宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第99集

やまぐち

山口遺跡第2地点

一般国道２１８号北方延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２００５年
宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第99集

やまぐち

山口遺跡 第2地点

一般国道２１８号北方延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２００５年
宮崎県埋蔵文化財センター

山口遺跡第２地点　１．上空から山口遺跡第２地点方面を展望

山口遺跡第２地点　２．遺跡全景

山口遺跡第２地点　出土土器

２１号竪穴住居跡出土土器一括

３７号竪穴住居跡出土の異形土器

序

埋蔵文化財の保護・活用に対しまして、日頃より深い御理解をいただき厚く御礼申し上げます。

宮崎県教育委員会では、北方延岡道路建設事業に伴い、山口遺跡第２地点の発掘調査を行いました。本書はその報告書です。山口遺跡第２地点では弥生時代・古墳時代の遺構・遺物が検出されました。特に発掘調査例の少ない当地域において、古墳時代中後期にかけての遺物が豊富に出土したことは注目されます。

こうした先人の歩みを振り返り、郷土の歴史を解明する貴重な資料が得られたことは、大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成１７年２月

宮崎県埋蔵文化財センター
所　長　　宮　園　淳　一

例　　言

1．本書は、一般国道218号北方延岡道路の建設に伴い、宮崎県教育委員会が調査主体となり宮崎県埋蔵文化財センターが行った山口遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、国土交通省九州地方整備局延岡工事事業所（現国土交通省九州整備局延岡河川国道事務所）の依頼を受けた宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

3．発掘調査の期間は、次のとおりである。

山口遺跡第２地点　第一次調査　平成14年４月30日から平成14年８月１日
第二次調査　平成14年10月30日から平成14年11月13日

4．現地での実測等の記録は、玉利勇二、日高広人、重留康宏、柳田裕三、久保春夫が行った。

5．本書に使用した写真は、玉利、日高が撮影した。

6．整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成、実測、トレースは主として玉利が行い、一部を整理作業員の協力を得た。

7．本書で使用した位置図は、国土地理院発行の２万５千分の１図を基に作成し、調査範囲図は、延岡市作成の５千分の１図、１万分の１図を基に作成した。

8．土層断面および土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』に拠った。

9．本書で使用した方位は、座標北(G.N.）および磁北（M.N.）である。レベルは海抜絶対高である。

10. 本書では、遺構に次の略号を使用している。

竪穴住居跡…ＳＡ　　土壙墓…ＳＤ　　土坑…ＳＣ

11. 本書の執筆は第Ⅰ章第１節を松林豊樹、そのほかを玉利が担当した。編集は玉利が担当した。

12. 出土遺物・その他諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の組織 …… 1

第Ⅱ章　調査の概要

第１節　遺跡の立地と歴史的環境 …… 2
第２節　調査の経過 …… 6
第３節　基本層序 …… 7

第Ⅲ章　調査の記録

第１節　弥生時代・古墳時代の遺構と遺物
　１　遺構・遺物の概要 …… 9
　２　遺構及び出土土器 …… 9
　（１）竪穴住居跡 …… 9
　（２）土壙墓 …… 68
　（３）土坑 …… 68
　（４）包含層出土の遺物 …… 71
第２節　石器・鉄製品 …… 74

第Ⅳ章　普及啓発 …… 87

第Ⅴ章　総括

　１　弥生・古墳時代の遺構について …… 89
　２　弥生・古墳時代の遺物について …… 91
　３　まとめ …… 94

挿　図　目　次

第１図　山口遺跡第２地点　遺跡位置図 …… 4
第２図　山口遺跡第２地点　周辺地形図 …… 5
第３図　山口遺跡第２地点　基本土層図 …… 7
第４図　山口遺跡第２地点　遺構分布図及びグリッド配置図 …… 8
第５図　山口遺跡第２地点　第１竪穴住居跡群実測図（SA１・SA13・SA26・SA27） …… 12
第６図　山口遺跡第２地点　１号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 13
第７図　山口遺跡第２地点　13号竪穴住居跡出土土器実測図（１） …… 14
第８図　山口遺跡第２地点　13号竪穴住居跡出土土器実測図（２） …… 15

第９図　山口遺跡第２地点　２号竪穴住居跡実測図 …… 17
第10図　山口遺跡第２地点　28号竪穴住居跡実測図 …… 18
第11図　山口遺跡第２地点　２号竪穴住居跡出土土器実測図 …… 19
第12図　山口遺跡第２地点　28号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 19
第13図　山口遺跡第２地点　３号竪穴住居跡石組検出状況図 …… 20
第14図　山口遺跡第２地点　３号竪穴住居跡実測図 …… 21
第15図　山口遺跡第２地点　３号竪穴住居跡出土土器実測図（１）…… 22
第16図　山口遺跡第２地点　３号竪穴住居跡出土土器実測図（２）…… 23
第17図　山口遺跡第２地点　３号竪穴住居跡出土土器実測図（３）…… 24
第18図　山口遺跡第２地点　３号竪穴住居跡出土土器実測図（４）…… 25
第19図　山口遺跡第２地点　３号竪穴住居跡出土石器実測図 …… 26
第20図　山口遺跡第２地点　14号・25号竪穴住居跡実測図 …… 28
第21図　山口遺跡第２地点　38号竪穴住居跡実測図 …… 29
第22図　山口遺跡第２地点　14号･25号･38号竪穴住居跡出土土器実測図 …… 29
第23図　山口遺跡第２地点　第２竪穴住居跡群土器出土位置図 …… 30
第24図　山口遺跡第２地点　４号竪穴住居跡実測図 …… 31
第25図　山口遺跡第２地点　４号竪穴住居跡出土土器実測図 …… 31
第26図　山口遺跡第２地点　５号竪穴住居跡実測図 …… 32
第27図　山口遺跡第２地点　５号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 33
第28図　山口遺跡第２地点　７号竪穴住居跡実測図 …… 34
第29図　山口遺跡第２地点　８号竪穴住居跡実測図 …… 35
第30図　山口遺跡第２地点　７号竪穴住居跡出土土器実測図（１）…… 35
第31図　山口遺跡第２地点　７号竪穴住居跡出土土器実測図（２）…… 36
第32図　山口遺跡第２地点　８号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 36
第33図　山口遺跡第２地点　９号・10号竪穴住居跡実測図 …… 37
第34図　山口遺跡第２地点　11号竪穴住居跡実測図 …… 39
第35図　山口遺跡第２地点　11号竪穴住居跡土器出土位置図 …… 40
第36図　山口遺跡第２地点　９号竪穴住居跡出土土器実測図 …… 41
第37図　山口遺跡第２地点　11号竪穴住居跡出土土器実測図（１）…… 41
第38図　山口遺跡第２地点　11号竪穴住居跡出土土器実測図（２）…… 42
第39図　山口遺跡第２地点　11号・15号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 43
第40図　山口遺跡第２地点　15号・16号竪穴住居跡実測図 …… 44
第41図　山口遺跡第２地点　17号竪穴住居跡及び出土土器・石器実測図 …… 45
第42図　山口遺跡第２地点　18号竪穴住居跡及び出土土器実測図 …… 46
第43図　山口遺跡第２地点　19号・21号竪穴住居跡、８号土坑実測図 …… 48
第44図　山口遺跡第２地点　第３竪穴住居跡群土器出土位置図 …… 49
第45図　山口遺跡第２地点　20号竪穴住居跡実測図 …… 50
第46図　山口遺跡第２地点　21号竪穴住居跡出土土器実測図（１）…… 50

第47図　山口遺跡第２地点　21号竪穴住居跡出土土器実測図（２）…… 51
第48図　山口遺跡第２地点　21号竪穴住居跡出土土器実測図（３）…… 52
第49図　山口遺跡第２地点　21号竪穴住居跡出土土器実測図（４）…… 53
第50図　山口遺跡第２地点　21号竪穴住居跡出土土器実測図（５）…… 54
第51図　山口遺跡第２地点　31号竪穴住居跡実測図 …… 54
第52図　山口遺跡第２地点　32号竪穴住居跡実測図 …… 55
第53図　山口遺跡第２地点　31号・32号竪穴住居跡出土土器実測図 …… 55
第54図　山口遺跡第２地点　33号竪穴住居跡実測図 …… 56
第55図　山口遺跡第２地点　34号竪穴住居跡実測図 …… 57
第56図　山口遺跡第２地点　33号竪穴住居跡出土土器実測図 …… 57
第57図　山口遺跡第２地点　35号竪穴住居跡実測図 …… 59
第58図　山口遺跡第２地点　36号竪穴住居跡実測図 …… 60
第59図　山口遺跡第２地点　36号竪穴住居跡土器出土位置図 …… 61
第60図　山口遺跡第２地点　35号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 62
第61図　山口遺跡第２地点　36号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 63
第62図　山口遺跡第２地点　37号竪穴住居跡出土土器実測図 …… 64
第63図　山口遺跡第２地点　37号竪穴住居跡実測図 …… 65
第64図　山口遺跡第２地点　37号竪穴住居跡土器出土位置図 …… 66
第65図　山口遺跡第２地点　37号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 67
第66図　山口遺跡第２地点　１号土壙墓及び出土土器実測図 …… 68
第67図　山口遺跡第２地点　１号・４号土坑実測図 …… 69
第68図　山口遺跡第２地点　１号・４号土坑出土土器実測図 …… 69
第69図　山口遺跡第２地点　２号土坑実測図及び出土土器実測図 …… 70
第70図　山口遺跡第２地点　３号土坑実測図及び出土土器実測図 …… 70
第71図　山口遺跡第２地点　５号土坑実測図及び出土土器実測図 …… 71
第72図　山口遺跡第２地点　６号土坑実測図及び出土土器実測図 …… 71
第73図　山口遺跡第２地点　包含層出土土器実測図（１）…… 72
第74図　山口遺跡第２地点　包含層出土土器実測図（２）…… 73
第75図　山口遺跡第２地点　石器実測図 …… 74
第76図　山口遺跡第２地点　鉄製品実測図 …… 75
第77図　山口遺跡第２地点　竪穴住居跡変遷分類図 …… 89

表　目　次

第１表　山口遺跡第２地点　竪穴住居跡一覧表 …… 10
第２表　山口遺跡第２地点　鉄製品計測表 …… 75
第３表　山口遺跡第２地点　石器計測表 …… 75
第４表　山口遺跡第２地点　出土土器観察表（１）…… 76

第５表　山口遺跡第２地点　出土土器観察表（２）…… 77
第６表　山口遺跡第２地点　出土土器観察表（３）…… 78
第７表　山口遺跡第２地点　出土土器観察表（４）…… 79
第８表　山口遺跡第２地点　出土土器観察表（５）…… 80
第９表　山口遺跡第２地点　出土土器観察表（６）…… 81
第10表　山口遺跡第２地点　出土土器観察表（７）…… 82
第11表　山口遺跡第２地点　出土土器観察表（８）…… 83
第12表　山口遺跡第２地点　出土土器観察表（９）…… 84
第13表　山口遺跡第２地点　出土土器観察表（10）…… 85
第14表　山口遺跡第２地点　出土土器観察表（11）…… 86
第15表　山口遺跡第２地点　「山口遺跡第２地点を通じた総合的な学習の時間」年間指導計画・学習指導案…… 88
第16表　山口遺跡第２地点　出土土器編年表 …… 95

図　版　目　次

巻頭１　山口遺跡第２地点　上空から山口遺跡第２地点方面を展望、遺跡全景
巻頭２　山口遺跡第２地点　21号竪穴住居跡出土土器一括、37号竪穴住居跡出土の異形土器
図版１　山口遺跡第２地点　第２竪穴住居跡群・第３竪穴住居跡群 …… 97
図版２　山口遺跡第２地点　37号・36号竪穴住居跡 …… 98
図版３　山口遺跡第２地点　５号・11号竪穴住居跡 …… 99
図版４　山口遺跡第２地点　28号・35号竪穴住居跡 …… 100
図版５　山口遺跡第２地点　調査区中央部竪穴住居跡検出状況 …… 101
図版６　山口遺跡第２地点　３号竪穴住居跡検出状況（土器・炭化材、石組・土器検出状況）…… 102
図版７　山口遺跡第２地点　２号・５号土坑、３号・37号竪穴住居跡土器検出状況、作業風景…… 103
図版８　山口遺跡第２地点　ＳＡ１・ＳA13(１)出土遺物 …… 104
図版９　山口遺跡第２地点　ＳA13(２)・ＳＡ２（１）出土遺物 …… 105
図版10　山口遺跡第２地点　ＳＡ２（２）・ＳA28・ＳＡ３（１）出土遺物 …… 106
図版11　山口遺跡第２地点　ＳＡ３（２）出土遺物 …… 107
図版12　山口遺跡第２地点　ＳA14・ＳＡ４・ＳA25・ＳＡ５・ＳＡ７出土遺物 …… 108
図版13　山口遺跡第２地点　ＳＡ８・ＳA11（１）出土遺物 …… 109
図版14　山口遺跡第２地点　ＳA11（２）・ＳA15・ＳA17・ＳA18・ＳA21（１）出土遺物…… 110
図版15　山口遺跡第２地点　ＳA21（２）・ＳA31・ＳA32・ＳA33・ＳA35出土遺物 …… 111
図版16　山口遺跡第２地点　ＳA36・ＳA37・ＳＤ１出土遺物 …… 112
図版17　山口遺跡第２地点　ＳＣ１～ＳＣ６・包含層出土遺物（１）…… 113
図版18　山口遺跡第２地点　包含層出土遺物（２）…… 114

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所（旧建設省九州地方建設局延岡工事事務所）は、高規格幹線道路整備事業として、延岡市天下町（延岡ＪＣＴ）から東臼杵郡北方町子（北方ＩＣ）に至る延長11.0㎞に及ぶ一般国道218号北方延岡道路の整備を計画し、平成８年度から同事業を実施している。宮崎県教育庁文化課では、同事業計画を受けて路線内の踏査を実施し、複数の埋蔵文化財包蔵地を確認した。この成果をもとに延岡河川国道事務所と協議を行い、年次的に確認調査を行い、必要に応じて記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

延岡市小川町から細見町周辺では平成元年度から同３年度にかけて県営圃場整備事業上南方地区に伴う発掘調査が延岡市教育委員会によって実施されており、北方延岡道路の路線に近接する水田において古代から中世に及ぶ遺構・遺物が検出されていた。このことから、ここに報告する山口遺跡の周辺には遺構・遺物が残存することが確実と判断され、平成14年２月18日から３月19日の間に宮崎県埋蔵文化財センターが確認調査を実施した。この結果、2,000㎡について遺構・遺物が確認されたため、次年度に本発掘調査を行うこととした。本発掘調査は、平成14年４月30日から８月１日にかけて宮崎県埋蔵文化財センターが実施したが、確認調査時点で予想された量をはるかに超える遺構・遺物が検出されたため、平成14年10月30日から11月13日にかけて２次調査を実施し、現地調査を終了した。

第２節　調査の組織

山口遺跡　発掘調査（平成14年度）

宮崎県埋蔵文化財センター

所長	米良　弘康
副所長兼総務課長	大薗　和博
副所長兼調査第二課長	岩永　哲夫
総務課総務係長	野邊　文博
調査第二課調査第四係長	永友　良典
同　主査	玉利　勇二
同　主任主事	日高　広人
同　調査員	重留　康弘

山口遺跡　整理および報告書作成（平成15年度～平成16年度）

宮崎県埋蔵文化財センター

所長	米良　弘康（H15）宮園　淳一（H16）
副所長兼総務課長	大薗　和博
副所長兼調査第二課長	岩永　哲夫
総務課主幹兼総務係長	石川　恵史
調査第二課調査第四係長	近藤　協
同　主査	玉利　勇二
同　主任主事	日高　広人

第Ⅱ章　調査の概要

第１節　遺跡の立地と歴史的環境

延岡市は、宮崎県北部に位置し、五ヶ瀬川の下流部に開けた有数の工業都市である。

延岡市内における文化財調査の歴史は古く、江戸時代の延岡藩主内藤政韶（1776年～1802年）にはじまる。彼は居宅である西の丸（現内藤記念館）から採集した土器をきっかけに、大貫町浄土寺山の古墳（現国指定南方古墳群第24号墳）などの調査を行い、「集古標目」「集古採覧」（戦争により焼失）として記録を残している。明治維新前後に活躍した延岡藩家老原時行は、延岡周辺の考古資料を収集し、その中には吉野町出土とされる石剣がある。その後、彼の影響を受けた有馬七蔵は、小学校の代用教員時代に天下町字今井野（延岡植物園周辺）で縄文から古墳時代にかけての遺物を多数収集し有馬コレクションとして学界に広く知られるようになったが、戦災により全て焼失している。大正から昭和初期にかけては、東京大学講師鳥居龍蔵による南方古墳群、延岡古墳群の発掘調査が実施されている。調査は大正14年10月から昭和４年７月にかけて、延べ３回にわたり浄土寺山古墳をはじめとする市内で主要な古墳が調査され、その成果は「上代の日向延岡」として出版され、現在でも重要な文献となっている。戦後の宮崎県における考古学研究は、石川恒太郎（宮崎県文化財保護審議会委員）の功績によるものが大きく、市内でも苺田窯跡、貝の畑遺跡など数多く調査され、「宮崎県の考古学」「延岡市史」などに紹介されている。

山口遺跡第２地点がある延岡市西部は、行縢山（831m）や霧子山（478m）など険しい山々が連なり、そのほぼ中央を五ヶ瀬川が東西に貫流している。その南側は河川近くまで急な丘陵裾部が迫り、北側もそれに類似するが、細見川などの小河川によって開析されることもなくわずかながらも狭小な沖積地が形成されている。丘陵縁辺においては、いくつかの平坦面がみられ、小沖積地と合わせて遺跡が展開している。また、本遺跡は延岡市西部の小川町に位置し、細見川左岸にある標高約18mの沖積地に広がる。遺跡の立地する沖積地の堆積土壌はすべて砂質土で細見川の氾濫による二次堆積層であることを示している。さらに、遺跡と河床との比高差は約２mで、周辺は最近まで、大雨時には時折川が氾濫していたらしく、わずかな降雨でも水の引きは非常に悪い状況であった。その中で調査地付近は、沖積地の大部分を占める水田ではなく畑地として利用されていることからすれば、微高地を呈し、そこに遺跡が営まれていたと考えられる。遺跡周辺には、五ヶ瀬川左岸にある標高約50mの台地上に所在する中尾原遺跡（第１図－５）、細見川左岸の標高約45mの丘陵縁辺に所在する畑山遺跡（第１図－６）があり、旧石

器時代～古墳時代まで多くの遺跡が分布している。以下時代別に概観する。

旧石器時代では、東方約１㎞に位置する舞野町赤木遺跡（第１図－13）が著名である。ここからは、瀬戸内技法が見られるナイフ形石器文化の赤木第１文化層、細石器を中心とする赤木第２文化層が確認されている。縄文時代早期は、上舞野遺跡群（第１図－14)、黒土田遺跡（第１図－８）など南方地区の畑作地のほぼ全域からチャート製石鏃、剥片類の他、押型文土器類が見られ、後期～晩期になると打製石斧、磨石、石錘等の表採資料は急増する。

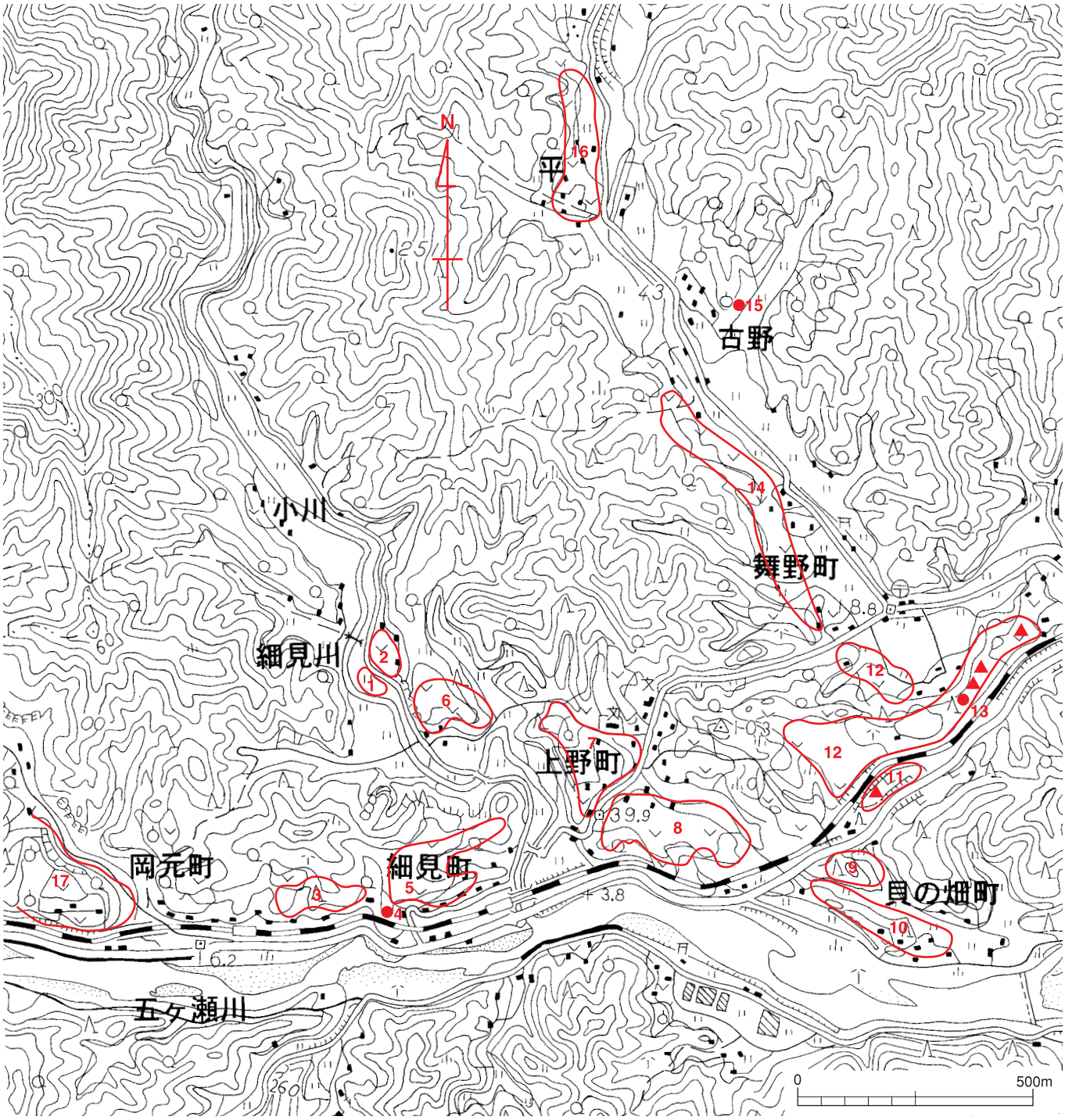
弥生時代では、これまで三須町出土の瀬戸内系土器が知られるのみであったが、最近の調査によって、丘陵上では中尾原遺跡、畑山遺跡などの集落が、沖積地では差木野遺跡や延岡城堀跡部分から遺跡が発見され、水田の可能性が推定され、徐々に当時の状況が解明されつつある。その他、延岡二ノ丸では土壙墓が検出され、鉄鏃などが出土した。また下流部に位置する古川町で擦切り穿孔をもつ石包丁が出土しているものの、いずれも弥生後期から終末期に限られ、前期から中期にかけては不明で、今後の調査を待つしかない。まだ時期は確定できないが、岡元町柴竹地区（第１図－３）では開墾中に壷（現在は不明）に入った炭化米（ジャポニカ種）も出土している。貝の畑遺跡（第１図－９）では弥生後期後半とみられる竪穴住居跡１軒を検出している。

古墳時代になると調査箇所が増え、集落としては、丘陵上において貝の畑遺跡群（第１図－10)、野田町八田遺跡、地蔵ヶ森遺跡、中尾原遺跡、沖積地では林遺跡などがある。これらの集落は、宮崎平野で発見された上薗遺跡（新富町）や大戸ノ口第二遺跡（高鍋町）などのように拠点集落ではなく、継続的な小集落を形成している。また他に、箱式石棺を中心とする南方古墳群舞野支群、多々羅遺跡（第１図－11)、細見古墳（第１図－４）等があげられる。

古代では、10世紀中頃に営まれた苺田窯跡（第１図－15）は須恵器窯跡で、半地下式無段登り窯の形態をとる。その他吉野遺跡で土壙内から多量の坏類が出土した。また林遺跡や畑山遺跡では中近世の集落とともに陶磁器や土師質土器などが出土している。林遺跡は山口遺跡と同様沖積地に営まれている。10棟の掘立柱建物が復元され、柱穴間の長さにより建物の時期差が想定されている。畑山遺跡は、山口遺跡の東側丘陵上に位置し、10数棟の建物が検出されている。その他、山城として松尾城などが知られている。近世では、小峰窯などや最近の延岡城公園整備による確認調査で、延岡城の実体や出土した陶磁器類により当時の生活の様相が明らかになりつつある。

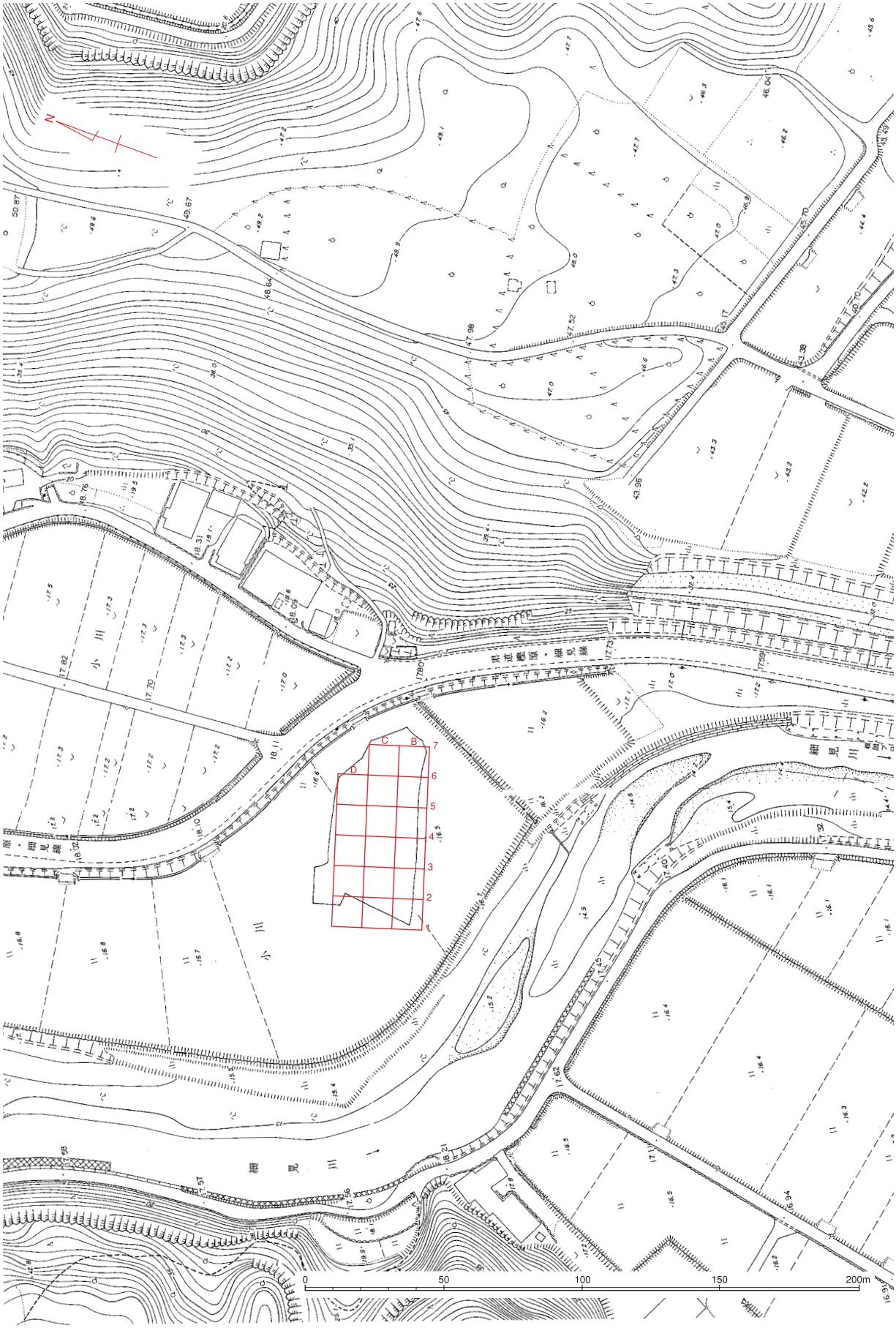
［参考・引用文献］

「上南方地区遺跡」『延岡市文化財調査報告書』第８集　延岡市教育委員会　1992
「差木野遺跡」『延岡市文化財調査報告書』第９集　延岡市教育委員会　1992
「貝の畑遺跡」『第二次日向遺跡総合調査　第二・第三』宮崎県教育委員会　1967
「野田町八田遺跡」延岡市教育委員会　1978
「地蔵ヶ森遺跡」『宮崎県史　資料編　考古２』宮崎県　1993
「林遺跡」宮崎県教育委員会　1990
「上薗遺跡」『宮崎県史　資料編　考古２』宮崎県　1993
「大戸ノ口第二遺跡」『高鍋町文化財調査報告書』第５集　高鍋町教育委員会　1991
「延岡市苺田窯跡」『宮崎県文化財調査報告書』第９集　宮崎県教育委員会　1992



1. **山口遺跡第２地点**	2. 山口遺跡第１地点	3. 柴竹遺跡	4. 細見古墳
5. 中尾原遺跡	6. 畑山遺跡	7. 千葉遺跡	8. 黒土田遺跡
9. 貝の畑（上貝地）遺跡	10. 貝の畑遺跡群	11. 多々羅遺跡	12. 下舞野遺跡群
13. 赤木遺跡	14. 上舞野遺跡群	15. 苺田窯跡	16. 平遺跡
17. 柏田遺跡	▲ ……国指定南方古墳群		

第１図　山口遺跡第２地点　遺跡位置図（S＝1／25,000）



第２図　山口遺跡第２地点　周辺地形図（S＝1／2,000）

第２節　調査の経過

山口遺跡第２地点の調査対象区は北方延岡道路建設部分である約2,000㎡について実施した。調査対象地は細見川左岸にある標高約18ｍの沖積地に位置し、遺跡の立地する沖積地の堆積土壌はすべて砂質土で細見川の氾濫による二次堆積層であることを示している。さらに、遺跡と河床の比高差は約２ｍで、周辺は最近まで大雨時には時折川が氾濫していたらしく、わずかな降雨でも水の引きは非常に悪い状況で、その中で調査地付近は、沖積地の大部分を占める水田ではなく畑地として利用されていることからすれば、微高地を呈し、そこに遺跡が営まれていたと予想された。

そこで、調査ではまず試掘により調査区全体の遺物包含層の確認を行った後、本調査を平成14年４月30日に着手した。予想を検証するために、第Ⅳ層上面まで重機による表土剥ぎを行い、古代の水田の痕跡を探したが畦畔等水田に関係する遺構は発見されなかった。その後、第Ⅳ層を除去し、第Ｖ層での遺構確認を実施した。試掘時に第Ｖ層からは古墳時代の土師器が出土しており、調査区西端に入れたトレンチでも古墳時代の土器・住居跡が認められたことから、この時期の遺構の検出が期待されたが、現代の造成の影響で調査区南側には厚く耕作土が堆積しており、第Ⅳ層の完全除去を含め多くの時間を費やした。６月上旬に入り発掘作業員を２グループに分け、掘り下げと表土剥ぎ以前に第Ｖ層が露出していた調査区北側の遺構確認を開始した。

掘り下げでは、試掘時において遺物が確認されなかった調査区南西から多量に遺物が出土した。土圧で潰されたほぼ完形の土器も数点出土した。遺構確認では、ピット群と多量の遺物が確認された。また調査区西端を拡張した結果、完形土器が数個体、他に多量の遺物、焼土が検出され住居跡群の存在があると予想された。７月上旬から下旬にかけて、３つの住居跡群を中心に遺構が検出され、第３竪穴住居跡群からはＴＫ208前後の須恵器が出土した。完掘した竪穴住居跡の平面プランの傾向は、方形プランで柱穴は４基、中央付近に焼土を有するものである。住居の埋土は地山とほとんど区別がつかず、削平されているためか、竪穴の深さは20㎝に満たないものが多かった。竪穴住居跡中央に焼土を持つ傾向があるため、遺構に絡まなかった焼土は、竪穴が削平されて床面のみになった竪穴住居跡として判断した。また、鉄分の沈着などをもとに住居推定範囲を定めた。

第Ｖ層上面で検出された遺構としては、古墳時代の竪穴住居跡30軒・土壙墓１基・土坑７基であるが、完掘したＳＡ２の床面からＳＡ２８が検出され、ＳＡ２８と同じレベルで古墳～弥生の文化層が存在する可能性が濃厚となり、調査区全体での確認が必要となった。確認時期が調査終了直前のため第一次調査を８月１日で一旦終了し、第二次調査を10月30日から開始した。第二次調査はトレンチを80㎝幅で調査区東西南北に張りめぐらし、遺構を確認していった。その結果、方形の竪穴住居跡が７軒、遺物数百点を検出した。

第Ｖ層の上面の遺構の調査を終了した時点で、第Ｖ層の下まで数箇所トレンチをいれたが、砂礫層にあたり、遺構・遺物の確認はできなかったため、平成14年11月13日に第二次調査を終了した。

調査区には、国土座標に準じた10ｍ×10ｍグリッドを単位とし、東西方向にアルファベット（北よりＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄ）を、また南北方向に数字（北より１、２、３、４…）をそれぞれ付した。

第３節　基本層序

本遺跡の堆積土壌は、黄褐色砂質河成二次堆積土すなわち氾濫土であり、わずかな降雨で冠水するなど、水の引きは非常に悪い。また旧地形は圃場整備事業により大規模な改変がなされており、その状態は良くない。以下層ごとに堆積状況について記述する。（第３図）

第　Ⅰ　層：耕作土で**灰黄褐色**（10ＹＲ４/２）を呈する。（現耕作土）

第　Ⅱ　層：シルト質で粘性がない**褐灰色土**（10ＹＲ５/１）。下部に鉄分を含む。（旧耕作土）

第　Ⅲ　層：**褐色土**（10ＹＲ４/３）。Ⅳ層上面に鉄分が沈着する。

第　Ⅳ　層：シルト質でしまる**褐灰色土**（10ＹＲ６/１）。ややグライ化している。

第　Ⅴ　層：**褐色土**（7.5ＹＲ４/３）。Ⅳ層上面に鉄分が沈着する。

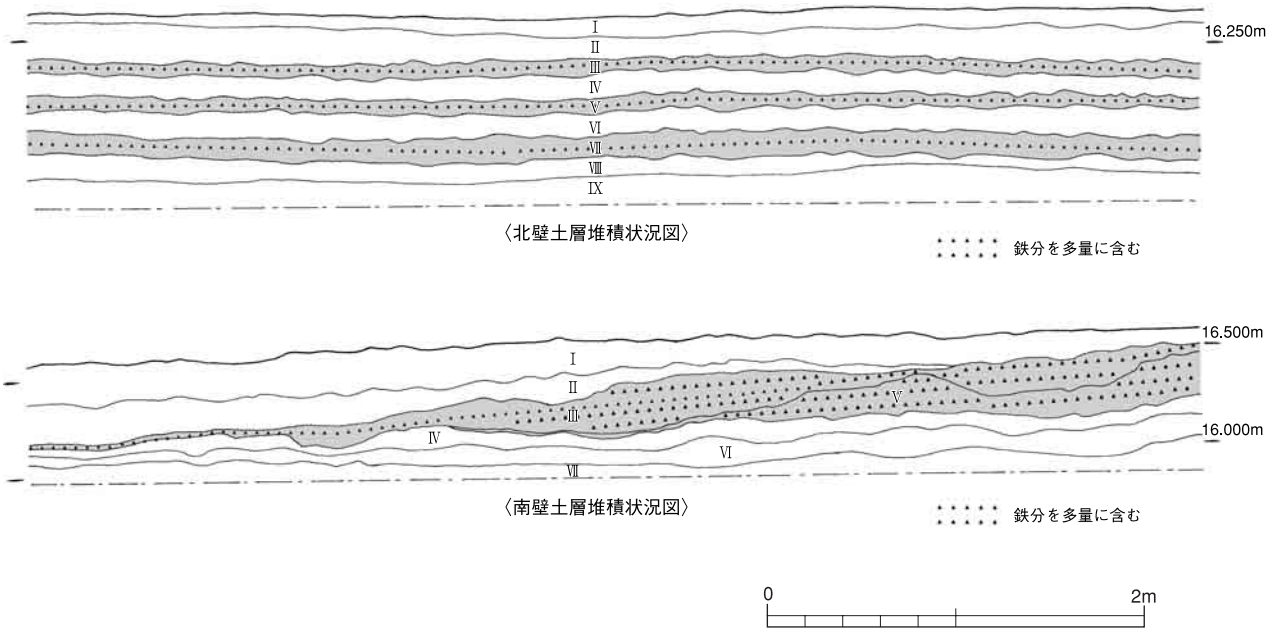
第　Ⅵ　層：シルト質でしまる**褐灰色土**（10ＹＲ５/１）。土器片が出土する。

第　Ⅶ　層：**暗褐色土**（7.5ＹＲ３/３）。Ⅵ層下部に鉄分が沈着するが、吸水性は無い。グライ化した土を含み、土器片多数出土する。

第　Ⅷ　層：氾濫原土で**明黄褐色土**（10ＹＲ７/６）。遺物を多量に含み、上面で遺構を検出する。

第　Ⅸ　層：旧河道由来の砂礫層である。

第Ⅰ～Ⅲ層は耕作土で、水田絡みの土である。第Ⅳ層下部の土はⅤ層上面の土に、上部はⅢ層下部土にそれぞれ鉄分が沈着したもので、中央にグライ化した土が挟まれる。それぞれの土に漸移は観察できない。第Ⅴ層は氾濫土であるが遺物を多量に含む。また上面より遺構が検出された。最下層は旧河道由来の砂礫層である。調査区西部は第Ⅴ層の堆積が薄いため、すでに砂礫が露出し、砂礫層の中からは遺物の出土は認められなかった。ただ、第１・第３竪穴住居跡群からは砂礫を掘り抜き住居が造営されている。調査区東部からは砂礫層は検出されなかった。



第３図　山口遺跡第２地点　基本土層図（Ｓ＝1／40）

第４図　山口遺跡第２地点　遺構分布図及びグリッド配置図（S＝1／300）

第Ⅲ章　調査の記録

第１節　弥生時代・古墳時代の遺構と遺物

１　遺構・遺物の概要

山口遺跡第２地点で検出された遺構・遺物は、第一次調査では、基本土層第Ⅷ（明黄褐色土）層までの遺構として、古墳時代の竪穴住居跡２０数軒・土坑７基を検出した。しかし、完掘した住居跡の床面から弥生時代の終末から古墳時代の中期の遺物を伴う住居跡が確認された。第二次調査では、隅丸方形の竪穴住居跡数軒・性格不明の落ち込み１基、遺物数百点を検出した。遺物は弥生時代から13～14世紀までであるが、主体は古墳時代の遺物で土師器・須恵器、石器（磨石・砥石・敲石）、鉄器（刀子・鉄釘・鉄鏃）、土製品、鞴の羽口などが出土している。ほかに弥生土器、白磁などがある。

２　遺構及び出土土器

（１）竪穴住居跡（ＳＡ）

竪穴住居跡は重複関係からみれば少なくとも３時期あるいは４時期に分かれ、古墳時代中期後半から後期が中心で、一部は弥生時代後期から古墳前期のものもあるのではないかと思われる。住居の平面形は方形が主体で長方形や不正方形のものがあり、規模は１辺1.5m～6.5mで、２m前後の小型のものと５m前後の大型のものに大別できる。小型の住居跡は、完掘したプランの傾向では方形プランで柱穴は４基である。中央付近に焼土を有する。住居跡の埋土は、地山の土と区別がつきにくい。削平されているためか、検出面からの深さは20㎝に満たないものが多い。竪穴住居跡中央に焼土をもつ傾向があるため、遺構に絡まなかった焼土は、削平されて床面のみになった住居跡の可能性がある。大型の竪穴住居跡は、隅丸方形を呈し検出面からの深さは約25㎝～35㎝で南北を主軸とする。竪穴住居跡中央には硬化面、焼土、炭化物が確認された。遺物は土圧で潰されたほぼ完形の土師器が数点検出され、第３竪穴住居跡群からはＴＫ２０８前後の須恵器が出土した。また住居跡内から台石、敲石、磨石、鉄製品、勾玉、管玉等が検出された。なお、竪穴住居跡遺構番号は、プランを確定し竪穴住居跡と認定し得た順に付している。ただ第１・第２・第３竪穴住居跡群については、調査段階では切り合いの状況から幾つかのプランとして竪穴住居跡と認定したが遺物整理の段階等でいくつかの竪穴住居跡を一つの住居としてまとめた。（ＳＡ６・２９・３０→ＳＡ３、ＳＡ１２→ＳＡ２５、ＳＡ２２・２３・２４→ＳＡ２０）

第１竪穴住居跡群（ＳＡ１・ＳＡ１３・ＳＡ２６・ＳＡ２７：第５図）

１号竪穴住居跡（ＳＡ１：第５図）

調査区の西側Ｂ２グリッドに位置し、１３号住居跡に切られている。南北方向に長い長方形プランを呈し、規模は長軸約4.58m、短軸約3.58mを測り、推定床面積は16.4㎡と小型の住居跡である。主軸方位はN10°Wを指す。現存壁高は0.24mを測り、床面は掘り底をそのまま利用したと考えられる。主柱穴は不明である。埋土は３層で、遺物の多くは３層の黄褐色の粘性砂質土から多量に出土した。

第１表　山口遺跡第２地点　竪穴住居跡（SA）一覧表

番号	規模(m) 長軸	短軸	深さ	床面積(㎡)	平面形態	主軸	柱数(主柱)	時期	主な出土遺物	備考
SA1	4.58	3.58	0.24	16.39	長方形	N10° W	2	C期	高坏・鉢・須恵器・磨石	・第1住居群(切合い) ・SA13に切られる
SA2	5.70	4.20	0.18～0.32	23.94	長方形	N14° E	4	B期	甕・壺・高坏	・SA28を切る ・焼土
SA3	5.60	5.40	0.14～0.24	30.24	正方形	N54° E	4	A－2期	甕・壺・高坏・手捏土器・勾玉	・第2住居群(切合い) ・SA14・SA25・SA38を切る
SA4	－	3.60	0.12～0.16	－	長方形	N16° W	2	A－1期	甕	
SA5	4.60	4.10	0.11～0.19	18.90	長方形	N15° W	4	D期	甕・壺・高坏・播鉢・磨石	・SA36を切る ・焼土
SA6	－									・SA3に含まれる
SA7	不明			－	長方形	N90° W	2	E期	甕・壺・小型丸底壺・高坏	・焼土
SA8	6.20	－	0.12	－	長方形	N74° E	不明	D期	甕・高坏・砥石・磨製石斧	
SA9	4.40	3.10	0.06～0.13	13.64	長方形	N79° E	4	D期	甕・壺	・SA10を切る ・焼土
SA10	不明			－	長方形	－	不明	D期	甕・壺・高坏・須恵器・砥石・鉄刀子	・SA10に切られる
SA11	5.20	4.10	0.22～0.41	21.32	長方形	N54° E	4	A－2期		・焼土・硬化面
SA12	－									・SA25に含まれる
SA13	3.74	2.84	0.26	10.62	長方形	N35° W	－	A－2期	甕・壺・高坏・鉢	・第1住居群(切合い) ・SA1を切る ・焼土
SA14	3.90	－	0.04～0.10	－	長方形	N70° E	4	A－1期	甕・壺	・第2住居群(切合い) ・SA3に切られる ・硬化面(貼床)
SA15	3.20	－	－	－	長方形	N65° W	4	E期	高坏・坏	・SA16に切られる ・焼土
SA16	3.60	2.36	－	8.49	長方形	N20° E	2	D期	遺物は出土していない	・SA15を切る
SA17	4.24	3.10	0.04	13.14	長方形	N70° E	2	E期	甕・石包丁	・焼土
SA18	5.06	3.36	0.04	17.00	長方形	N 2° E	2	D期	甕・鉢	・焼土
SA19	4.52(？)	2.86(？)	？	12.93？	長方形	N38° W	2(？)	A－2期	21号住居に含まれる	・第3住居群(切合い) ・SA21に切られる ・焼土
SA20	不明							B期	小さな土器片	・第3住居群(切合い) ・SA21に切られる ・焼土(浅い掘込み)
SA21	5.56	4.16	0.32	23.12	長方形	N24° W	4	B期	甕・壺・高坏・浅鉢・手捏土器・須恵器	・第3住居群(切合い) ・SA19を切り、SC8を切る ・焼土・硬化面
SA22	－									・SA20に含まれる
SA23	－									・SA20に含まれる
SA24	－									・SA20に含まれる
SA25	不明			－	方形(？)	N40° E	不明	A－2期	甕・高坏	・第2住居群(切合い) ・SA3に切られる
SA26	不明			－	長方形	(？)	2(？)	C期	13号住居内に含む	・第1住居群(切合い) ・SA1・SA13を切る ・焼土
SA27	不明			－	長方形	(？)	2(？)	C期	－	・第1住居群(切合い) ・SA13に切られる ・焼土
SA28	5.10	4.10	0.23～0.30	20.91	方形	N14° E	4	C期	甕・壺・高坏・鉄鏃	・SA2に切られる ・焼土(浅い掘込)
SA29	－									・SA3に含まれる
SA30	－									・SA3に含まれる
SA31	2.94	2.72	0.12～0.21	7.99	方形	N15° W	4	E期	甕・壺	・焼土
SA32	3.86	2.64	0.16～0.18	10.19	長方形	N14° W	4	E期	甕・壺・高坏	
SA33	3.64	3.18	0.18～0.20	11.57	方形	N83° E	2	D期	甕・壺・高坏	・焼土
SA34	3.28	2.78	0.04～0.10	9.12	方形	N15° W	4	D期	遺物は出土していない	・焼土
SA35	5.44	4.64	0.20～0.22	25.24	長方形	N72° E	4	A－1期	甕・壺・高坏・鉢・磨石・刀子	・SA9・10の下から検出 ・焼土
SA36	5.98	4.72	0.20～0.28	28.23	長方形	N50° E	4	A－2期	甕・壺・高坏・須恵器・敲石	・SA5に切られる ・硬化面(貼床)
SA37	7.24	4.96	0.16～0.32	35.91	長方形	N70° E	4	A－1期	甕・壺・高坏・杓子土器・鉄器	・焼土・硬化面
SA38	不明			－	方形(？)	－	不明	A－2期	高坏・坏	・第2住居群(切合い) ・SA14・SA25・SA38を切る

出土遺物（第６図：１～12）

この住居跡に伴う遺物は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。

１～６は土師器の高坏である。１～３は坏部で、１は坏底部と体部の境に不明瞭な稜をもち、屈折して外反ぎみに開く。２は坏部が浅く水平に近い体部で大きく開く口縁部が付く。３は坏部が内湾ぎみで、口縁端部を平坦に仕上げている。４～６は脚部で、４は裾部が不明瞭な稜をなし開く。５は円柱状の脚に伏鉢状の裾部が付く。６は円柱状の脚に強く屈曲する短い裾部が付く。高坏の器面調整は内外面ともナデ調整である。

７は土師器の鉢で底部は平底である。

８～10は須恵器である。８・９は甕の体部とみられ、内面に同心円当て具痕、外面にタタキがみられる。10は平底状を呈する坏の底部とみられる。

11・12は磨石である。平面形態は円形を呈し、周縁に敲打痕が観察される。使用石材は砂岩である。

１３号竪穴住居跡（ＳＡ１３：第５図）

調査区の西側Ｂ２グリッドに位置し、１号住居跡を切っている。やや南北方向に長い長方形プランを呈し、規模は長軸約3.74m、短軸約2.84mを測り、推定床面積は10.6㎡と小型の住居跡である。主軸方位はN35°Wを指す。現存壁高は0.26mを測り、床面は掘り底をそのまま利用したと考えられ、南西方向に焼土が広がる。主柱穴は不明である。埋土は３層で、遺物の多くは３層の黄褐色の粘性砂質土から多量に出土した。

出土遺物（第７図：16～21・第９図：22～33）

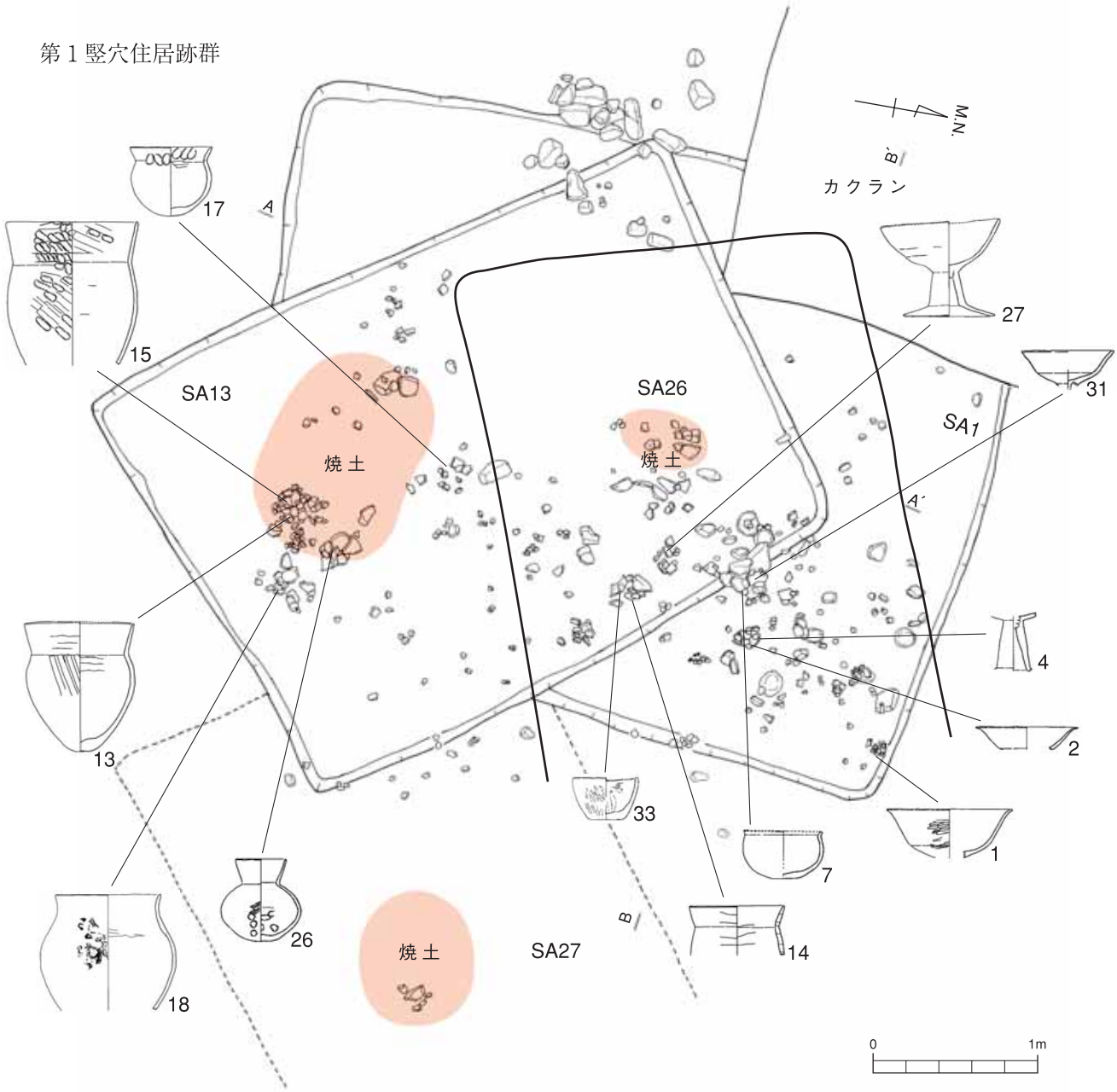
この住居跡に伴う遺物は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。

13～25は土師器の甕である。13・14は「くの字」状の口縁部を呈し、直線的に開く。付け根の内外面の稜は明瞭である。胴部最大径が体部中ほどより上位にあり、肩が張る。内外面ともナデ調整が主体だが、内面に粘土の輪積み痕を残す。底部は僅かに凸レンズ状を呈する。15・16は「くの字」状の口縁部を呈し、口縁部付け根付近から緩やかに外反する。付け根の内外面の稜は明瞭である。口縁部の厚さはほとんど変わらず、端部で薄くなって尖り気味にまとまる。口径と胴部最大径は等しい。17は口縁部が外反し胴部中位が張り、底部が丸底である。18は口縁部が短く外反し、口唇部は先細りとなる。胴部は中位が張る。19は屈曲する頸部に稜がみられ、胴部最大径が口径を上回る。20は胴部で、内面に粘土の繋ぎ目を残し、外面にススと鉄分が付着している。21～25は底部で、21は側面が外反して立ち上がり、僅かな上げ底を呈するもの（21）、平底のもの（22・23）、丸底のもの（24）、木の葉底を呈するもの（25）がある。

26は倒卵形の胴部をもつ土師器の小型の壺である。調整は内外面ともナデであるが、内面に指頭痕を残す。

27～33は土師器の高坏である。27・28・29の坏部は、やや深さのある体部に大きく延びる直線的な口縁部が付くもので、30・31の坏部は、浅い体部に直線的な口縁部が付き稜が明瞭である。脚部については、27・28・30は円柱状の脚に強く屈曲する短い裾部が付くもので、32は滑らかな「八」字形を呈し、裾部との区別が不明瞭である。

33は、土師器の鉢で底部が平底である。外面にはミガキ調整がみられる。



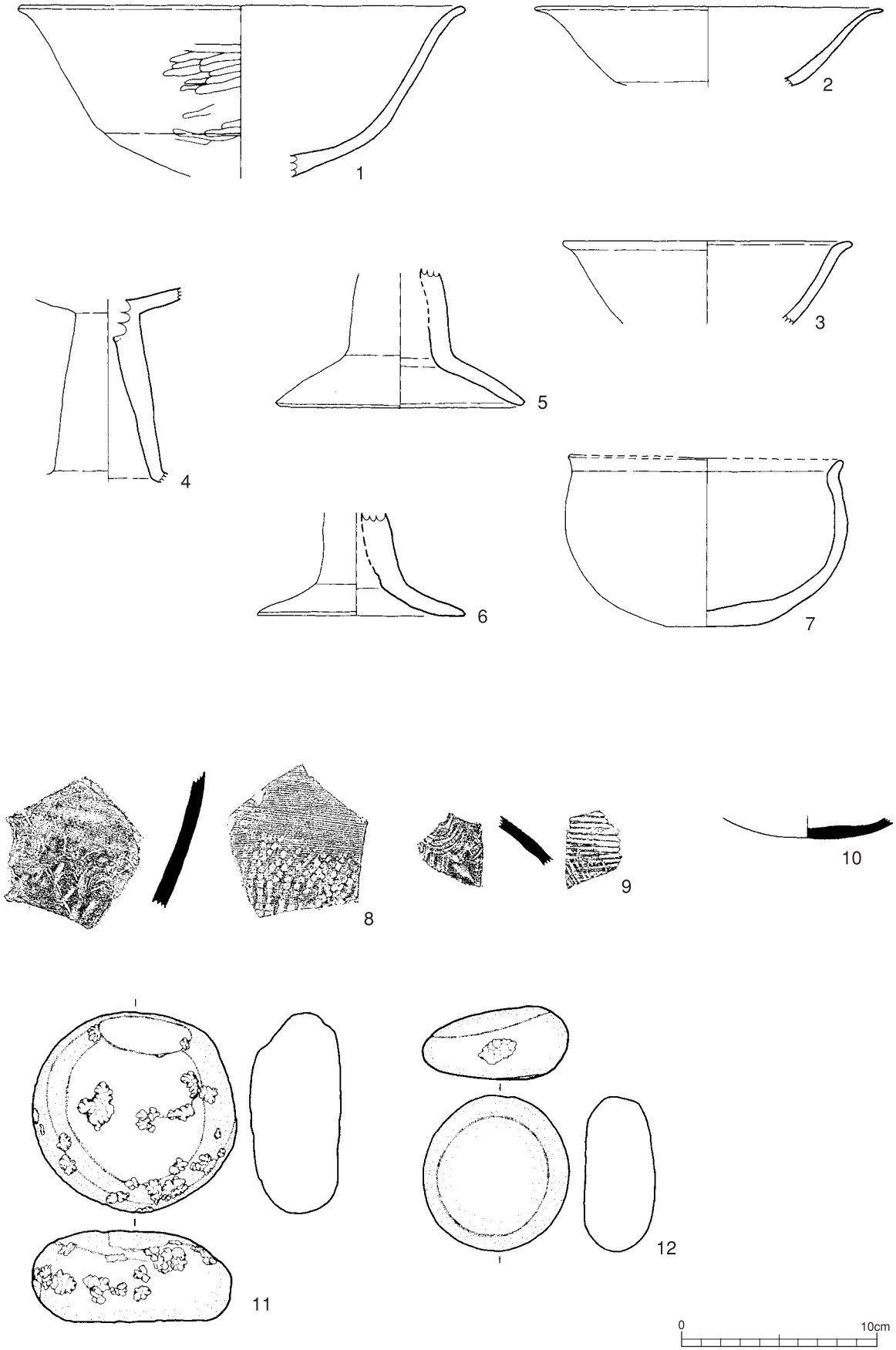
第５図　山口遺跡第２地点　第１竪穴住居跡群実測図（ＳＡ１・ＳA13・ＳA26・ＳA27：Ｓ＝1／40）

２６号竪穴住居跡（ＳＡ２６：第５図）

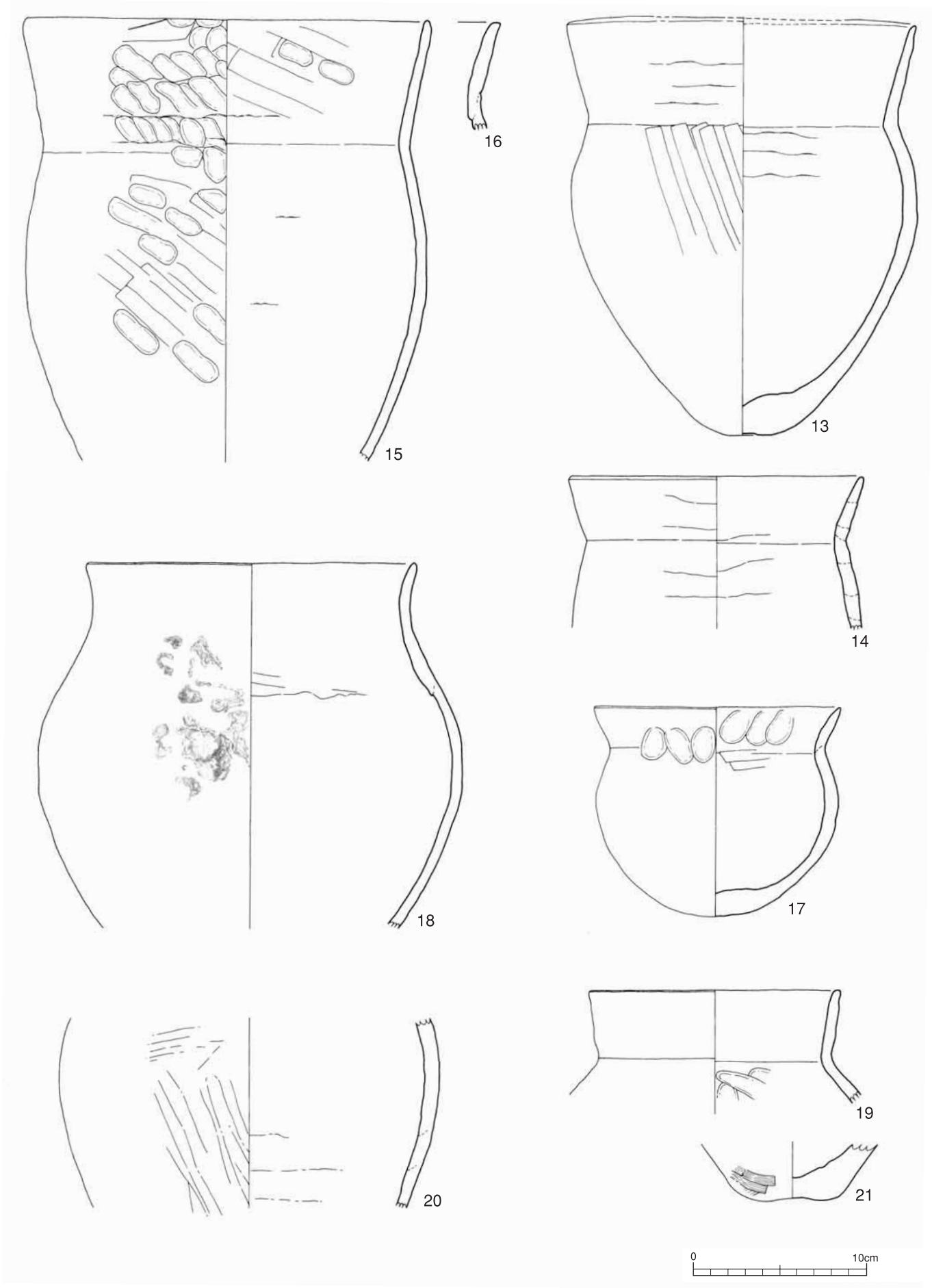
調査区の西側Ｂ２グリッドに位置し、１号・１３号住居跡を切っている。焼土の位置から南西方向に長い長方形プランを呈すると考えられるが、耕地整理により完全に削平されている。構造は１号住居・１３号住居と同様で、主柱穴は不明である。遺物については１３号住居の遺物と同時期と考えられ、１３号住居に含めた形で掲載する。

２７号竪穴住居跡（ＳＡ２７：第５図）

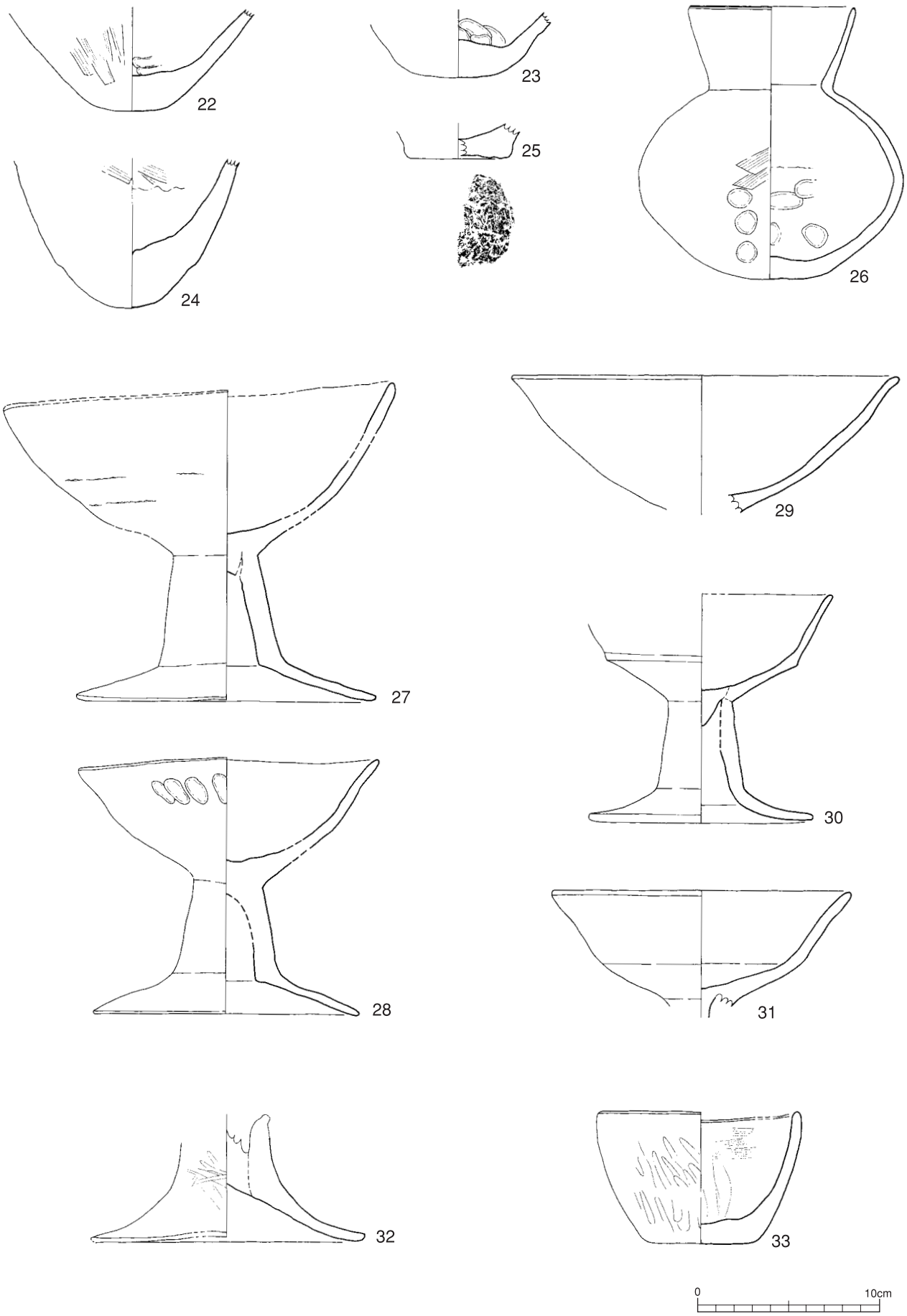
調査区の西側Ｂ２グリッドに位置し、１３号住居跡に切られている。立地的に２６号住居と同様に検出状況が非常に悪く、検出した面が掘り底に近い状態であった。構造的には２６号住居と同じで、焼土の位置から南北方向に長い長方形プランを呈し、主柱穴は不明である。



第６図　山口遺跡第２地点　１号竪穴住居跡出土遺物実測図（Ｓ＝1／3）



第７図　山口遺跡第２地点　13号竪穴住居跡出土土器実測図（１）（S＝1／3）



第８図　山口遺跡第２地点　13号竪穴住居跡出土土器実測図（２）（Ｓ＝1／3）

２号竪穴住居跡（ＳＡ２：第９図）

調査区の南側Ｂ３グリッドに位置し、２８号住居跡を切っている。南北方向がやや長い隅丸方形プランを呈し、規模は長軸約5.7m、短軸約4.2mを測り、推定床面積は23.9㎡と大型の住居跡である。主軸方位はN14°Ｅを指す。現存壁高は0.18m～0.32mを測り、床面はほぼ平坦を保つ。プラン中央部には焼土が確認され、埋土は鉄分・炭化物を含む粘性の砂質土が堆積する。主柱穴は４本とみられ、その距離は（ｐ１－ｐ２　3.7m／ｐ２－ｐ３　2.2m／p3－p4　3.1m／p4－p1　2.6m）で床面からの深さは約30㎝～35㎝である。遺物の多くは床面から若干浮いた状態で多量に出土した。

出土遺物（第11図：34～55）

この住居跡に伴う遺物は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。

34～47は土師器の甕である。34は口縁部が「くの字」状で口縁部付け根付近から緩やかに外反する。付け根の内外面の稜は明瞭である。また、口縁部の厚さはほとんど変らず薄くなって尖り気味にまとまる。底部は側面が外反しながら立ち上がり、底面との境が明瞭な平底である。内面は平坦ではない。器面調整はほとんどナデが主体となり内面に粘土紐の接合痕を残す。37・38・39は口縁部が頸部に稜をなさず長く緩く外反、あるいは上方に延びる。40・41は口縁端部がやや内湾する。42・43は口縁端部が外反し、胴部中位が張るものと思われる。44の器面調整には外器面に平行タタキがみられる。底部には小さな平底のもの（45）、平底のもの（46）、木の葉底を呈するもの（47）がある。 48～51は土師器の壺である。48は頸部に布目圧痕を残す刻目が施された貼付突帯がみられる。51はナデと不定方向のタタキがみられる。胴部に穿孔がみられ脚台を有する。52は土師器の鉢の口縁部である。内面にハケ目調整がみられる。53～55は土師器の高坏で、53・54は同一個体で坏部が深く、口縁部が内湾し脚部が短い同一個体である。55は口縁部が内湾気味である。

２８号竪穴住居跡（ＳＡ２８：第10図）

調査区の南側Ｂ３グリッドに位置し、２号住居跡に切られている。南北方向がやや長い長方形プランを呈し、規模は長軸約5.1m、短軸約4.1mを測り、推定床面積は20.9㎡と中型の住居跡である。主軸方位はN14°Ｅを指す。現存壁高は0.23m～0.3mを測り、床面はほぼ平坦を保つ。竪穴の埋土最下層はにぶい黄褐色土で、その上面に鉄分が沈着し硬化している。床面中央部に焼土の広がりがみられ、柱穴（ｐ1－ｐ4）の間に、0.69m×0.88m・深さ22㎝の不定形の掘り込みを有し、埋土が炭化物・焼土粒を多く含むことから火所として利用された可能性が高い。主柱穴は４本とみられ、その距離は（ｐ1－ｐ2　2.42m／ｐ2－ｐ3　2.1m／ｐ3－ｐ4　2.5m／ｐ４－ｐ1　1.98m）で床面からの深さは約32㎝～36㎝である。遺物の多くは床面直上か若干浮いた状態で出土した。土圧で潰されたほぼ完形の土器等も出土している。

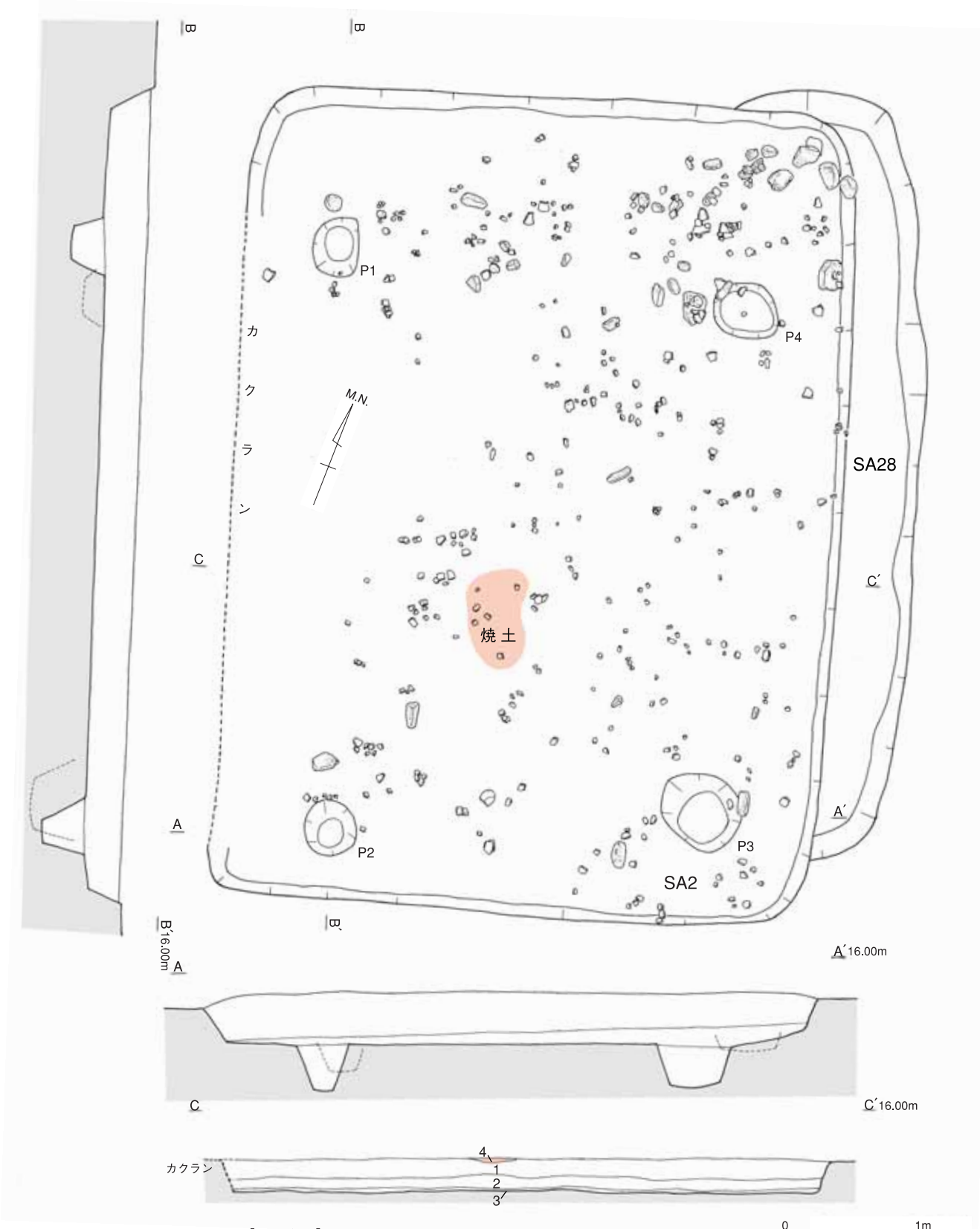
出土遺物（第12図：56～62）

この住居跡に伴う遺物は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。

56～58は土師器の甕である。頸部に稜をもたず、口縁部は緩やかに外反する。器面調整は内外面ともナデで、底部は径の小さな平底、木の葉底がみられる。

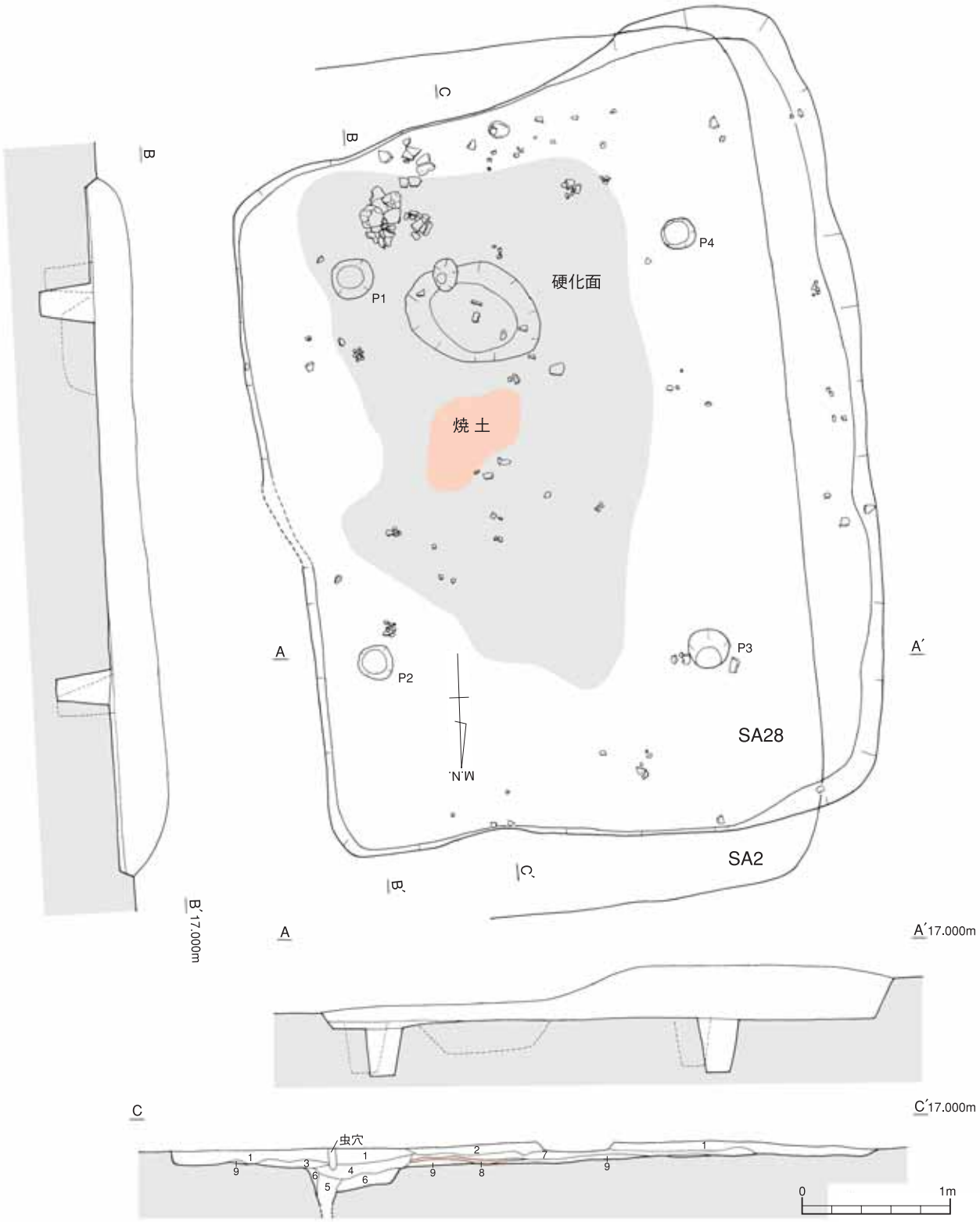
59は土師器の壺である。頸部に布目圧痕を残す刻み目が施された貼付突帯がみられる。

60・61は土師器の高坏である。60は口縁部が緩やかに外反し、61は口縁部が外傾し直線的に延びるものと思われる。62は、鉄鏃の鏃身部で中央に小さな穿孔がみられる。



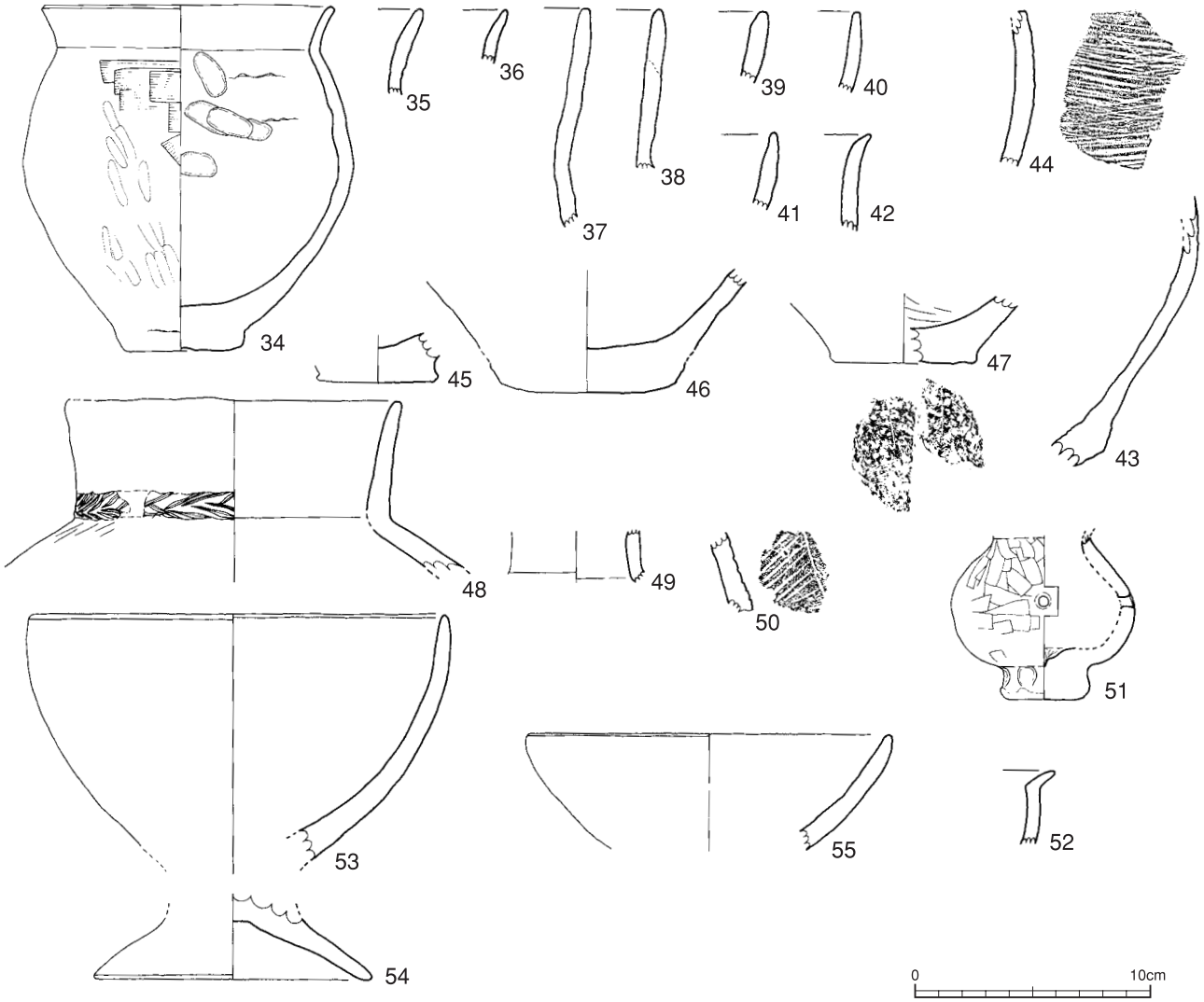
【土層注記】ＳＡ２
１：明黄褐色（10YR6/6）粘性砂質土で砂利を含む。下部に鉄分が付着。
２：にぶい黄橙色（10YR6/4）粘性砂質土で炭化物を含む。
３：にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質土。
４：明赤褐色（2.5YR3/6）焼土。

第９図　山口遺跡第２地点　２号竪穴住居跡実測図（Ｓ＝1／40）

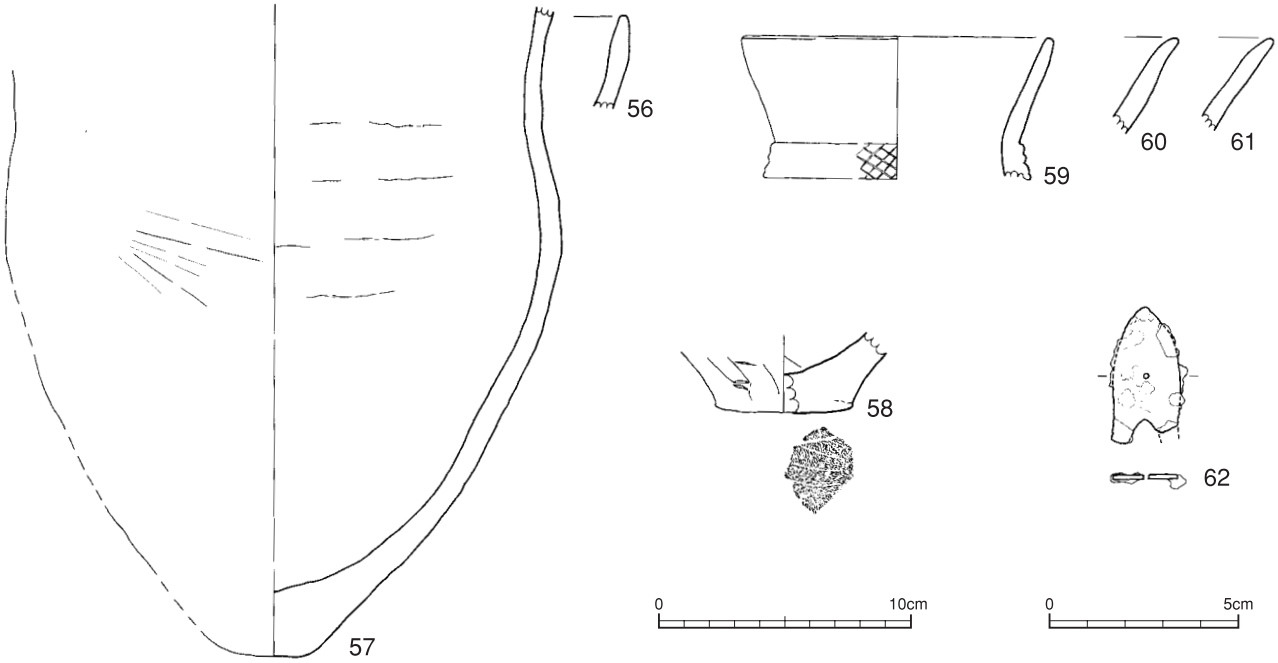


【土層注記】ＳＡ２８
１：褐色土（10YR4/4）やや硬質でしまりがあり、炭化物・にぶい黄褐色粒を含む。
２：暗褐色土（10YR3/3）やや硬質でしまりがあり、１層より炭化物を多く含む。
３：黒褐色土（10YR2/2）やや硬質でしまりが弱い。炭化物を多量に含む。焼土を若干含む。
４：にぶい黄褐色土（10YR3/3）粘性があり、黒褐色土。焼土粒等をブロック状に含む。
５：黒褐色土（10YR2/2）粘性があり、炭化物・砂利等を含む。
６：にぶい黄褐色土（10YR5/4）砂利・黒褐色土粒等を含む。しまりがない。
７：にぶい黄褐色土（10YR5/3）砂質でしまりがある。
８：赤褐色土（5YR4/8）焼土。
９：にぶい黄褐色土（10YR5/3）かなり硬質でしまりが強い。硬化面。上部は鉄分が沈着する部分もみとめられる。

第10図　山口遺跡第２地点　28号竪穴住居跡実測図（Ｓ＝1／40）



第11図　山口遺跡第２地点　２号竪穴住居跡出土土器実測図（S＝１／３）



第12図　山口遺跡第２地点　28号竪穴住居跡出土遺物実測図（S＝1／3：62…S＝1／2）

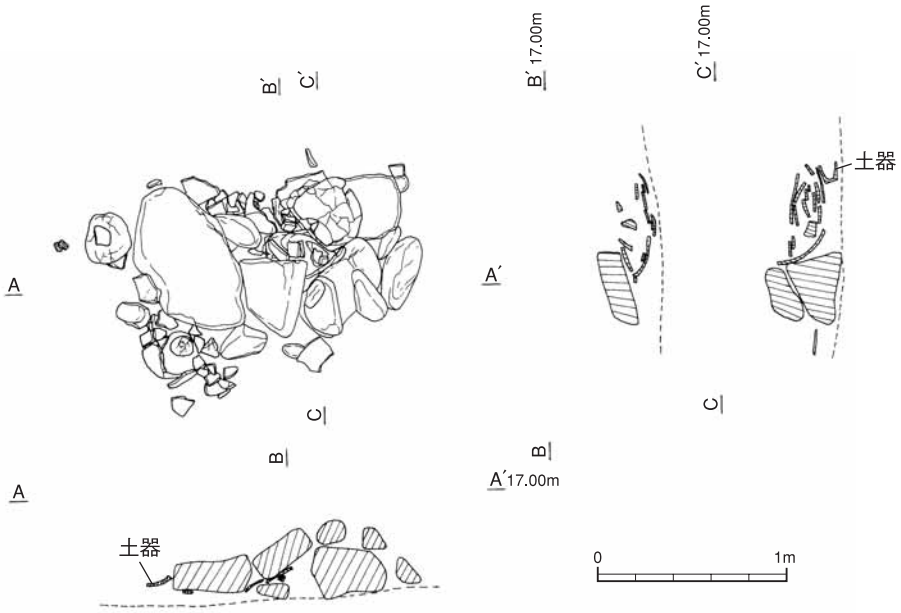
第２竪穴住居跡群（ＳＡ３・ＳＡ１４・ＳＡ２５・ＳＡ３８：第23図）

３号竪穴住居跡（ＳＡ３：第14図）

調査区の中央部よりやや北寄り西側Ｃ３グリッドに位置し、１４号住居跡・１５号住居跡・３８号住居跡を切っている。また、北西隅が１４号住居跡と接しているが切り合い関係は確認できなった。隅丸方形プランを呈し、規模は長軸約5.6m、短軸約5.4mを測り、推定床面積は30.24㎡と大型の住居跡である。主軸方位はN54°Eを指す。現存壁高は0.14m～0.24mを測り、床面は中央部に向けて緩やかに凹む。竪穴部の埋土最下層中央部ににぶい黄橙色土の硬化面（2.9m×3.8m）を有し、プラン全面に炭化物・焼土等が堆積する。主柱穴は４本とみられ、その距離は（p1－p2　2.40m／p2－p3　2.26m／p3－p4　2.42m／p4－p1　2.30m）で床面からの深さは約48㎝～54㎝である。床面中央部に1.72×1.02m・深さ22㎝の不定形の掘り込みが確認された。遺物の多くは床面直上か若干浮いた状態で多量に出土した。また、多くの炭化物（材？）が南西側に多量に出土した。不定形の掘り込みの南側に10㎝～40㎝大の石が径75㎝、高さ25㎝ほどに積み上げられたものが１カ所みられた。この石組の間にも炭化物がみられたことから、火所として利用された可能性がある。

出土遺物（第15図：63～70・第16図：72～81）

この住居跡に伴う遺物は主に下層から出土しており、63～78は土師器の甕である。形態的にいくつかのタイプがみられる。63～69は、口縁部が直立気味に長く緩やかに外反する。口縁部付け根の稜線は内外面ともうすくなる。また、体部高が低くなり、相対的に口縁部が長くなる。67～70は、口縁部が「くの字」状で、口縁部付け根付近から緩やかに外反する。付け根の外面の稜は明瞭で、口縁部の厚さはほとんど変らず端部で薄くなって尖り気味にまとまる。71・72は球形の胴部に直立気味の口縁部が付く。頸部屈曲が小さく不明瞭な稜をもち、胴部最大径が口径をやや上回る。甕の器面調整は、ほとんど内外面ともナデ調整が主体となり、内面に粘土紐の接合痕や指頭痕を残すものがみられる。72は外面にハケ目後ナデ調整がみられる。底部は63・71・72・74・75・77が尖底気味の平底、66・78は平底となり、64・67・76は底部外面を押圧により凹ませている。79は脚台状の大きな上げ底となる。また、80は端部の張り出しが大きく、64・67・76・81は木の葉底を呈する。82は土師器の壺である。球胴に尖底に近い平底をもち、器面調整は、内外面ともナデ調整である。83～97は土師器の高坏である。形態的バリエーションが多様であり、坏部を分類する。

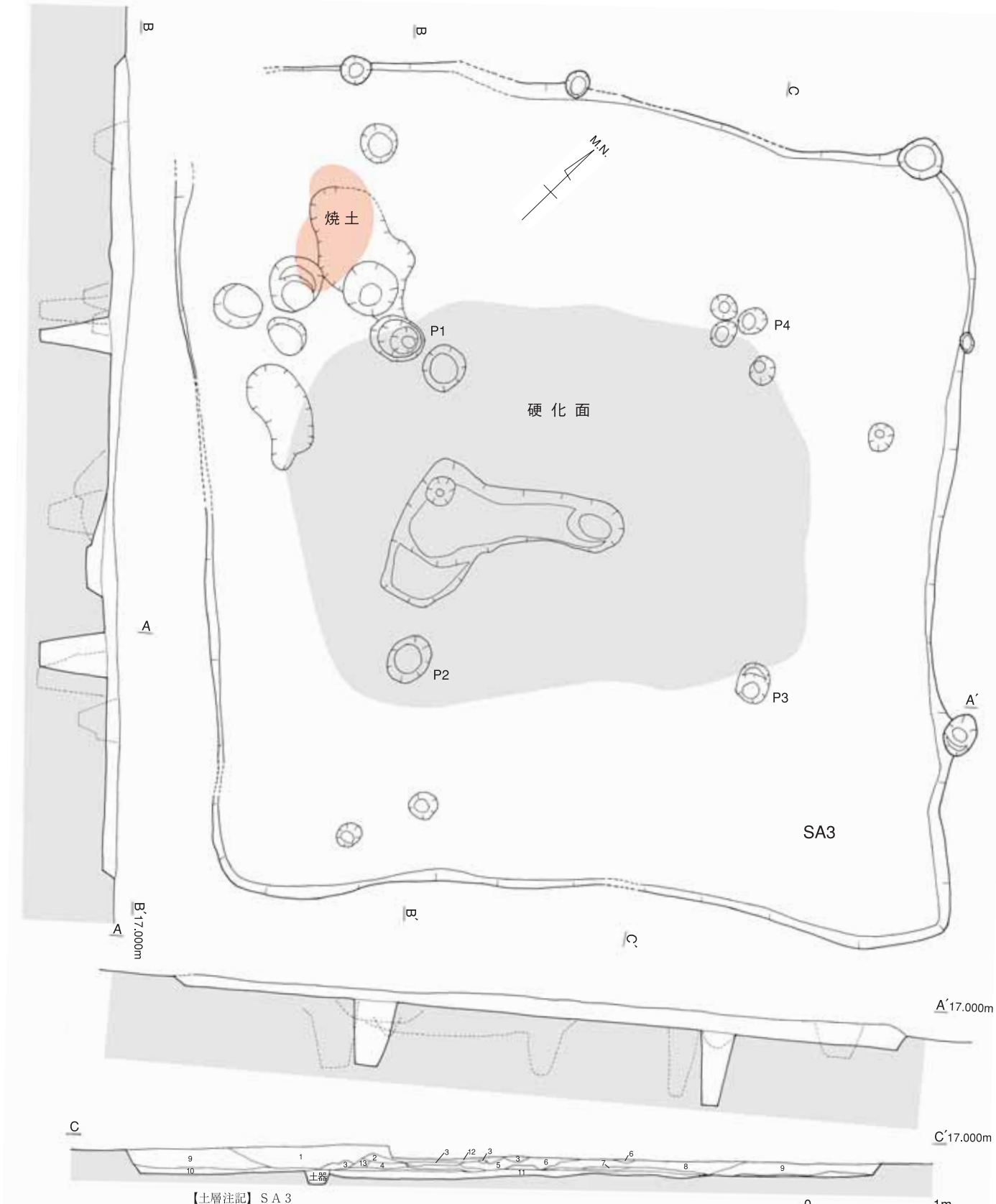


第13図　３号竪穴住居跡石組検出状況図（Ｓ＝１／40）

坏部ａ　口縁部が外傾し、直線的に延びるもの（83）

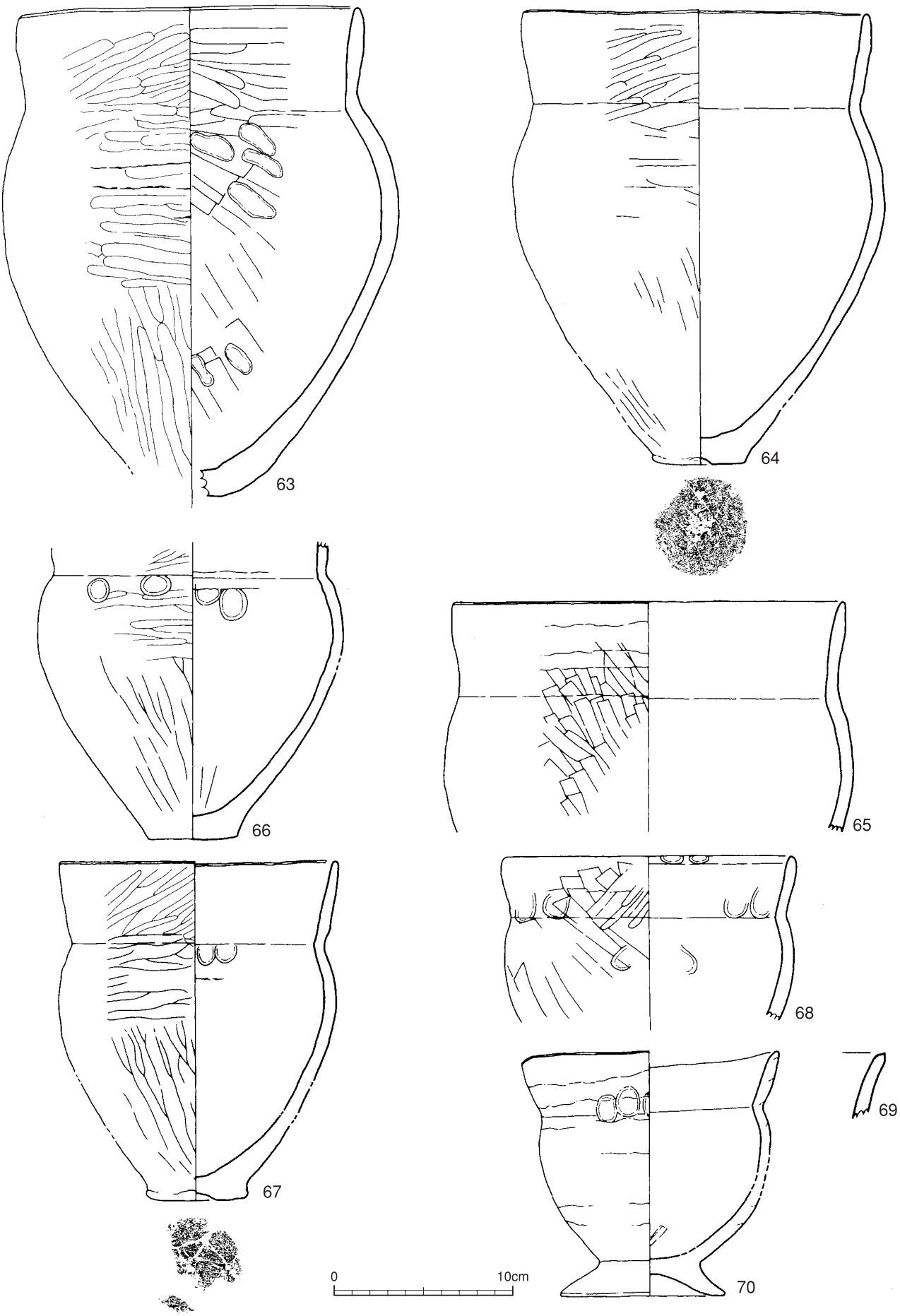
ｂ　浅い体部に直線的な口縁部が付き、稜が明瞭なもの（84～90）

ｃ　やや深さの有る体部に大きく外反する口縁部が付くもの（91）

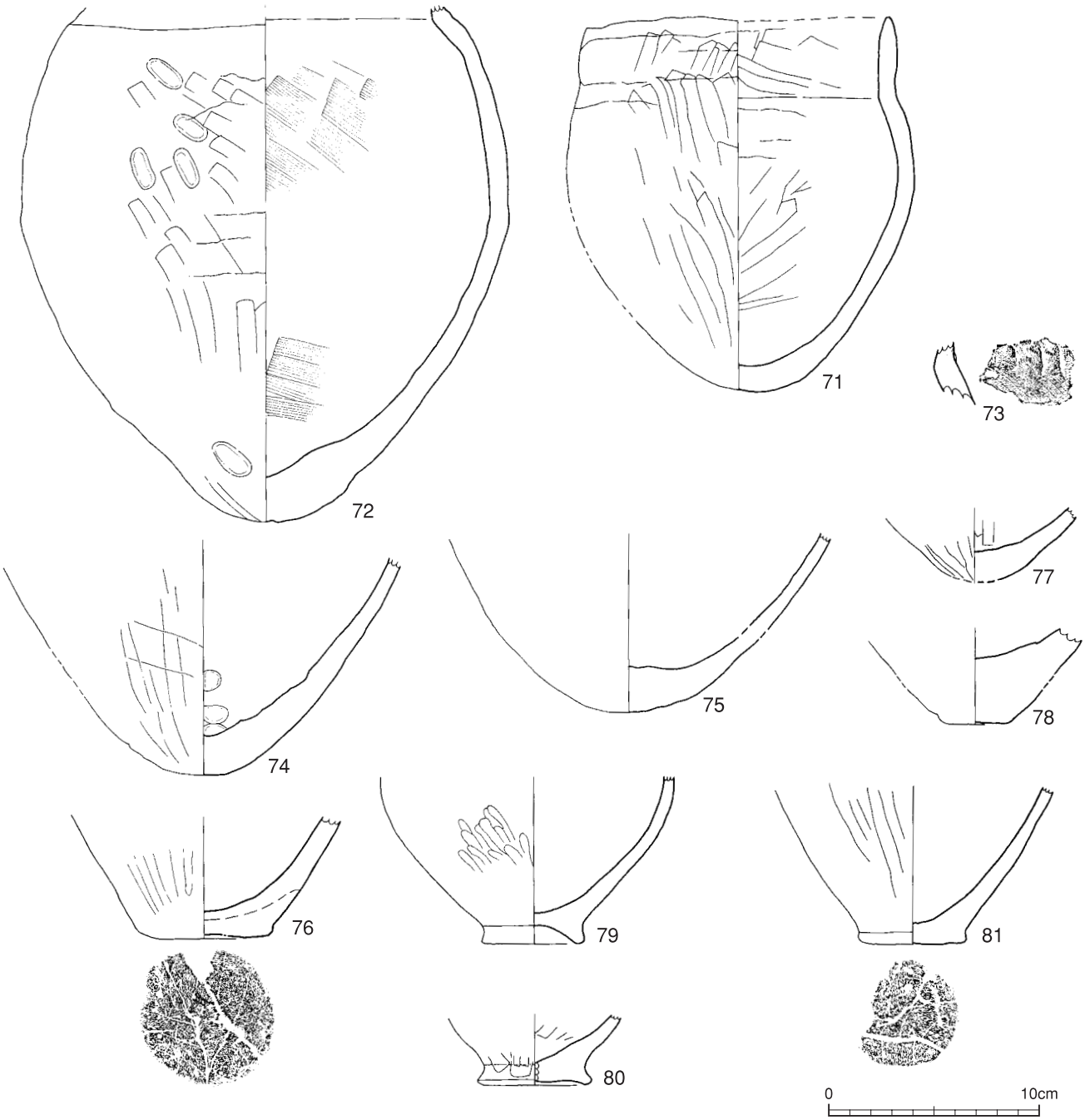


【土層注記】ＳＡ３
１：褐色土（10YR4/6）やや硬質でしまりが強い。マンガン斑・炭化物を含む。
２：褐色土（10YR4/4）やや硬質でしまりが強い。炭化物を多量に含み、焼土ブロックを若干含む。
３：にぶい赤褐色土（5Y4/4）やや硬質でしまりがやや強い。焼土ブロック（割合が高い）・炭化物を多く含む。
４：にぶい黄褐色土（10YR4/5）やや硬質でしまりがやや強い。炭化物を多量に含み、焼土ブロックを若干含む。
５：褐色土（10YR4/6）やや硬質でしまりがやや強い。にぶい黄褐色土（10YR4/3）がブロック状に含み、炭化物を若干含む。
６：にぶい黄褐色土（10YR4/3）やや硬質でしまりがやや強い。炭化物を含む。（部分的に筋状になる）
７：にぶい黄褐色土（10YR3.5/3）やや軟質でややしまりがない。炭化物を若干含む。
８：褐色土（10YR4.5）やや硬質でしまりが強い。炭化物を多く含む。（１層より多量）
９：褐色土（10YR4/4）やや硬質でしまりが強い。１層と比べ炭化物やマンガン斑の量が少ない。
１０：にぶい黄褐色土（10YR5/4）やや硬質でしまりが強い。炭化物を若干含む。
１１：にぶい黄橙色土（10YR6/4）硬化面。
１２：褐色土（10YR4/4）やや硬質でややしまりがあり、炭化物・焼土ブロックを多く含む。
１３：褐色土（10YR4/6）やや硬質でややしまりがあり、炭化物を若干含む。

第14図　山口遺跡第２地点　３号竪穴住居跡実測図（Ｓ＝1／40）



第15図　山口遺跡第２地点　３号竪穴住居跡出土土器実測図（１）（S＝1／3）



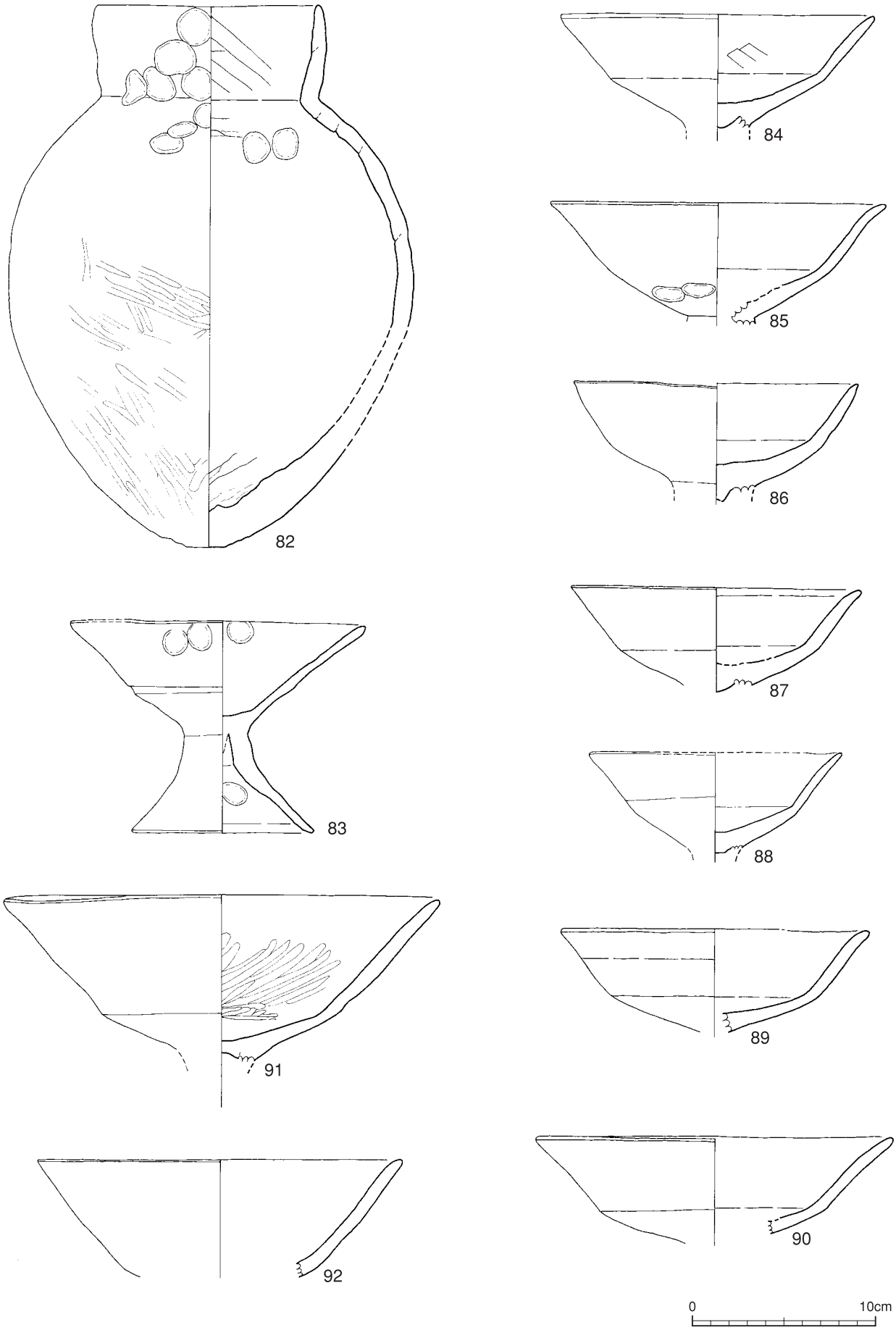
第16図　山口遺跡第２地点　３号竪穴住居跡出土土器実測図（２）（Ｓ＝1／3）

坏部ｄ　全体に丸みをもち、稜の不明瞭なもの（92）

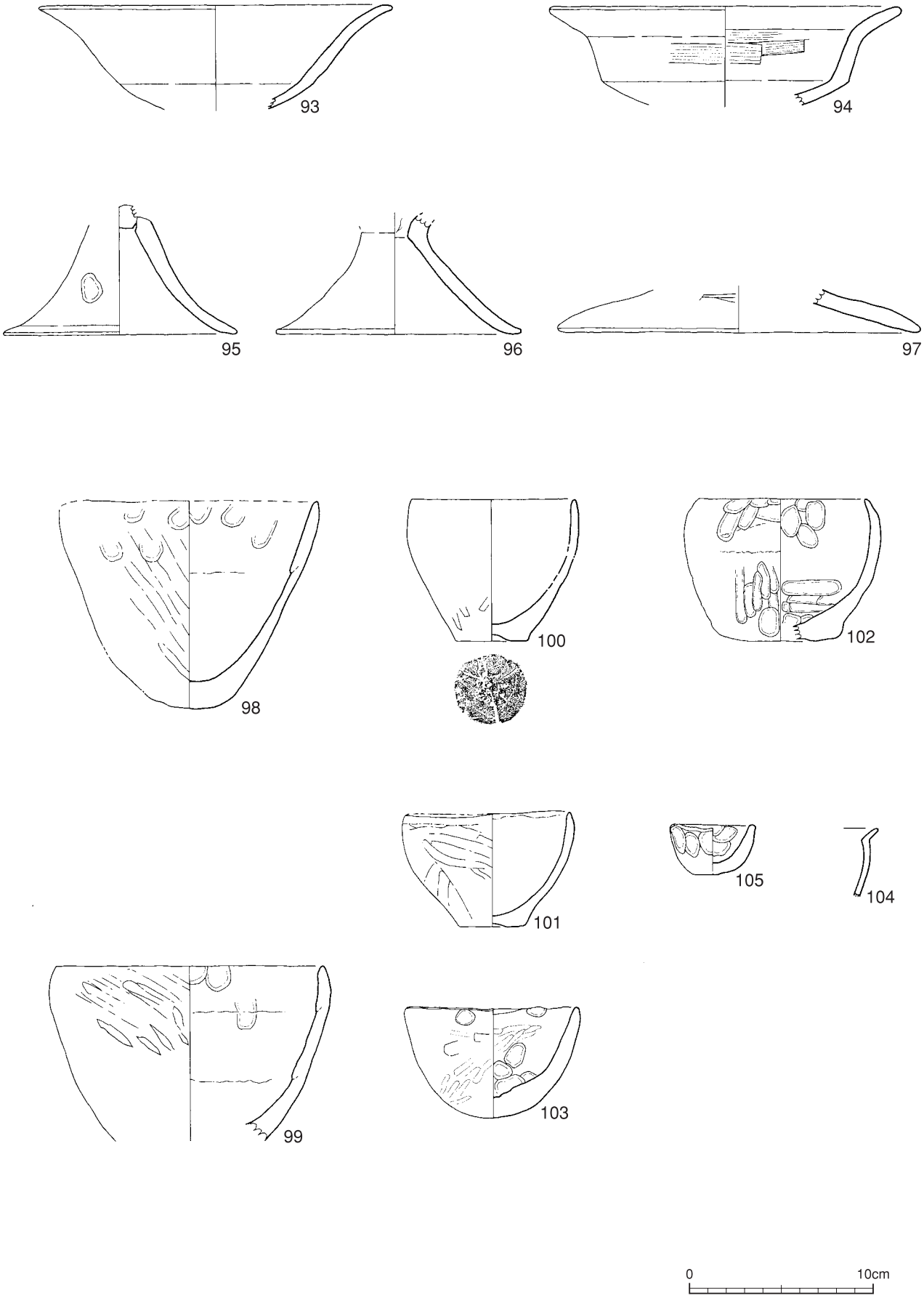
ｅ　浅い体部に口縁部が緩やかに外反するもの（93）

ｆ　受け部状の突出部の内側に外反しながら口縁部が立ち上がり、端部は外反する（94）

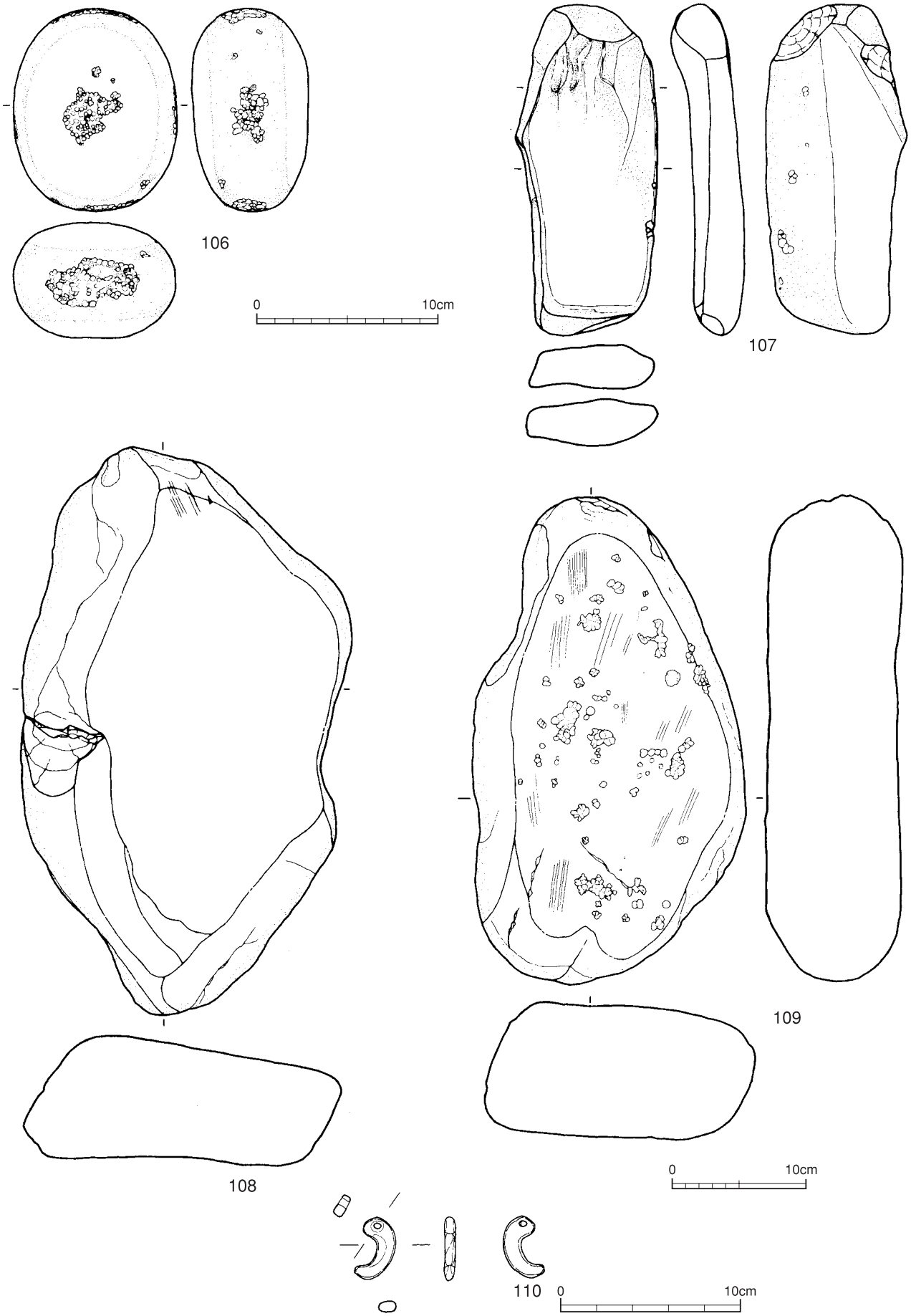
95・96の脚部は、滑らかな「八」字形を呈し、裾部との区分が不明瞭なものである。95は円柱状の脚に伏鉢状の裾部が付くものである。坏部と脚部の接合法には、粘土塊の充填と脚の貼付けの２通りがみられる。98～104は土師器の鉢である。口縁部が直線的に伸びるもの（98）、口縁端部が内湾するもの（99～103）、口縁端部に明瞭な稜をもつもの（104）がある。105は手捏ねミニチュアの鉢である。106は砂岩の磨石で、平面形態は円形を呈し、周縁に敲打痕が観察される。107～109は砂岩の砥石である。110は勾玉である。蛇紋岩製で１点のみの出土である。Ｃ字状に湾曲する形状で、頭部に両端より穿孔を施している。



第17図　山口遺跡第２地点　３号竪穴住居跡出土土器実測図（３）（S＝1／3）



第18図　山口遺跡第２地点　３号竪穴住居跡出土土器実測図（４）（S＝1／3）



第19図　山口遺跡第２地点　３号竪穴住居跡出土石器実測図（S＝1／3，107～109…1／4，110…1／2）

１４号竪穴住居跡（ＳＡ１４：第20図）

調査区の中央部よりやや北寄り西側に位置する。プランの東側と西側の一部が削平され壁の立ち上がりが確認できなかった。また、南東隅が３号住居跡と接しているが切り合い関係は確認できなかった。ほぼ南北に主軸をもち、南北軸約3.9m、東西軸は不明であるが主柱穴の在り方から長方形プランであるとみられる。主軸方位はN70°Ｅを指す。現存壁高は0.04m～0.10mを測り、床面はほぼ水平をたもつ。竪穴部の北東部に硬化した部分が一部みられる。主柱穴はプランに対して東側による４本柱とみられ、その距離は（p1－p2　1.14m／p2－p3　1.90m／p3－p4　1.30m／p4－p1　1.84m）で床面からの深さは約10㎝～21㎝である。検出状況が良好でなかったため検出面から掘り底まで10㎝ほどしかなく、床面の認定は困難である。遺物の多くはプランの東側に若干浮いた状態で出土した。

出土遺物（第22図：112～114）

この住居跡に伴う遺物は主に下層から出土しており、プランの東側に集中して分布している。遺物の内訳は、111・112は土師器甕の頸部である。111は外器面にナデ、内器面に横・斜方向のナデ・平行タタキが施されている。112は外器面にタタキ、内器面に横方向のハケ目調整が施されている。113・114は土師器甕の頸部である。113は外器面にカキ目・横方向のナデ、部分的に指頭痕を残す。内器面には斜方向のハケ目調整がみられる。114は外器面にタタキ、内器面に斜方向のハケ目調整が施されている。

２５号竪穴住居跡（ＳＡ２５：第20図）

調査区の中央部よりやや北寄り西側Ｃ３グリッドに位置し、３号住居跡に切られている。立地的に１４号住居と同様に検出状況が非常に悪く、検出した面が掘り底に近い状態であった。ほぼ南北に主軸をもち、東西軸約3.2m、南北軸は不明であるが主柱穴の在り方から方形プランであるとみられる。主軸方位はN40°Ｅを指す。床面に３基の柱穴を確認したが、配置状況から主柱は２本柱ではないかとみられる。１基は不明である。その距離は（p1－p2　1.32m／p1－p3　0.62m）である。住居跡の南側には５号土坑を伴う。前述のとおり検出状態が悪かったため、遺物の出土は少なかったが完形土器が数点検出されている。

出土遺物（第22図：115～118）

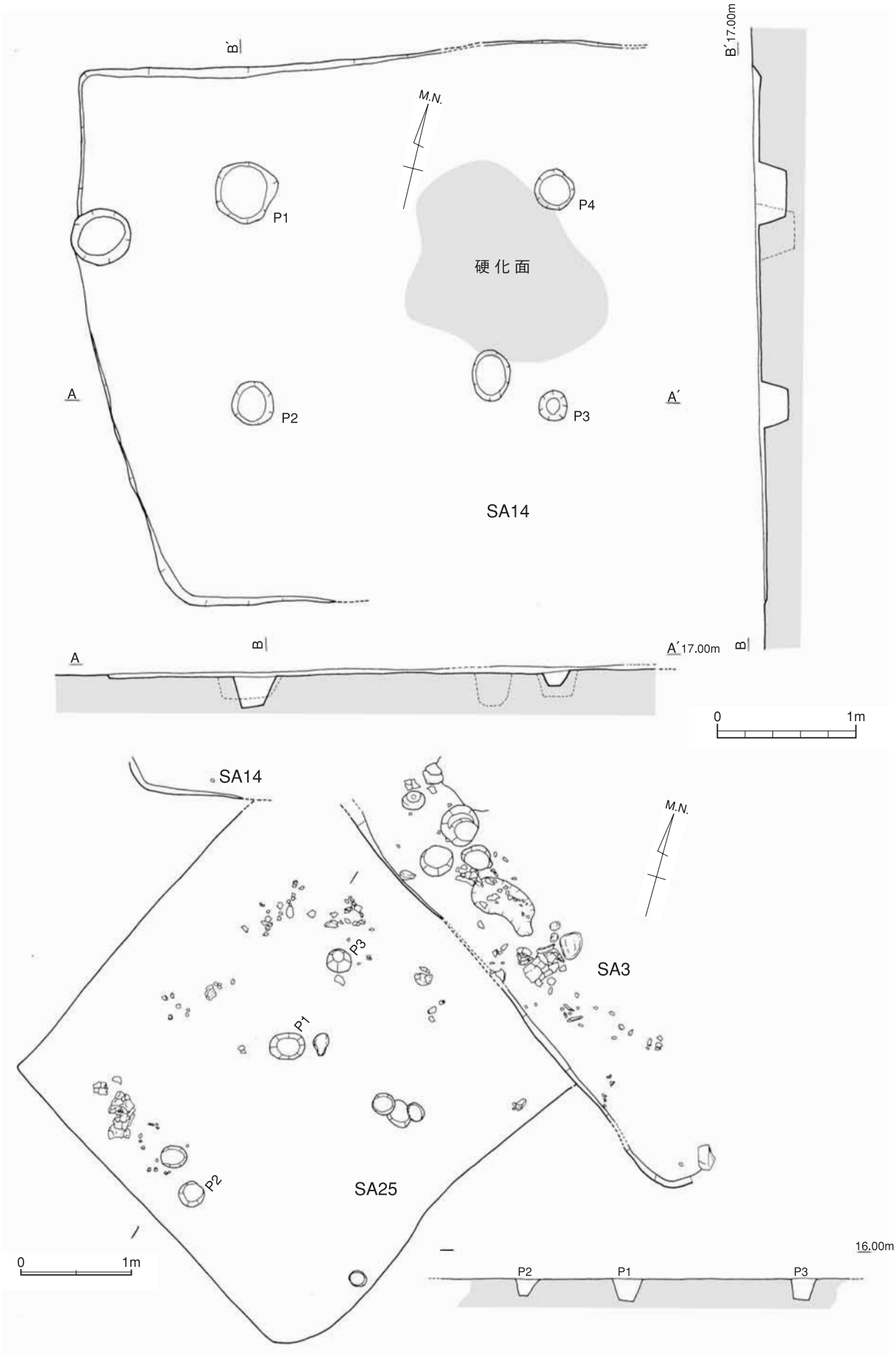
この住居跡に伴う遺物は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。遺物の内訳は、115・116は土師器の甕である。胴部最大径が口縁部径を上回る。115は口縁部が直立気味に長く外反し、116は直立気味に長く外反し、口縁端部は緩やかに外反する。底部に木の葉底を呈する。117は外器面に平行タタキがみられる。118は土師器の高坏で浅い体部に直線的な口縁部が付き、稜が明瞭である。

３８号竪穴住居跡（ＳＡ３８：第20図）

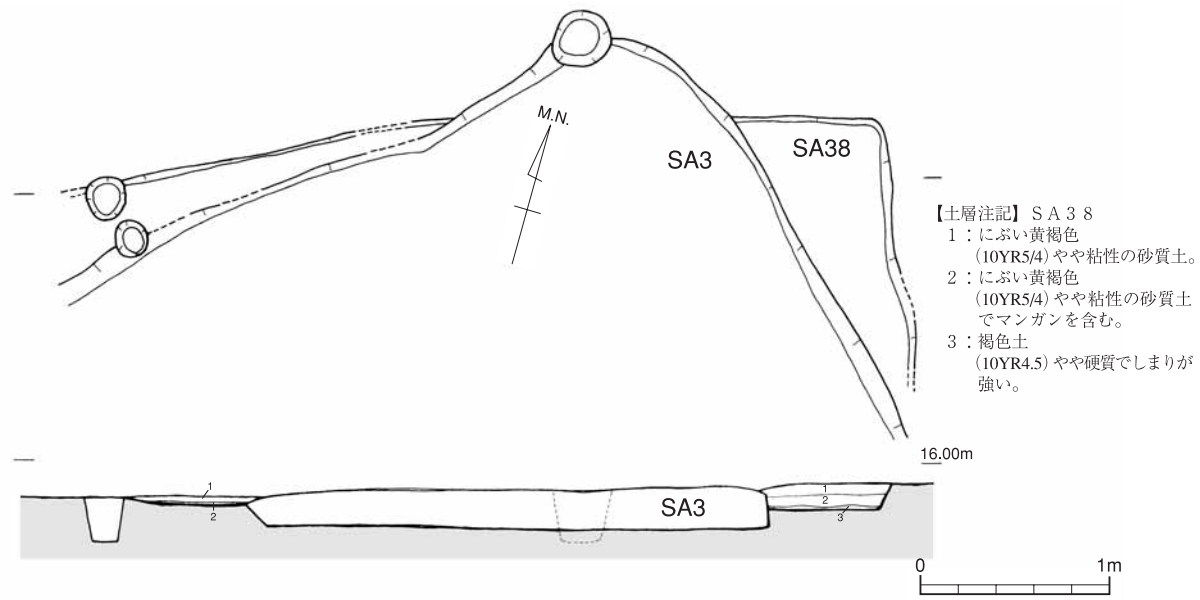
調査区の中央部よりやや北寄り西側Ｄ４グリッドに位置し、３号住居跡により切られている。また、プランの西側～東側が削平され壁の立ち上がりが確認できなかった。軸が不明であるためにプランも確認できなかった。遺物も非常に少なく、小さな土師器片が出土しているにすぎない。

出土遺物（第22図：119・120）

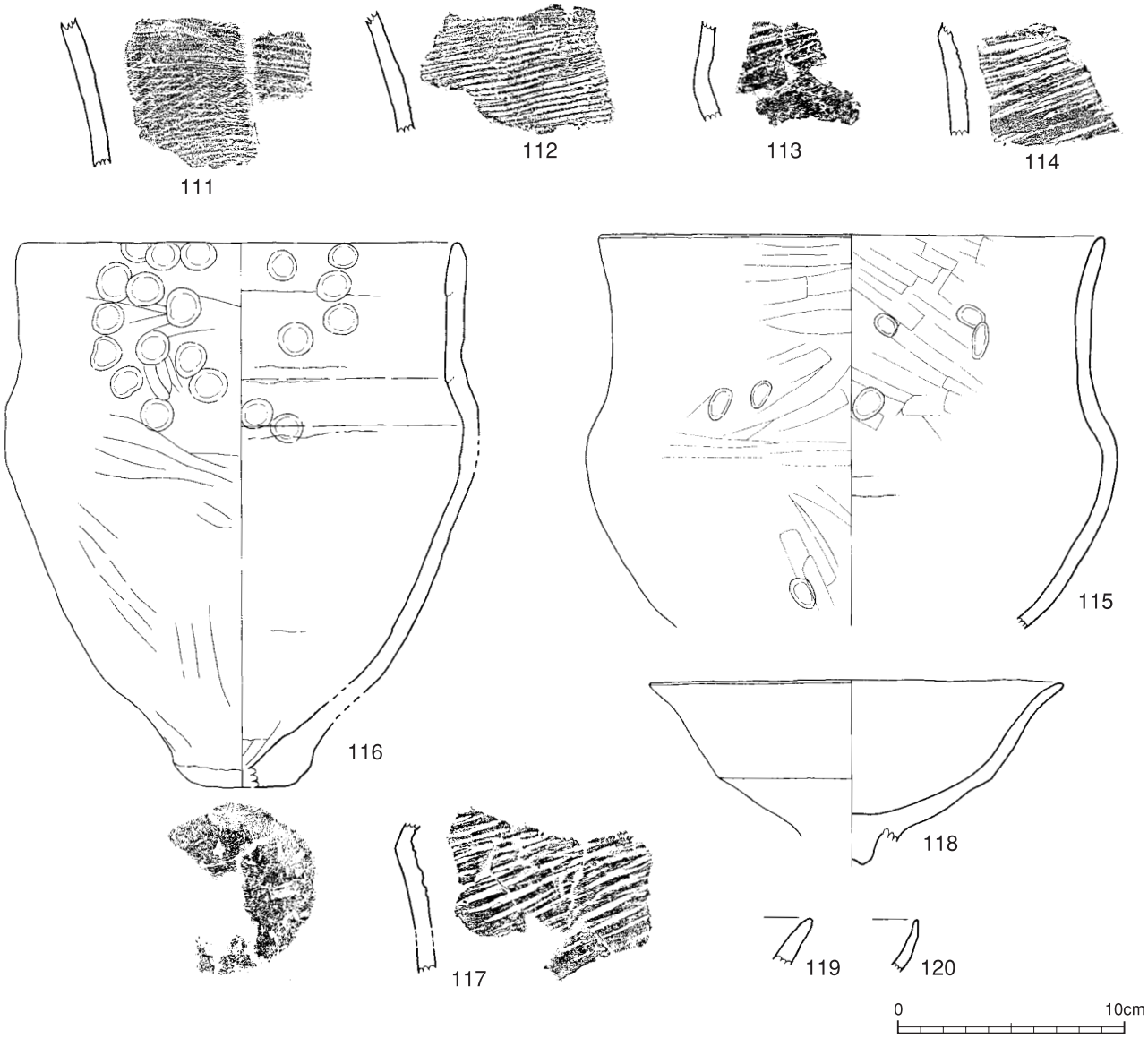
この住居跡に伴う遺物は主に下層から出土している。遺物の内訳は、119は土師器の高坏、120は土師器の坏とみられる。



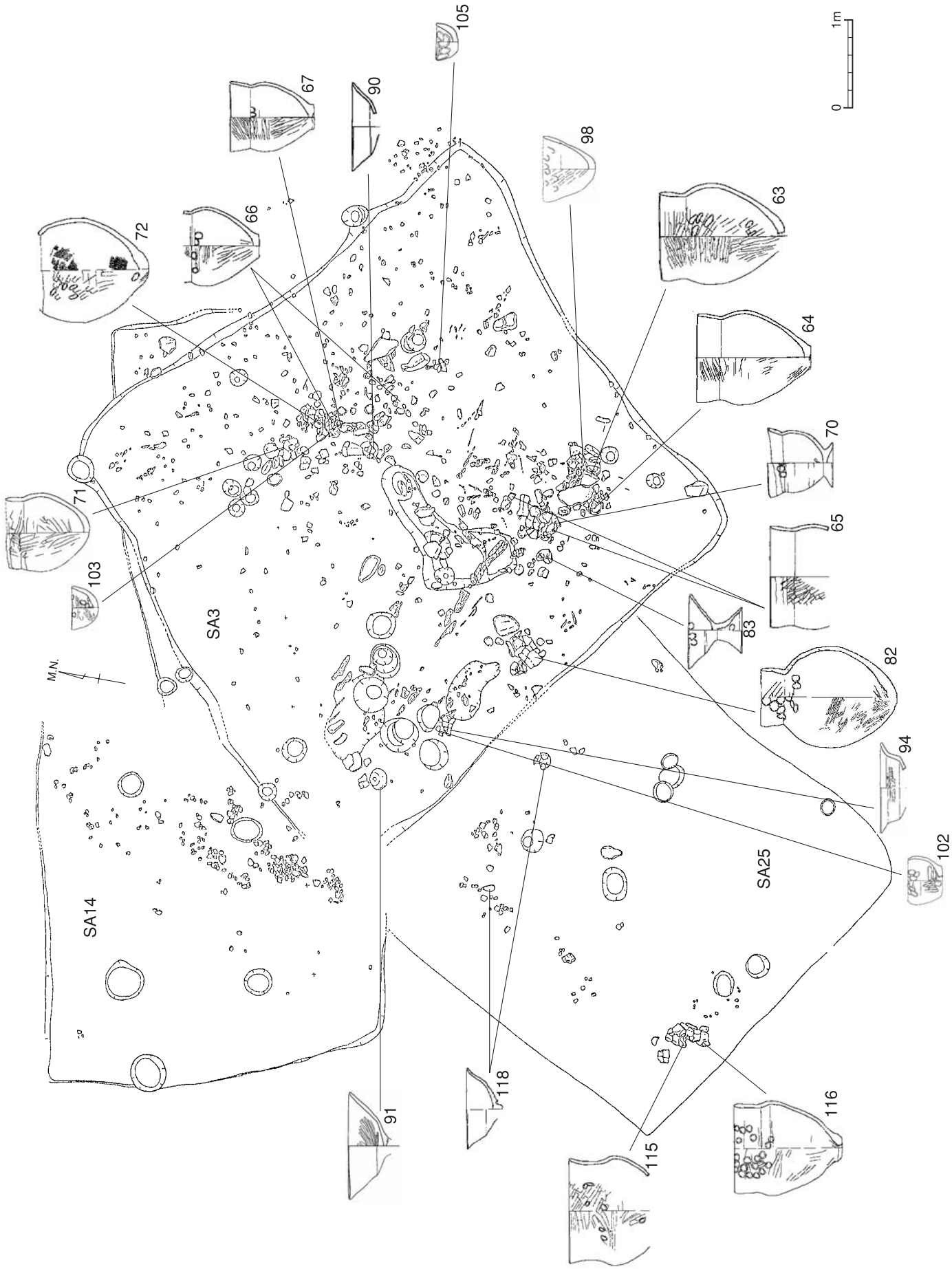
第20図　山口遺跡第２地点　14号（S＝1／40）・25号（S＝1／50）竪穴住居跡実測図



第21図　山口遺跡第２地点　38号竪穴住居跡実測図（Ｓ＝1／40）



第22図　山口遺跡第２地点　14号・25号・38号竪穴住居跡出土土器実測図（Ｓ＝1／3）
（ＳＡ14：111～114，ＳＡ15：115～118，ＳＡ38：119・120）



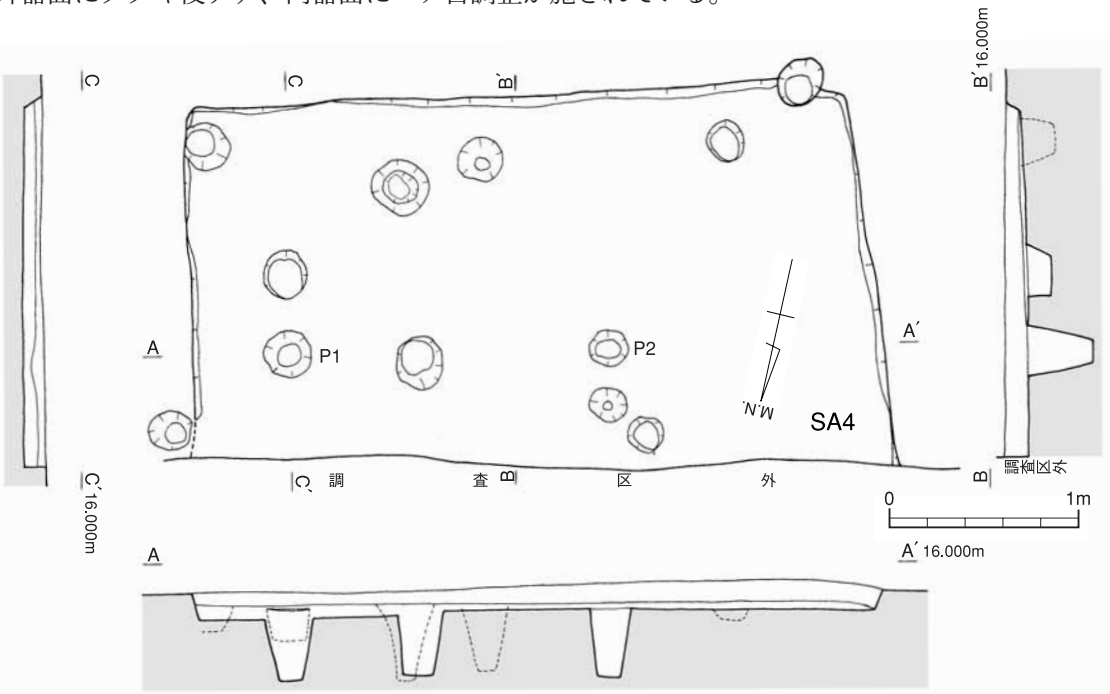
第23図　山口遺跡第２地点　第２竪穴住居跡群土器出土位置図

４号竪穴住居跡（ＳＡ４：第24図）

調査区北壁沿い５号住居跡の北北東に隣接し、１６号住居跡・４号土坑の北西約３ｍＤ４グリッドに位置する。住居跡の半分は調査区外に向かって延びるかたちで検出された。ほぼ南北に主軸をもち、東西軸約3.6m、南北軸は不明であるが主柱穴の在り方から長方形プランであるとみられる。主軸方位はN16°Wを指す。現存壁高は0.12m～0.16mを測り、床面は調査区外に向かって緩やかに傾斜する。主柱穴は長軸方向に並ぶ２本柱と考えられ、その距離は（p1－p2　1.46m）で床面からの深さは約40㎝である。床面は貼り床ではなく、掘り底をそのまま利用したとみられるが、硬化面や焼土等は確認できなかった。遺物の多くは床面直上か若干浮いた状態で出土した。

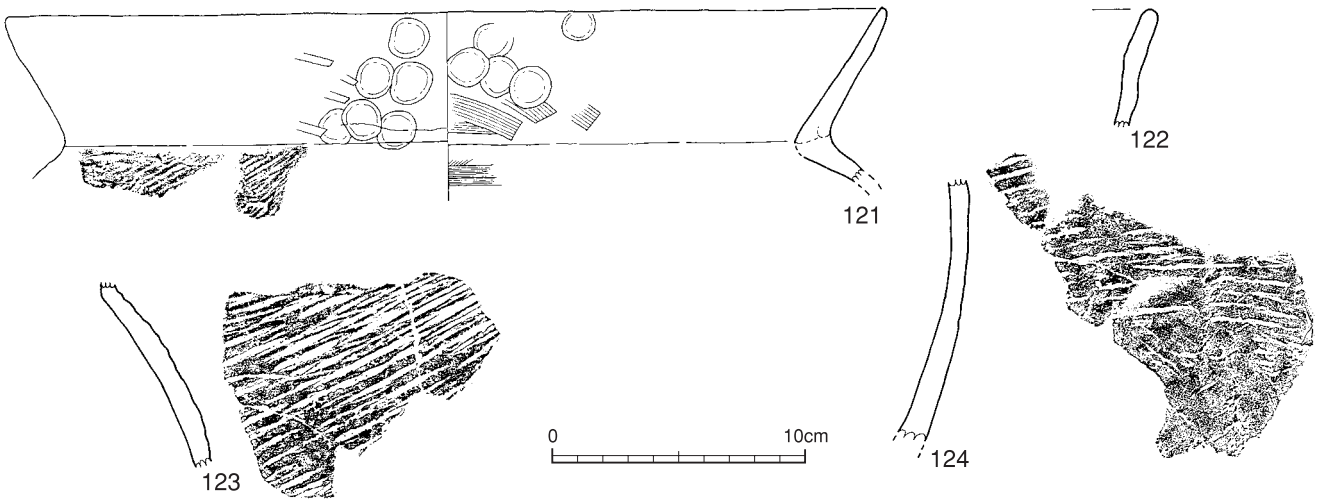
出土遺物（第25図：121～124）

この住居跡に伴う遺物は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。遺物の内訳は、121～122は土師器の甕である。121は口縁部が「くの字」状で口縁部付け根付近から外反する。付け根付近の内外面の稜は明瞭である。外器面にタタキがみられる。122は口縁部がやや外反する。123・124は胴部で外器面にタタキ後ナデ、内器面にハケ目調整が施されている。



【土層注記】ＳＡ４
1：褐灰色土（10YR4/1）しまりがあり、粘性がややあり。マンガン・鉄分を微量含む。
2：にぶい褐色土（10YR3/1）しまりがややあり、粘性ややあり。

第24図　山口遺跡第２地点　４号竪穴住居跡実測図（Ｓ＝1／40）



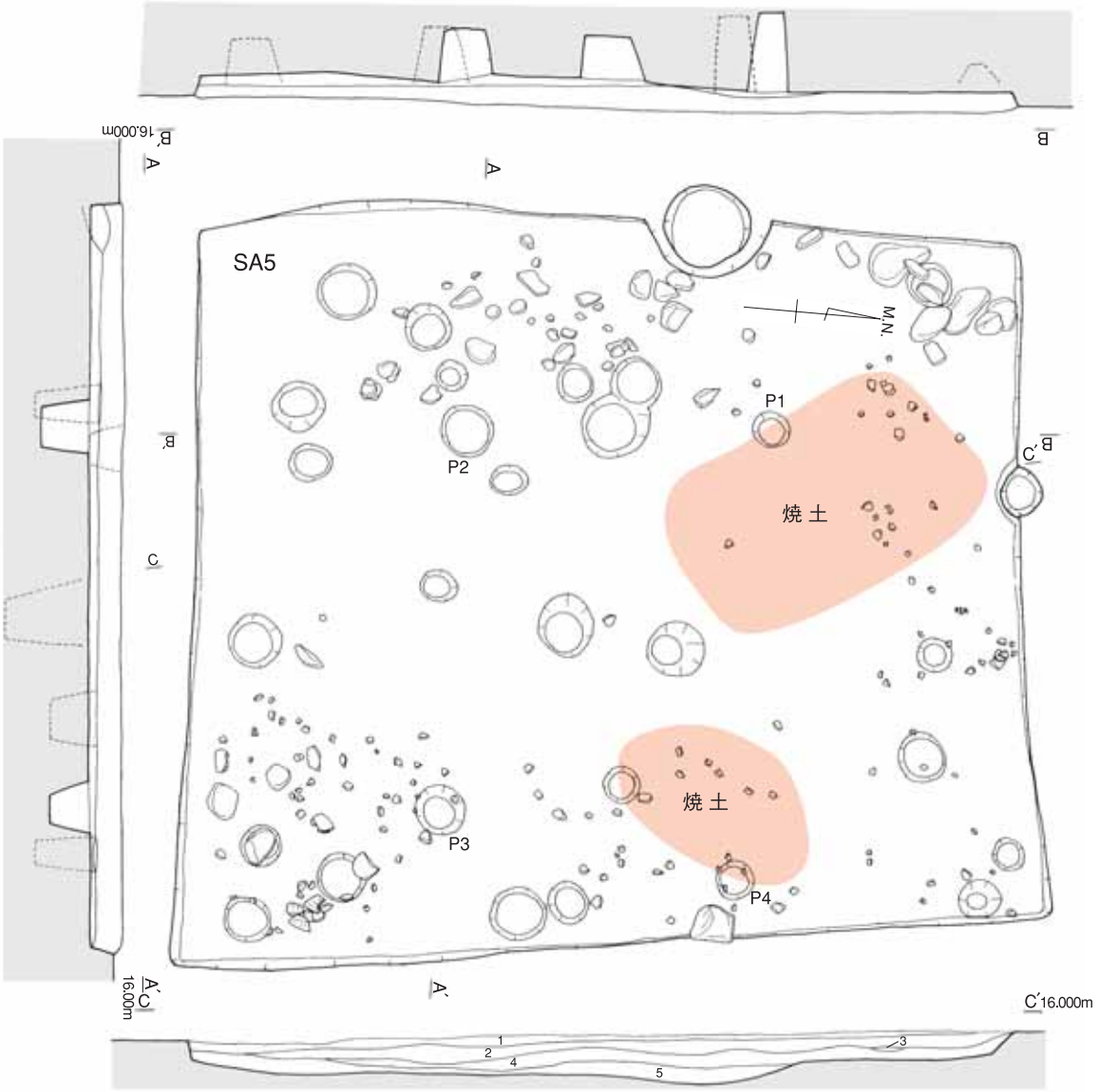
第25図　山口遺跡第２地点　４号竪穴住居跡出土土器実測図（Ｓ＝1／3）

５号竪穴住居跡（ＳＡ５：第27図）

調査区の中央部の北よりの３号土坑と４号土坑の間D4グリッドに位置し、３６号住居を切っている。また、４号住居と主軸がほぼ一致する。南北方向に長い長方形プランを呈し、規模は長軸方向で約4.6m、短軸方向で約4.1mを測り、推定床面積は約18.9㎡と小型の住居跡である。主軸方位はN15°Wを指す。現存壁高は0.11m～0.19mを測り、床面は中央部から南壁に向けて緩やかに凹む。竪穴部の中央から北側に焼土が確認された。主柱穴は４本柱とみられ、その距離は（p1－p2　1.44m／p2－p3　1.82m／p3－p4　1.42m／p4－p1　2.30m）で床面からの深さは約24㎝～46㎝である。遺物の多くは床面直上か若干浮いた状態で出土した。

出土遺物（第27図：125～135）

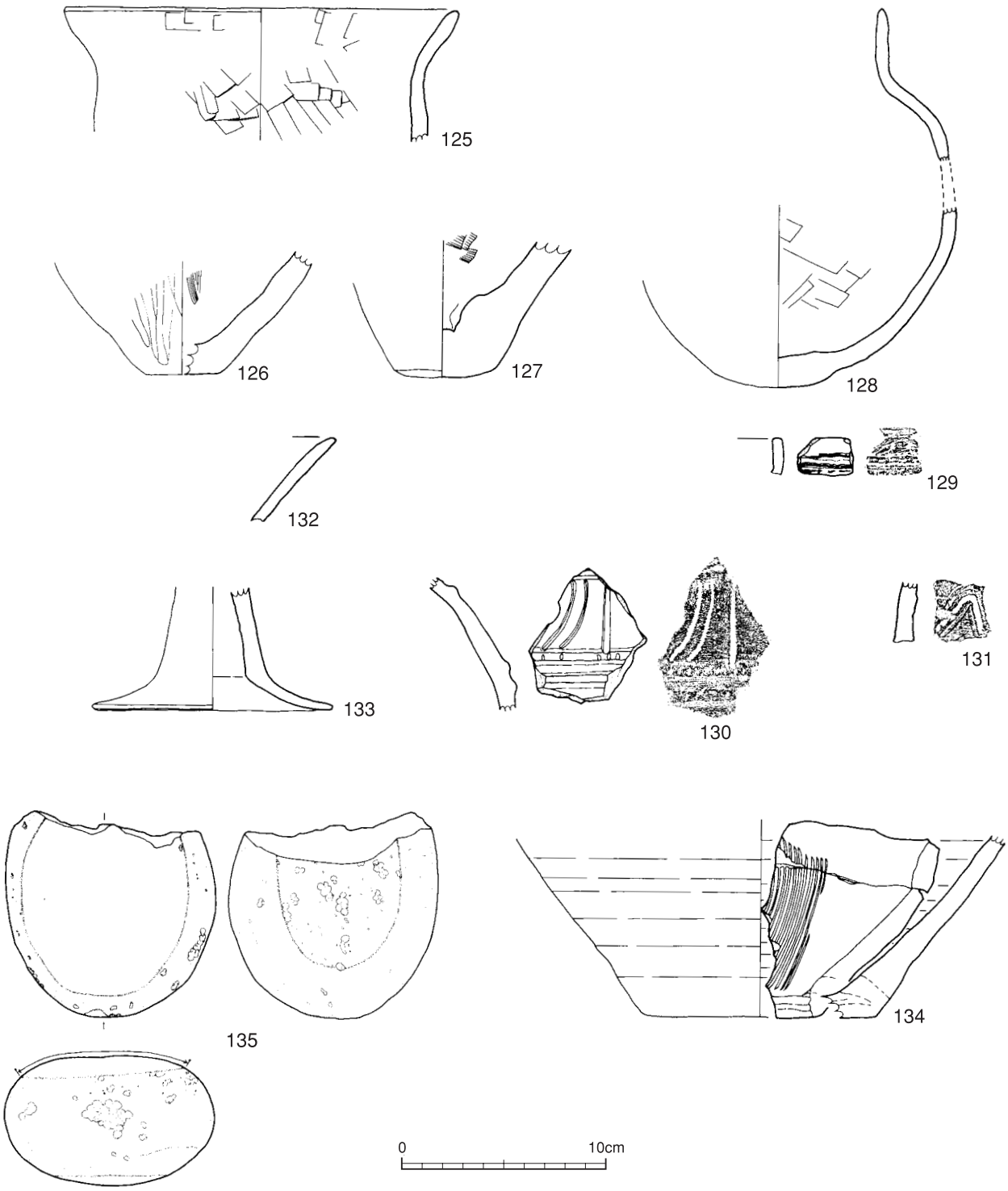
この住居跡に伴う遺物は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。遺物の内訳は、125～127は土師器の甕である。125は、口縁部が短く外反している。126・127は平底の底部である。



【土層注記】ＳＡ５
１：褐灰色土（10YR4/1）しまりがなく、粘性弱い。鉄分・マンガンを多く含む。
２：灰褐色土（10YR4/2）しまりがなく、粘性弱い。
３：黒褐色土（10YR3/1）しまりがあり、粘性ややあり。
４：にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまりがなく、粘性ややあり。
５：褐色土（10YR4/4）砂質状でしまりがなく、粘性なし。

0　1m

第26図　山口遺跡第２地点　５号竪穴住居跡実測図（Ｓ＝1／40）



第27図　山口遺跡第２地点　５号竪穴住居跡出土遺物実測図（Ｓ＝1／3）

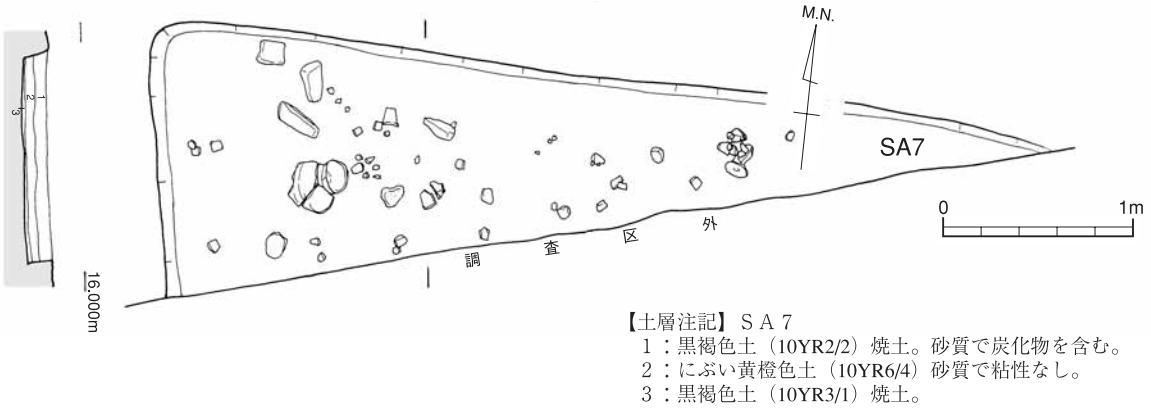
128～131は土師器の壺である。128は口縁部が直立気味に伸び、口縁端部が尖り気味である。129は口縁部に櫛描文を施している。130は肩部片で突帯を残し、刻みや数条の沈線文を施している。131は胴部片で外面に横位の波状文を施している。129～131は沈線文の特徴から弥生土器ではないかと思われる。132・133は土師器の高坏である。132は坏部がやや外反するもので、133は裾部が明瞭な稜をもち、「八の字」状に開くものである。134は中世の擂鉢である。135は砂岩の磨石である。平面形態は楕円形を呈し、周縁に敲打痕が観察される。

７号竪穴住居跡（ＳＡ７：第28図）

調査区南壁沿い２号住居跡の南西４ｍＢ３グリッドに位置し、６号土坑が東側に隣接している。住居の大部分は調査区外に向かって延びるかたちで検出された。８号住居と同様の構造と考えられ、プランはおそらく東西方向に長い長方形とみられ、主柱穴は不明である。主軸方位はN90°Wを指す。現存壁高は0.12ｍを測り、床面はほぼ水平を保つ。埋土は４層で、１・３層は黒褐色土の焼土でプラン全体に堆積し炭化物を多く含む。遺物の多くは床面直上か若干浮いた状態で出土した。

出土遺物（第30図：136～140、第31図141～143）

この住居跡に伴う遺物は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。遺物の内訳は、136は土師器の甕である。口縁部が直線的に伸びるもので内外面にナデ、工具ナデを施し、指頭痕が残る。137～140は土師器の壺である。137～139は口縁部が外反するもので、137は外器面に斜方向のミガキを施している。140は小型丸底壺とみられ、外器面をヘラ磨きしている。141～143は土師器の高坏である。141は全体的に丸みをもち稜の不明瞭なもので、埦状をなす。142は脚部が短く、裾部に明瞭な稜をもつ。143は脚部と裾部の分かれ目がない。



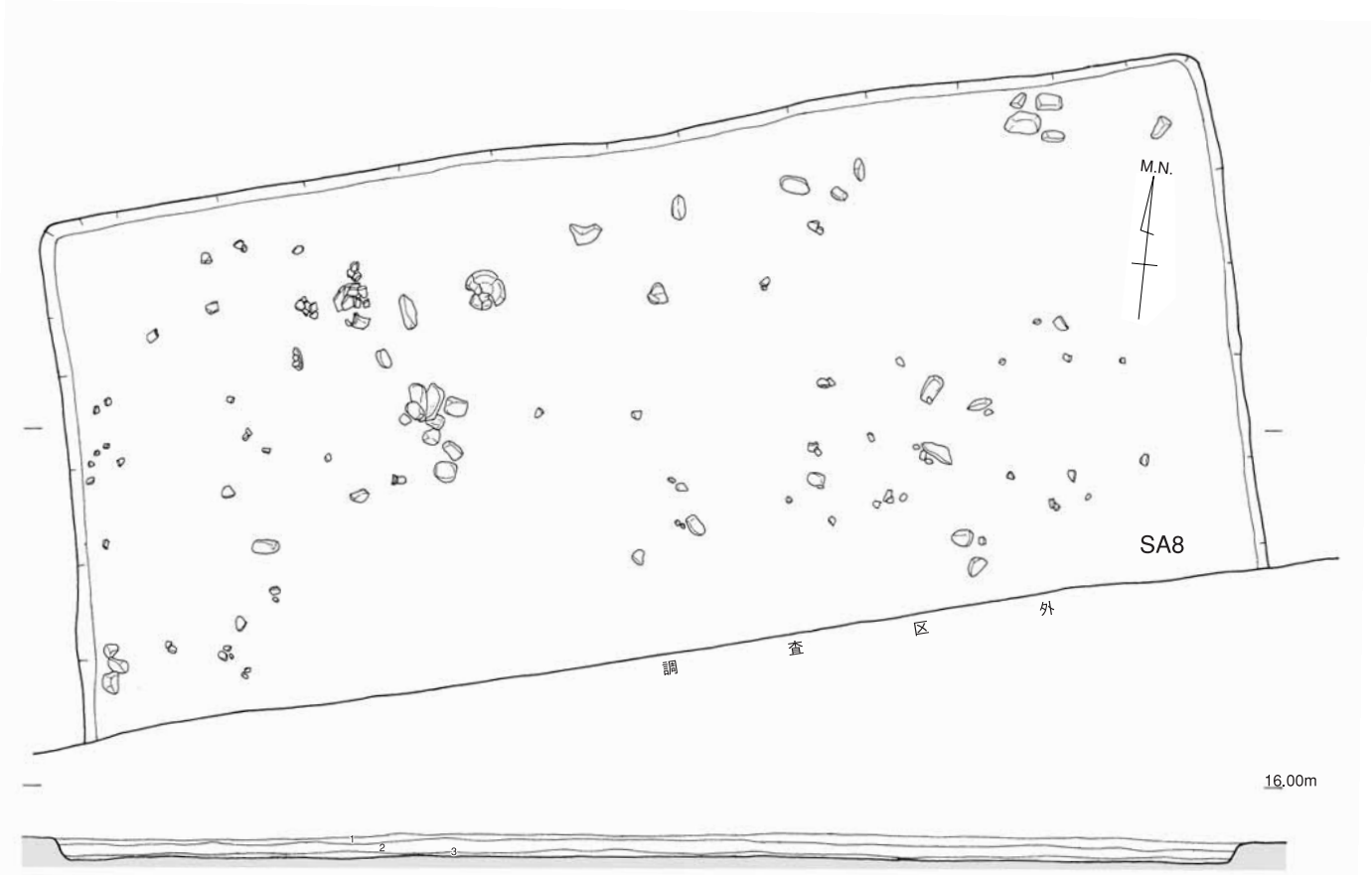
第28図　山口遺跡第２地点　７号竪穴住居跡実測図（Ｓ＝1／40）

８号竪穴住居跡（ＳＡ８：第29図）

調査区南壁沿い第１竪穴住居跡群の南側Ｂ2グリッドに位置し、東に位置する７号住居跡と約９ｍ離れている。住居跡の半分は調査区外に向かって延びるかたちで検出された。ほぼ東西に主軸をもち、東西軸約6.2ｍ、南北軸は不明であるが長方形プランであるとみられる。主軸方位はN74°Ｅを指す。現存壁高は0.12ｍを測り、床面はほぼ水平を保つ。主柱穴は確認できなかった。埋土は暗褐色の粘性の砂質土で鉄分が沈着している。硬化面や焼土等は確認できなかった。遺物の多くは若干浮いた状態で出土した。

出土遺物（第32図：144～153）

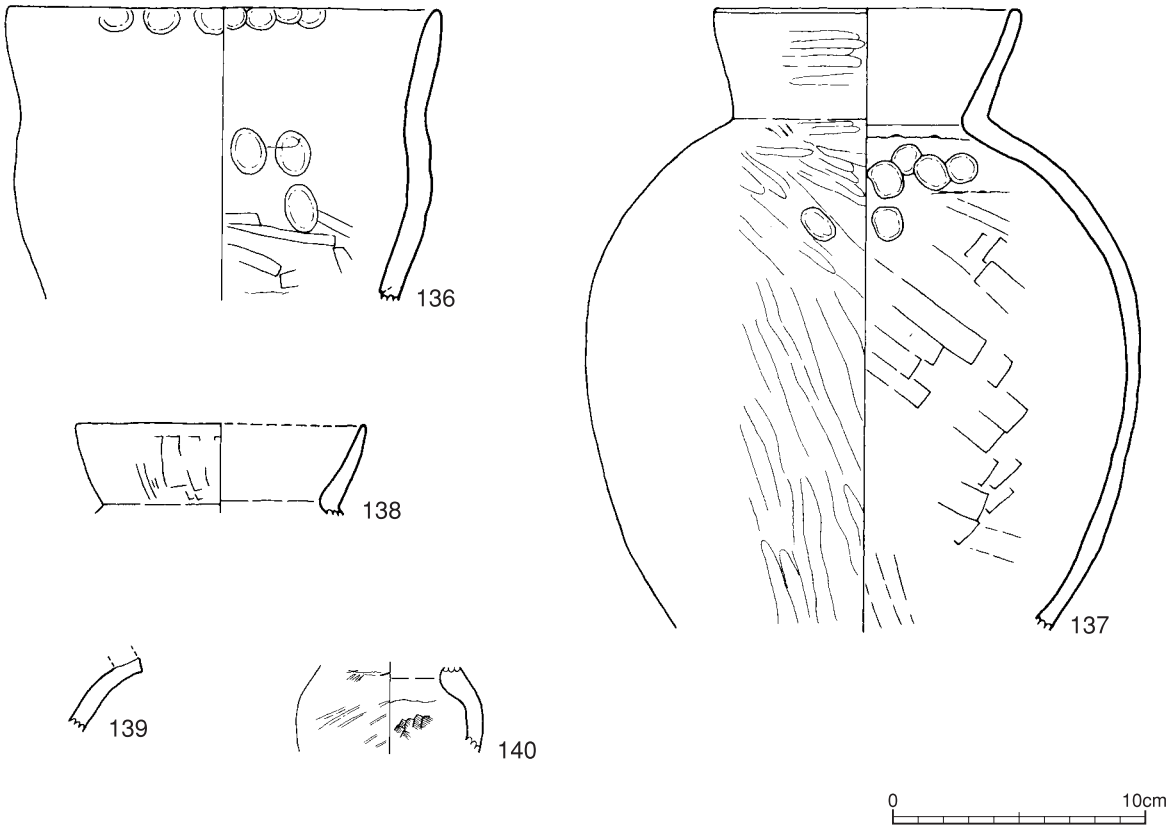
この住居跡に伴う遺物は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域分布している。遺物の内訳は、144～147は土師器甕の口縁部片である。口縁部が外反しながら直線的に伸びるもの（144～146）、口縁部端部がわずかに内湾するもの（147）がある。148～151は土師器の高坏である。坏部の口縁部がわずかに外反するもの（148・149）、坏部が大きく、深く明瞭な稜をもつもの（150）、脚部がわずかにエンタシス状を呈するもの（151）がある。152・153は石器である。152は板状砥石で２面の平面状の研磨面をもつ。153は磨製石斧で両面に自然面を残し、わずかに研磨痕が残る。



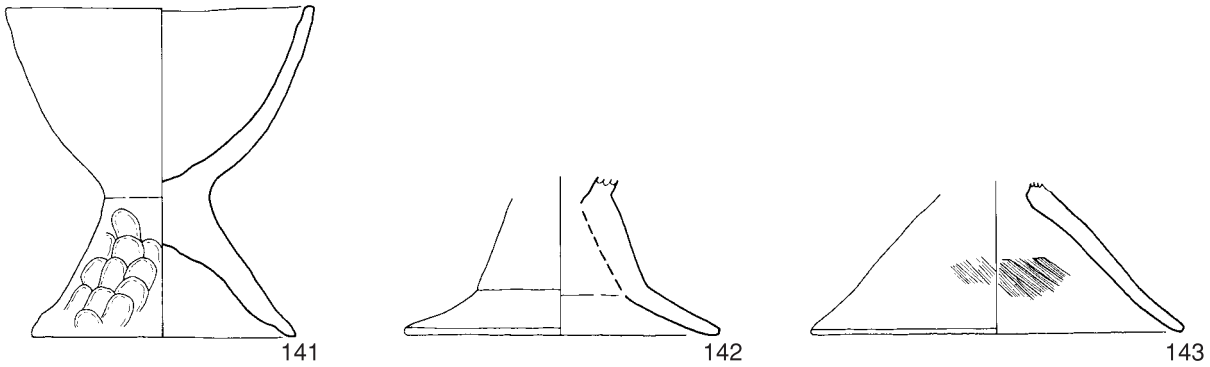
【土層注記】ＳＡ８
１：暗褐色（10YR3/4）粘性砂質土で砂利が若干混じる。下部に鉄分が沈着している。
２：暗褐色（10YR3/3）粘性砂質土で１層より粘性は強い。
３：灰黄褐色（10YR4/2）砂礫層で、この層を若干掘り込む形でＳＡ８は形成されている。

0　1m

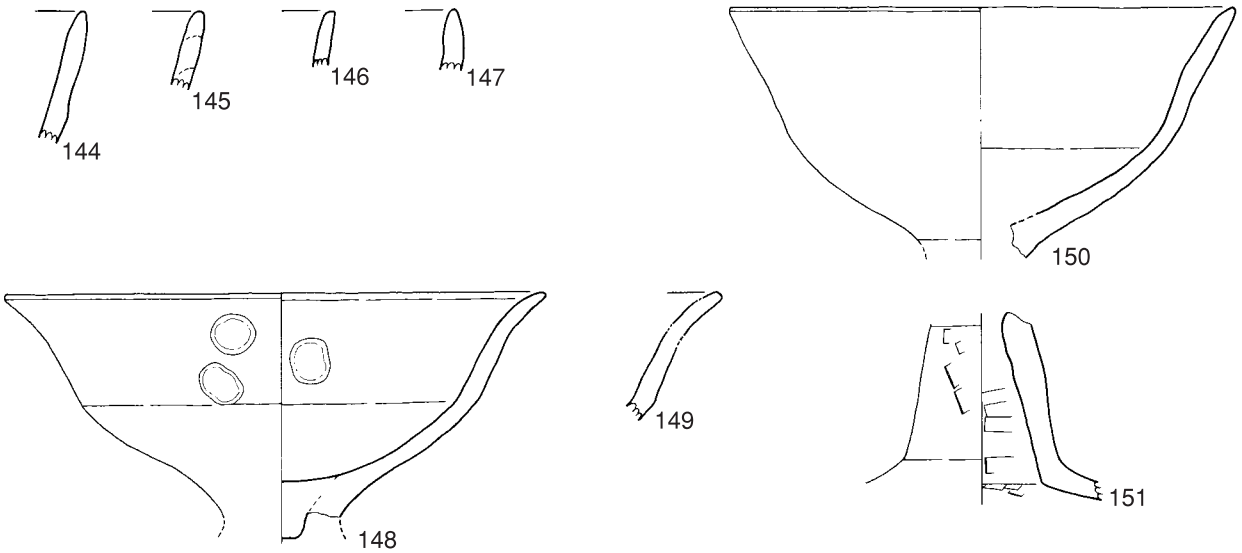
第29図　山口遺跡第２地点　８号竪穴住居跡実測図（Ｓ＝1／40）

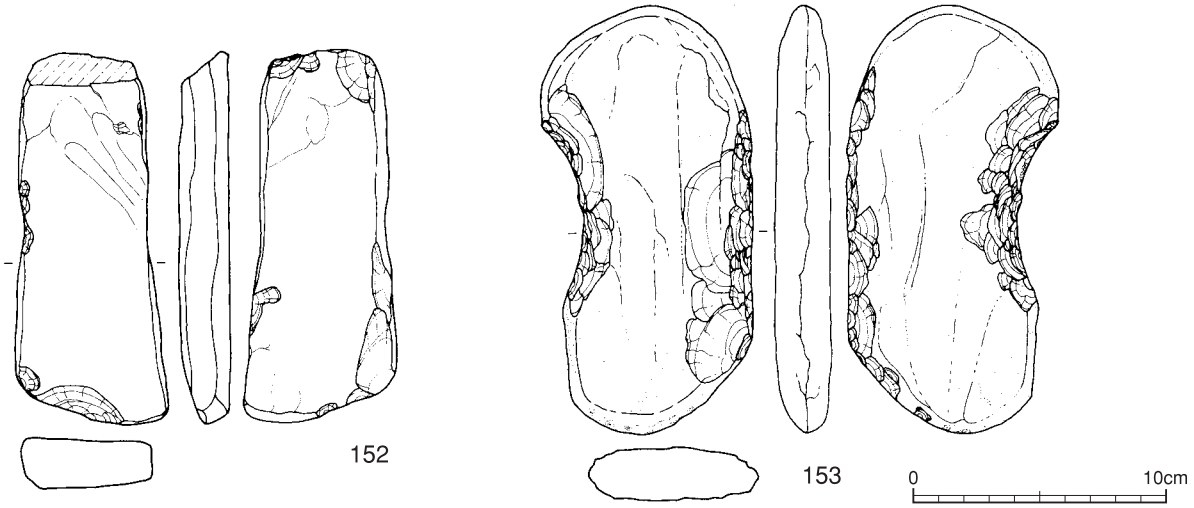


第30図　山口遺跡第２地点　７号竪穴住居跡出土土器実測図（１）（Ｓ＝1／3）



第31図　山口遺跡第２地点　７号竪穴住居跡出土土器実測図（２）（Ｓ＝1／3）





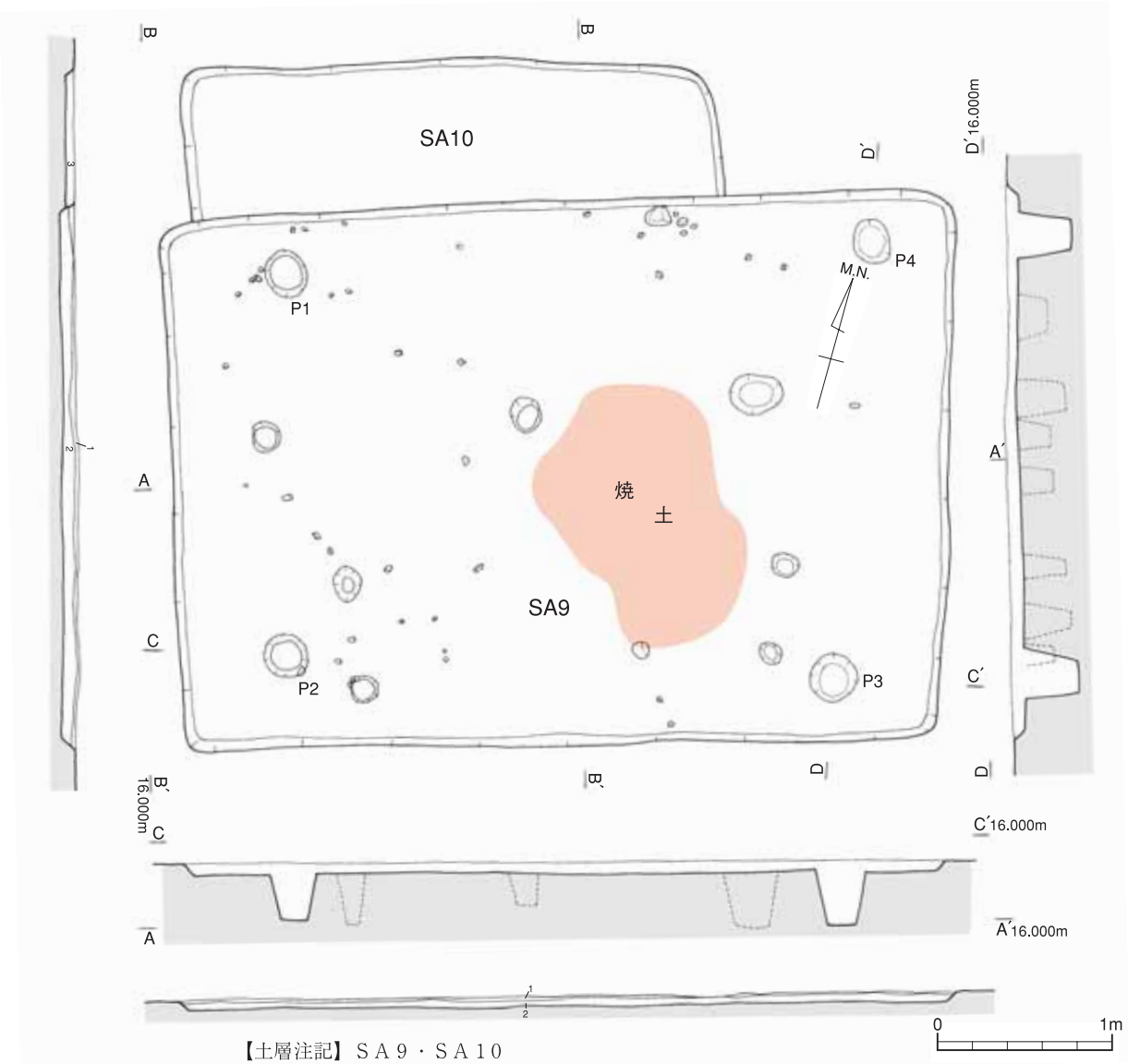
第32図　山口遺跡第２地点　８号竪穴住居跡出土遺物実測図（Ｓ＝1／3）

９号竪穴住居跡（ＳＡ９：第33図）

調査区の中央部南端Ｂ４グリッドに位置する。１０号住居跡を切っている。東西方向に長い長方形プランを呈し、規模は長軸方向で約4.4m、短軸方向で約3.1mを測り、推定床面積は約13.6㎡と小型の住居跡である。主軸方位はN79°Ｅを指す。現存壁高は0.06m～0.13mを測り、床面はほぼ水平を保つ。竪穴の中央部に焼土が確認された。主柱穴は４本柱とみられ、その距離は（p1－p2　1.92m／p2－p3　2.86m／p3－p4　2.24m／p4－p1　3.12m）で床面からの深さは約30㎝～36㎝である。遺物の多くは床面直上か若干浮いた状態で出土した。

出土遺物（第36図：154～156）

この住居跡に伴う遺物は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。遺物の内訳は、154・155は土師器甕の口縁部片である。口縁部が外反しながら直線的に伸びるもの（154）、口縁端部がわずかに内湾するもの（155）がある。154は外器面にタタキがみられる。156は土師器壺の底部で平底である。



【土層注記】ＳＡ９・ＳＡ１０
１：にぶい黄橙色土（10YR6/4）砂質土。
２：にぶい黄橙色土（10YR6/3）ややしまりのある砂質土。粘性なし。
３：にぶい黄橙色土（10YR6/3）砂質土。ＳＡ９のⅡ層に比べ若干暗い色調。

第33図　山口遺跡第２地点　９号・10号竪穴住居跡実測図（Ｓ＝1／40）

１０号竪穴住居跡（ＳＡ１０：第33図）

９号住居跡に切られ、部分的に検出された。主軸をやや北に振った南北方向に長方形プランと考えられるが、規模および主柱穴については不明である。遺物は出土していない。

１１号竪穴住居跡（ＳＡ１１：第34図）

調査区の中央部のやや東よりＣ4グリッドに位置する。また、３６号住居跡と主軸がほぼ一致する。南北方向に長い隅丸長方形プランを呈し、規模は長軸方向で約5.2m、短軸方向で約4.1mを測り、主軸方位はN54°Wを指す。現存壁高は0.22m～0.41mを測り、床面は南寄りが高くなる。竪穴の中央部に焼土・硬化面等が確認された。主柱穴は４本柱とみられるが住居中央部から北寄りにあり、いまひとつ不確定要素を残す。その距離は(p1－p2　1.98m／p2－p3　1.60m／p3－p4　1.52m／p4－p1　1.82m）で床面からの深さは約22㎝～38㎝である。遺物の多くは床面直上か若干浮いた状態で出土した。

出土遺物（第38図：157～168・第39図：169～180・第40図：181～188）

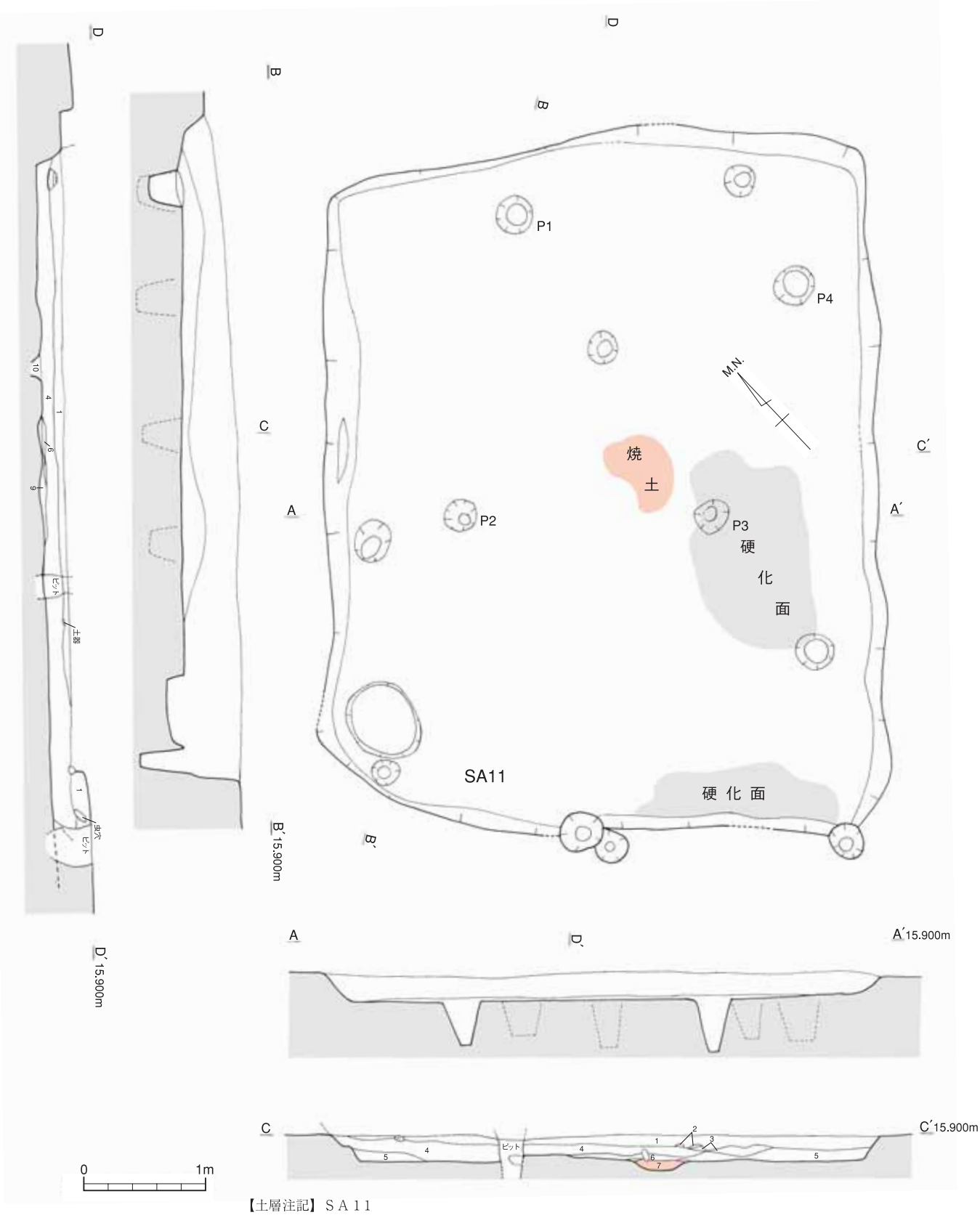
この住居跡に伴う遺物は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。遺物の内訳は、157～169は土師器の甕である。甕は口縁部が長くやや外反しながら直線的に伸びるもの（157～161)、短く外反するもの（162)、やや外反し口縁部径が胴部径を上回るもの（163)、口縁部と頸部のくびれがはっきりしないもの（162・164）がある。底部は明瞭な稜をもち平底で中央部がわずかに上げ底を呈するもの（166･168)、底部が一部平底になるもの（167)、木の葉底を呈するもの（169）がある。170～172は土師器の壺である。口縁部が直線的に伸び、口縁端部は先細りとなるもの（170)、口縁部が内湾するもの（172）がある。173～180は土師器の高坏である。高坏は坏部が深いもの（173)、坏部が浅く丸みを帯びているもの（174)、坏身が深く椀状をなすもの（175・176)、稜が明瞭なもの（177・178）がある。脚部は、エンタシス状のもの（179)、円柱状の脚に伏鉢状の裾部が付くもの（174・180）がある。181～183は土師器の鉢である。181は口縁部が内湾し、外器面に工具によるナデ調整がみられる。明瞭な平底を呈し、底部外面を押圧により凹ませている。183は明瞭な稜をもつ。184は須恵器の坏の受部である。185は須恵器の壺の頸部である。186は自然礫を利用した砥石である。全面的に砥面が確認されるだけでなく、一部敲打痕が残り、台石としての機能をもっていたと考えられる。187・188は鉄製刀子である。弥生時代後期・終末にかけてからの出土が多く武器や工具としての用途が考えられる。

１５号竪穴住居跡（ＳＡ１５：第40図）

調査区の中央から北西で１４号住居跡の北側Ｄ３グリッドに位置し、１６号住居跡に切られている。立地的に１６号住居と同様に検出状況が非常に悪く、検出した面が掘底に近い状態であった。ほぼ東西に主軸をもち、東西軸約3.2m、南北軸は不明であるが主柱穴の在り方から長方形プランであるとみられる。主軸方位はN65°Eを指す。床面に５基の柱穴を確認したが、配置状況から４本柱ではないかとみられる。１基は不明である。その距離は（p1－p2　1.84m／p2－p3　1.20m／p3－p5　不明／p5－p1　不明）で床面からの深さは約23㎝～32㎝である。住居の北側には２号土坑を伴い、p1－p2－p3－p5の中央に焼土の広がりがみられる。前述のとおり検出状態が悪かったため、遺物の出土は少なかったが焼土の付近から数十点検出されている。

出土遺物（第39図：189・190）

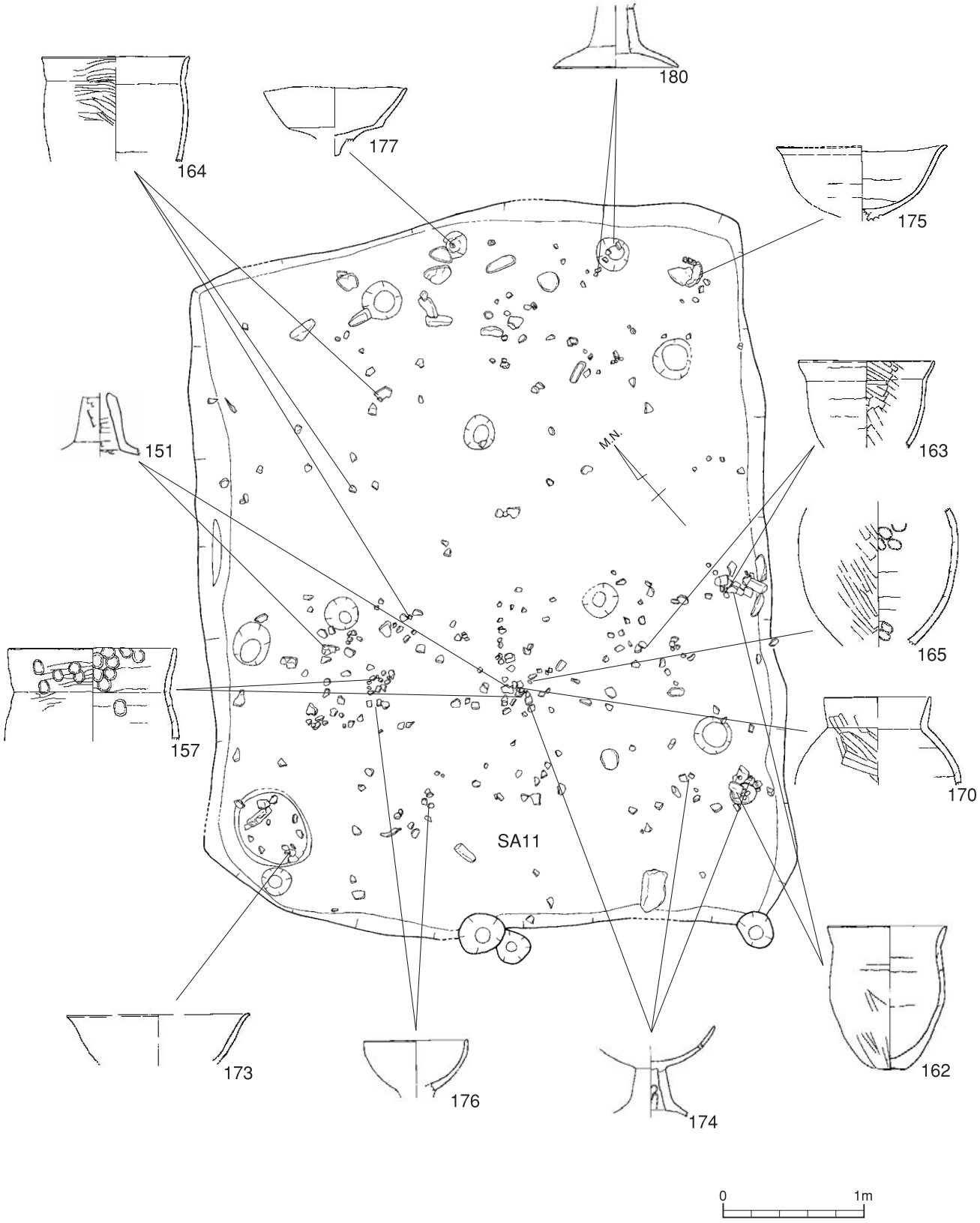
この住居跡に伴う遺物は主に下層から出土している。遺物の内訳は、189･190は高坏である。189は坏部に稜が明瞭で口縁部が外反する。190は脚部である。



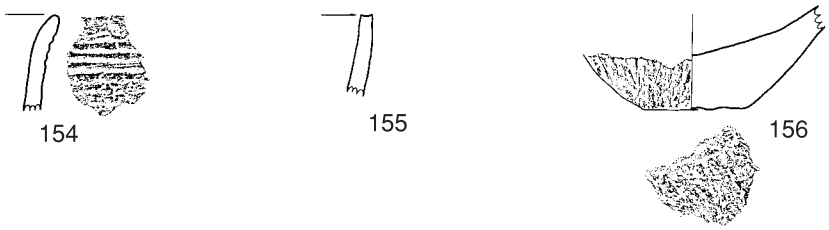
【土層注記】ＳＡ１１

１：暗褐色土（10YR4.5/3）硬質でしまりがある。マンガン粒（φ0.5mm）炭化物粒・白色粒等を含む。
２：黒褐色土（10YR2/2）やや軟質でしまりがない。炭化物・焼土粒を含む。
３：褐色土（10YR4/4）やや硬質でしまりがある。焼土粒を若干含む。
４：暗褐色土（10YR2.5/3）やや硬質でしまりがある。炭化物を若干含む。マンガン斑を含むが１層ほどではない。
５：褐色土（10YR4/3.5）やや硬質でしまりがある。部分的に砂粒（φ1mm以下）を含む。
６：褐色土（10YR4/3）やや軟質でややしまりがある。炭化物を多く含む。黒褐色・焼土ブロックを多く含む。
７：明赤褐色土（5YR5/8）焼土。
８：暗褐色土（10YR3.5/2）4層より色調が暗い。
９：褐色土（10YR4/4）粘性あり。炭化物を筋状に若干含む。
１０：にぶい黄褐色土（10YR3/2）マンガン斑・炭化物を含む。やや粘性があり、ややしまりがある。

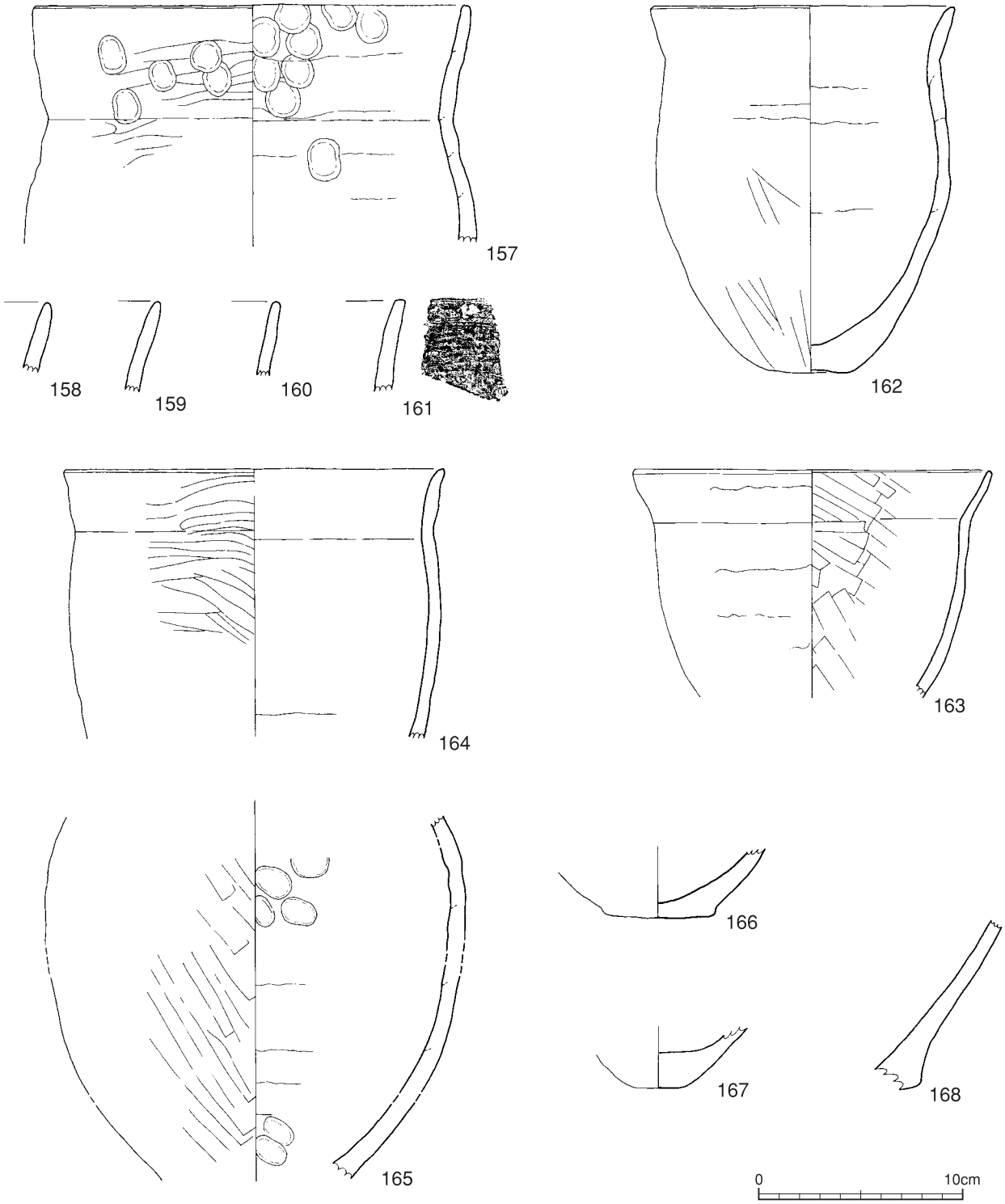
第34図　山口遺跡第２地点　11号竪穴住居跡実測図（Ｓ＝1／40）



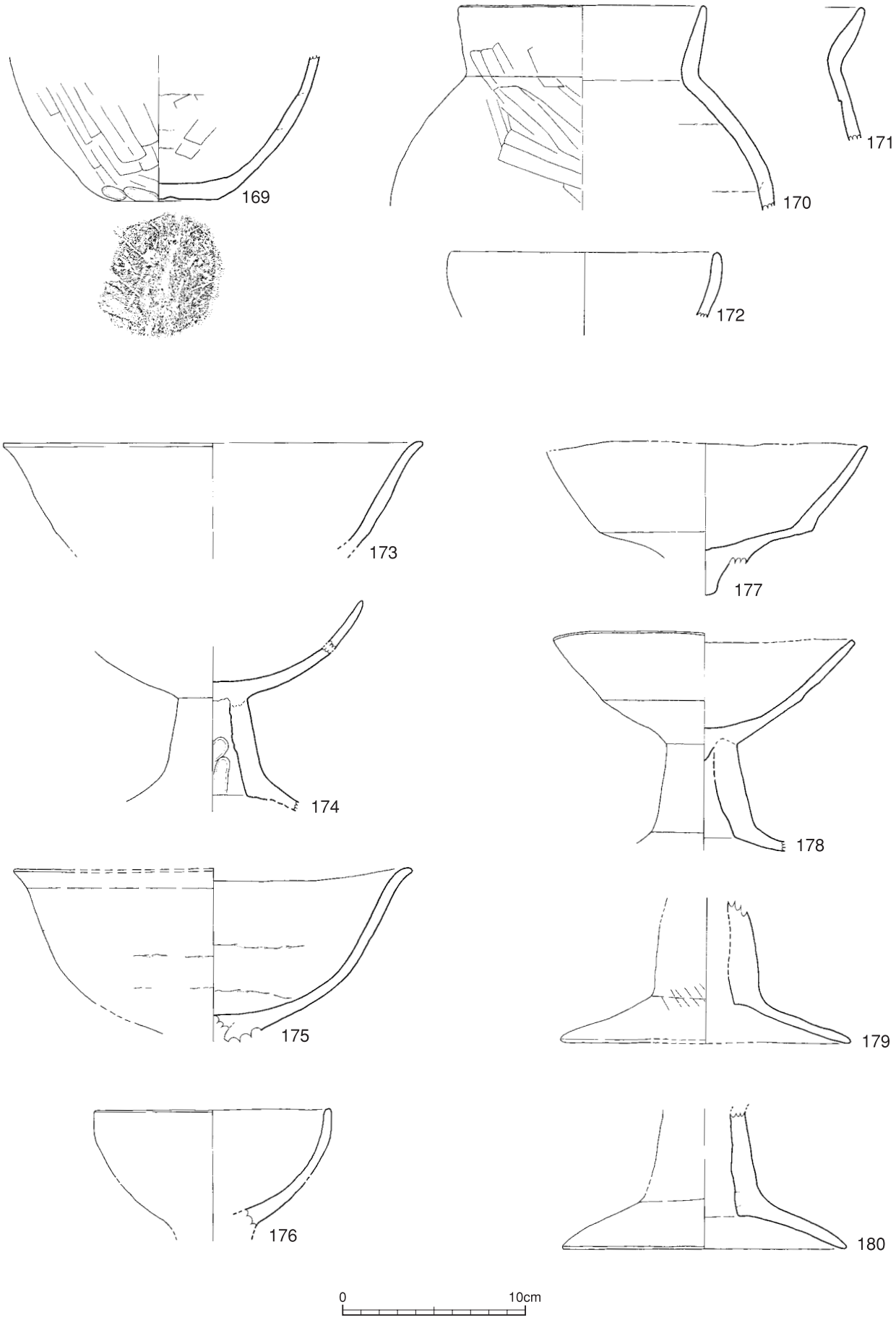
第35図　山口遺跡第２地点　11号竪穴住居跡土器出土位置図



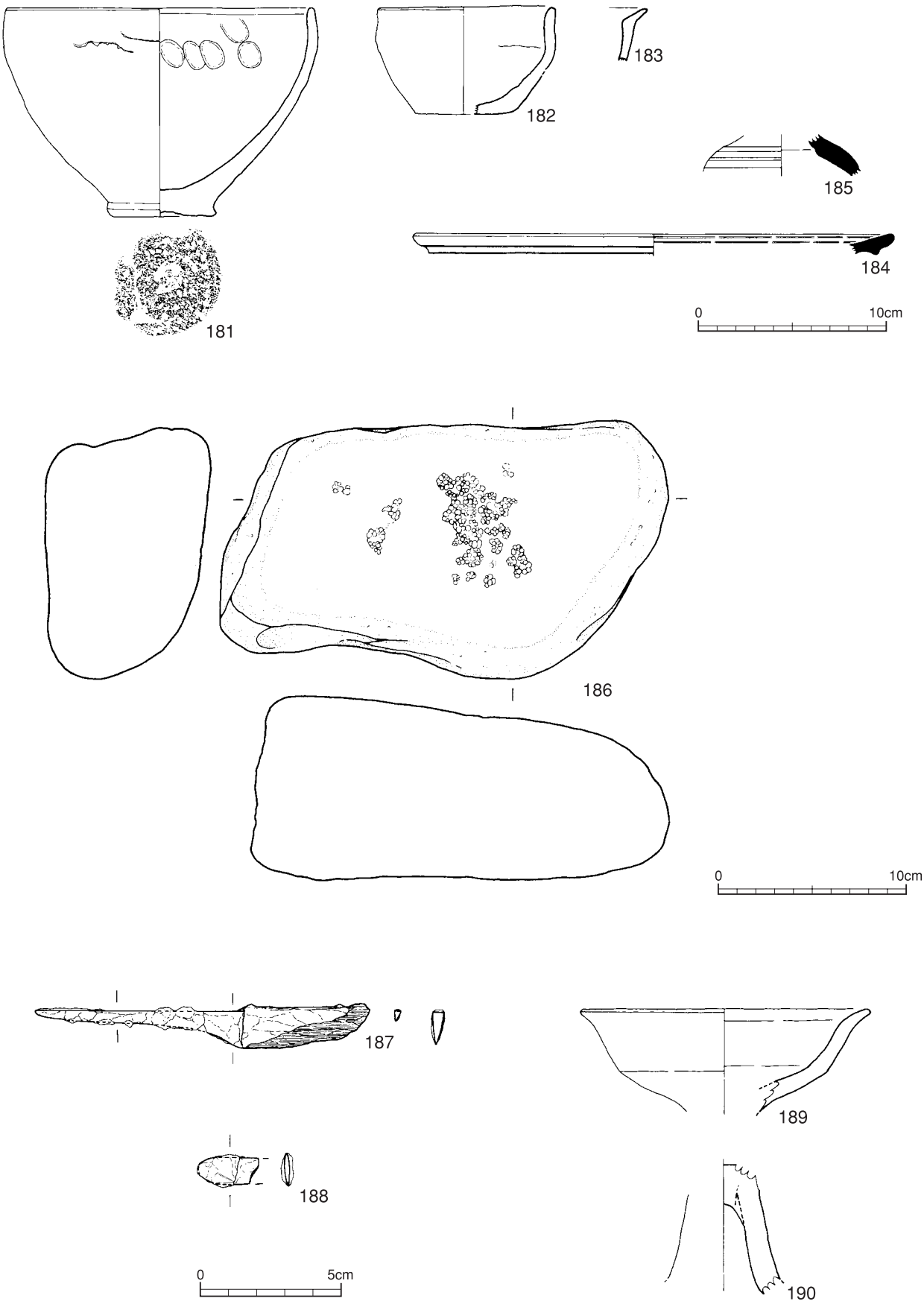
第36図　山口遺跡第２地点　９号竪穴住居跡出土土器実測図（Ｓ＝1／3）



第37図　山口遺跡第２地点　11号竪穴住居跡出土土器実測図（１）（Ｓ＝1／3）



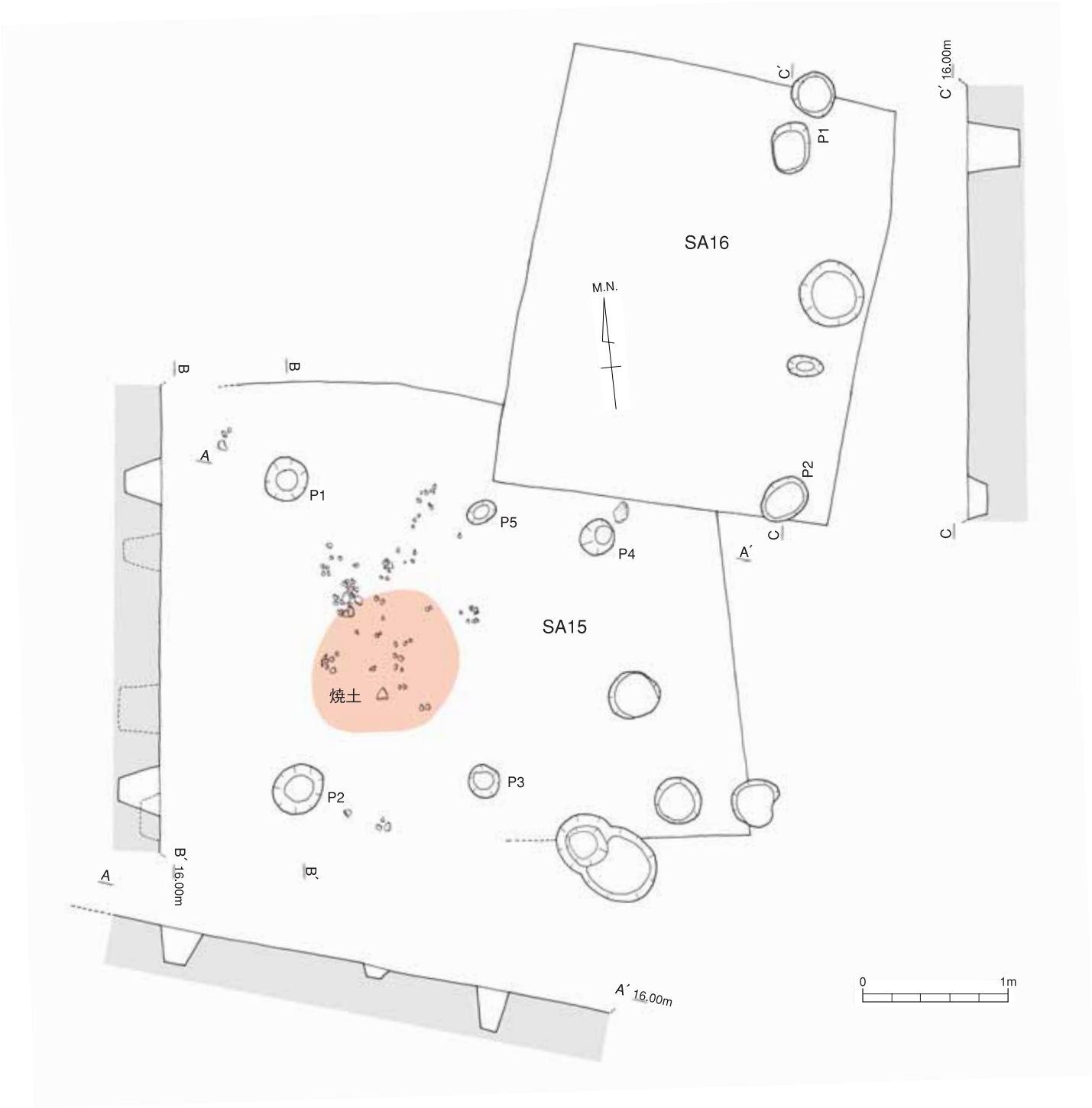
第38図　山口遺跡第２地点　11号竪穴住居跡出土土器実測図（２）（S＝1／3）



第39図　山口遺跡第２地点　11号・15号（189・190）竪穴住居跡出土遺物実測図
（S＝1／3…181～186・189・190，　S＝1／2…187・188）

１６号竪穴住居跡（ＳＡ１６：第40図）

調査区の中央から北西で１４号住居跡の北側Ｄ３グリッドに位置し、１５号住居を切っている。立地的に１５号住居と同様に検出状況が非常に悪く、検出した面が掘り底に近い状態であった。ほぼ南北に主軸をもち、南北軸約3.6m、東西軸約2.36mの長方形プランを呈し、推定床面積は約8.5㎡と小型の住居跡である。主軸方位はN20°Eを指す。主柱穴は長軸方向に並ぶ２基とみられ、その距離は約2.08m、掘り底からの柱穴の深さはp1が38㎝、p2が12㎝ほどである。他の住居跡と比較すると規模的に小型で、土坑や焼土などの住居に付帯する遺構は確認できなかった。前述のとおり検出状態が悪かったため、遺物は出土していない。



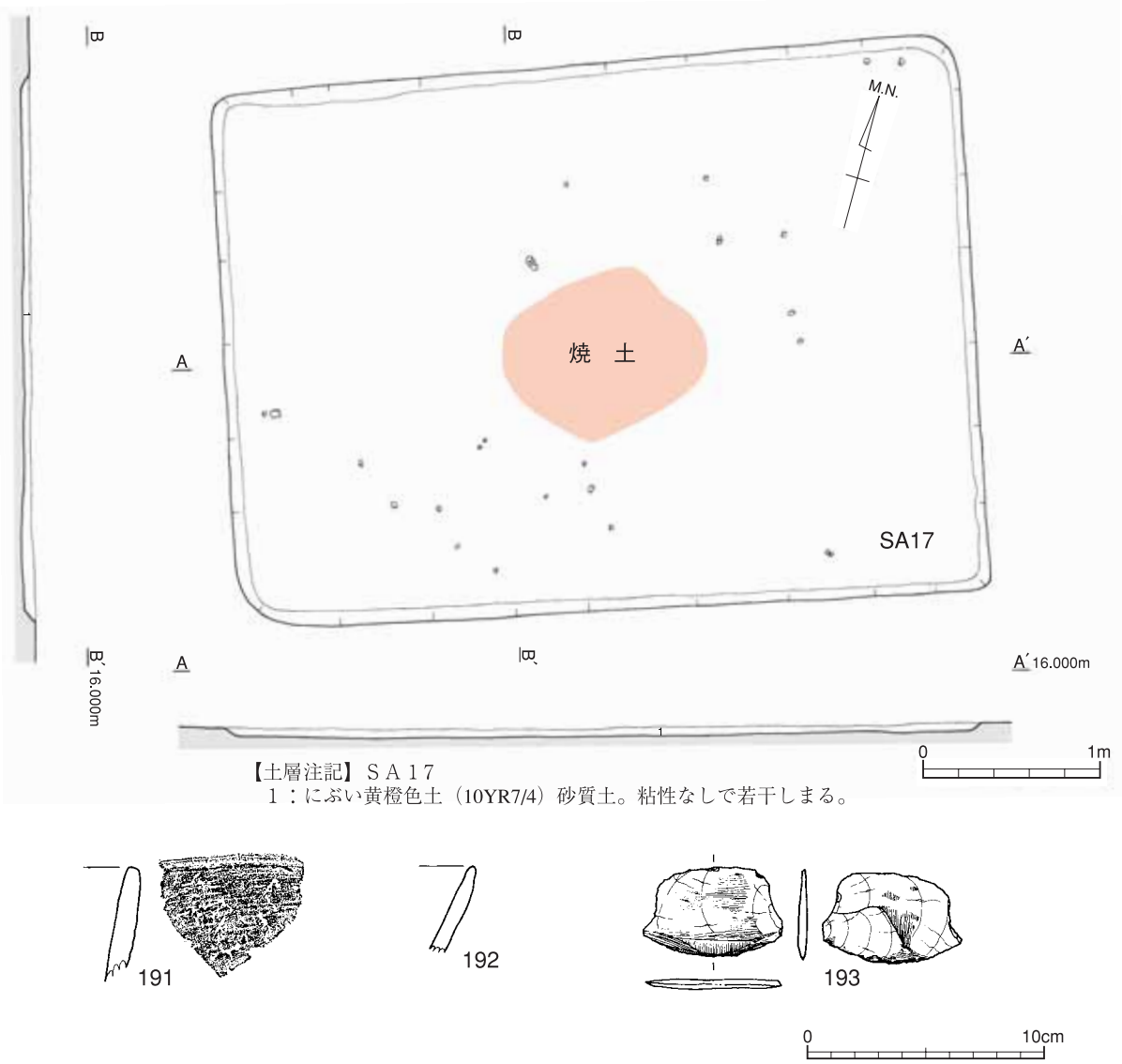
第40図　山口遺跡第２地点　15号・16号竪穴住居跡実測図（Ｓ＝1／40）

１７号竪穴住居跡（ＳＡ１７：第41図）

調査区の東側北寄りＣ６グリッドに位置し、３４号住居跡が西側に隣接する。ほぼ東西に主軸をもち、長軸約4.24m、短軸約3.10mの長方形プランを呈し、推定床面積は約13.1㎡と小型の住居跡である。主柱穴は不明である。主軸方位はN70°Ｅを指す。現存壁高は0.04mを測る。床面は掘り底をそのまま利用したとみられ、中央部には焼土がみられる。埋土は１層でにぶい黄橙色の砂質土である。遺物の多くは床面直上から数十点検出された。

出土遺物（第41図：191～193）

この住居跡に伴う遺物は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。遺物の内訳は、191・192は土師器甕の口縁部片である。191は口縁部が直線的に伸び、口縁部の端部を平坦に仕上げている。192は口縁部端部がやや内湾するもので、外器面にススが付着している。193は頁岩製の石包丁である。両端に浅い抉りをもつ直背直刃タイプである。



【土層注記】ＳＡ１７
１：にぶい黄橙色土（10YR7/4）砂質土。粘性なしで若干しまる。

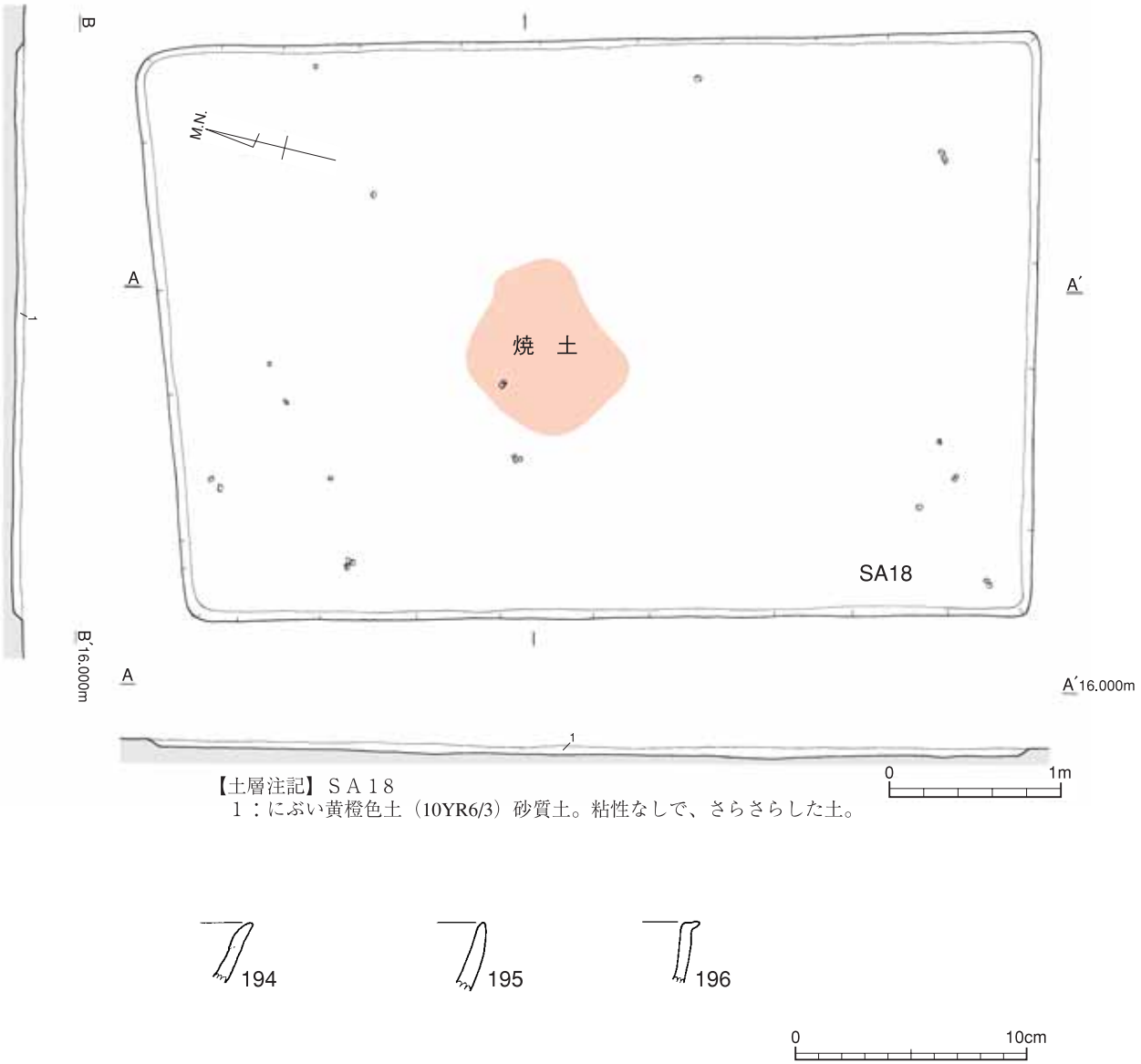
第41図　山口遺跡第２地点　17号竪穴住居跡（Ｓ＝1／40）及び出土土器・石器実測図（Ｓ＝1／3）

１８号竪穴住居跡（ＳＡ１８：第42図）

調査区の東端Ｃ６グリッドに位置する。１７号住居跡が北側に５ｍ隣接する。ほぼ南北に主軸をもち、長軸約5.06ｍ、短軸約3.36ｍの長方形プランを呈し、推定床面積は約17.0㎡と小型の住居である。主柱穴は不明である。主軸方位はN2°Ｅを指す。現存壁高は0.04ｍを測り、床面は掘り底をそのまま利用したとみられる。中央部には焼土が確認される。埋土は１層でにぶい黄橙色の砂質土である。遺物の多くは床面直上から数十点検出された。

出土遺物（第42図：194～196）

この住居跡に伴う遺物は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。遺物の内訳は、194・195は土師器甕の口縁部片である。194は口縁部が斜め上方に直線的に伸び、端部を細く仕上げている。195は口縁端部がやや内湾している。196は土師器の鉢の口縁部である。



【土層注記】ＳＡ１８
１：にぶい黄橙色土（10YR6/3）砂質土。粘性なしで、さらさらした土。

第42図　山口遺跡第２地点　18号竪穴住居跡（Ｓ＝1／40）及び出土土器実測図（Ｓ＝1／3）

第３竪穴住居跡群（ＳＡ１９・ＳＡ２０・ＳＡ２１・ＳＣ８：第44図）

２１号竪穴住居跡（ＳＡ２１：第43図）

調査区の中央から北西のＤ２グリッドに位置し、１９号住居跡を切る。立地的に河川の氾濫等自然の営力により土砂が堆積し、検出状況が非常に悪く、検出した面が掘り底に近い状態であった。ほぼ南北に主軸をもち、東西軸約4.2m、南北軸約5.5mの隅丸長方形プランを呈し、推定床面積23㎡と大型住居である。主軸方位はN24°Wを指す。床面に９基の柱穴を確認したが、配置状況から４本柱ではないかとみられる。その距離は（p1－p2　2.10m／p2－p3　2.15m／p3－p4　2.32m／p4－p1　2.05m）で床面からの深さは約31㎝～33㎝である。住居の北西側には８号土坑位置し、p1－p2－p3－p4の中央に焼土・硬化面の広がりがみられる。遺物の出土は多く、床面直上か若干浮いた状態で出土した。なお、１９号住居跡については２１号住居跡に切られ北隅方向のみ検出された。一部のみの検出であるが、北隅の形状から考えて、平面形態は長方形と考えられ、主軸方位もN38°Wと察する。遺物については河川の氾濫等により検出状況が悪く２１号住居跡内の遺物と混合している状況で記載については２１号住居跡に含める。

出土遺物（第46図：197～199・第47図：200～205・第48図：207～211・第49図：215～232・第50図：233～237）

この住居跡に伴う遺物は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。197～211は土師器の甕である。197～201は肩張りせず、胴部最大径を胴部中位にもつ。197は頸部屈曲に不明瞭な稜をもち、口縁端部が内湾する。内外面に指頭痕を残す。200は胴長で頸部から口縁部にかけて直線的に伸び、口縁端部が外反する。198は頸部から口縁部にかけて緩やかに外反するが大きくは開かない。頸部と口唇部に明瞭な指頭痕が残る。199は口縁部が直立気味に立つ。201は口縁部が短く緩やかに外反する。198・202は口径と胴部最大径がほぼ等しく、202は口縁部が直線的に伸び、口縁端部が内湾し、203は口縁部がやや外反しながら直線的に伸びる。204～206は肩部が張り、胴部最大径が胴部上位にもち、口縁部が外方に開き端部が外反するもの（204・205）、口縁部が直線的に伸びるもの（206）がある。底部は、平底のもの（208・209）、丸底のもの（210・211）がある。208は外器面にタタキがみられる。206は木の葉底を呈する。 212～214は土師器の壺である。212は大型の壺である。213・214は丸底壺である。213は内器面に指頭痕を残し、214は内外面に指頭痕、底部に木の葉底を呈する。215～225は高坏である。形態的バリエーションが多様であり、坏部と脚部に分けて分類する。

坏部ａ　浅い体部に大きく外反する口縁部が付き、稜が明瞭なもの（219～222）

ｂ　浅い体部に直線的な口縁部が付き、稜が明瞭なもの（218）

ｃ　やや深さの有る体部に大きく外反する口縁部が付くもの（215）

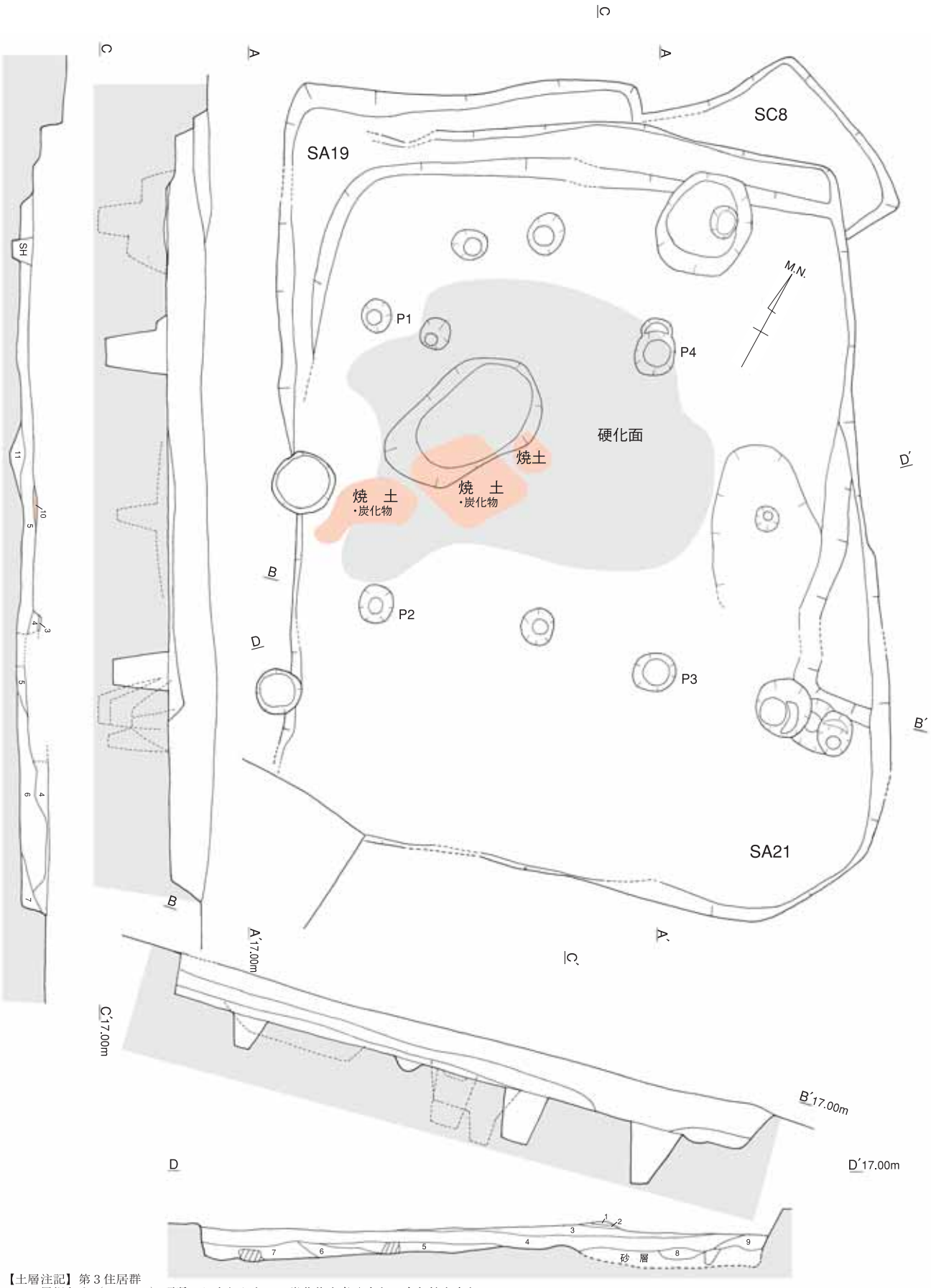
ｄ　全体に丸みをもち、稜の不明瞭なもの（216・217）

脚部ａ　やや開き気味の直線的な脚に強く屈曲する直線的な裾部が付くもの（223）

ｂ　やや開き気味で、屈曲する裾部が付くもの（225・224）

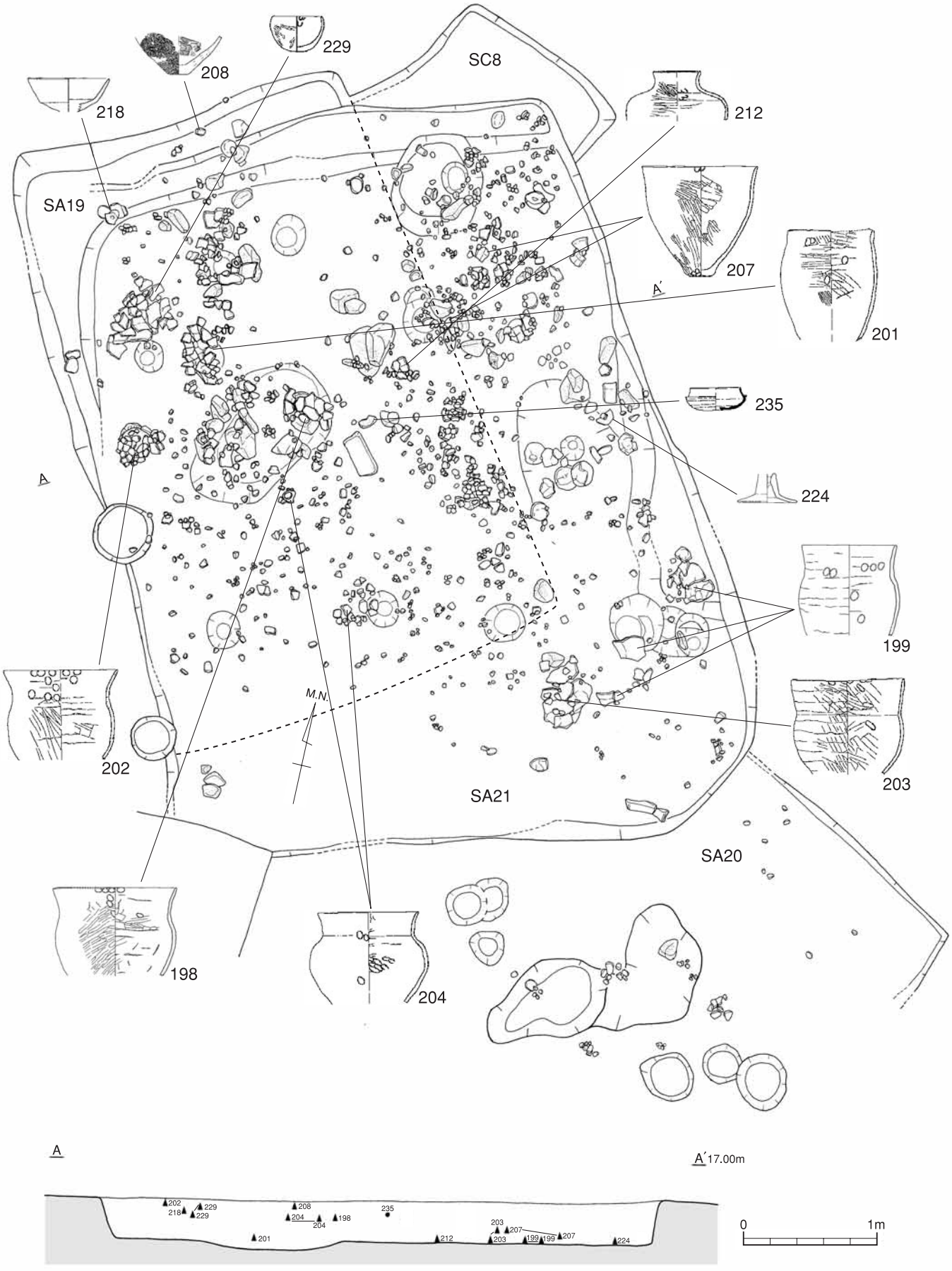
さらに、坏部や脚部の接合法には、粘土塊の充填と脚の貼付けも２通りがある。

226～229は鉢である。口縁端部が直線的に伸びるもの（226）、口縁端部が内湾気味のもの（227～230）がある。232は浅鉢の高台付の底部とみられる。233・234は手捏ね土器である。235～237は須恵器である。235は蓋坏で、その形状や法量の違いからＴＫ２０８の時期ではないかと思われる。236・237は壺の口縁部である。



【土層注記】第３住居群
１：黒褐色土（10YR3/2）硬質でしまりがある。炭化物を多く含む。白色粒を含む。
２：黄褐色土（2.5YR5/3）硬化面。
３：褐色土（10YR4/4）やや硬質でしまりがあり、炭化物やマンガン斑等を多く含む。
４：褐色土（10YR4/6）やや硬質でしまりがあり、３層と比べて色調が明るく、炭化物やマンガン斑等の量が少ない。
５：褐色土（10YR4/6）４層と比べ砂質が強い。部分的に礫等含む。
６：褐色砂質土（10YR4/6）しまりがない砂層。（本来の砂層と比べてしまりがなく、すぐ崩れる）
７：褐色土（10YR4/5）やや硬質で粘性あり。砂質がやや強い。炭化物を若干含む。
８：黄褐色土（10YR5/6）やや粘質でしまりが弱い。炭化物を少量含む。やや砂質。
９：褐色土（10YR4/6）やや粘質で粘性あり。やや砂質が強い。４層と比べてほとんど炭化物を含まない。
１０：暗赤褐色土（5YR3/4）焼土。
１１：褐色土（10YR4/4）やや硬質でややしまりがなく、炭化物、黒色土、焼土ブロックを多量に含む。

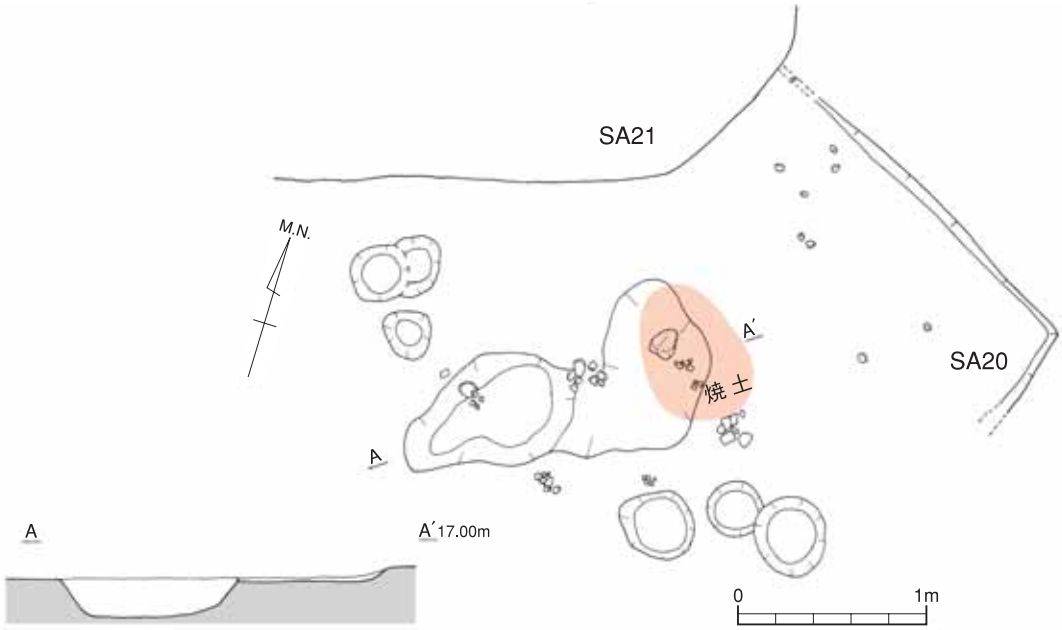
第43図　山口遺跡第２地点　19号・21号竪穴住居跡、８号土坑実測図（Ｓ＝1／40）



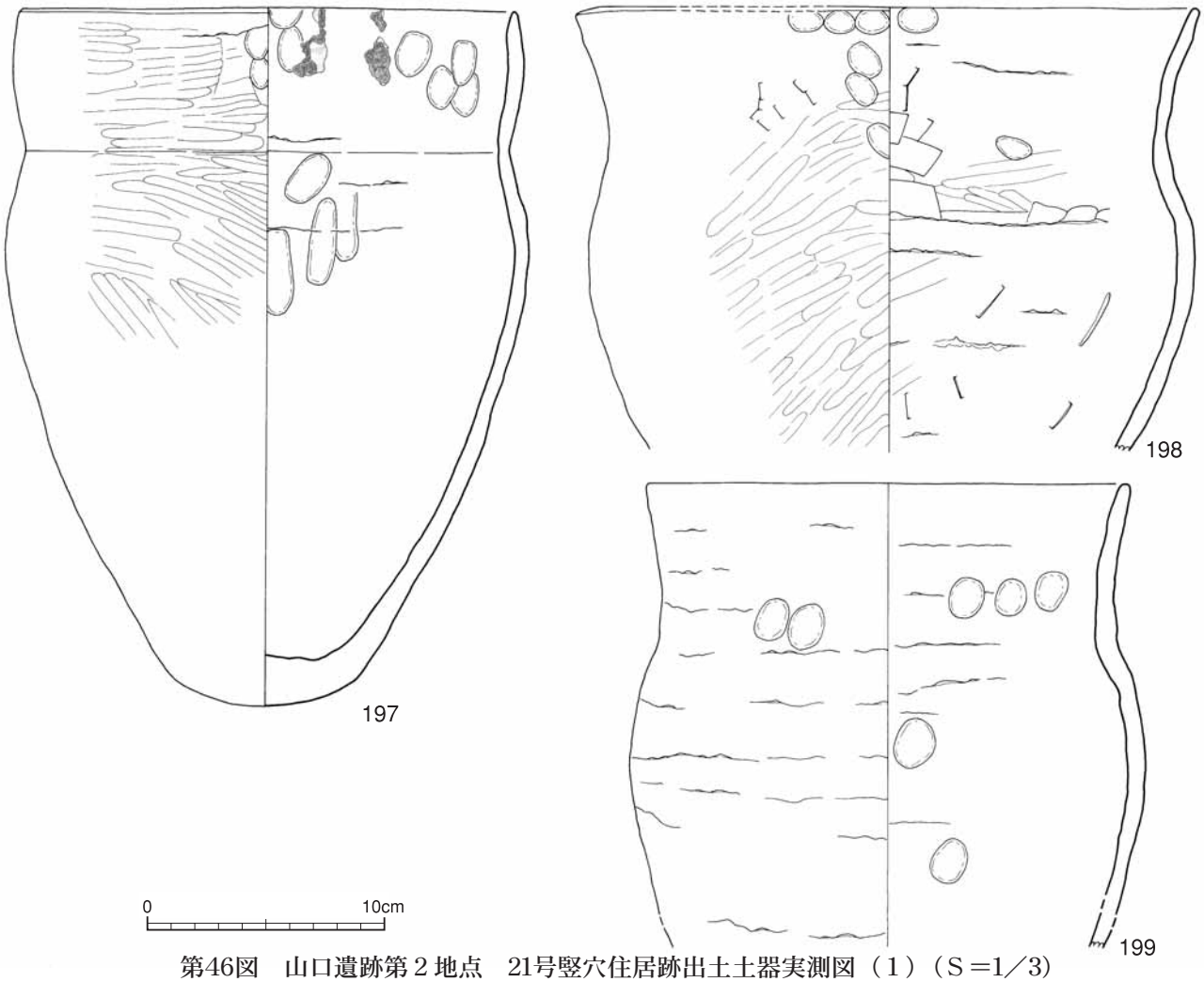
第44図　山口遺跡第２地点　第３竪穴住居跡群土器出土位置図（S＝1／40）

２０号竪穴住居跡（ＳＡ２０：第45図）

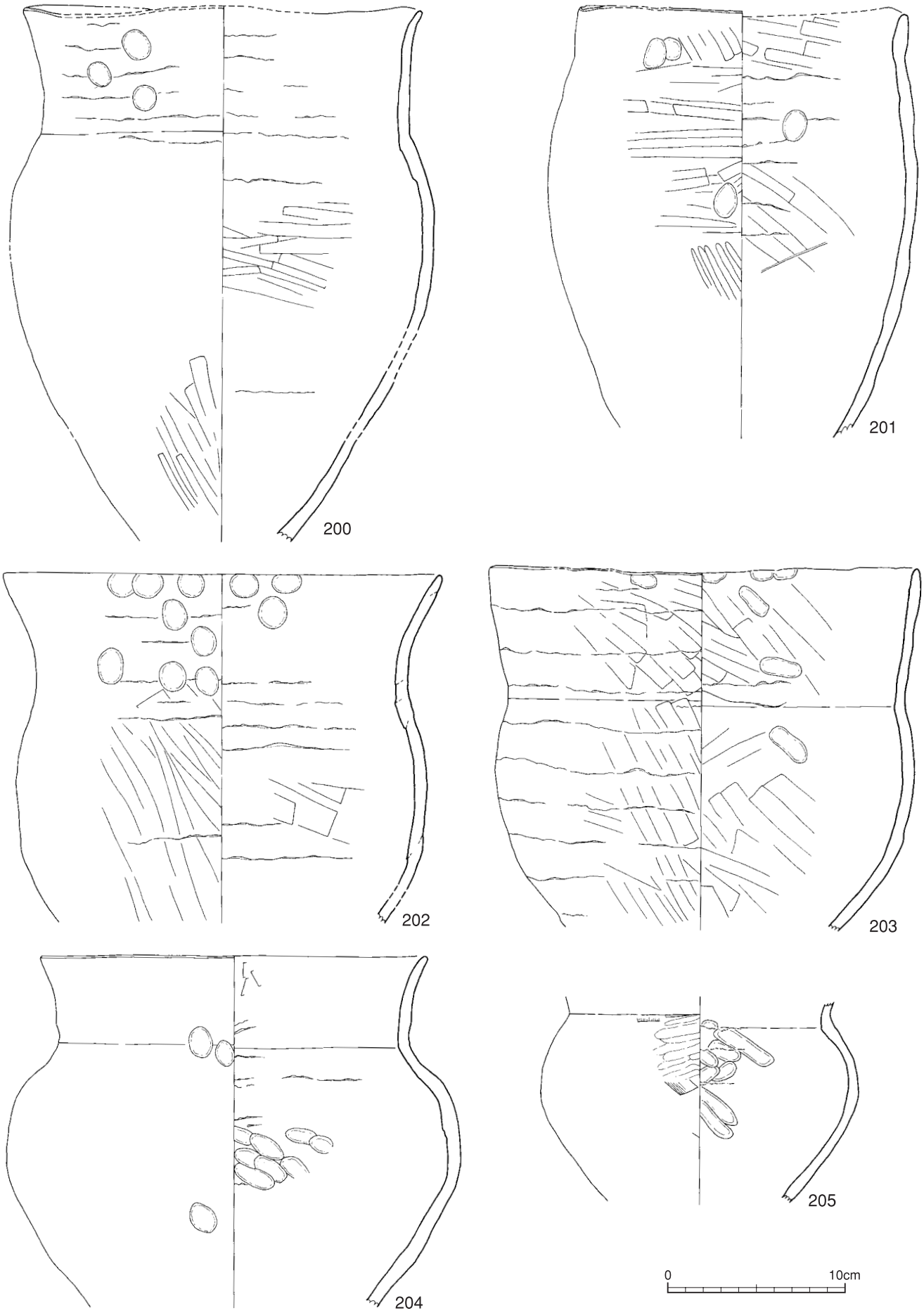
調査区の中央部よりやや北寄り西側に位置し、３号住居跡により切られている。また、プランの西側東側が削平され壁の立ち上がりが確認できなかった。軸が不明であるためにプランも確認できなかった。遺物も非常に少なく、小さな土師器片が出土しているにすぎない。



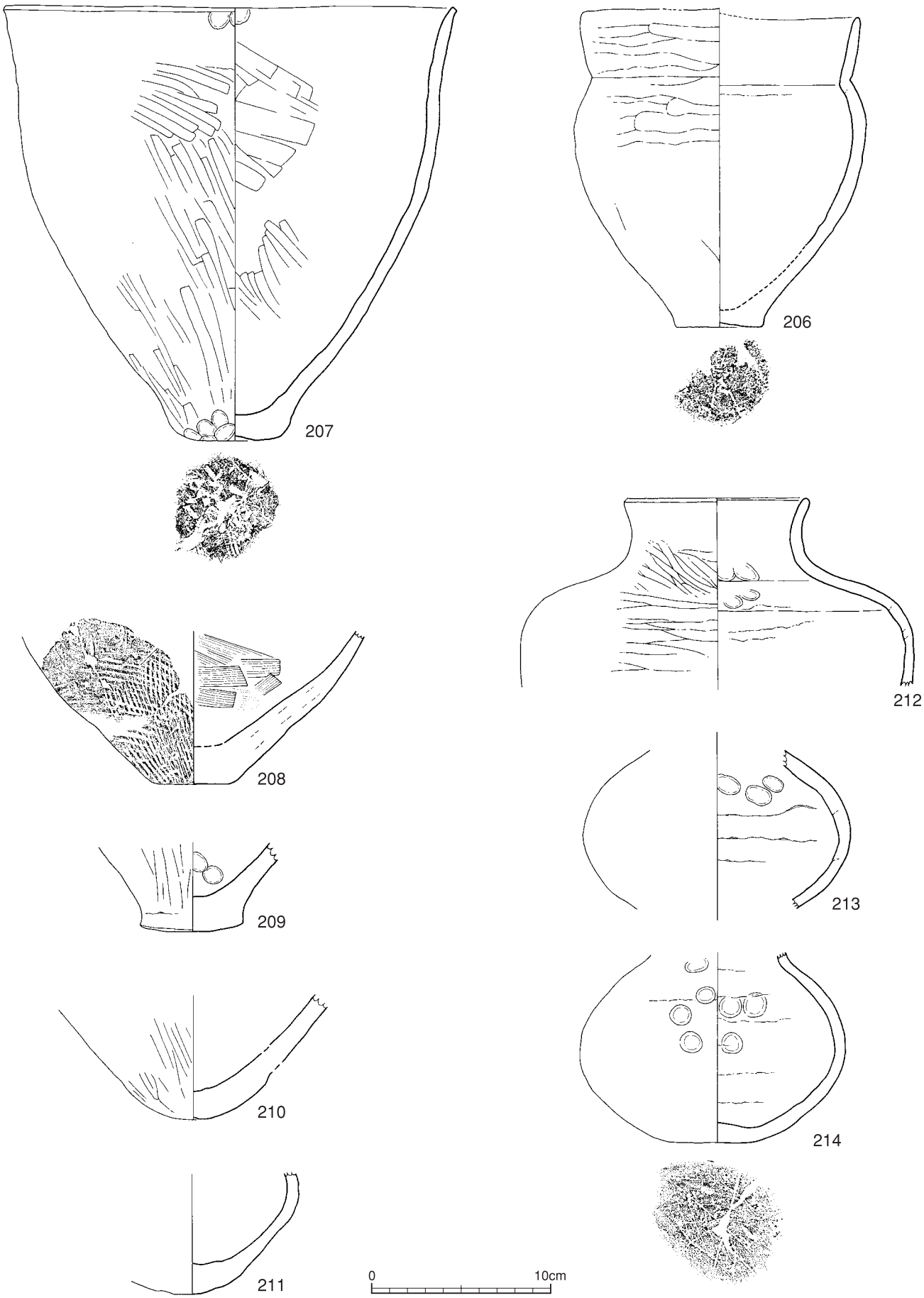
第45図　山口遺跡第２地点　20号竪穴住居跡実測図（Ｓ＝1／40）



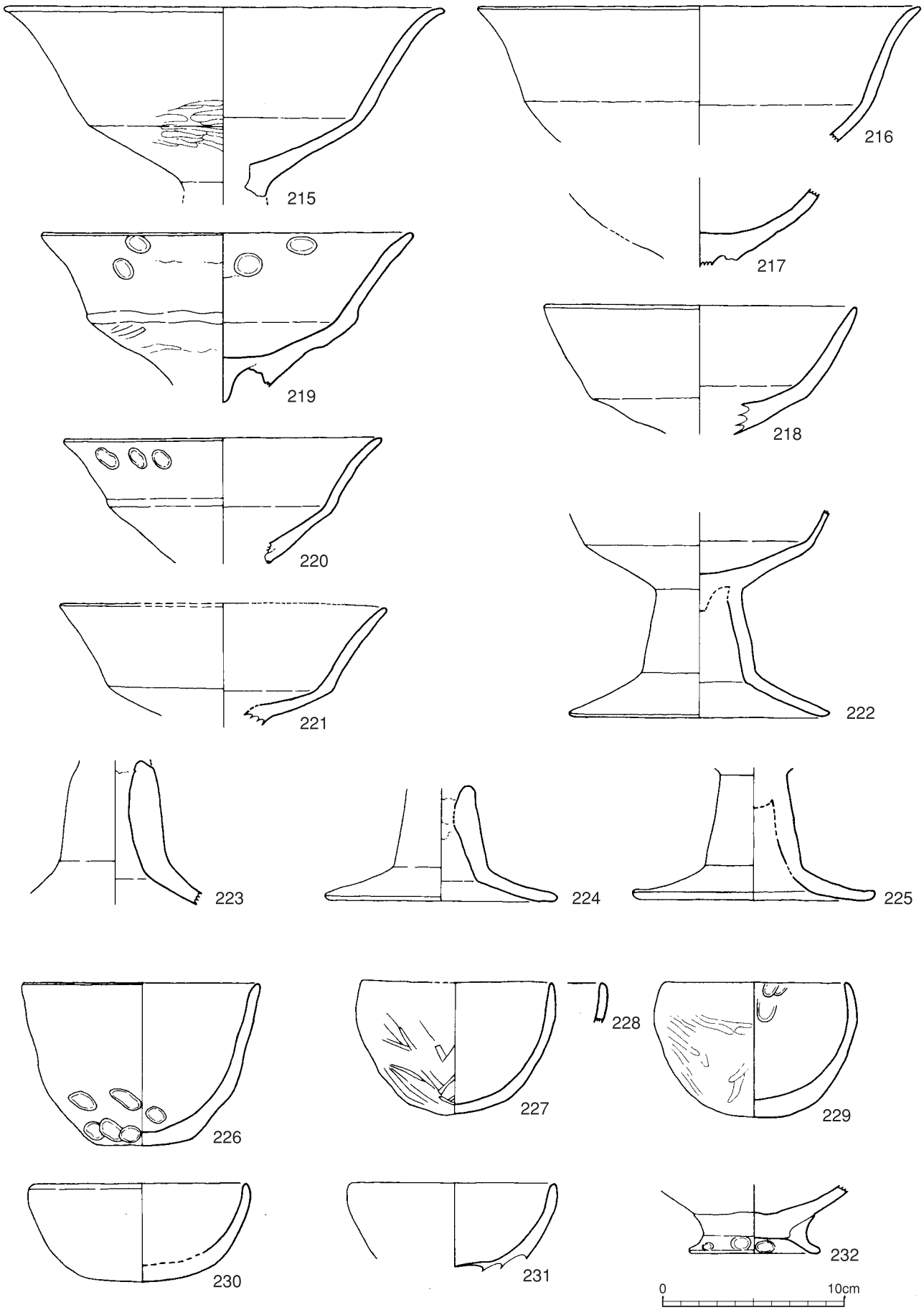
第46図　山口遺跡第２地点　21号竪穴住居跡出土土器実測図（１）（Ｓ＝1／3）



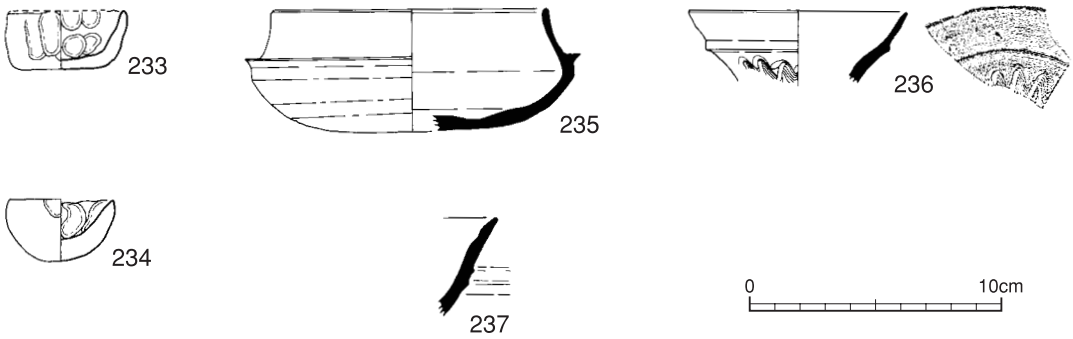
第47図　山口遺跡第２地点　21号竪穴住居跡出土土器実測図（２）（S＝1／3）



第48図　山口遺跡第２地点　21号竪穴住居跡出土土器実測図（３）（S＝1／3）



第49図　山口遺跡第２地点　21号竪穴住居跡出土土器実測図（４）（S＝1／3）



第50図　山口遺跡第２地点　21号竪穴住居跡出土土器実測図（５）（Ｓ＝1／3）

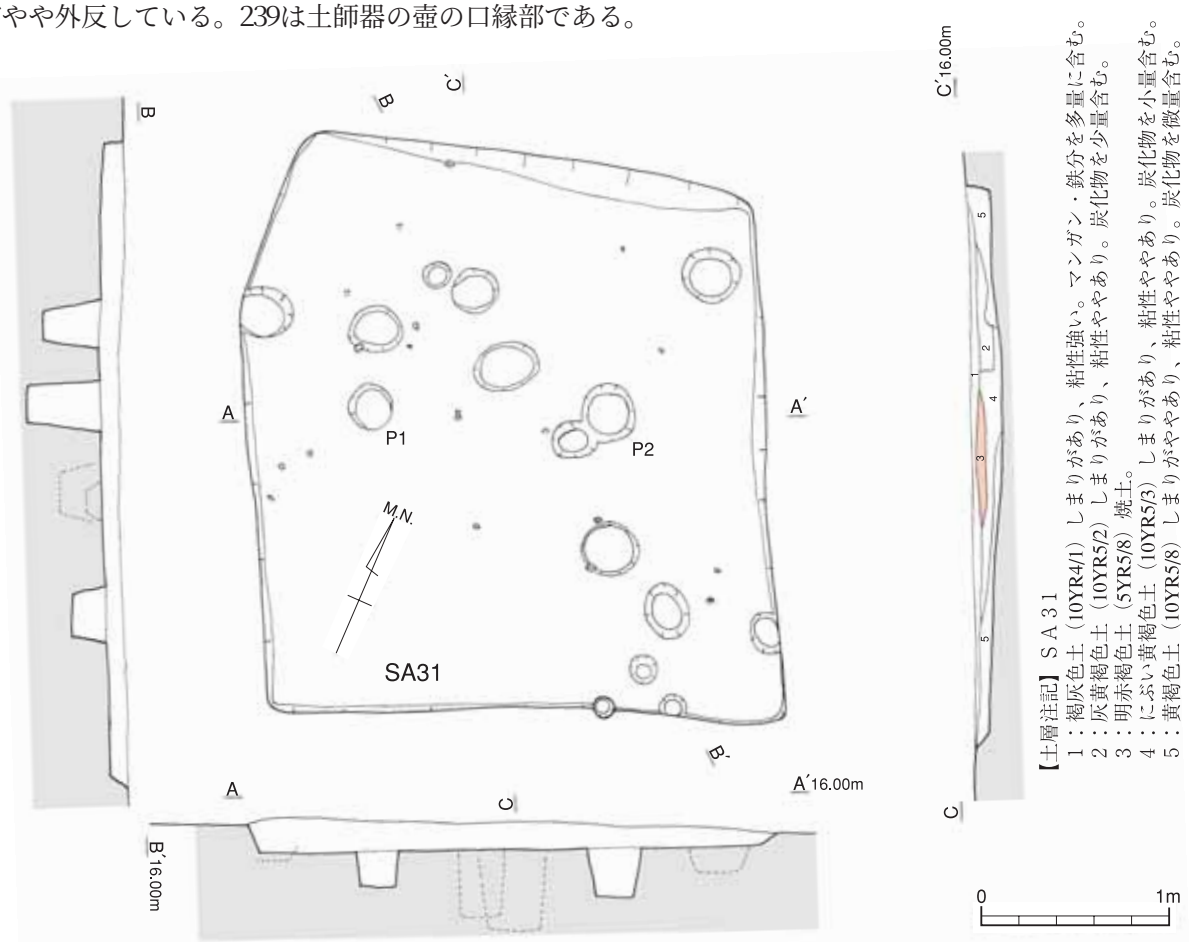
３１号竪穴住居跡（ＳＡ３１：第51図）

調査区の東寄りＣ５グリッドに位置し、３４号住居跡から４m離れている。南北方向に主軸をもち、長軸方向約2.94m、短軸方向に約2.72mの方形プランを呈し、推定床面積は約8.00㎡と小型の住居である。

主軸方位はN15°Wを指す。現存壁高は0.12m～0.21mを測り、床面はほぼ水平を保つ。床面には４基の柱穴を確認したが、配置状況から主柱穴はp1・p２の２本柱が想定される。その柱間は約1.2m、深さ約32～40㎝を測る。遺物の出土は少なかったが、焼土付近から数十点検出されている。

出土遺物（第53図：238・239）

この住居跡に伴う遺物は主に下層から出土している。遺物の内訳は、238は土師器の甕で、口縁端部がやや外反している。239は土師器の壺の口縁部である。



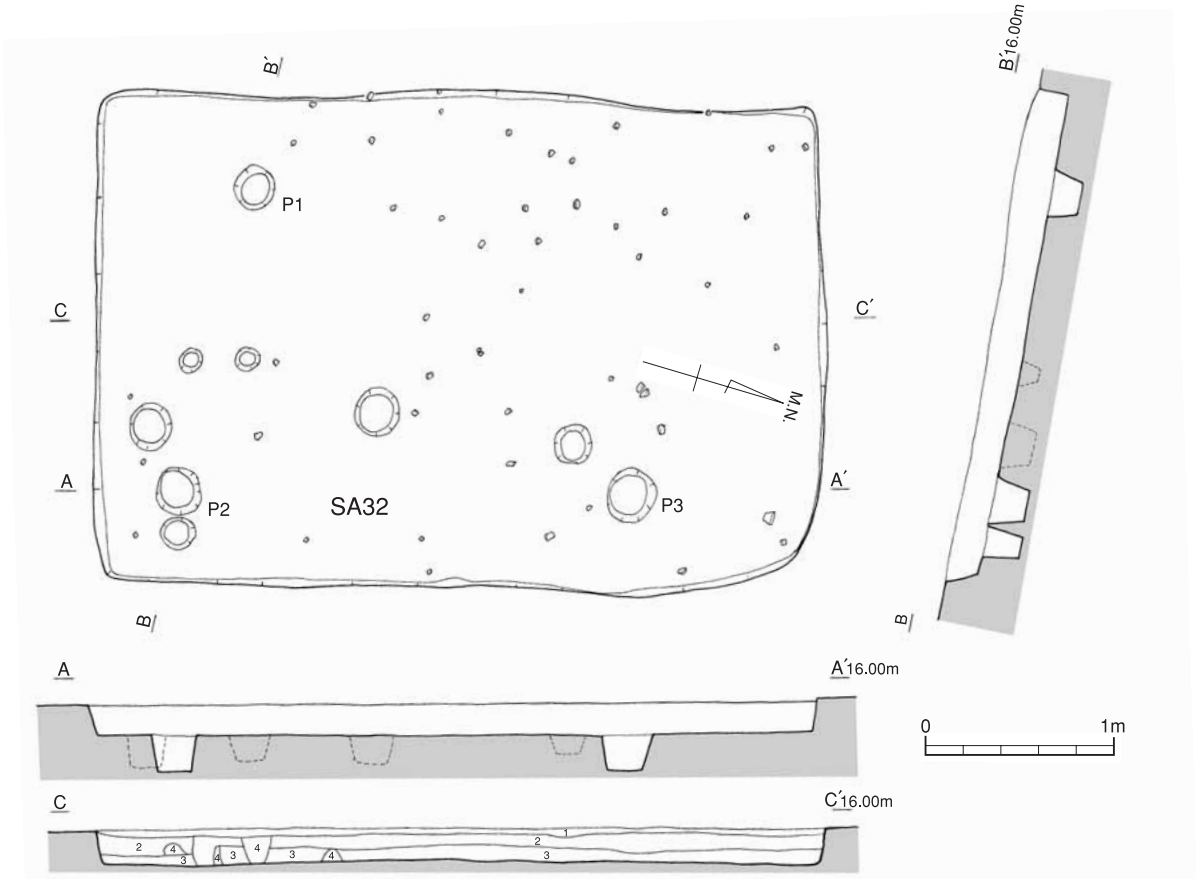
第51図　山口遺跡第２地点　31号竪穴住居跡実測図（Ｓ＝1／40）

３２号竪穴住居跡（ＳＡ３２：第52図）

調査区中央部から東南で３５号住居跡から東11mＢ５グリッドに位置する。南北方向に主軸をもち、長軸方向約3.86m、短軸方向に約2.64mの長方形プランを呈し、推定床面積は約10.2㎡と小型の住居跡である。主軸方位はN14°Wを指す。現存壁高は0.16m～0.18mを測り、床面はほぼ水平を保つ。床面には６基の柱穴を確認したが、配置状況から主柱穴は４本柱が想定される。しかし１基は不明である。その距離は（p1－p2　1.42m／p2－p3　2.16m）で床面からの深さは約16㎝～20㎝を測る。焼土は確認されなかったが遺物は数十点検出される。

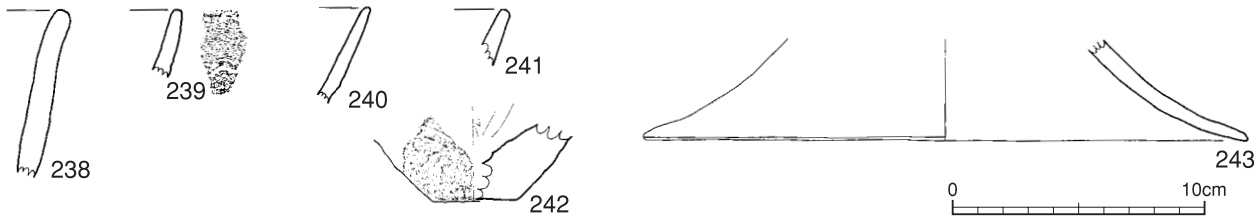
出土遺物（第53図：240～243）

この住居跡に伴う遺物は主に下層から出土している。遺物の内訳は、240～242は土師器の甕である。240・241は口縁部が直立して伸びている。242は平底の底部で外器面にタタキ調整がみられる。243は土師器の高坏の裾部ではっきりした稜をなさず、大きく外方へ開く。



【土層注記】ＳＡ３２
１：褐灰色土（10YR4/1）しまりがあり、粘性強い。マンガン・鉄分を多量に含む。
２：灰黄褐色土（10YR5/2）しまりがあり、粘性ややあり。炭化物を少量含む。
３：にぶい黄褐色土（10YR5/2）しまりがあり、粘性ややあり。炭化物を少量含む。
４：褐灰色土（10YR5/1）しまりがあり、硬い。マンガン・鉄分を多量に含む。
５：褐色土（10YR4/4）しまりがあり、ざらざらしている。砂が混入し、粘性なし。

第52図　山口遺跡第２地点　32号竪穴住居跡実測図（Ｓ＝1／40）



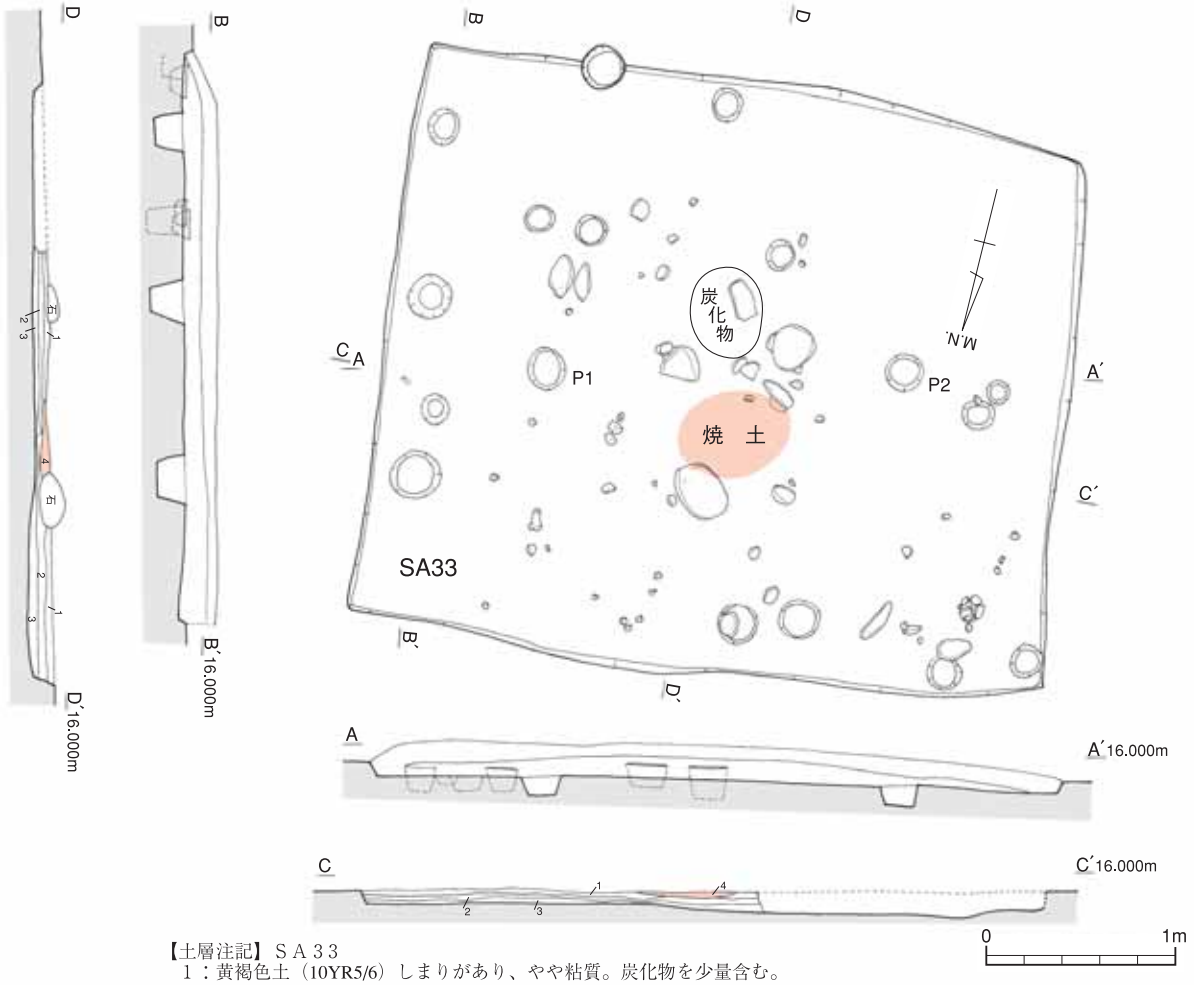
第53図　山口遺跡第２地点　31号（238・239）・32号（240～243）竪穴住居跡出土土器実測図（Ｓ＝1／3）

３３号竪穴住居跡（ＳＡ３３：第54図）

調査区中央部より北側の端Ｄ３グリッドに位置する。１号・３号土坑の下から検出される。東西方向に主軸をもち、長軸方向約3.64m、短軸方向に約3.18mの方形プランを呈し、推定床面積は約11.6㎡と小型の住居跡である。主軸方位はN83°Ｅを指す。現存壁高は0.18m～0.20mを測り、床面は中央部から北に向けて緩やかに凹む。主柱穴は長軸方向に並んだ２本柱とみられ、その距離は（p1－p2　1.68m）で床面からの深さは約10㎝～12㎝を測る。主柱穴の間に焼土・炭化物等の広がりがみられたが、遺物の出土は少なかった。

出土遺物（第56図：244～253）

この住居跡に伴う遺物は主に下層から出土している。遺物の内訳は、244～248は土師器の甕である。口縁部が強く外反するもの（244）、直立して外反するもの（245～247）がある。248は丸底の底部である。249・250は土師器の壺である。249は頸部の貼付突帯部に布目圧痕を残す。250は丸底の底部で外器面にタタキがみられる。251・252は土師器の高坏である。251は坏部の口縁部がわずかに外反している。252は裾部で明瞭な稜をもち開くものである。253は土師器の埦で口縁部が丸みをもつ。



【土層注記】ＳＡ３３
１：黄褐色土（10YR5/6）しまりがあり、やや粘質。炭化物を少量含む。
２：にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまりがあり、やや粘質。炭化物を少量含む。
３：にぶい黄褐色土（10YR5/3）しまりがあり、やや粘質。
４：明赤褐色土（5YR5/8）焼土。

第54図　山口遺跡第２地点　33号竪穴住居跡実測図（Ｓ＝1／40）

３４号竪穴住居跡（ＳＡ３４：第55図）

調査区東側北寄りＣ５グリッドに位置し、１７号住居跡が東側に隣接する。南北方向に主軸をもち、長軸方向約3.28m、短軸方向に約2.78mの長方形プランを呈し、推定床面積は約9.1㎡と小型の住居跡である。主軸方位はN15°Wを指す。現存壁高は0.04m～0.10mを測る。床面は水平を保ち、中央部に焼土が確認された。主柱穴は４本柱とみられ、その距離は（p1－p2　1.76m／p2－p3　2.36m／p3－p4　1.66m／p4－p1　1.86m）で床面からの深さは約18㎝～22㎝である。遺物の出土はなかった。

３５号竪穴住居跡（ＳＡ３５：第57図）

調査区中央部南端Ｂ４グリッドに位置し、９号・１０号住居跡の下から検出される。東西方向に主軸をもち、長軸方向約5.44m、短軸方向に約4.64mの隅丸方形プランを呈し、推定床面積は約25.2㎡と大型の住居跡である。主軸方位はN72°Ｅを指す。現存壁高は0.20m～0.22mを測り、床面は中央部から西に向けて緩やかに凹む。竪穴部の中央部に床面積の6.7㎡の楕円形の掘り込みが確認された。埋土は褐色土で炭化物を多量に含む。主柱穴は４本柱とみられ、その距離は（p1－p2　3.20m／p2－p3　3.00m／p3－p4　3.32m／p4－p1　2.68m）で床面からの深さは約20㎝～28㎝である。遺物の多くは床面直上か若干浮いた状態で出土した。

出土遺物（第60図：254～275）

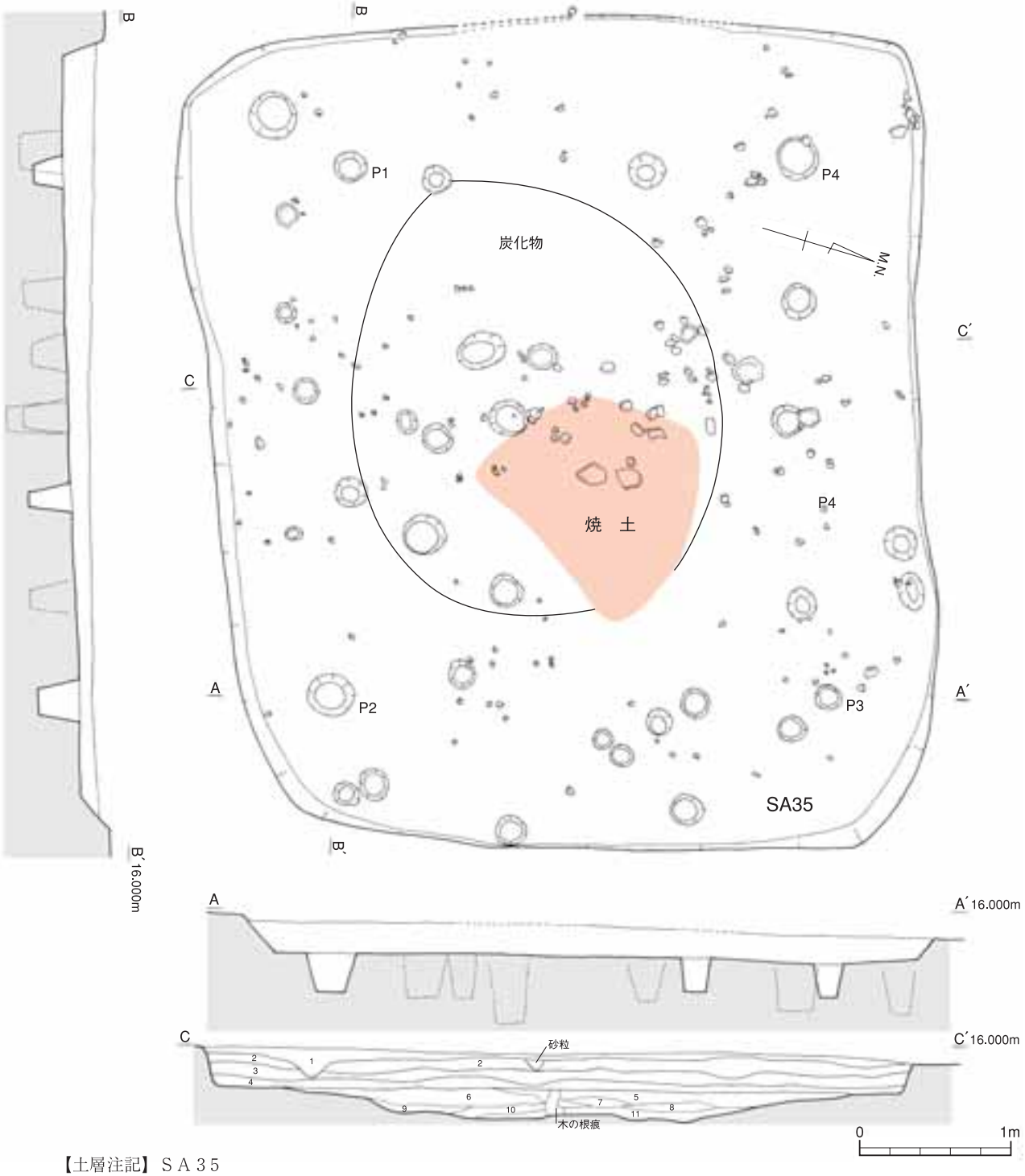
この住居跡に伴う遺物は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。遺物の内訳は、254～258は土師器の甕である。254・255は口縁部が直立して伸びるもので、256は口縁端部がやや内湾している。255は外器面にタタキが施されている。底部は平底（257）、丸底（258）のものがある。259・260は土師器の壺である。259は口縁部がやや外反し、口縁端部に丸みをもたせて仕上げている。頸部に刻目突帯を施す。260は頸が「くの字」状に付け根付近から外反するものと思われる。261は底部で外器面にタタキが施されている。262～265は土師器の高坏である。262は坏部がやや外反し、外器面に櫛描波状文が施されている。263・264は裾部がはっきりした稜をなさず「八の字」状に大きく外方へ開くものである。265は直線的に開く裾部である。266～271は土師器の鉢である。口縁端部が内湾するもの（266・267・268）、直線的に伸びるもの（269）、屈曲し外反するもの（270）がある。271は鉢のミニチュア土器底部である。272～274は石器である。272は円礫の自然面を背面とする剥片を素材とするもので平面は楕円形、断形楔形と考えられ、石包丁との関連が想起できる。273・274は磨石である。凝灰岩の扁平な円礫を用いる。表裏一面に磨痕が認められ、周縁に敲打痕が認められる。275は鉄鏃である。銹化著しく形状は不明瞭だが、両丸造篦被柳葉式と思われる。茎には横方向の繊維痕がみられる。全長11.8㎝（うち刃部長7.1㎝、茎長4.6㎝）厚さ1.4㎝、である。

３６号竪穴住居跡（ＳＡ３６：第55図）

調査区の東側北寄りＤ５グリッドに位置し、４号土坑の下から検出される。東北東方向に主軸をもち、長軸方向約5.98m、短軸方向に約4.72mの隅丸長方形プランを呈し、推定床面積は約28.2㎡と大型の住居跡である。主軸方位はN50°Ｅを指す。現存壁高は0.20m～0.28mを測り、床面は中央部から南に向けて緩やかに凹む。主柱穴は４本柱とみられ、その距離は（p1－p2　2.20m／p2－p3　1.74m／p3－p4　2.18m／p4－p1　1.54m）で床面からの深さは約42㎝～70㎝である。床面は掘り底から10㎝ほどの厚さで炭化物をブロック状に含む褐色土が堆積しており、その上面に硬化した部分がみられたことから貼り床であったと考えられる。遺物の多くは床面直上か若干浮いた状態で出土した。

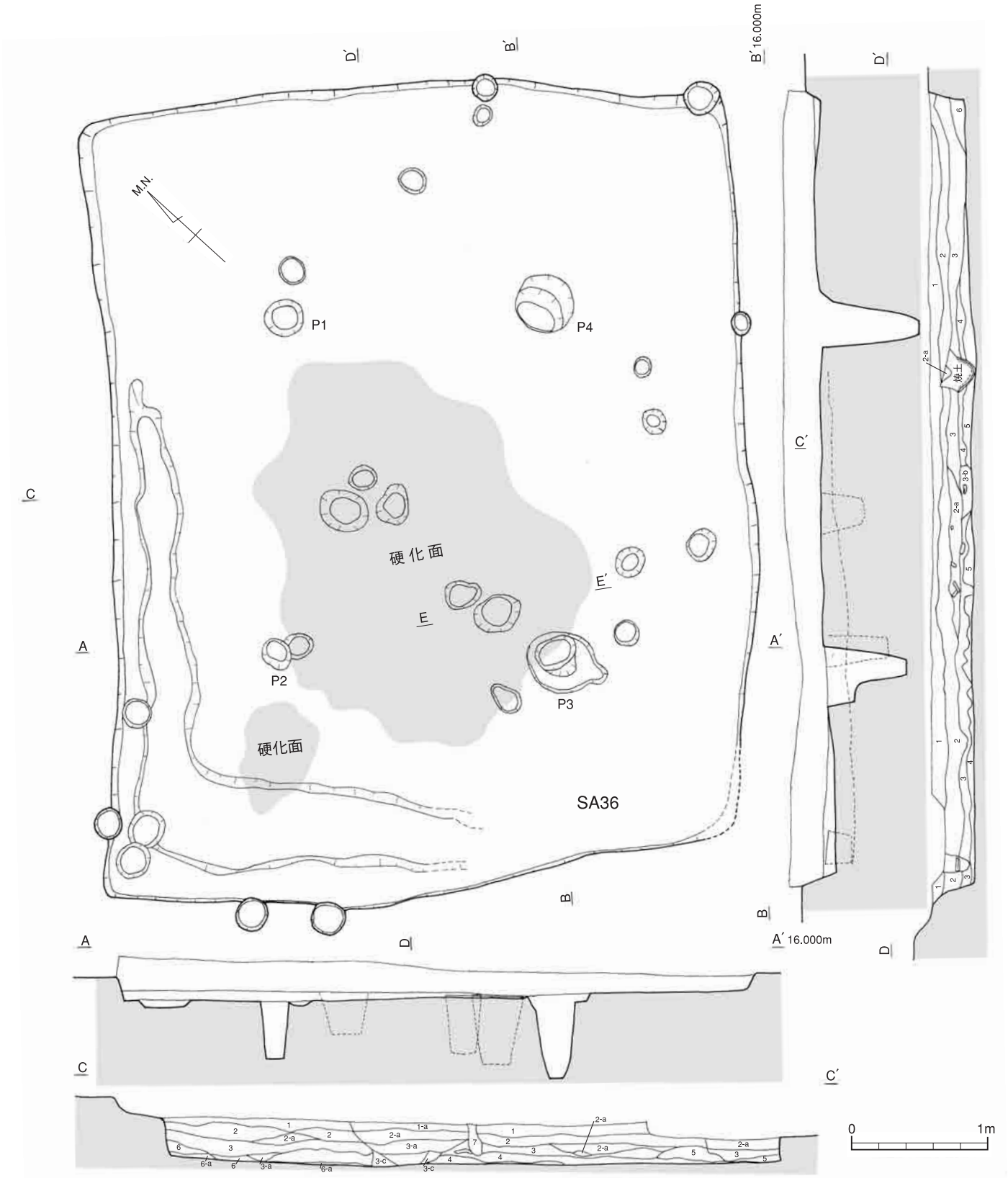
出土遺物（第61図：276～293）

この住居跡に伴う遺物は主に下層から出土している。遺物の内訳は、276～280は土師器の甕である。276・277は口縁部が長くやや外反しながら直線的に伸びる。276の口縁端部は丸みを帯び、277は口縁端部が薄くなって尖り気味にまとまる。底部は平底でわずかな上げ底を呈するもの（278）、わずかに凸レンズ状を呈するもの（280・279）ものがある。



【土層注記】ＳＡ３５
１：褐色土（10YR4/4）砂質粘土質。炭化物が少量混在。マンガン・鉄分を微量含む。
２：にぶい黄褐色土（10YR3/4）砂質粘土質。しまりがあり、砂粒のブロック状にある。
３：暗褐色土（10YR3/4）砂質粘土質。しまりがややあり、砂の割合が多い。
４：暗褐色土（10YR3/3）砂質粘土質。しまりがあり、砂の割合が非常に多い。
５：褐色土（10YR4/6）粘性があり、ややしまりがない。炭化物を含む。
６：褐色土（10YR4/4）粘性があり、ややしまりがない。Ｉ層に比べあまり炭化物を含まない。南側はやや砂質。
７：暗褐色土（10YR5.5/4）粘性があり、ややしまりがある。炭化物・暗褐色粒等を含む。
８：褐色土（10YR4/6）粘性があり、ややしまりがある。炭化物や焼土粒を若干含む。
９：にぶい黄褐色土（10YR4/5）粘性があり、炭化物や焼土粒を若干含む。
１０：褐色土（10YR4/6）粘性があり、ややしまりがある。炭化物や黒褐色土を多量に含む。
１１：褐色土（10YR4/6）粘性があり、ややしまりがある。焼土粒や炭化物を若干含む。暗褐色粒を多量に含む。

第57図　山口遺跡第２地点　35号竪穴住居跡実測図（Ｓ＝1／40）



【土層注記】ＳＡ３６

1　：黄褐色土（10YR5/6）硬質でしまりが強い。
1－a：黄褐色土（10YR5/6）硬質でしまりが強く、水分を多く含み粘質が強まる。
2　：褐色土（10YR4/6）硬質でややしまりがあり、炭化物を１層より多く含む。
2－a：褐色土（10YR4/6）硬質でややしまりがあり、炭化物を１層より多く含む。水分を多く含み粘質が強まる。
3　：にぶい黄褐色土（10YR5/4）軟質で炭化物をブロック状で含む。
3－a：にぶい黄褐色土（10YR5/4）軟質で炭化物をブロック状で含む。水分を多く含み粘質が強まる。
3－b：にぶい黄褐色土（10YR5/4）軟質で炭化物をブロック状で含む。かなり強い軟質で暗褐色土層が混入。
3－c：にぶい黄褐色土（10YR5/4）軟質で炭化物をブロック状で含む。強い軟質で褐灰色土層が混入。
4　：にぶい黄褐色土（10YR7/4）硬質でかたくしまり、粒子をあまり含まない。
5　：明黄褐色土（10YR7/6）硬質でかたくしまり、粒子をあまり含まない。
6　：褐色土（10YR4/4）軟質で粒子を含まない。
6－a：褐色土（10YR4/4）かなり軟質で粒子を含まない。
7　：にぶい黄褐色土（10YR5/4）軟質。

第58図　山口遺跡第２地点　36号竪穴住居跡実測図（Ｓ＝1／40）

第59図　山口遺跡第２地点　36号竪穴住居跡土器出土位置図（Ｓ＝1／40）

281～284は土師器の壺である。281は複合口縁を有し、口縁部外面に櫛描波状文がみられる。282は口縁部が直線的に伸び、口縁端部は先細りとなりやや内湾する。外器面はハケ目調整がみられる。283は小型丸底壺の頸部である。284は頸部で貼付突帯が施され、内面は剥離している。

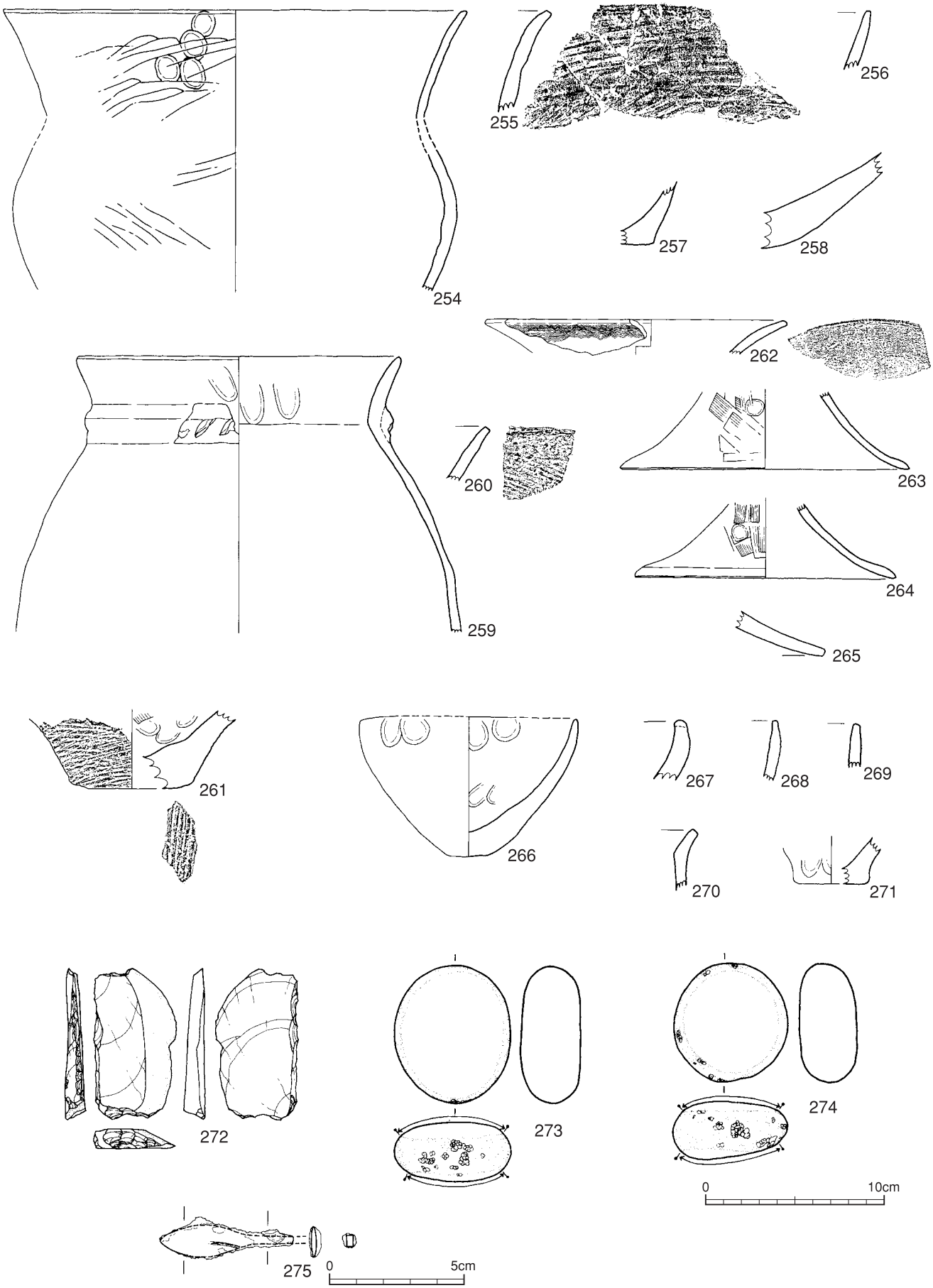
285・286は土師器の高坏である。坏部が明瞭な稜を有し、口縁端部はやや外反する。287・288は土師器の鉢である。外器面に指頭痕を残す。

289・290は土師器の坏である。289は口縁端部が先細りし、内外面ナデを施している。290は底径と口径の差が大きくなり、体部は基本的にラッパ状に大きく開く。内外面とも回転ナデである。

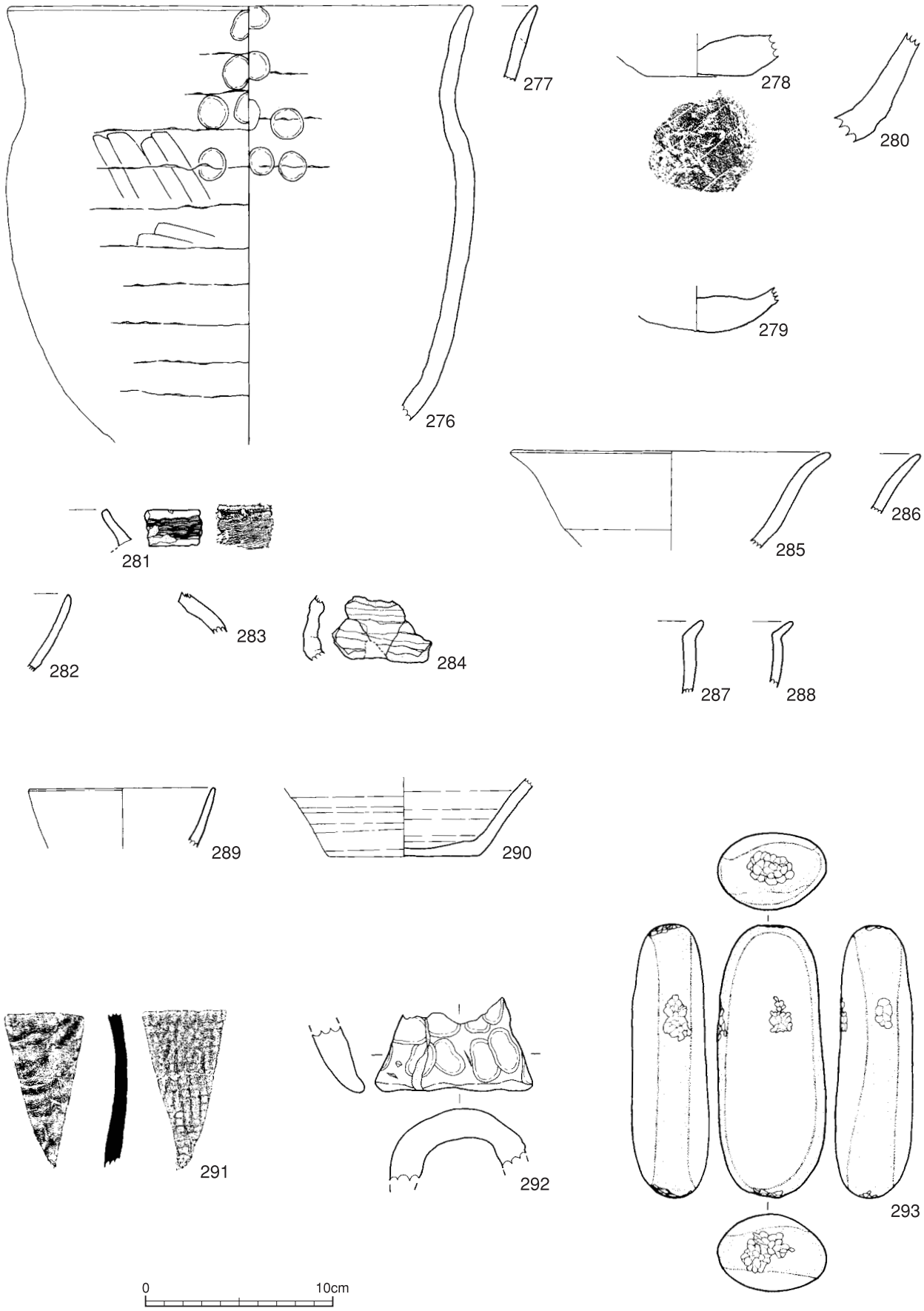
291は須恵器の甕である。外器面に格子目タタキを施している。

292は土製の鞴の羽口である。

293は砂岩製の敲石である。表面中央部と側面に明瞭な敲打痕を残す。



第60図　山口遺跡第２地点　35号竪穴住居跡出土遺物実測図（S＝1／3）



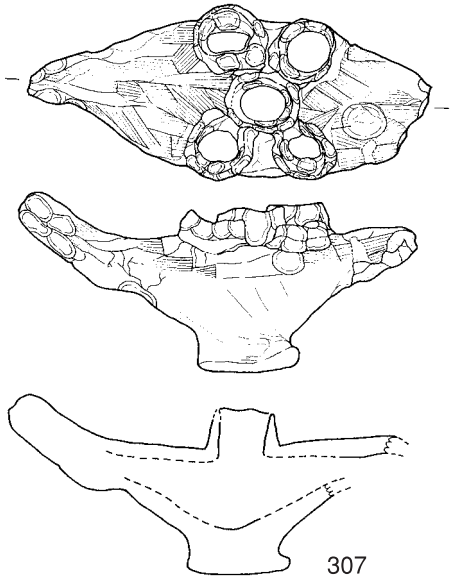
第61図　山口遺跡第２地点　36号竪穴住居跡出土遺物実測図（S＝1／3）

３７号竪穴住居跡（ＳＡ３７：第63図）

調査区の中央部やや南寄りの２号住居跡と第２竪穴住居跡群の間Ｃ３グリッドに位置する。東北東方向に主軸をもち、長軸方向約7.24m、短軸方向に約4.96mの隅丸長方形プランを呈し、推定床面積は約35.9㎡と大型の住居跡である。主軸方位はN70°Ｅを指す。現存壁高は0.16m～0.32mを測り、床面は水平を保つ。竪穴部中央には焼土が確認された。主柱穴は４本柱とみられるがp4は不明である。その距離は（p1－p2　3.78m／p2－p3　2.72m／p3－p4　不明／p4－p1　不明）で、床面からの深さは約34㎝～60㎝である。床面は掘り底から10㎝ほどの厚さで炭化物をブロック状に多量に含む暗褐色土が堆積しており、その上面に硬化した部分がみられたことから貼り床があったと考えられる。遺物の多くは床面直上か若干浮いた状態で出土した。

出土遺物（第65図：294～310）

この住居跡に伴う遺物は主に下層から出土している。遺物の内訳は、294～298は土師器の甕である。294は胴長で口縁部が長くやや外反しながら直線的に伸びる。外器面に平行タタキ後にハケ目調整を施し、内器面に指頭痕、ハケ目調整を施している。295は胴長で最大径を胴部にもち、胴部が球形している。外器面に平行タタキが施され、内器面に工具ナデ後にナデを施している。296は口縁部が斜め方向に直線的に伸び、頸部に明瞭な稜をもつ。最大径が口縁部にあり、器面調整は内外面ともナデ調整である。297・298は口縁部が短く「くの字」状に外反し、口縁端部が先細りする。



第62図　37号竪穴住居跡出土土器実測図（Ｓ＝1／3）

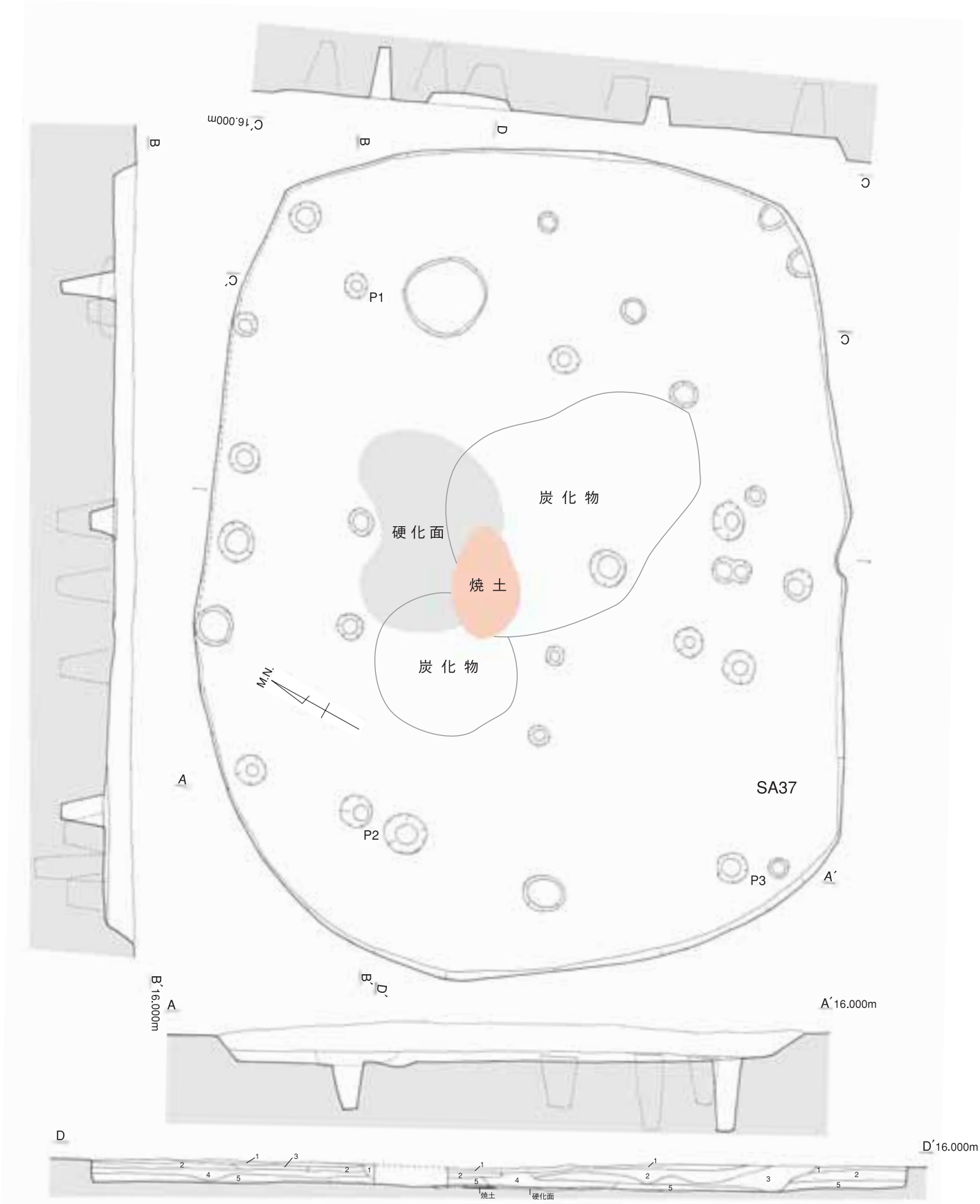
299～304は土師器の壺である。299・300は複合口縁を有し、口縁部外面に山形に近い櫛描波状文を施している。301は複合口縁を有し、口縁部外面に斜方向の工具ナデ後板状工具で線刻による直線的な文様を施している。302は口縁端部を平坦に仕上げている。303は頸部の刻目突帯である。304は丸底の底部である。

305は土師器の鉢である。頸部で屈曲、短く外反し明瞭な稜をもつ。

306は杓子土器と考えられるが、杓子状というよりは注口土器としての機能が考えられる。また、第62図307は熊本県城南町歴史民俗資料館にある舟形土器（弥生後期後葉：２世紀後半）に類似している。祭祀に使われた土器とも考えられる。赤塚次郎氏によると、この弥生時代後期から邪馬台国時代（古墳時代早期）前半期にかけては、広域的な活発な土器の全国的な動きが見られない時期であり、つまり個性的であり、かつ地域性豊かな文化が日本列島各地に花咲いた時代だと思われる。各地の個性的な土器様式の誕生ともいえる。307の土器も山口遺跡第２地点出土土器の個性的な土器の一つといえよう。

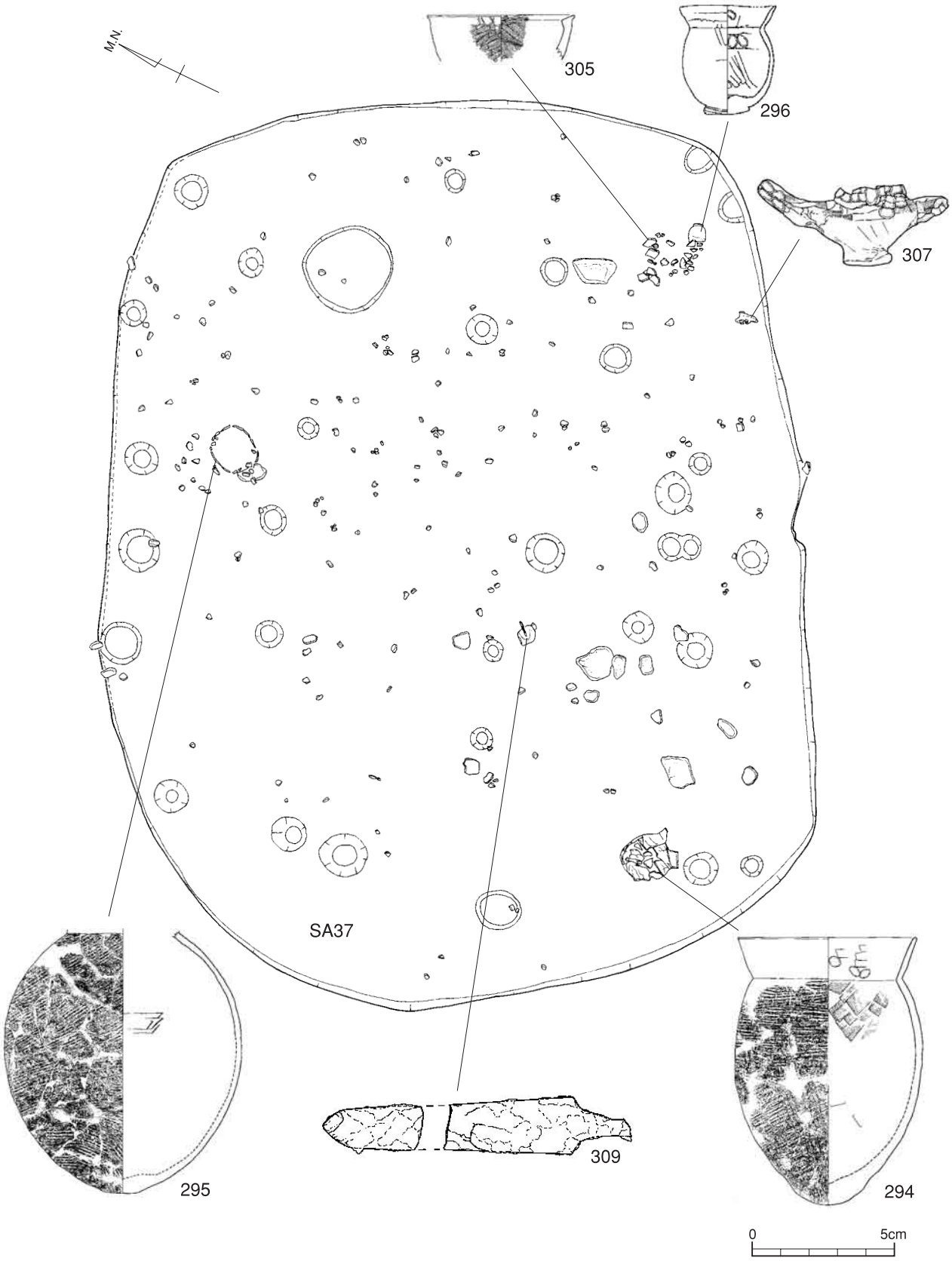
308は器種は不明であるが、外器面にタタキを施し、内器面に布目痕が残る。

309・310は鉄器である。309は剣（短剣）の身部片と思われるが背関が深くすき取られたようになっており、あるいは大型の刀子片かもしれない。平造り、角背。銹化剥離が著しい。310は不明鉄器で、錆がかなりひどく不鮮明である。

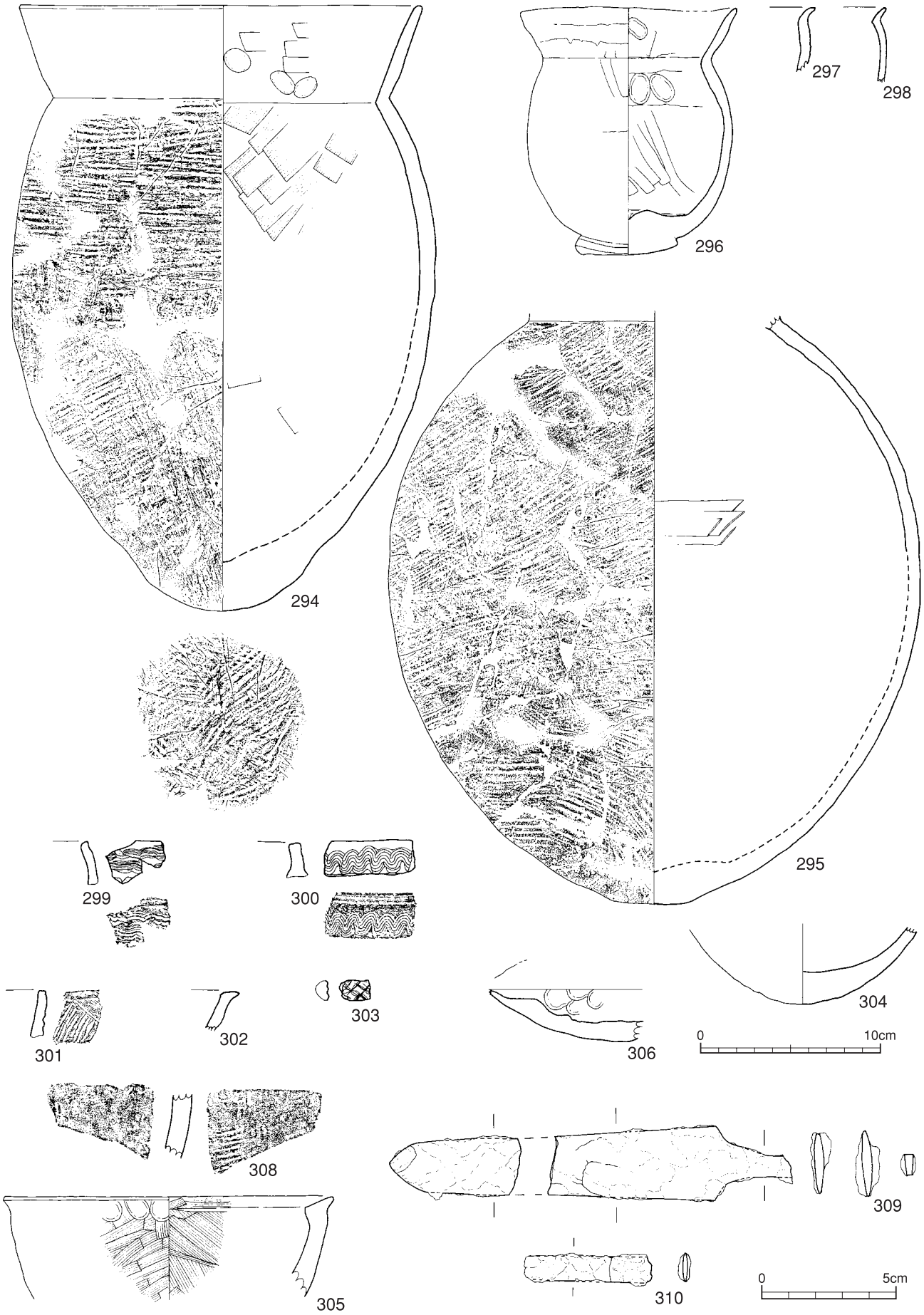


【土層注記】ＳＡ３７
１：褐色土（10YR4/4）砂質土。粘土質で、鉄分・マンガンを少量含む。
２：褐色土（10YR4/4）砂質土。炭化物を微量含む。
３：灰黄褐色土（10YR5/2）砂質粘土質。石粒（1mm～5mm）を多量に含む。炭化物を少量含む。
４：にぶい黄褐色土（10YR3/4）砂質粘土質。炭化物多量に含む。
５：暗褐色土（10YR3/3）砂質粘土質。炭化物を多量に含み、ところどころに焼土粒が点在する。

第63図　山口遺跡第２地点　37号竪穴住居跡実測図（Ｓ＝1／40）



第64図　山口遺跡第２地点　37号竪穴住居跡土器出土位置図（S＝1／40）



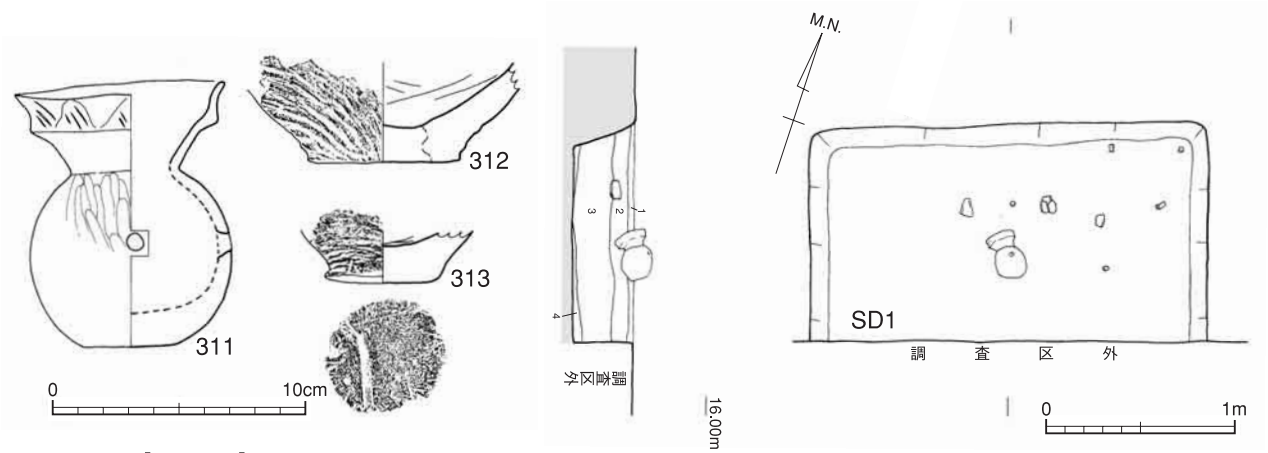
第65図　山口遺跡第２地点　37号竪穴住居跡出土遺物実測図（S＝1／3）

（２）土壙墓（ＳＤ）

１号土壙墓（ＳＤ１：第66図）

調査区中央南側の２号住居跡の東側Ｂ３グリッドから検出された。遺構の南側の大部分は調査区外に延びているため、プランの約２分の１を検出した。全長不明の方形プランで深さは約32㎝である。埋土は大きく３層に分けられる。須恵器模倣甕などの土器が出土する層、その下位の無遺物層、最下層の粘土により張床した層である。被葬者の胸に土師器を共献し埋葬したのではないかと推測される。遺物は少量出土している。出土土器より、古墳時代中期後半、５世紀後半から６世紀前半に位置付けされる。出土遺物は311～313である。

311はＴＫ208段階の須恵器の甕に類似した形態で、胴部に穿孔がみられる。312・313は甕の底部で、外面にタタキがみられる。



【土層注記】
１：にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土。炭化物を多く含む。上面の土は削平されており調査時残存せず。
２：にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土。粘性なく、ややしまる。土師器片が出土。
３：にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土。２層よりも若干しまりあり。粘性がある。遺物の出土なし。
４：灰白色（10YR7/1）粘土。土壙の床張り。

第66図　山口遺跡第２地点　１号土壙墓（Ｓ＝1／40）及び出土土器実測図（Ｓ＝1／3）

（３）土　坑（ＳＣ）

山口遺跡第２地点の土坑は竪穴住居跡の周辺に存在する。規模は２ｍ前後のものが多く、平面形態は円形プランが４基、方形プラン１基、不定形１基で、深さは約20㎝～40㎝である。遺構の性格については不明なものが多い。埋土は基本土層Ⅳ層を主体とし、遺物は土師器片が出土している。時期については遺物の関係から古墳時代の前期（ＳＣ１・ＳＣ４）と中期（ＳＣ２・ＳＣ３・ＳＣ５・ＳＣ６・ＳＣ８）に分かれる。

１号土坑（ＳＣ１：第67図）

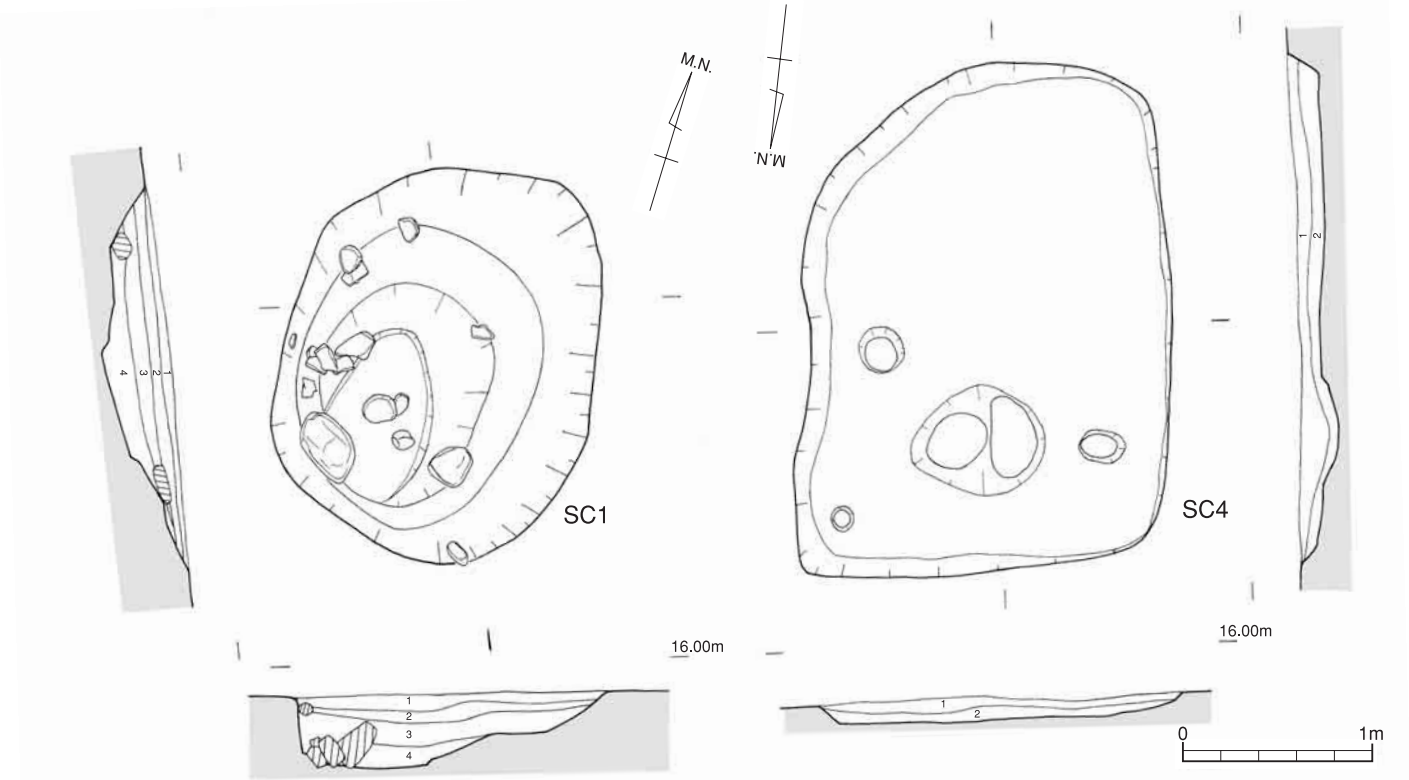
調査区北側の３３号住居跡の東側Ｄ４グリッドから検出された。長軸約2.08ｍ・短軸約1.65ｍの円形プランである。検出面の深さは約32㎝であるが、表土剥ぎの段階で遺構上面が削平された形で検出されたので、正確な深さは不明である。埋土を観察すると、遺物は第４層の褐色土層から検出されている。褐色土は３３号住居の第３層（埋土、焼土混在）とよく似ており、１号土坑は３３号住居に切られた状態であると判断できる。

出土遺物は（第68図）に示している。この遺構に伴う遺物は主に下層から出土している。314～317は土師器の甕である。314は口縁端部がやや内湾し、315はやや外反する。316・317は小型の甕で、317は外器面にミガキが施されている。318は甕の底部である。320・321は直線的に広がり屈曲して開く高坏の裾部である。321は円形透かしを施している。

４号土坑（ＳＣ４：第67図）

調査区中央北東側の３６号住居跡の上面Ｄ５グリッドから検出された。長軸約2.68m・短軸約1.88mの不整長方形で、検出面の深さは約15cmである。埋土を観察すると、遺物は第２層の褐色土層から検出されている。出土遺物は土器片が少量検出された。

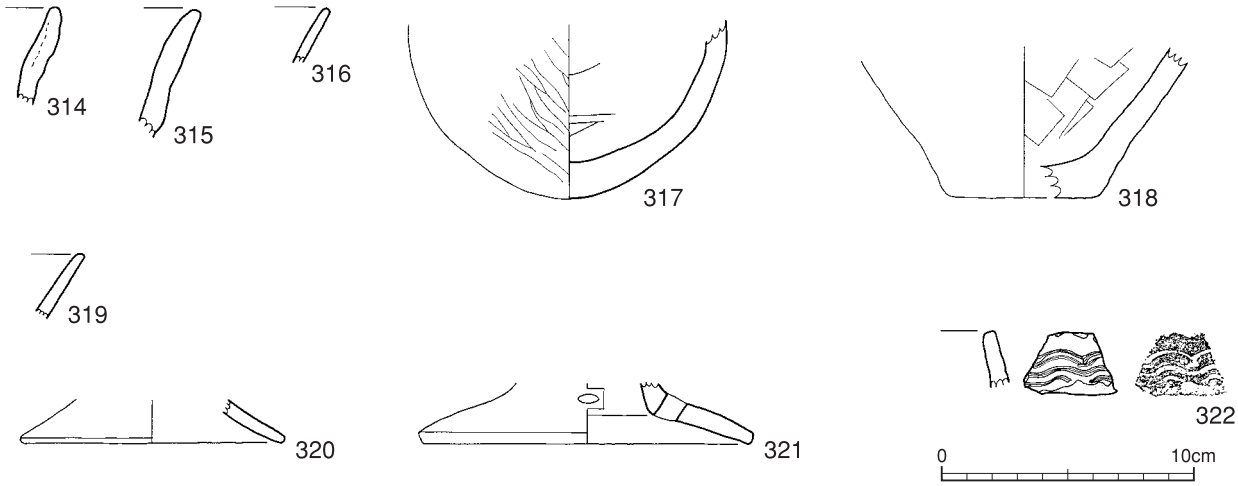
第68図の322は土師器の壺の口縁部である。複合口縁を有し、口縁部外面に櫛描波状文がみられる。



【土層注記】ＳＣ１
1：褐灰色土（10YR4/1）しまりがあり、粘性強い。マンガン・鉄分を微量含む。
2：灰褐色土（10YR4/2）しまりがあり、粘性ややあり。
3：にぶい褐色土（10YR3/1）しまりがややあり、粘性ややあり。
4：褐色土（10YR4/4）砂質土でしまりがなく、粘性なし。

【土層注記】ＳＣ４
1：褐灰色土（10YR4/1）しまりがあり、粘性ややあり。マンガン・鉄分を多く含む。
2：褐色土（10YR4/4）砂質土でしまりがなく、粘性なし。

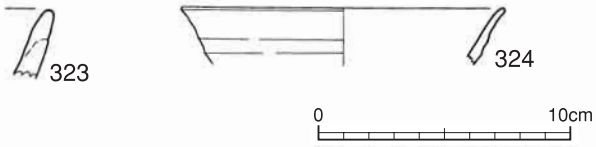
第67図　山口遺跡第２地点　１号・４号土坑実測図（Ｓ＝1／40）

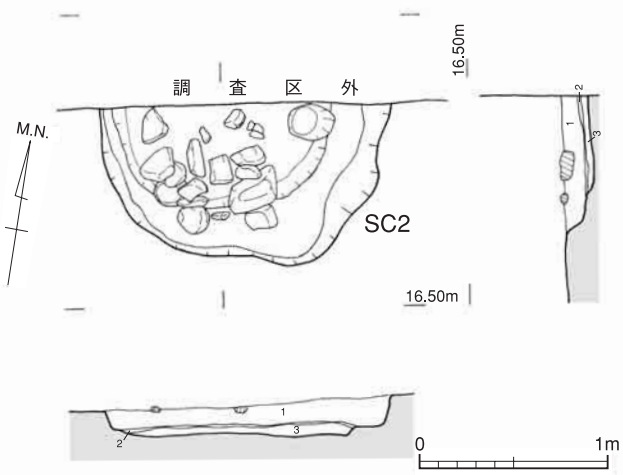


第68図　山口遺跡第２地点　１号（314～321）・４号（322）土坑出土土器実測図（Ｓ＝1／3）

２号土坑（ＳＣ２：第69図）

調査区北側の１６号住居跡北西Ｄ３グリッドから検出された。遺構の北半分は調査区域外であり、約２分の１の検出であった。正確な平面形態は不明であるが、およそ直径約1.55ｍの円形と推測される。検出面の深さは約18㎝である。埋土を観察すると、遺物は第３層の灰黄褐色土層から土器片が少量検出されている。323は口縁部が直線的に伸びる土師器の甕である。324は口縁部が直線的に伸びる高坏である。



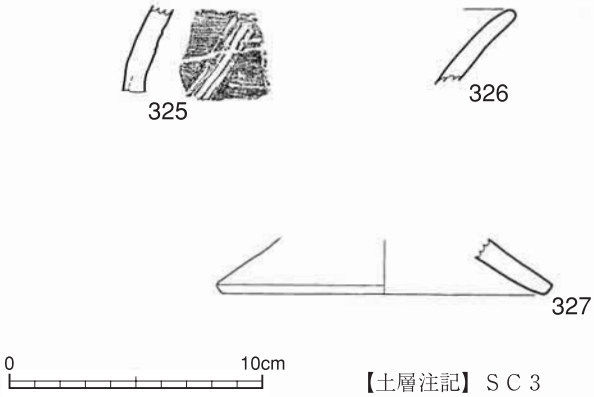


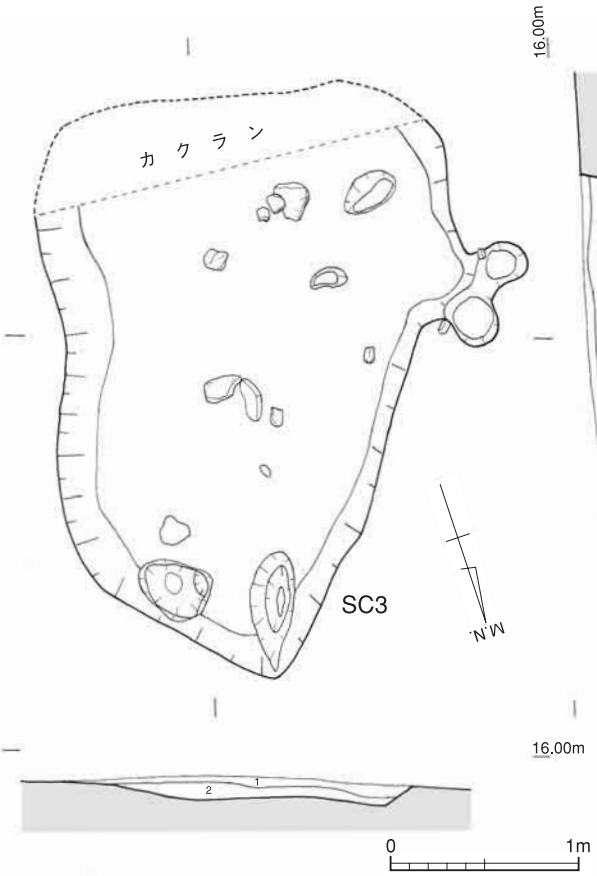
【土層注記】ＳＣ２
１：にぶい褐色土（10YR5/4）しまった砂質土。粘性なし。耕作土。
２：明黄褐色土（10YR6/6）砂質土。氾濫土。遺物なし。
３：灰黄褐色土（10YR5/2）やや粘性のある砂質土。２層が40％混じる。土器が出土。

第69図　山口遺跡第２地点　２号土坑実測図（Ｓ＝1／40）及び出土土器実測図（Ｓ＝1／3）

３号土坑（ＳＣ３：第70図）

調査区北側の３３号住居跡を切る形でＤ4グリッドから検出された。長軸約3.08ｍ・短軸約1.80ｍの不定形で、検出面の深さは約10㎝である。埋土を観察すると、遺物は第２層のにぶい黄褐色土層から土器片が少量検出された。325は壺の肩部片で横方向のナデ後に斜方向の沈線文を残す。326・327は高坏である。326は口縁部が直線的に伸びるもので、327は直線的に開く裾部である。





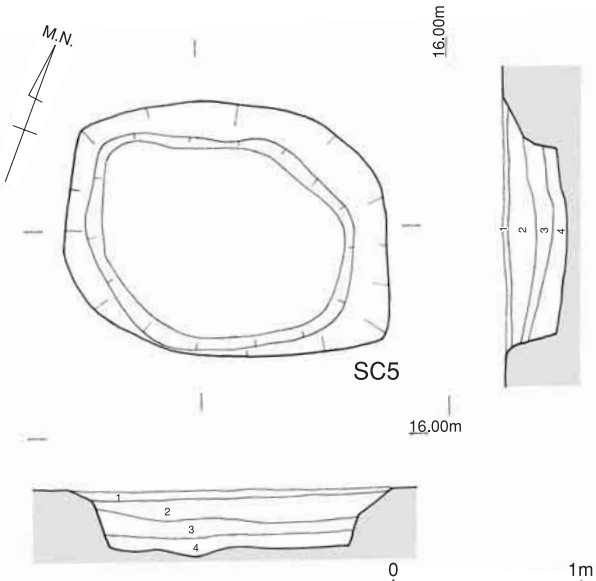
【土層注記】ＳＣ３
１：褐灰色土（10YR4/1）しまりがあり、粘性強い。マンガン・鉄分を微量含む。
２：にぶい黄橙色土（10YR4/3）しまりはないが、粘性ややあり。

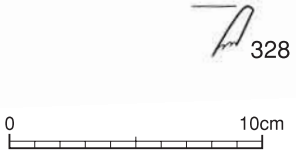
第70図　３号土坑実測図（Ｓ＝1／40）及び出土土器実測図（Ｓ＝1／3）

５号土坑（ＳＣ５：第71図）

調査区中央東よりの３７号住居跡の東側Ｃ３グリッドから検出された。長軸約1.70ｍ・短軸約1.33ｍの楕円形で、検出面の深さは約32㎝である。埋土を観察すると、遺物は第２層の褐色土層から土器片が少量検出された。

328は、口縁部が外反しながら直線的に伸びる土師器の甕である。





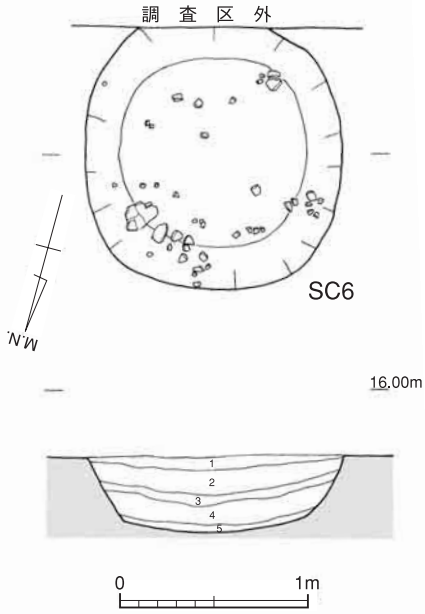
【土層注記】ＳＣ５
１：褐色土（10YR4/4）しまりがややあり、粘性があり。炭化物を少量含む。
２：褐色土（10YR4/4）しまりがややあり、粘性ややあり。炭化物を多量に含む。
３：黄褐色土（10YR5/6）しまりがややあり、砂質土。炭化物を少量含む。
４：黄褐色土（10YR6/5）しまりがややあり、砂質土状。

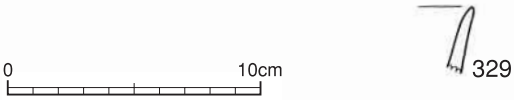
第71図　山口遺跡第２地点　５号土坑実測図（Ｓ＝1／40）及び出土土器実測図（Ｓ＝1／3）

６号土坑（ＳＣ６：第72図）

調査区南側の７号住居跡の東側Ｂ３グリッドから検出された。長軸約1.45ｍ・短軸約1.35ｍの円形で、検出面の深さは約40㎝である。埋土を観察すると、遺物は第５層の黒褐色土層から土器片が少量検出された。

329は、口縁部が直線的に伸びる土師器の甕である。口縁端部が先細りする。





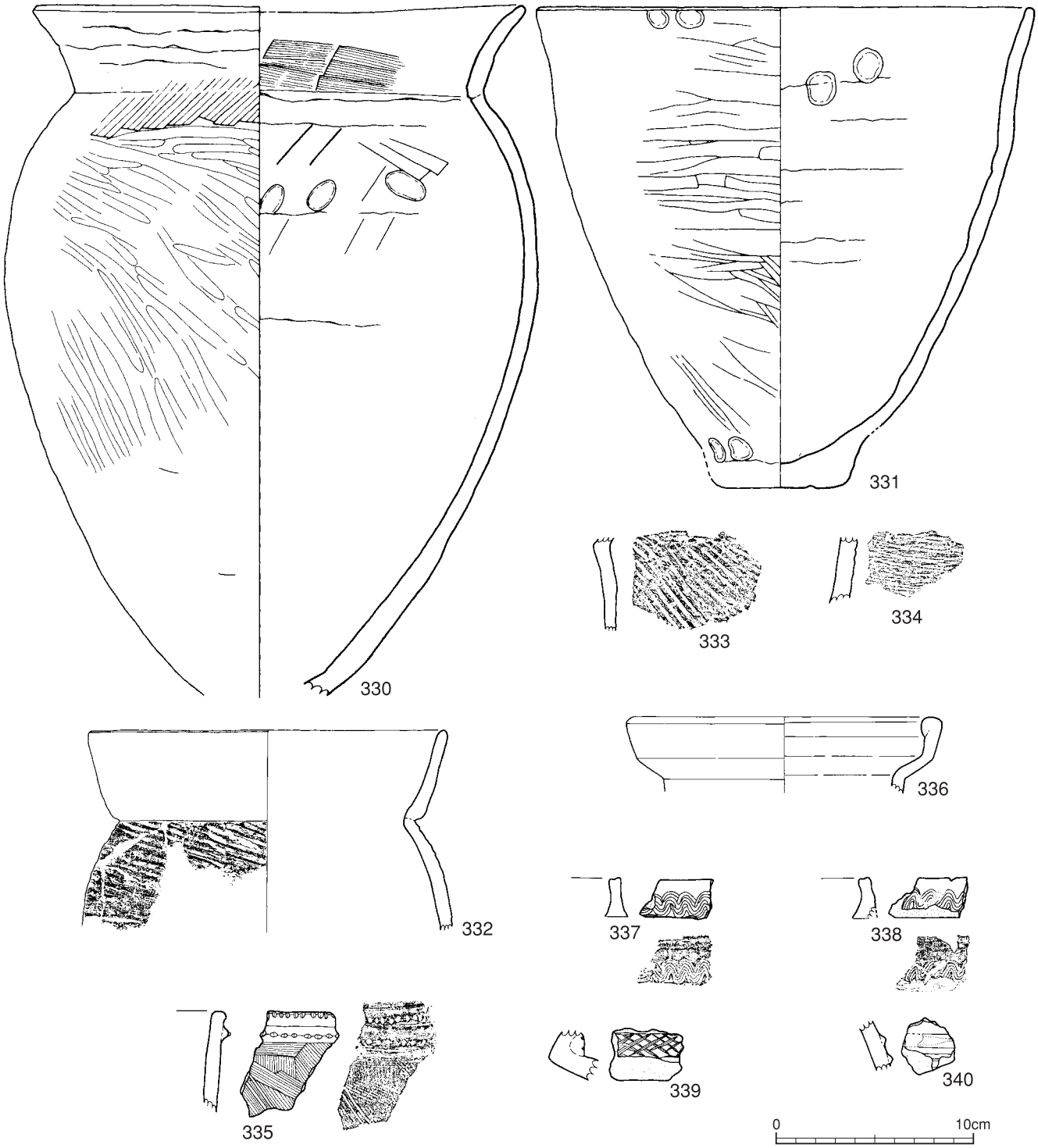
【土層注記】ＳＣ６
１：黒褐色土（10YR2/2）焼土。砂質で炭化物を含む。
２：にぶい黄橙色土（10YR6/4）砂質で粘性なし。
３：黒褐色土（10YR3/1）焼土。
４：にぶい黄褐色土（10YR5/4）砂質で若干粘性あり。
５：黒褐色土（10YR3/1）焼土。

第72図　山口遺跡第２地点　６号土坑実測図（Ｓ＝1／40）及び出土土器実測図（Ｓ＝1／3）

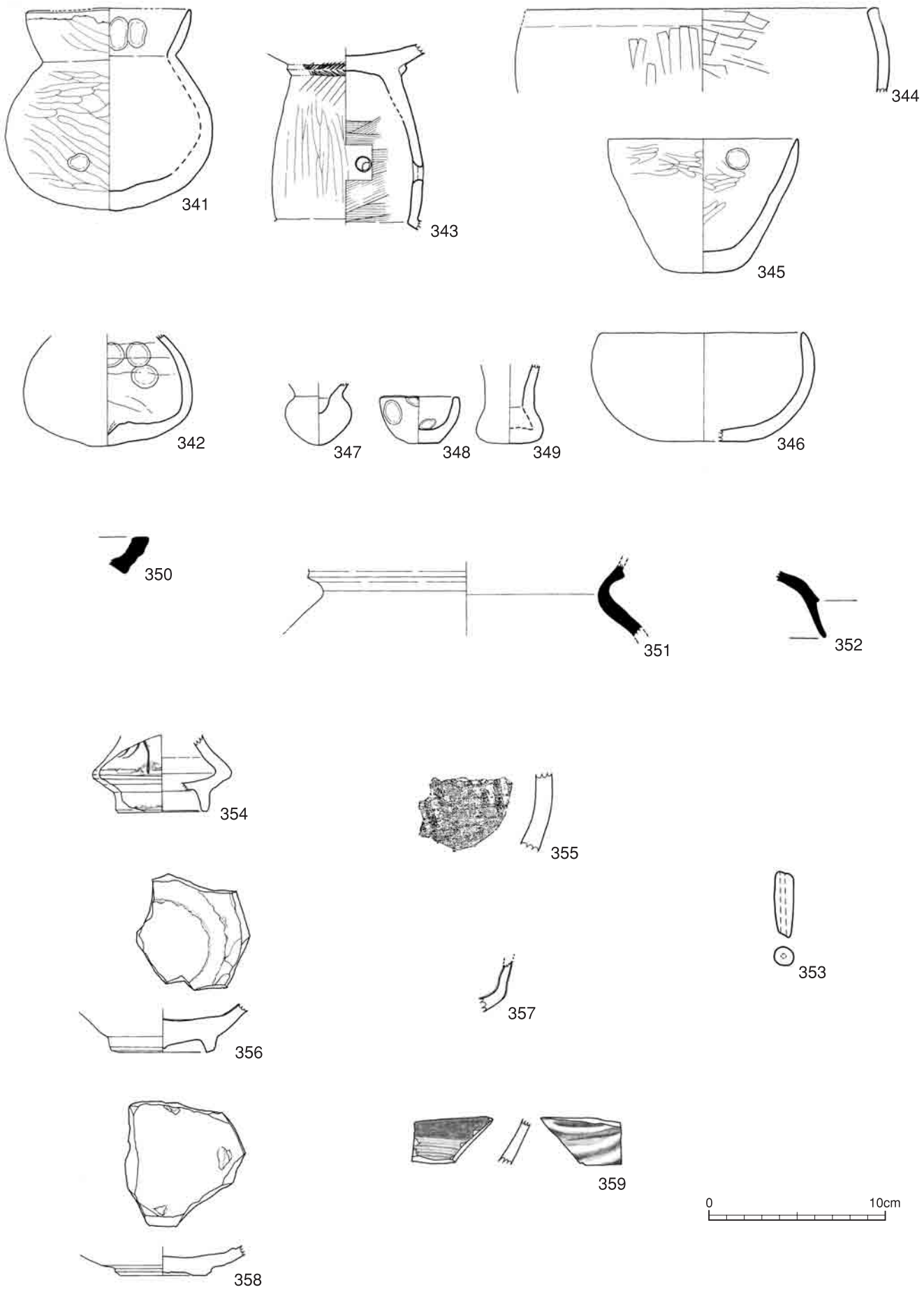
（４）包含層出土の遺物（第73図～第74図）

330～334は土師器の甕である。甕は口縁部が外方に開き、口縁端部がやや外反するもの（330）、平底の底部を有し、口縁部で最大径を測るもの（331）、口縁部が「くの字」状に屈曲し内湾するもの（332）がある。332・333・334は外器面にタタキが施されている。335は口唇端部と口縁部下の１条の三角状の貼付突帯上に連続刻目文を施す下城式系の甕の口縁部である。336～342は土師器の壺である。336～338は複合口縁を呈する。口縁部外面に山形に近い櫛描波状文を施しているもの（337・338）、頸部に格子目状突帯を施しているもの（339）、胴部に貼付突帯を施しているもの（340）がある。341・342は小型の丸底壺で341は外器面にミガキが一部施されている。343は高坏の脚部であり、内湾しながら立ち上がる

裾部とエンタシス状に近い直立気味の脚柱部をもつ。脚柱中央部に円形透かしを４カ所施し、坏部と脚柱部の境に刻目突帯を施している。344・345は土師器の鉢である。口縁部が内湾し口縁端部が丸みをもつもの（344）、口縁端部が先細りになるもの（345）がある。346は口縁部が内湾し口縁端部が先細りする埦である。347～349は手捏ねのミニチュア土器である。須恵器は甕、壺、坏身が出土している。甕は口縁部が外反し、口縁端部を平坦に仕上げている（350）。壺は口縁部外面に突帯を設けており、器面調整は内外面とも回転ナデである（351）。坏蓋はＴＫ47期平行とみられる（352）。353は土錘である。354～359は陶磁器である。354は壺、355は甕、356・357は碗、358・359は皿である。



第73図　山口遺跡第２地点　包含層出土土器実測図（１）（Ｓ＝1／3）



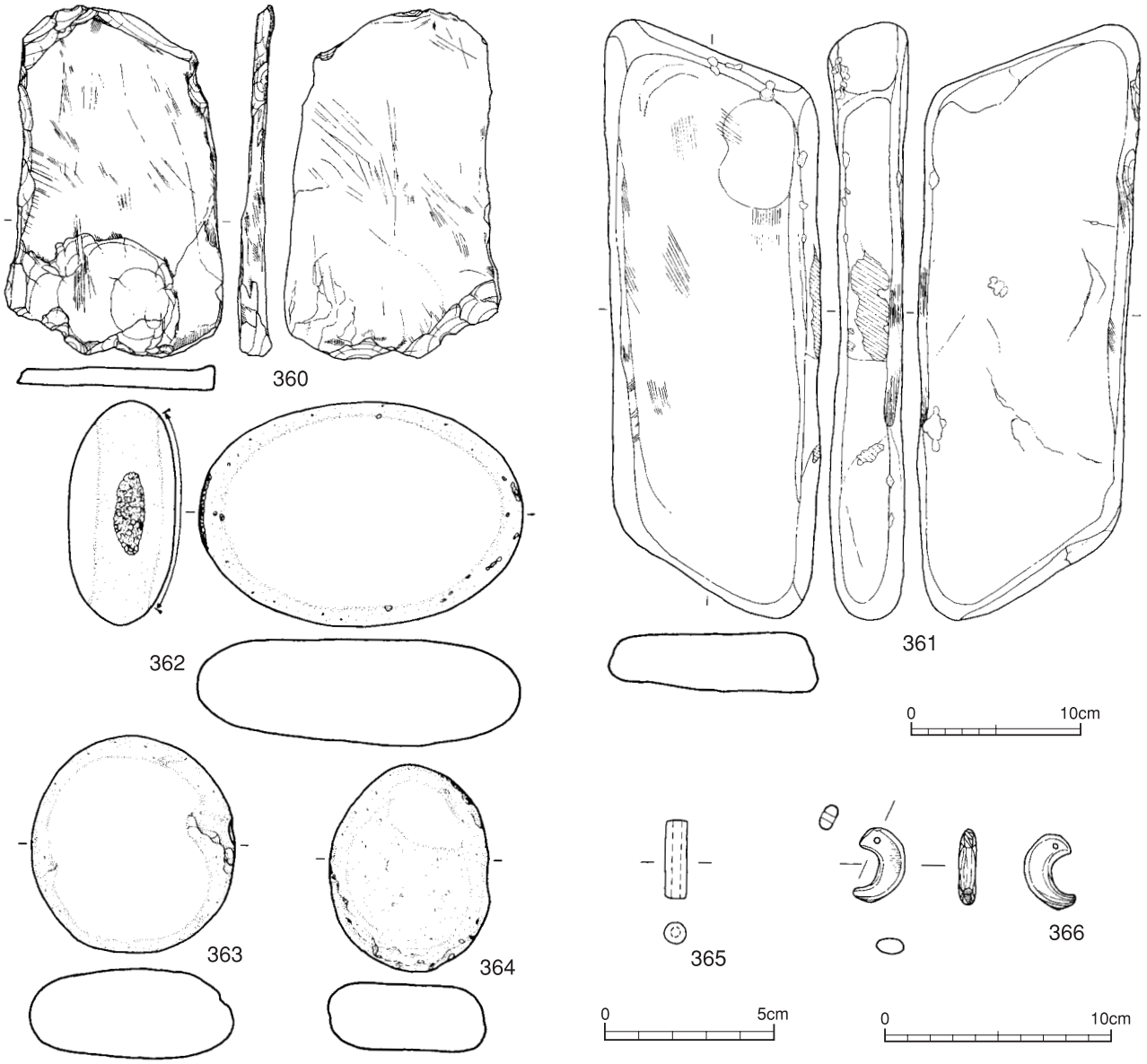
第74図　山口遺跡第２地点　包含層出土土器実測図（２）（S＝1／3）

第２節　石器・鉄製品

１　石器（第75図）

包含層から出土した石器は少なく、第75図に記載したものがほとんどである。石器の使用された時期については特定できないので一括して記述したい。

360は板状砥石である。自然礫をほとんど加工せずに砥石に転用したと考える。使用石材は頁岩である。研磨面は表裏の２面で平坦状のものである。361は台石状砥石である。大振りな礫を利用した砥石である。大型で据え置いて利用したと考えられる。使用石材は砂岩で変則的な４面の研磨面をもつ。各研磨面は皿状に窪んでいる。362～364は磨石である。砂岩の扁平な礫を用いる。表裏一面に磨痕がみられ、周縁には敲打痕が認められる。365は石製の管玉である。石材は蛇紋岩で１点のみの出土である。両端より穿孔している。366は石製の勾玉である。本遺跡では勾玉が２点出土した。石材は蛇紋岩でＣ字状に湾曲する形状で、頭部に両側より径２㎜の穿孔を施している。



第75図　山口遺跡第２地点　石器実測図（360．362～364…1／2，361…1／4，365・366…1／3）

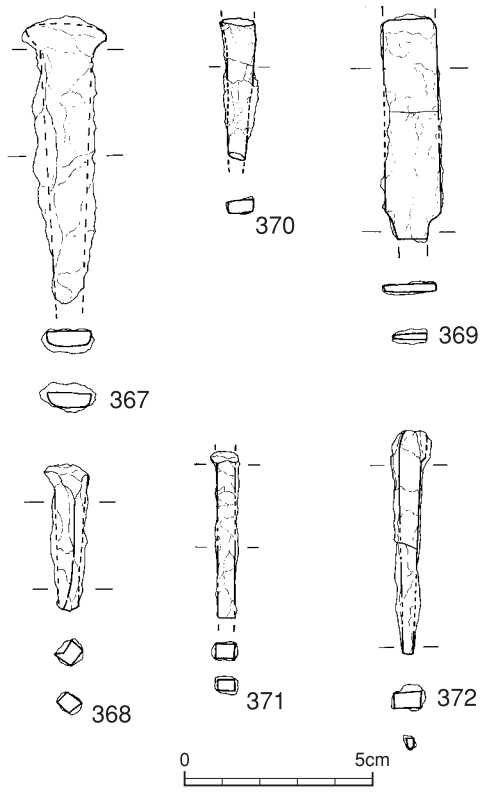
2　鉄製品（第76図）

包含層から出土した鉄器は少なく、第76図に記載したものがほとんどである。鉄製品の使用された時期については特定できないので一括して述べる。

367・368は頭部先端が折り曲げられた断面方・長方形の釘状の鉄製品である。錆のため亀裂が著しい。370・371・372は鉄鏃の箆被ぎ片と思われる。まだ接合する可能性もあるが現状では困難であった。いずれも錆化が著しい。現存長は次の通りである。370は3.52㎝、371は4.23㎝、372は5.92㎝。369は断面の形状が偏平であるが、器種は不明である。

第２表　鉄製品計測表

遺物番号	器　種	出土地点	最大厚(㎝)	最大長(㎝)	最大幅(㎝)	重量(グラム)	備　　考
62	鉄鏃身部	SA28	0.10	3.60	1.80	2.9	
187	鉄刀子	SA11	0.45	11.80	1.50	10.6	
188	鉄刀子	SA11	0.20	2.15	1.20	1.4	
275	鉄鏃身部	SA35	0.20	4.95	1.60	3.9	
309	剣(短剣)	SA37	0.40	14.80	2.80	40.4	
310	不明	SA37	0.25	4.70	1.15	4.3	
367	鉄製品	トレンチ3	0.40	7.60	2.20	19.0	
368	鉄製品	Ⅴ層上	0.65	3.90	1.15	5.2	
369	不明	Ⅴ層上	0.25	6.00	1.60	7.7	
370	鉄鏃箆被ぎ片	2層中位	0.50	3.52	1.05	4.9	
371	鉄鏃箆被ぎ片	Ⅴ層	0.40	4.23	0.90	3.8	
372	鉄鏃箆被ぎ片	Ⅴ層上	0.40	5.92	0.70	3.9	



第76図　鉄製品実測図（Ｓ＝1／2）

第３表　石器計測表

遺物番号	器　種	出土地点	最大厚(cm)	最大長(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	石　材	備　　考
11	磨　石	SA1	4.70	10.40	10.50	751.8	砂　岩	
12	磨　石	SA1	3.75	8.00	7.50	325.2	砂　岩	
106	磨　石	SA3	6.40	11.30	9.00	1,054.7	砂　岩	敲打痕あり
107	砥　石	SA3	3.00	18.35	7.85	589.9	砂　岩	
108	砥　石	SA3	11.40	41.90	24.40	14,300.0	砂　岩	
109	砥　石	SA3	9.80	36.00	20.25	10,500.0	砂　岩	
110	勾　玉	SA21	0.40	1.80	0.90	0.7	蛇紋岩	穿孔あり
135	磨　石	SA5	6.45	10.20	10.35	957.2	砂　岩	敲打痕あり
152	板状砥石	SA8	2.05	14.70	6.10	310.3	頁　岩	
153	磨製石斧	SA8	2.10	17.00	8.45	482.5	砂　岩	研磨痕あり
186	砥　石	SA11	13.10	31.80	18.30	11,300.0	頁　岩	敲打痕あり
193	石包丁	SA17	0.40	3.80	5.90	10.9	頁　岩	
272	石包丁	SA35	1.13	8.40	4.60	52.4	頁　岩	
273	磨　石	SA35	3.35	7.70	6.50	250.3	凝灰岩	敲打痕あり
274	磨　石	SA35	3.25	6.70	6.40	192.9	凝灰岩	敲打痕あり
293	敲　石	SA36	4.20	14.70	5.80	569.9	砂　岩	敲打痕あり
360	板状砥石	山口(2) 2-SA	1.10	15.55	9.65	235.8	頁　岩	
361	台石状砥石	C-2	3.55	35.00	12.30	3,200.0	砂　岩	
362	磨　石	C-2	9.95	14.25	4.70	983.0	砂　岩	敲打痕・磨痕あり
363	磨　石	C-2	4.00	9.70	9.00	523.7	砂　岩	敲打痕・磨痕あり
364	磨　石	C-2	2.00	9.20	7.10	306.0	砂　岩	敲打痕・磨痕あり
365	管　玉	C-2	0.50	1.75	0.50	0.8	蛇紋岩	穿孔あり
366	勾　玉	包含層	0.45	1.70	1.05	0.6	蛇紋岩	穿孔あり

第４表　山口遺跡第２地点　出土土器観察表（１）

遺物番号	種別	出土地点	器種	部　位	(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外　面	内　面	色　調 外　面	内　面	胎土の特徴	備　考
1	土師器	SA1	高坏	坏部	推定22.5			横方向のナデ・ミガキ、丁寧なナデ	横・斜方向のナデ、ナデ	にぶい橙 橙	にぶい橙 黄灰	7mm以下の灰・乳白・灰白・茶色粒を含む	風化気味
2	土師器	SA1	高坏	坏部	推定17.9			ナデ、横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい橙 橙	橙	6mm以下の灰・橙色粒、3mm以下の灰白・乳白・茶色粒を含む	
3	土師器	SA1	高坏	坏部	推定14.8			ナデ、横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい黄橙 橙	橙 にぶい黄橙	4mm以下の灰・乳白・にぶい赤褐色粒を含む	
4	土師器	SA1	高坏	脚部				横方向のナデ、縦方向のナデ	縦・横方向のナデ	橙	橙 にぶい橙	7mm以下の褐灰粒、5mm以下の灰白粒、1mm以下の黒褐粒を含む	
5	土師器	SA1	高坏	脚部～裾部		12.8		丁寧なナデ、横・斜方向のナデ	横・斜方向のナデ、ナデ	橙 黒褐	橙 黒褐	11mm以下の灰白粒、6mm以下の赤褐粒、1mm以下の黒褐粒、微細な透明光沢粒を含む	部分的に黒変
6	土師器	SA1	高坏	脚部～裾部		推定10.7		ナデ	ナデ	橙	橙	3mm以下の灰白・灰褐・茶褐色粒、1mm以下の金色粒を含む	全体的に黒変
7	土師器	SA1	鉢	口縁部～底部	13.9		8.7	横ナデ、丁寧なナデ	横ナデ、ナデ	橙 黒褐	にぶい黄橙	5mm以下の灰白・灰褐色粒、2mm以下の黒色光沢粒を含む	黒変 平底
8	須恵器	SA1	甕	体部				横ナデの後タタキ	同心円当具痕の後ナデ	黄灰	黄灰	2mm以下の乳白色粒、1mm以下の黒褐色粒を含む	
9	須恵器	SA1	甕	体部				タタキ	同心円当具痕	灰	黄灰	2mm以下の乳白色粒、1mm以下の灰褐色粒を含む	
10	須恵器	SA1	坏	底部				回転ナデ	回転ナデ	暗灰黄	黄灰	2mm以下の乳白・黒褐・灰褐色粒を含む	
13	土師器	SA13	甕	口縁部～底部	20.2		24.2	横ナデ、一部スス付着、工具による調整の後指ナデ	横ナデ、ナデ、炭化物付着	にぶい黄橙 明褐	にぶい橙	7mm以下の灰褐色粒、5mm以下の黒褐色粒、3mm以下の褐色粒、2mm以下の柱状黒色光沢粒、1mm以下の透明光沢粒を含む	
14	土師器	SA13	甕	口縁部～胴部	推定16.8			ナデ、スス付着	ナデ	にぶい褐	にぶい橙	3mm以下の褐・黒褐・灰褐色粒、2mm以下の柱状黒色光沢粒、透明光沢粒を含む	
15	土師器	SA13	甕	口縁部～胴部	推定23.3			横ナデ、スス付着、横・斜方向の工具ナデ、指頭痕	斜方向の工具ナデ、横ナデ、ナデ、指頭痕	暗褐	にぶい橙	6mm以下の褐色粒、5mm以下の赤褐色粒、3mm以下の乳白色粒、1mm以下の透明光沢粒を含む	黒斑（内面）
16	土師器	SA13	甕	口縁部				ススと鉄成分付着、斜方向の工具ナデ	斜方向の指ナデ、ナデ	にぶい褐	にぶい橙 にぶい黄橙	2.5mm以下の橙・乳白色粒、微細な透明光沢粒を含む	
17	土師器	SA13	甕	口縁部～底部	推定14.3		12.2	スス付着、指頭痕、横方向のナデ、ナデ	横方向のナデ、一部工具痕、指頭痕、ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙 灰黄褐	7mm以下の褐灰、黒褐粒、４mm以下の灰白、にぶい赤褐粒、１mm以下の柱状黒色光沢粒を含む	風化気味
18	土師器	SA13	甕	口縁部～胴部	推定19			スス付着、横方向のナデ、鉄の成分付着、縦方向のナデ	工具による横方向のナデ、ナデ	橙 にぶい黄橙	橙 灰黄褐	8mm以下の明褐灰、4mm以下の赤褐粒、2mm以下の柱状黒色光沢粒・透明光沢粒を含む	
19	土師器	SA13	甕	口縁部～頸部	推定14.6			スス付着、斜方向の工具ナデ	横ナデ、指ナデ	にぶい黄	にぶい黄 黄灰	3.5mm以下の赤褐色粒、2mm以下の黒・白・褐色粒を含む	
20	土師器	SA13	甕	胴部				横・斜方向の工具によるナデ、スス付着	ナデ	灰褐 黒褐	にぶい橙 にぶい黄橙	8mm以下の褐・灰褐色粒、6mm以下の灰白色粒、3mm以下の黒褐・浅黄・柱状黒色光沢粒、微細な透明光沢粒を含む	
21	土師器	SA13	甕	底部		5.2		ナデ、斜方向のハケ目	粗いナデ	にぶい黄橙	灰白 にぶい橙	7mm以下の褐・灰色粒、4mm以下の灰・灰白・褐・乳白色粒を含む	
22	土師器	SA13	甕	胴部～底部		4.2		縦方向のハケ目、ナデ	斜方向のナデ、指ナデ	にぶい黄橙 にぶい橙	橙 にぶい黄橙	6mm以下の褐色粒、4mm以下の灰・灰白・褐色粒、1mm以下の灰・茶・乳白色粒を含む	
23	土師器	SA13	甕	底部		4.0～4.8		粗いナデ、ナデ	ナデ、指頭痕	橙 にぶい黄橙 黄灰	にぶい橙	9mm以下の褐灰色粒、5mm以下の灰白・明赤褐色粒、3mm以下の灰黄・褐灰・灰白・橙・黒色光沢・透明光沢を含む	
24	土師器	SA13	甕	胴部～底部		2.4～3.0		ハケ目、ナデ	ハケ目、ナデ	浅黄橙 にぶい黄橙	にぶい橙	4mm以下の灰白色粒、3.5mm以下の灰白・赤褐・灰褐・黒褐・灰・黒色光沢粒を含む	
25	土師器	SA13	甕	底部		推定5.5		粗いナデ	斜・横方向のナデ	にぶい黄橙 灰黄褐	にぶい黄橙	3mm以下の褐・灰白色粒、1mm以下の透明・黒色光沢粒を含む	黒変 木の葉底
26	土師器	SA13	壺	口縁部～底部	推定9.0	5.9	15.1	ナデ、ハケ目、指頭痕	指ナデ、指頭痕	橙 にぶい黄橙	橙	6mm以下の灰褐色粒、4mm以下の灰白・黒褐・灰褐・にぶい赤褐色粒を含む	
27	土師器	SA13	高坏	坏部～裾部	21.7	16.6	17.8	横方向のナデ、ナデ	横方向のナデ	にぶい橙 橙 黒	にぶい橙	6mm以下の赤褐色粒、5mm以下の灰白色粒、3mm以下の黒色光沢粒、微細な透明光沢粒を含む	一部黒変 風化気味
28	土師器	SA13	高坏	坏部～裾部	16.6	14.6	14.3	横方向のナデ、ナデ、指頭痕	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	6mm以下の茶褐色粒、2mm以下の黒色光沢粒、1mm以下の茶褐・黒褐色粒を含む	
29	土師器	SA13	高坏	坏部	推定21.2			横方向のナデ、丁寧なナデ、黒変	横方向のナデ、ナデ	にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい橙 にぶい黄橙	5mm以下の褐灰白色粒、2mm以下の褐・灰白・黒・乳白・黒色光沢粒・微細な褐色粒を含む	外面は全体的に風化気味
30	土師器	SA13	高坏	坏部～裾部		12.4	12.7	横方向のナデ、ナデ	横方向のナデ、ナデ	黄橙	橙	5mm以下の茶褐・灰褐・灰白色粒を含む	裾部に一部黒変
31	土師器	SA13	高坏	坏部	推定16.4			横方向のナデ、丁寧なナデ、黒変	横方向のナデ、ナデ	にぶい橙	にぶい橙 にぶい黄橙	5mm以下の褐色粒、3mm以下の灰・乳白色粒、1mm以下の透明光沢・黒色光沢粒を含む	内外面は風化気味
32	土師器	SA13	高坏	脚部～裾部		15.1		横方向のナデ、一部にミガキ	横方向のナデ、一部縦方向のナデ	にぶい橙	橙	9mm以下の褐灰色粒、6mm以下の灰褐色粒、3mm以下の灰白色粒、1mm以下の黒色粒、微細な透明光沢粒を含む	全体的に風化
33	土師器	SA13	鉢	口縁部～底部	推定10.8	5.9	7.3	縦・斜方向にミガキ、横方向にナデ、ナデ	横方向ハケ目、ナデ、底部中心から縦方向に工具痕、縦・斜方向にナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	8mm以下の褐灰色粒、2.5mm以下の柱状黒色光沢粒、1mm以下の灰白・褐色粒を含む	全体的に風化
34	土師器	SA2	甕	口縁部～底部	推定12.4	5.1	14.7	ハケ目の後ナデ、スス付着、ミガキの後ナデ、ナデ	ナデ、指ナデ	にぶい橙	にぶい橙	10mm以下のにぶい赤褐色粒、5mm以下の橙・灰白・褐灰・明赤褐・灰黄褐・黒色粒を含む	底部風化気味
35	土師器	SA2	甕	口縁部				ナデ、沈線	ナデ	橙・黒褐	にぶい橙	5mm以下の赤褐色粒、4mm以下の灰褐色粒、1mm以下の透明光沢粒を含む	黒変
36	土師器	SA2	甕	口縁部				横方向のナデ	ナデ、横方向のナデ	にぶい橙	にぶい橙	4mm以下の赤褐色粒、3mm以下の灰白色粒、2mm以下の黒色光沢粒を含む	
37	土師器	SA2	甕	口縁部～頸部				全体的に粗いスス付着、斜・横方向にナデ、凸凹あり	横・斜方向にナデ	にぶい黄橙	灰黄	3mm以下の黒褐色粒、1mm以下の灰白・赤色粒・微細な黒色光沢粒を含む	風化一部黒変
38	土師器	SA2	甕	口縁部				スス付着、斜・横方向にナデ、部分的に指頭痕	横方向にナデた後に指押さえ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の褐灰・褐色粒、2mm以下の黒色光沢粒を含む	全体的風化

第５表　山口遺跡第２地点　出土土器観察表（２）

遺物番号	種別	出土地点	器種	部　位	(cm)			手法・調整・文様ほか		色　調		胎土の特徴	備　考
					口径	底径	器高	外　面	内　面	外　面	内　面		
39	土師器	SA2	甕	口縁部				横ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	2mm以下の赤褐・明褐灰粒を含む	
40	土師器	SA2	甕	口縁				横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい橙	橙	3mm以下の赤褐・褐色粒、1mm以下の黒色光沢・乳白・灰色粒を含む	
41	土師器	SA2	甕	口縁部				横方向のナデ	横・斜め方向のナデ	にぶい橙 黒	にぶい黄橙	5mm以下の茶褐色粒、4mm以下の乳白色粒、3mm以下の黒褐・黒色光沢粒を含む	黒変
42	土師器	SA2	甕	口縁部				ナデ	ナデ	にぶい黄橙 黒褐	橙	2mm以下の茶褐・灰褐色粒を含む	
43	土師器	SA2	甕	胴部～底部付近				ミガキ	工具ナデ	にぶい黄橙 黒褐	橙	5mm以下の茶褐・灰褐色粒、2mm以下の茶褐・灰褐色粒を含む	
44	土師器	SA2	甕	口縁部				タタキ	斜・横方向のハケ目	にぶい橙	にぶい黄橙	3mm以下の灰白粒、2mm以下の灰褐・黒色光沢粒を含む	
45	土師器	SA2	甕	底部		5.2		タタキ、ナデ	ナデ	灰	灰	6mm以下の灰白・灰褐・茶褐色粒を含む	
46	土師器	SA2	甕	胴部～底部		推定 7.4		縦方向のナデ、ナデ	ナデ	橙	灰褐	3mm以下の灰褐・茶褐色粒を含む	黒変か？
47	土師器	SA2	甕	底部		推定 5.9		ナデ、底部付近指押さえ	横・斜め方向のナデ、工具痕がみられる	橙	にぶい黄橙	4mm以下の黒色光沢粒・黄褐色粒を含む	木の葉底
48	土師器	SA2	壺	口縁部～頸部	推定 14			横方向のナデ、刻み目突帯、横方向にナデた後に斜方向に工具痕	ナデ、横方向にナデ	橙	橙	5mm以下の灰褐・橙色粒、2mm以下の褐灰色粒、1mm以下の黒・灰白色粒を含む	風化
49	土師器	SA2	壺	頸部				横方向にハケ目？ナデ？（横方向）	横方向にハケ目？ナデ？（横方向）	褐	褐	1mm以下の赤褐色粒を含む	
50	土師器	SA2	壺	頸部				斜方向の沈線	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄	7mm以下の赤褐色粒、3mm以下の灰白・黒色粒を含む	
51	土師器	SA2	壺	頸部～底部		3.2		不定方向に工具によるナデ、穿孔、縦方向にナデ、ナデ、指頭痕、不定方向にタタキ	ナデ、粘土のしぼり	黒	暗灰	4mm以下の褐灰色粒、2mm以下の黒褐・灰白粒、微細な黒色光沢粒を含む	
52	土師器	SA2	鉢	口縁部				ナデ	ハケ目	浅黄	淡黄	2mm以下の茶褐・灰褐色粒を含む	
53	土師器	SA2	高坏	口縁部～坏部	推定 17.5			ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	4.5mm以下の灰白・にぶい橙・灰褐・赤褐・灰黄・透明光沢・黒色光沢粒を含む	
54	土師器	SA2	高坏	裾部		推定 11.8		ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	9mm以下のにぶい赤褐色粒、5mm以下のにぶい褐・灰褐・灰白・橙・透明光沢・黒色光沢粒を含む	
55	土師器	SA2	高坏	坏部	推定 15.4			横方向のナデ、ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の黒色光沢・乳白・褐・灰色粒、1mm以下の透明光沢粒を含む	
56	土師器	SA28	甕	口縁部				ナデ、ケズリ？	横方向のナデ、一部黒斑	にぶい黄橙 黒褐	にぶい黄橙	3mm以下の褐灰色粒、2mm以下の赤褐色粒、微細な透明光沢粒を含む	
57	土師器	SA28	甕	頸部～底部		2.8		横ナデ、斜方向の工具ナデ、ナデ、凹凸あり	ナデ	橙	橙	7mm以下の灰白・茶褐・灰褐色粒を含む	黒変
58	土師器	SA28	甕	底部		推定 5.5		工具痕あり	縦方向に工具ナデ	にぶい黄橙	灰白	3mm以下の灰褐・にぶい黄橙色粒、微細な黒色光沢粒を含む	木の葉底 一部黒変
59	土師器	SA28	壺	口縁部～頸部	推定 12.0			ナデ、横方向の工具ナデ、やや斜方向の工具ナデ、格子目状、突帯	ナデ、横方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の灰白・褐・乳白色粒、1mm以下の黒色光沢粒を含む	
60	土師器	SA28	高坏	坏部				ナデ	横方向のナデ、ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	5mm以下の赤茶色粒、3mm以下の黒色粒、2mm以下の灰白色粒、1.5mm以下の黒色光沢粒を含む	
61	土師器	SA28	高坏	坏部				横方向のナデ、ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	5mm以下の褐色粒、3mm以下の灰白・乳白色粒、1mm以下の黒色光沢粒を含む	風化気味
63	土師器	SA3	甕	口縁部～底部	19.2		27.4	ミガキ、斜・横・縦方向の工具によるナデの後ナデ、スス付着	スス付着、斜方向の工具ナデの後ナデ。指頭痕。炭化物付着か。	にぶい橙	にぶい黄橙 赤 暗赤灰	5mm以下の灰白・にぶい橙・褐灰・黒色粒を含む	
64	土師器	SA3	甕	口縁部～底部	19.2	5.0	25.6	横方向のナデ、スス付着、横及び斜方向に工具ナデ、縦方向の工具によるナデ、横方向に粗いナデ	横方向のナデ、横及び斜方向のナデ、不定方向にナデ、炭化物付着、指押さえあり	橙	橙	5mm以下の褐灰色粒、3mm以下の黒褐・灰白・暗赤褐色粒、1mm以下の黒色光沢粒を含む	木の葉底 風化
65	土師器	SA3	甕	口縁部～胴部	推定 21.7			スス付着、横方向のナデ、工具による斜方向の粗いナデ	横方向のナデ、斜方向のナデ、指頭痕	にぶい橙	にぶい褐	5mm以下の赤茶色粒、3mm以下の褐灰色粒、2mm以下の黒色光沢粒、繊細な透明光沢粒を含む	一部黒変
66	土師器	SA3	甕	頸部～底部		5.0		斜方向の工具ナデ、スス付着、指頭痕、横方向及び縦方向に工具によるナデ、ナデ、ミガキ	ナデ、横方向にナデ、指頭痕、縦方向に工具によるナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	8mm以下の褐灰色粒、5mm以下の灰色粒、2mm以下の灰白・柱状黒色光沢粒を含む	黒変
67	土師器	SA3	甕	口縁部～底部	推定 15.4	推定 5.7	19.1	横方向のナデ、ミガキ、斜・横方向の工具ナデ、縦方向の工具ナデ	横方向のナデ、斜方向のナデ、指頭痕	橙	橙	5mm以下の灰白色粒、4.5mm以下の褐灰色粒、1mm以下の柱状黒色光沢粒を含む	木の葉底 風化、黒変
68	土師器	SA3	甕	口縁部～胴部	推定 8.1			斜方向の工具による粗いナデ、斜方向の工具による圧痕あり、指おさえ	斜方向のナデ・指おさえ	黒褐	黒褐	5mm以下の灰白・茶褐色粒、3mm以下の黒色光沢粒、微細な透明光沢粒を含む	風化気味
69	土師器	SA3	甕	口縁部				斜方向にハケ目	横ナデ、ハケ目の後にナデ、斜方向にハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の暗赤褐色粒、1mm以下の灰白・黒色粒を含む	黒変

第６表　山口遺跡第２地点　出土土器観察表（３）

遺物番号	種別	出土地点	器種	部　位	(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外　面	内　面	色　調 外　面	内　面	胎土の特徴	備　考
70	土師器	SA3	甕	口縁部～底部	14.3	推定 9.1	13.8	横ナデ、不定方向にナデ、一部指頭痕、黒変部分あり、一部風化	工具による斜方向のナデ、不定方向の工具ナデ、斜方向の粗い工具ナデ、黒斑、黒変,指頭痕	にぶい黄橙	橙	4mm以下の灰褐・褐灰色粒、3mm以下の灰色粒、1mm以下のやや黄色味のある透明な鉱物粒、微細な黒色光沢粒を含む	黒変 黒斑
71	土師器	SA3	甕	口縁部～底部	14.20～14.45		17.9	斜方向の工具ナデ、縦方向の工具ナデ、ナデ	斜方向の工具ナデ、ナデ	にぶい橙	橙	5mm以下の褐色粒、3mm以下の灰白・乳白・金色光沢粒、1mm以下の黒色光沢粒を含む	黒変
72	土師器	SA3	甕	胴部～底部		4.2		工具によるナデの後ナデ、スス付着、指頭痕	ハケ目のあとナデ、ナデ	にぶい橙 橙	灰黄褐 褐灰	5mm以下の灰黄褐・褐灰・灰白・にぶい橙・褐・黒色光沢粒を含む	黒変
73	土師器	SA3	甕	頸部				粘土を貼り付けた後にハケ目？ナデ。その後に刻みを入れた後に指押さえか？　斜方向にナデかハケ目	横方向のナデかハケ目？、斜方向のナデかハケ目？	にぶい黄橙	浅黄橙	4mm以下の褐灰・黒色粒、3mm以下の灰褐色粒を含む	
74	土師器	SA3	甕	胴部～底部				縦方向の工具ナデの後に一部横方向に工具ナデ	内面に凹凸、指頭痕	橙	橙	7mm以下の褐灰・灰褐色粒、3mm以下の灰白色粒を含む	風化
75	土師器	SA3	甕	胴部～底部				工具による縦方向のナデ	タテ方向のナデ	にぶい黄橙 褐灰	にぶい黄橙	4mm以下の茶褐・黒褐色粒を含む	
76	土師器	SA3	甕	胴部～底部		6.3		縦方向にミガキ、工具ナデ	指でなであげている	にぶい黄橙 黒褐	にぶい黄橙 にぶい赤橙	2mm以下の茶褐・黒色光沢粒を含む	木の葉底
77	土師器	SA3	甕	底部		2.2		縦方向の工具ナデ	粗い工具ナデ	にぶい黄橙 灰黄褐	にぶい黄橙	5mm以下の乳白色粒、3mm以下の褐・灰色粒、1mm以下の黒色光沢粒、微細な金色光沢・透明光沢粒を含む	黒変
78	土師器	SA3	甕	底部		3.1		ナデ	ナデ？スス厚く付着	にぶい黄橙	黒褐	2.5mm以下の赤褐・褐灰色粒、1mm以下の灰・金色光沢・黒色光沢粒を含む	
79	土師器	SA3	甕	胴部～底部		5.0		ミガキ、ナデ	横ナデ	橙	橙	3.5mm以下の灰褐・茶褐色粒、2mm以下の黒色光沢粒を含む	一部黒変か？
80	土師器	SA3	甕	底部		推定 4.8		ナデ、工具ナデ、工具ナデの後ナデ	工具ナデの後ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	3mm以下の灰白・褐・乳白色粒、1mm以下のにぶい褐・灰・黒色光沢粒を含む	
81	土師器	SA3	甕	胴部～底部		推定 5.1		縦方向のナデ、ナデ、一部工具によるナデあり	ナデ、黒斑か？	にぶい橙	にぶい橙	3mm以下の灰白・茶褐・灰褐色粒を含む	木の葉底 黒変
82	土師器	SA3	壺	口縁部～底部	推定 12.1	2.2	29.7	横方向にナデ、指頭痕、縦方向にナデ、ミガキ	斜方向に工具ナデ、部分的に工具痕、横方向に工具ナデ、粗い仕上げ、指頭痕	にぶい黄橙	灰黄	5mm以下の灰白・灰褐・黒色粒・微細な黒色光沢粒を含む	黒変・風化
83	土師器	SA3	高坏	坏部～裾部	16.0	10.0	11.6	横方向にナデ、指頭痕	横方向にナデ、一部斜方向、指頭痕	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の灰白・褐灰色粒、微細な黒色光沢・金色で鱗片状の鉱物粒を含む	一部黒変 風化
84	土師器	SA3	高坏	坏部	推定 17			ナデ、横方向のナデ、一部工具ナデ？	横方向のナデ、工具痕、丁寧なナデ	にぶい黄橙 にぶい橙	にぶい黄橙	7mm以下の灰色粒、5mm以下の褐色粒、3mm以下の乳白粒、1mm以下の灰白・黒色光沢粒を含む	風化気味
85	土師器	SA3	高坏	坏部	18.3			横ナデ、指頭痕、スス		にぶい橙 にぶい黄橙	橙	4mm以下の灰黄・灰白色・黒色光沢粒を含む	黒変？
86	土師器	SA3	高坏	坏部	15.5			横ナデ（一部不定方向のナデ）	横方向のナデ	橙	橙	5.5mm以下の灰白・茶褐色粒、1.5mm以下の黒色光沢粒を含む	風化 一部黒変
87	土師器	SA3	高坏	坏部	15.6			横方向にナデ	横方向にナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	5mm以下の灰色の岩片、4mm以下の灰褐・黒・灰・赤褐色粒、2mm以下の灰白色粒を含む	風化
88	土師器	SA3	高坏	坏部	13.5			横方向のナデ、ナデ	横方法のナデ、ナデ	にぶい橙 黒褐	橙	3mm以下のにぶい橙・灰白・赤褐色粒、2mm以下の赤灰色粒、1mm以下の黒色光沢粒を含む	黒変
89	土師器	SA3	高坏	坏部	推定 16.8			丁寧な横ナデ、スス付着	丁寧なナデ	褐灰 にぶい黄橙 黒褐	浅黄橙 灰黄褐 褐灰	5mm以下のにぶい黄橙色粒、3mm以下のにぶい黄褐色粒、1mm以下の黒色光沢粒、微細な透明光沢粒を含む	部分的に黒変
90	土師器	SA3	高坏	坏部	19.4			丁寧な横ナデ、ナデ	丁寧な横ナデ、ナデ	にぶい黄橙 褐灰 黒	にぶい黄橙 褐灰 黒	4mm以下の明褐灰の純光沢粒、3mm以下の柱状黒色光沢粒、2mm以下の淡橙色粒を含む	黒斑（内外）
91	土師器	SA3	高坏	坏部	23.6			横方向のナデ（部分的に斜方向のナデ）、凸凹あり	横方向のナデ、斜方向のミガキ、丁寧なナデ	にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい橙 にぶい黄橙	5mm以下の褐・赤褐色粒、2mm以下の灰白・乳白色・黒色光沢粒、1mm以下の透明光沢粒を含む	黒変
92	土師器	SA3	高坏	坏部	推定 19.8			横ナデ	横ナデ、ナデ	橙	橙 褐灰	2mm以下の灰白・灰褐・茶褐色粒を含む	
93	土師器	SA3	高坏	坏部	推定 19.2			横ナデ	横ナデ、ナデ	橙	橙 褐灰	5mm以下の灰白・茶褐色粒を含む	
94	土師器	SA3	高坏	坏部	推定 18.8			横ナデ、ハケ目	横ナデ、ハケ目	浅黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の灰褐色粒、2mm以下の黒色粒、微細な柱状黒色光沢粒を含む	部分的に黒変
95	土師器	SA3	高坏	脚部～裾部		12.6		横方向にナデ、指頭痕	横方向にナデ、ケズリ	にぶい黄橙	灰黄	5mm以下の褐灰色粒、2.5mm以下の灰白・赤褐色粒、微細な黒色光沢粒を含む	風化 黒斑
96	土師器	SA3	高坏	脚部～裾部		推定 13.4		横方向にナデ、わずかな凸凹あり	横方向にナデ、ケズリ	にぶい橙	にぶい橙 淡赤橙	6mm以下の淡赤橙色粒、3mm以下の褐灰色粒、1mm以下の灰白粒を含む	暗赤褐色に変色
97	土師器	SA3	高坏	裾部		推定 19.30		ナデ、工具痕、横方向のナデ	ナデ、工具痕？、横方向のナデ	にぶい黄橙 にぶい橙	にぶい橙 にぶい黄橙	3mm以下の灰白・褐色粒、1mm以下の乳白・黒色光沢粒を含む	
98	土師器	SA3	鉢	口縁部～底部	14.0		11.5	ナデ、指つまみ、斜方向の工具ナデ、スス付着、剥離、粗いナデ	所々に縦の工具痕、横方向・斜方向の工具ナデ、粗いナデ、指頭痕	にぶい黄橙 橙 にぶい褐	にぶい黄橙 黒褐	6mm以下の褐灰色で鈍光沢の粒、5mm以下のにぶい赤褐色粒、2mm以下の黒色光沢粒、微細な透明光沢粒を含む	黒変
99	土師器	SA3	鉢	口縁部～底部付近	推定 14.5			斜方向のナデ、不定方向のナデ	ナデ、口唇部は指で調整している、黒斑	橙	にぶい橙	7mm以下の茶褐・灰白色粒、微細な黒色・透明光沢粒を含む	一部黒変

第７表　山口遺跡第２地点　出土土器観察表（４）

遺物番号	種別	出土地点	器種	部　位	(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外　面	内　面	色　調 外　面	内　面	胎土の特徴	備　考
100	土師器	SA3	鉢（ミニチュア）	口縁部～底部付近	推定8.9	4.0	7.8	横ナデ、不定方向に工具痕がみられる。部分的に調整が異なっている。	横ナデ、工具によるナデ	灰褐	橙	4mm以下の灰白・にぶい橙・褐灰色粒、3mm以下の褐色粒を含む	木の葉底風化
101	土師器	SA3	鉢（ミニチュア）	口縁部～底部	9.0	3.6	6.4	横方向に工具ナデ、縦方向に工具ナデ、ナデ、指頭痕、口唇部に工具ナデの後にケズリとった様な調整がみられる。指つまみ？	斜方向にナデ	黒褐	にぶい橙	3mm以下の灰白・黄灰・にぶい黄橙色粒を含む	
102	土師器	SA3	鉢	口縁部～底部	推定9.0	6.5	7.8	両側からつまみナデ、工具によるナデの後ナデ、指頭痕、ナデ、黒変	指ナデ、指頭痕、黒変	橙	にぶい橙	3mm以下の灰・橙・褐・黒色光沢粒を含む	内外黒変
103	土師器	SA3	鉢	口縁部～底部	9.5		5.1	つまみナデ、指頭痕、ミガキ、所々工具痕あり、ススｒ	つまみナデ、ミガキ、指頭痕	橙 にぶい黄橙	にぶい橙	5mm以下の明赤褐色粒、3mm以下の灰白・黒・透明光沢粒を含む	黒変
104	土師器	SA3	鉢（ミニチュア）	口縁部～胴部				ナデ、丁寧な横ナデ、丁寧なナデ	斜方向のナデ、丁寧なナデ	黄橙	黄橙	1.5mm以下の褐灰・褐・黒褐色粒を含む	
105	土師器	SA3	手涅土器	口縁部～底部付近	4.4	1.4	2.8	ナデ、指頭痕		橙	にぶい橙	3mm以下の灰白・灰褐色粒、2mm以下の黒色光沢粒、微細な透明光沢粒を含む	黒変
111	土師器	SA14	甕	頸部				横方向・斜方向のナデ	横方向・斜方向のナデ、タタキ	にぶい黄橙	浅黄橙	4mm以下のにぶい褐色粒、3mm以下の明黄褐・黄褐色の鈍光沢粒・黒色の鈍光沢粒、2mm以下の褐灰色の鈍光沢粒を含む	
112	土師器	SA14	甕	頸部				タタキ（ススｒ付着）	横方向のハケ目	にぶい黄橙	灰黄 黄灰	5mm以下の浅黄色の鈍光沢粒・明黄褐色粒、4mm以下の黒褐色の鈍光沢粒、3mm以下の黄灰色の鈍光沢粒を含む	一部黒変
113	土師器	SA14	甕	頸部				タタキ、横方向にナデ、部分的に指頭痕	斜方向にハケ目？、指頭痕	にぶい橙	浅黄橙 黄灰	5mm以下の灰・にぶい褐色粒、4.5mm以下の透明光沢粒、4mm以下の黒色粒を含む	
114	土師器	SA14	甕	頸部～胴部				斜方向にタタキ、ススｒ付着	斜方向にハケ目	浅黄橙	にぶい黄橙	6mm以下の灰色粒・4mm以下の褐・黄灰・黒色粒、微細な透明光沢粒を含む	
115	土師器	SA25	甕	口縁部～胴部	推定22.2			ナデ、工具によるナデの後ナデ、指頭痕、ススｒ付着	工具によるナデの後ナデ	にぶい黄橙 橙	にぶい黄橙 橙	7mm以下の灰黄褐色粒、5mm以下の明赤褐・灰黄・灰白・灰褐・橙・にぶい橙・透明光沢・黒色光沢粒を含む	黒変
116	土師器	SA25	甕	口縁部～底部	推定19.6	推定5.0	24.2	ススｒ付着、不定方向に工具ナデ、全体的に非常に凹凸が激しく、器形が一定でない。縦方向の工具ナデ、指頭痕？	横方向にナデ、指頭痕、炭化物付着、縦方向に工具ナデ？、工具痕あり	橙	にぶい黄橙	6mm以下の赤褐・灰色粒、3mm以下の黒褐・灰褐色粒を含む	木の葉底風化
117	土師器	SA25	甕	頸部～胴部				横方向にタタキ	斜方向にハケ目	浅黄橙	浅黄橙	5mm以下の灰黄・灰褐・黒褐色粒、3mm以下の黒色粒を含む	黒変・風化
118	土師器	SA25	高坏	坏部	推定18.2			ナデ、横方向のナデ	横方向のナデ、一部にやや斜方向の工具？痕あり、不定方向のナデ	にぶい橙	にぶい橙	10mm以下の灰白・褐色粒、5mm以下の黒色光沢粒、2mm以下の灰・乳白・赤褐色粒を含む	黒変
119	土師器	SA38	高坏	坏部				横方向のナデ、凹	横方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の灰白粒、微細な不透明の光沢粒を含む	
120	土師器	SA38	坏	口縁部				横ナデ、横ナデの後に縦方向にハケ目？	横ナデ、ナデ	浅黄	浅黄橙	3mm以下の黒色粒、2mm以下の灰白・褐・灰色粒、微細な不透明の光沢粒を含む	
121	土師器	SA4	甕	口縁部～頸部	推定34.4			指頭痕、横方向に工具ナデ、ススｒ付着、斜方向にタタキ	指頭痕、ハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5mm以下の暗灰・灰白・灰褐色粒、3mm以下の褐色粒を含む	黒変
122	土師器	SA4	甕	口縁部				横方向のナデ、不定方向のナデ、ススｒ付着	横ナデ、指押さえ	浅黄橙	浅黄橙	4mm以下の褐灰・灰褐・灰白色粒、3mm以下の黒色粒を含む	全体的に風化
123	土師器	SA4	甕	頸部～胴部				ナデの後斜方向のタタキ、ススｒ付着	斜方向のハケ目	浅黄橙	にぶい黄橙	6mm以下の褐灰・灰褐色粒、3mm以下の灰白・黒色粒を含む	
124	土師器	SA4	甕	胴部				ナデの後にタタキ、ススｒ付着、工具痕あり	ハケ目、不定方向	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4.5mm以下の灰白・にぶい橙・灰褐・赤褐・灰黄色・透明光沢・黒色光沢粒を含む	黒変
125	土師器	SA5	甕	口縁部	推定19.2			工具によるナデの後ナデ、ススｒ付着	工具によるナデ	橙	橙	10mm以下の灰白色粒、5mm以下の褐灰・にぶい橙・明赤褐色粒を含む	
126	土師器	SA5	甕	底部		3.8		縦方向のミガキ、丁寧なナデ、ススｒ付着？	工具によるナデの後ナデ後、縦方向のハケ目	橙 にぶい黄橙	にぶい橙	10mm以下の柱状黒褐・にぶい黄橙色粒、1mm以下の黒色光沢粒を含む	
127	土師器	SA5	甕	底部		4.3～4.8		ナデ、ススｒ付着	ハケ目、ナデ	にぶい黄褐 橙	にぶい黄褐	6mm以下の黄灰色の鈍光沢粒・灰褐色粒・5mm以下の乳白色の柱状光沢粒、2mm以下の黒色光沢粒を含む	
128	土師器	SA5	壺	口縁部～底部		5.6		やや斜方向のナデ、縦方向・やや斜方向のナデ	斜方向の工具ナデ、工具痕あり、ナデ	にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい橙 にぶい黄橙	5mm以下の褐色粒、3mm以下の褐・灰色粒、2mm以下の灰白・黒色光沢粒、1mm以下の灰白・黒色光沢粒・乳白色粒、微細な透明光沢粒を含む	黒変
129	土師器	SA5	壺	口縁部（二重）				櫛描文	ナデ	灰褐	にぶい黄橙	1mm以下の灰白・にぶい橙・黒色粒を含む	
130	土師器	SA5	壺	肩部				突帯、ナデ、ススｒ、刻み変	ナデ、炭化物	にぶい褐 にぶい黄	黒褐	4.5mm以下の灰白・灰・黒・灰褐色粒を含む	
131	土師器	SA5	壺	口縁部～頸部付近				横ナデの後に凹線文と沈線文？	横ナデ	橙	にぶい橙	5mm以下の灰白粒、4mm以下の灰褐・褐灰・不透明な鉱物粒を含む	

第８表　山口遺跡第２地点　出土土器観察表（５）

遺物番号	種別	出土地点	器種	部　位	(cm)			手法・調整・文様ほか		色　調		胎土の特徴	備　考
					口径	底径	器高	外　面	内　面	外　面	内　面		
132	土師器	SA5	高坏	坏部				横ナデ	横ナデ	橙	橙	2.5mm以下の灰褐、茶褐色粒、1.5mm以下の黒色光沢粒を含む	黒変
133	土師器	SA5	高坏	脚部～裾部		推定11.7		ナデ	ナデ	橙	橙	7mm以下の灰白・茶褐色粒、1mm以下の黒色光沢粒を含む	風化気味
134	土師器	SA5	擂鉢(中世)	胴部～底部		推定11.4		横ナデの後に縦方向に工具痕、粗い仕上げ	横ナデ、５条の櫛目文？	橙 黄橙	浅黄橙 橙	6mm以下の黒褐色、2mm以下の灰白色粒を含む	
136	土師器	SA7	甕	口縁部～胴部	推定17.2			指頭痕、斜方向にナデ、スス、縦方向に工具ナデ？	斜方向にナデ、横方向にナデ、不定方向に工具ナデ、指頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	6mm以下のにぶい褐・灰白色粒、4mm以下の黒・褐灰・にぶい赤褐色粒、3mm以下の柱状黒色光沢粒を含む	風化
137	土師器	SA5	壺	口縁部～胴部	12.0			ナデ、横・斜方向のミガキの後ナデと指頭痕、スス付着	横ナデ	橙	橙	5mm以下の褐灰・にぶい橙・灰白色粒を含む	
138	土師器	SA7	壺	口縁部～頸部	推定16.4			工具で縦方向にナデた後横ナデか？	横ナデ	橙	橙	2mm以下の灰白色の鈍光沢粒・柱状黒色光沢粒を含む	
139	土師器	SA7	壺	口縁部～複合口縁				横方向にナデ、ナデ	縦方向に工具ナデ、横方向のナデ	浅黄橙	灰黄	5mm以下の黒色粒、3mm以下の灰白粒、2mm以下のにぶい褐色粒を含む	黒変 壺の拡張部
140	土師器	SA7	壺	頸部～胴部				斜方向のミガキ	ナデ、横方向・斜方向のハケ目	にぶい黄橙	橙	4mm以下のにぶい黄橙色粒、1mm以下の黒色鋭光沢粒、微細な無色透明の鋭光沢粒を含む	黒変
141	土師器	SA7	高坏	口縁部～底部	推定12.2	推定10.4		ナデ、口唇部にスス付着？、指頭痕	ナデ、工具ナデ	橙	にぶい橙	5mm以下の茶褐・灰褐・灰白色粒、微細な黒色光沢粒を含む	黒変 一部風化
142	土師器	SA7	高坏	脚部～裾部		12.3		ナデ	ナデ、粗いナデ	橙 灰	橙 にぶい黄橙	4mm以下の黒褐・茶褐色粒、2mm以下の乳白色粒を含む	
143	土師器	SA7	高坏	裾部		推定14.5		横ナデ、指頭痕、ハケ目	ナデ、横ナデ、ハケ目	橙 褐灰	橙	2mm以下の茶褐粒色・白色・黒色光沢粒を含む	
144	土師器	SA8	甕	口縁部				横方向に工具ナデ、口唇部に指つまみあり、指頭痕による凹あり、スス付着	口唇部指つまみあり、斜方向のナデの後に横ナデ、斜方向にナデ	灰褐	浅黄橙	6mm以下のにぶい橙色、4mm以下の赤褐色、微細な透明光沢粒・黒色鋭光沢粒を含む	
145	土師器	SA8	甕	口縁部				横方向にナデ、スス付着	横方向にナデ、斜方向にナデ	灰褐	浅黄橙	5mm以下の灰白・にぶい橙色粒、2mm以下の黒・灰褐色粒、微細な黒色・金色の光沢粒を含む	
146	土師器	SA8	甕	口縁部				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	4mm以下の角のあるにぶい黄褐・褐灰・にぶい褐色粒、1mm以下の柱状黒色光沢粒を含む	
147	土師器	SA8	甕	口縁部				工具による横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい黄橙 黒褐	浅黄橙	1mm以下の金色で鋭光沢粒、3mm以下の角の丸いオリーブ褐色、1mm以下の角の丸い灰白色粒を含む	黒変
148	土師器	SA8	高坏	坏部	21.4			横ナデ部分的に斜方向にナデ、指頭痕あり	横ナデ部分的に斜方向にナデ、指頭痕あり	にぶい黄橙	にぶい黄橙	10mm以下の褐灰色、3mm以下の黒色、7mm以下の黒褐色、微細な黒色光沢粒を含む	
149	土師器	SA8	高坏	口縁部 坏部				横ナデ	横ナデの後一部斜方向にもナデ	浅黄橙	浅黄橙	6mm以下の灰色粒、5mm以下の褐灰色粒、2mm以下の灰白色粒、微細な柱状黒色光沢粒を含む	
150	土師器	SA8	高坏	坏部	推定20.0			横ナデ、ナデ	ナデ	浅黄橙	橙	5mm以下の灰褐・にぶい橙・灰白・灰黄・明赤褐・黒色光沢粒を含む	
151	土師器	SA8	高坏	脚部～裾部				工具によるナデの後ナデ	工具によるナデ	灰赤 浅黄橙	淡赤橙	5mm以下のにぶい赤褐・褐灰・赤褐・灰白・赤灰・黒色光沢粒を含む	
154	土師器	SA8	甕	口縁部				タタキ・スス付着	横方向・斜方向のハケ目か？	橙	浅黄橙	3mm以下の浅黄色で鈍光沢粒、にぶい褐色で鈍光沢粒・灰白色で鈍光沢粒・黒色で鈍光沢粒を含む	
155	土師器	SA9	甕	口縁部				工具による横方向・斜方向のナデ	工具によるやや斜方向のナデ	浅黄橙	灰白	4mm以下の褐灰色粒、2mm以下の灰白色粒を含む	
156	土師器	SA9	壺	底部		4.1～4.4		タタキ	ナデ、所々工具痕	にぶい橙	にぶい黄橙	6mm以下の灰白色で角のある鈍光沢粒、5mm以下の明赤褐・灰褐・黒色粒を含む	黒変
157	土師器	SA11	甕	口縁部～胴部	21.0			粗い工具ナデ、スス付着、指頭痕	横ナデ、指頭痕、斜方向に工具ナデ（頸部は横方向）	にぶい橙	にぶい橙	5mm以下の灰褐色、1mm以下の灰白色粒・微細な柱状黒色光沢粒を含む	黒変
158	土師器	SA11	甕	口縁部				沈線、横ナデ、斜方向のナデ、スス付着、指押さえ	横ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	8mm以下の灰白色粒、3mm以下の灰褐色粒を含む	
159	土師器	SA11	甕	口縁部				横ナデ、指押さえ	横ナデ、指押さえ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5mm以下の褐灰色粒、2mm以下の灰褐・にぶい赤褐・灰白・黒色光沢粒を含む	
160	土師器	SA11	甕	口縁部				横ナデ、スス付着、指押さえ	横ナデ、指押さえ	橙	にぶい黄橙	8mm以下のにぶい黄褐色粒、2mm以下のにぶい黄橙・灰白粒を含む	
161	土師器	SA11	甕	口縁部				横ナデ、タタキ、スス付着	横ナデ、不定方向のナデ	浅黄橙	灰白	4mm以下の褐灰・灰褐・灰白・黒色光沢粒を含む	
162	土師器	SA11	甕	口縁部～底部	推定14.5	4.4	17.8	横ナデ、縦方向のナデ、指頭痕、工具痕	横ナデ、ナデ	橙 黒褐	にぶい黄橙 黒褐	5mm以下の灰褐・茶褐色粒、2mm以下の柱状黒色光沢粒を含む	
163	土師器	SA11	甕	口縁部～胴部	推定17.2			ナデ	斜方向・縦方向の工具痕	灰白 黄橙	灰白 黄橙	3mm以下の灰黄褐・明黄褐・褐灰色粒で鈍光沢粒を含む	
164	土師器	SA11	甕	口縁部～胴部	推定17.95			工具ナデ・スス付着	横ナデ、斜方向のナデ	橙	にぶい橙	4mm以下の灰褐・茶褐色粒、2mm以下の柱状黒色光沢粒を含む	
165	土師器	SA11	甕	胴部～底部付近				斜方向に工具ナデ、スス付着	炭化物付着？、指頭痕、工具ナデ？	にぶい橙	にぶい橙	8mm以下の黒褐・褐灰色粒、2mm以下の赤褐・灰褐、微細な黒色鋭光沢粒を含む	風化
166	土師器	SA11	甕	底部		5.4		横方向ナデ、凹凸あり	一部工具ナデ	にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい橙	6mm以下の灰褐色粒、4mm以下のにぶい赤褐色粒、2mm以下の灰色粒、微細な柱状黒色光沢粒を含む	風化
167	土師器	SA11	甕	底部		2.6		ナデ、所々スス付着か？、粗いナデ	ナデ	橙	橙	4.5mm以下の明赤褐・暗赤褐色粒、3mm以下の鈍光沢のにぶい黄色粒・微細な黒色光沢粒・透明光沢粒を含む	

第９表　山口遺跡第２地点　出土土器観察表（６）

遺物番号	種別	出土地点	器種	部位	(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
168	土師器	SA11	甕	胴部～底部				ナデ、縦方向に工具ナデ	斜方向に部分にナデ、縦方向に工具ナデ、やや雑な仕上げ	にぶい黄橙	灰黄	4mm以下の灰白・黄灰・褐・灰褐色粒、微細な柱状黒色光沢粒を含む	風化
169	土師器	SA11	甕	胴部～底部		6.4		工具によるナデ、指頭痕、スス付着	ナデ、工具痕	にぶい橙 にぶい黄褐	にぶい黄橙	6mm以下の灰褐色粒、4mm以下の灰白・にぶい橙・赤褐・にぶい黄橙色粒、黒色光沢粒を含む	木の葉底 黒変
170	土師器	SA11	壺	口縁部～胴部	推定13.1			ナデ、やや斜方向の工具ナデ、スス付着	横方向のナデ、ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	6mm以下の灰・乳白・褐色粒、3mm以下の灰・褐・乳白色粒、1mm以下の黒色光沢・褐・灰白・乳白色粒を含む	
171	土師器	SA11	壺	口縁部～頸部				ナデ、横・やや斜方向のナデ・不定方向のナデ	ナデ・丁寧なナデ	橙 にぶい橙	にぶい橙	5mm以下の灰白・褐色粒、3mm以下の灰・褐・乳白色粒・微細な透明光沢・黒色光沢粒を含む	
172	土師器	SA11	壺	口縁部	推定14.6			横方向のナデ、スス付着	横ナデ、一部斜方向のナデ	にぶい褐	にぶい黄橙	6mm以下の灰褐色粒、1mm以下の黒色光沢粒、微細な透明光沢粒を含む	
173	土師器	SA11	高坏	坏部	推定22.9			横ナデ、スス付着	工具ナデ	橙	橙	2.5mm以下の灰褐・茶褐色粒、2mm以下の柱状黒色光沢粒を含む	風化
174	土師器	SA11	高坏	坏部～裾部				ナデ	ナデ、指ナデ、指頭痕	橙	にぶい橙 浅黄橙	7mm以下の灰白・灰褐・にぶい赤褐色粒、4mm以下の灰褐・にぶい橙・灰・灰白・透明・黒色光沢粒、3mm以下の灰白・にぶい赤褐・灰褐・にぶい黄橙・透明光沢・黒色光沢粒を含む	
175	土師器	SA11	高坏	坏部	21.5			ナデ、工具によるナデ	工具による横ナデ	橙 黄橙	橙	5mm以下の浅黄色粒、3mm以下の淡黄色粒、2.5mm以下の黄灰色粒、微細な透明光沢粒を含む	所々黒変
176	土師器	SA11	高坏	坏部	推定12.9			不定方向の工具ナデ、スス付着	不定方向の工具ナデ	橙	橙 にぶい橙	5mm以下の灰褐・茶褐色粒を含む	黒変
177	土師器	SA11	高坏	坏部	17.6			工具による横ナデ	工具による横ナデ	橙 にぶい黄橙	にぶい黄橙 橙	5mm以下の茶褐色粒、2mm以下の茶褐色粒・柱状黒色光沢粒を含む	
178	土師器	SA11	高坏	坏部～裾部	16.3			横ナデ、不定方向のナデ	不定方向の工具ナデ、ナデ	橙	橙	6mm以下の茶褐・灰褐色粒、1.5mm以下の柱状黒色光沢粒を含む	
179	土師器	SA11	高坏	脚部～裾部		16.0		横方向のナデ、ナデ、やや斜方向の工具ナデ、工具痕、一部その後横方向のナデ	縦方向の工具ナデ、縦方向の工具ナデの後横方向のナデ、凹ナデ、横方向のナデ	にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい橙	2mm以下の褐・灰白色粒、微細な金色光沢粒を含む	
180	土師器	SA11	高坏	脚部～裾部		推定15.3		ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	14mm以下の淡赤橙色の岩片、7mm以下の灰白色粒、4mm以下の褐灰、赤褐色粒を含む	
181	土師器	SA11	鉢	口縁部～底部	16.0	5.8		横ナデ、スス付着、工具によるナデの後ナデ	横ナデ、指頭痕、工具によるナデの後ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	3mm以下の灰白・白・灰褐・にぶい橙色粒・黒色光沢粒を含む	黒変 網代底か？
182	土師器	SA11	鉢（ミニチュア）	口縁部～底部	9.3	5.2	5.8	横ナデ	横ナデ	橙 褐灰	橙	3mm以下の茶褐・灰褐色粒、1mm以下の白・黒色光沢粒を含む	
183	土師器	SA11	鉢	口縁部				ナデ	横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の黒褐・茶褐色粒を含む	
184	須恵器	SA11	坏	受部？	推定25.3			横ナデ	横ナデ	灰褐 黄灰	灰褐 黄灰	2mm以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を含む	
185	須恵器	SA11	壺	頸部				横ナデ	横ナデ、横ナデの後、斜方向のナデか？	黄灰	黄灰	0.5mm以下の灰白・明黄褐色粒を含む	
189	土師器	SA15	高坏	坏部	推定15.2			工具による横ナデ	工具による横ナデ	浅黄橙	橙	5mm以下の茶褐色粒、2mm以下の茶褐・柱状黒色光沢粒を含む	
190	土師器	SA15	高坏	脚部				不定方向にナデ、ナデ	ナデ	橙	にぶい赤褐	4mm以下の黄灰・褐色粒、1mm以下の灰白色粒を含む	
191	土師器	SA17	甕	口縁部				タタキ？	横ナデ、斜方向にナデ	にぶい橙	橙	3mm以下の茶褐・灰褐・黒色粒、2mm以下の茶褐・灰褐色粒を含む	
192	土師器	SA17	甕	口縁部				ナデ・スス付着	ナデ・スス付着	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の灰白・にぶい褐・黒色光沢・透明光沢粒を含む	
194	土師器	SA18	壺	口縁部				ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の茶褐・黒褐色粒を含む	風化
195	土師器	SA18	甕	口縁部				ナデ、スス付着	横方向のナデ、ハケ目	にぶい橙	にぶい橙	4mm以下のにぶい黄橙色粒を含む	風化気味
196	土師器	SA18	鉢	口縁部				ナデの後指つまみ、ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の黒褐・褐灰・灰白・灰褐色粒を含む	
197	土師器	SA21	甕	口縁部～底部	推定20.8		29.2	指頭痕、横・縦方向のミガキ、（所々スス付着）	鉄付着か？、指頭痕、ナデ（所々にスス付着か？）	灰褐 にぶい赤褐	にぶい黄橙 にぶい赤褐	7.5mm以下の黒色粒、4mm以下の黄灰色で鈍光沢粒、微細な透明鈍光沢粒を含む	
198	土師器	SA21	甕	口縁部～胴部	26.3			ナデ、つまみナデ、工具によるナデの後ナデ、指頭痕、ミガキ、スス付着	工具による横ナデ、工具によるナデの後ナデ、ミガキ、指頭痕	にぶい赤褐 にぶい黄橙	にぶい橙	10mmの黄灰色粒、6mmの灰褐色粒、5mm以下の灰褐・灰白・黒褐・黄灰色・透明光沢・黒色光沢粒を含む	
199	土師器	SA21	甕	口縁部～胴部	推定23.0			横ナデ、斜方向の工具ナデ、指で押えた跡、全体的にスス付着	横ナデ、工具ナデ、指頭痕部分的に黒斑	橙	橙	7mm以下の茶褐・灰褐色粒を含む	
200	土師器	SA21	甕	口縁部～底部付近	22.3			ナデ、縦・やや斜方向の工具ナデ、指頭痕	ナデ、やや斜方向の工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	6mm以下の褐・灰白色粒、4mm以下の褐・灰白・乳白・灰白色粒、1mm以下の透明光沢・黒色光沢・灰白・褐・金色光沢粒を含む	全体的に黒変
201	土師器	SA21	甕	口縁部～底部付近	推定18.2～19.0			横方向のナデ、工具による斜方向、工具による斜方向・横方向のナデ、工具による縦方向のナデ、スス付着、指頭痕	工具によるやや斜方向・横方向のナデ、ナデ、斜方向の工具ナデ、斜方向のナデか？、指頭痕	橙 にぶい黄橙	橙 浅黄橙	10mm以下のにぶい赤褐・橙色粒、4mm以下の赤褐色粒、3mm以下の黒色光沢粒、微細な透明光沢粒を含む	

第10表　山口遺跡第２地点　出土土器観察表（７）

遺物番号	種別	出土地点	器種	部位	(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
202	土師器	SA21	甕	口縁部～胴部	推定24.5			横方向にナデ、スス付着、指頭痕あり、不定方向に工具痕、縦方向に工具痕	横方向にナデ、指頭痕あり、横方向及び斜方向に工具ナデ	にぶい橙	にぶい橙	8mm以下の褐灰・灰褐の岩片、7mm以下のにぶい黄橙の岩片、4mm以下の灰白・灰色粒を含む	一部黒変
203	土師器	SA21	甕	口縁部～底部付近	推定23.3～25.4			横方向のナデの後斜方向のナデか？、工具による斜方向のナデ、指頭痕、（所々にスス付着）	工具による斜方向のナデの後、横方向のナデか？、所々指頭痕、工具による斜方向のナデ	橙 にぶい褐	橙 にぶい褐	6mm以下の暗赤褐色粒、微細な無色透明で鈍光沢のある粒、4mm以下の浅黄橙粒を含む	一部に黒変
204	土師器	SA21	甕	口縁部～胴部	推定21.8			ナデ、指頭痕	ナデ、工具による横ナデ、指頭痕、炭化物付着	にぶい橙	にぶい橙	6mmの赤灰色粒、5mm以下の灰褐・にぶい赤褐・灰白・浅黄橙・黒色光沢粒を含む	
205	土師器	SA21	甕	頸部～胴部				ナデ、ミガキ、ハケ目	指押え、指ナデ、ナデ	橙	橙	5mm以下の明赤褐・灰赤・にぶい橙・灰・灰白色・黒色光沢・透明光沢粒を含む	
206	土師器	SA21	甕	口縁部～底部	15.4	推定5.0	17.6	工具ナデ、スス付着、指頭痕	横ナデ、ナデ	橙 にぶい黄橙	にぶい黄橙 褐灰	3mm以下の黒褐・茶褐色粒、2mm以下の黒色光沢粒、1mm以下の茶褐・灰褐色粒を含む	木の葉底
207	土師器	SA21	甕	口縁部～底部	推定24.9	推定5.9		横ナデ・指頭痕・斜方向、縦方向に工具ナデ	指頭痕、斜方向に工具ナデ	橙 黒褐	橙	4mm以下の茶褐・灰褐色粒、2mm以下の茶褐・灰褐色粒を含む	黒変
208	土師器	SA21	甕	胴部～底部		4.7		タタキ、指頭痕	ハケ目	にぶい黄橙	黒褐	4mm以下の灰白・灰褐・茶褐色粒を含む	
209	土師器	SA21	甕	底部		5.7		縦方向に工具ナデ、ナデ（丁寧でない）	工具によるナデ？、指頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	8mm以下の明褐色粒、5mm以下の灰白・にぶい橙色粒、4mm以下の暗褐色粒を含む	風化著しい、全体的に黒変？
210	土師器	SA21	甕	底部				縦方向に工具痕、縦方向にナデ	工具痕	にぶい黄橙	にぶい赤褐	6.5mm以下の灰白・灰黄褐・褐灰色粒、3mm以下の灰・赤褐色粒を含む	全体的に風化著しい
211	土師器	SA21	甕（小型）	胴部～底部				工具ナデ、一部指頭痕あり	工具ナデ	橙	橙	8mm以下の茶褐色粒、1.5mm以下の柱状黒色光沢粒を含む	
212	土師器	SA21	壺	口縁部～胴部	推定10.0			口縁～頸部は斜方向に工具ナデ、胴部は横方向に工具ナデ、スス付着	不定方向にナデ、指頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	9mm以下の褐色粒、4mm以下の柱状黒色光沢粒、1mm以下の灰白粒を含む	風化
213	土師器	SA21	壺	胴部				ナデ	横ナデ、指頭痕	にぶい橙	橙	7mm以下のにぶい橙色粒、5mm以下の赤橙・灰白色粒、2mm以下の柱状黒色光沢粒を含む	風化
214	土師器	SA21	壺	頸部～底部		5.1		不定方向にナデ、指頭痕、横方向に粗いナデ	横方向にナデ、指頭痕、斜方向にナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	10mm以下の灰褐色の岩片、4mm以下の赤褐・黒色粒、2mm以下の柱状黒色光沢粒を含む	木の葉底
215	土師器	SA21	高坏	坏部	推定24.3			横ナデ、ミガキのあとナデ、ナデ	ナデ	赤褐	明赤褐	10mm以下の赤褐・灰赤色粒、4mm以下の明赤褐・淡黄・黄灰・にぶい赤褐・灰白・透明光沢・黒色光沢粒を含む	
216	土師器	SA21	高坏	坏部	推定24.5			ナデ、横ナデ	横ナデ、工具によるナデの後ナデ	浅黄橙	浅黄橙	7mm以下の褐灰・明赤褐色粒、3mm以下の灰褐・明赤褐・灰白・淡黄色・黒色光沢・透明光沢粒を含む	
217	土師器	SA21	高坏	坏部				タタキ	工具ナデ	浅黄橙	浅黄橙	6mm以下の灰褐・茶褐色粒、2mm以下の柱状黒色光沢粒を含む	一部黒変
218	土師器	SA21	高坏	坏部	推定17.1			工具による丁寧な横ナデ	工具による丁寧な横ナデ	にぶい橙 浅黄	浅黄橙 にぶい橙	7mm以下の淡黄色粒、6mm以下のにぶい赤褐色粒、3mm以下の明赤褐色粒、3mm以下で柱状黒色光沢粒・微細な透明光沢粒を含む	風化気味、一部黒変
219	土師器	SA21	高坏	坏部	推定20.3			横方向のナデ、指頭痕、横方向のナデの後に斜方向に工具によるナデ、部分的にミガキ？	横方向にナデ、指頭痕	橙	橙	5mm以下の灰白・灰褐色粒、微細な黒色光沢粒、4mm以下の赤褐色粒を含む	
220	土師器	SA21	高坏	坏部	推定17.6～18.2			工具による丁寧な横ナデ、指頭痕	工具による横ナデ（一部に斜方向のナデ）、工具による斜方向のナデ	にぶい橙 淡黄	にぶい橙 淡黄	3mm以下の淡黄色粒、2mm以下の柱状黒色光沢粒、1mm以下の黒色光沢粒、微細な透明光沢粒を含む	
221	土師器	SA21	高坏	坏部	18.1			ナデ・黒斑・回転ナデ（細かい線が入っているが、工具痕？線刻？）	回転ナデ、黒斑	にぶい橙	にぶい橙	9mm以下の灰赤色粒、5mm以下の灰赤・灰褐・にぶい橙、灰白色、黒色光沢粒を含む	
222	土師器	SA21	高坏	坏部～裾部		推定14.4		ナデ、部分的に縦方向のナデ、部分的に横方向のナデ	雑なナデ、横方向の粗いナデ、砂粒の動きが見られる、横方向のナデ	明黄褐 にぶい黄橙	橙 灰黄	7mm以下の褐色粒、4mm以下の褐・灰白色粒、1mm以下の褐・灰・灰白・乳白色粒を含む	黒変部分あり
223	土師器	SA21	高坏	脚部～裾部				縦方向に工具ナデ、横・斜方向にナデ	横方向のナデ、工具痕	橙	橙	4mm以下の灰褐・褐灰色粒、2mm以下の灰色粒・柱状黒色光沢粒を含む	一部に黒変
224	土師器	SA21	高坏	脚部～裾部		12.6		横ナデと思われるが、全体的に磨耗、横ナデ	横方向粗い	橙	橙	7mm以下のにぶい褐色粒、5mm以下の灰白・赤褐・褐灰色粒、3mm以下の黒色粒、微細な柱状黒色光沢粒を含む	全体的に磨耗
225	土師器	SA21	高坏	脚部～裾部		推定13.4		丁寧なナデ、横方向のナデ、黒斑？	横方向のナデ、ナデ	にぶい黄橙 橙	にぶい黄橙 にぶい褐	6mm以下の灰白・褐色粒、2mm以下の褐・灰白色粒を含む	
226	土師器	SA21	鉢	口縁部～底部	推定12.9	5.6	9.0	横ナデ、工具ナデ、粗いナデ、指頭痕、ナデ	横ナデ、工具によるナデの後ナデ、指頭痕、指ナデ	橙	橙	5mm以下の灰褐・にぶい黄橙・灰白・透明光沢・黒色光沢粒を含む	
227	土師器	SA21	鉢	口縁部～底部	10.5		7.4	横方向のナデ・不定方向の工具ナデ	横方向のナデ、ナデ	橙 にぶい赤褐 にぶい橙	橙 にぶい黄橙	6mm以下の褐・灰白・乳白色粒、1mm以下の黒色・金色光沢粒を含む	黒変部分あり
228	土師器	SA21	鉢	口縁部				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の茶褐・灰褐色粒、1mm以下の茶褐色粒を含む	
229	土師器	SA21	鉢	口縁部～底部	推定9.8		7.5	横ナデ、斜方向にミガキ、ナデ	横ナデ、指頭痕、ナデ	橙 褐灰 にぶい黄橙	橙	3mm以下の茶褐・灰褐色粒、2mm以下の茶褐・黒色光沢粒を含む	

第11表　山口遺跡第２地点　出土土器観察表（８）

遺物番号	種別	出土地点	器種	部位	(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
230	土師器	SA21	鉢	口縁部～底部	推定11.8		5.5	ナデ	横方向のナデ、ナデ	にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい橙 にぶい黄橙 灰黄褐	8mm以下の褐色粒、5mm以下の灰白色粒、3mm以下の乳白色粒を含む	風化気味・黒変部分あり
231	土師器	SA21	鉢	口縁部～底部付近	推定11.3			縦ナデ、斜方向にナデ	横ナデ、指頭痕	橙 浅黄橙	浅黄橙 褐灰	4mm以下の茶褐・灰褐色粒、2mm以下の黒色光沢粒、微細な透明光沢粒を含む	全体的に風化著しい
232	土師器	SA21	浅鉢	底部（高台付）		推定7.0		ナデの後に指押え、指押え、ナデ	ナデ、指頭痕	にぶい橙	にぶい褐	4mm以下の赤褐・褐灰色粒、2mm以下の灰白色粒を含む	全体的に風化
233	土師器	SA21	手捏土器	口縁部～底部	推定4.4	3.6	2.4	指ナデ、指頭痕、ナデ、つまみ	指ナデ、指頭痕、ナデ、つまみ	浅黄橙	浅黄橙	7mm以下の灰白色粒、5mm以下の褐灰・にぶい褐・灰白・黒色光沢粒を含む	
234	土師器	SA21	手捏土器	口縁部～底部	4.1		2.5	つまみ、指ナデ、指頭痕	指ナデ、指頭痕、つまみ	にぶい橙	にぶい橙	1.5mm以下の赤褐・灰白・灰褐・透明光沢・黒色光沢粒を含む	
235	須恵器	SA21	坏身	口縁部～底部	10.8	7.6	4.9	回転ナデ、ヘラ削り、ヘラ記号、ナデ	ナデ、回転ナデ、仕上げナデ	灰	灰	3mm以下の灰白色粒を含む	
236	須恵器	SA21	壺	口縁部	推定4.8			回転ナデ、櫛描波状文	回転ナデ	黄灰	暗灰黄	1mm以下の灰黄褐・灰白色粒を含む	
237	須恵器	SA21	壺	口縁部				ナデ、回転ナデ、２条の突帯、櫛描波状文	回転ナデ	灰	灰	1mm以下の灰・白・淡黄色粒を含む	
238	土師器	SA31	甕	口縁部				指押え、丁寧な横ナデ、横ナデの後縦方向のハケ目？	指押え、丁寧な横ナデ	橙	浅黄橙	4mm以下の赤褐色粒、3mm以下の暗灰黄・灰褐・黒色粒、1mm以下の黒色で鋭光沢粒、微細な透明光沢粒を含む	
239	土師器	SA31	甕	口縁部				ナデ、櫛描波状文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の褐・褐灰色粒を含む	
240	土師器	SA32	甕	口縁部				不定方向のナデ、横方向のナデ、スス付着	ナデ、斜方向のナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	5mm以下の褐・乳白・黒色粒、1mm以下の灰白色粒、微細な金色光沢粒を含む	
241	土師器	SA32	甕	口縁部				やや斜方向のナデ、ナデ	ナデ、斜方向のナデ方向のナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	5mm以下の褐色粒、2mm以下の褐・灰・乳白色粒を含む	
242	土師器	SA32	甕	底部		推定3.2		タタキの後ナデ、スス付着	縦方向の工具痕、ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5mm以下の褐・灰白粒、1mm以下の乳白・褐・灰・透明光沢・金色光沢粒を含む	内面黒変？
243	土師器	SA32	高坏	裾部		推定24.0		横ナデの後、やや斜方向のミガキ、横方向のナデ、ナデ	やや斜方向の工具ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の褐・灰白・乳白・透明・黒色粒を含む	
244	土師器	SA33	甕	口縁部～胴部				工具による圧痕、工具による粗いナデ、工具による縦方向のナデ、工具による不定方向のナデ	工具によるナデ、横方向の工具によるナデ	明黄褐	にぶい黄橙	3mm以下の褐灰粒、1mm以下の灰白色粒・黒色鈍光沢粒、微細な透明光沢粒を含む	
245	土師器	SA33	甕	口縁部				横ナデ、ナデ	ナデ	浅黄橙	淡黄 灰白	4mm以下のにぶい黄橙色粒・黄褐色粒・灰色粒・赤褐色粒、2mm以下の黒色で鋭光沢粒を含む	
246	土師器	SA33	甕	口縁部				横ナデ、スス付着	ナデ	にぶい橙	浅黄橙	4mm以下の浅黄橙粒・褐・褐灰・にぶい褐色粒を含む	
247	土師器	SA33	甕	口縁部				不定方向のナデ	横方向のナデ、斜方向のナデ	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の褐灰・褐・灰白色粒、3mm以下の灰黄褐色粒を含む	
248	土師器	SA33	甕	底部				タタキの後ナデ、ナデ	ナデ	にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい橙	8mm以下の褐色粒、5mm以下の褐灰色粒、2mm以下の灰白・乳白色粒を含む	風化気味 黒変部分あり
249	土師器	SA33	壺	頸部				キザミ目突帯、やや斜方向のハケ目、指頭痕あり	ナデ、指頭痕あり	にぶい黄橙 灰白	にぶい黄橙 灰白	4mm以下の灰白・褐灰・にぶい黄褐色粒、2mm大の灰白色で鈍光沢粒を含む	
250	土師器	SA33	壺	底部		推定3.2		斜方向の平行タタキ、スス付着部分あり、縦方向の平行タタキ、タタキの後ナデ	やや斜方向のハケ目、斜方向のハケ目の後ナデ、黒斑？	にぶい黄橙	褐灰	5mm以下の褐・灰色粒、2mm以下の乳白色粒を含む	
251	土師器	SA33	高坏	坏部				ナデ	ナデ	浅黄橙	黄橙	4mm以下の褐灰・褐・黒・灰白色粒、3.5mm以下の明赤褐・暗赤褐色粒、微細な透明鋭光沢粒を含む	風化
252	土師器	SA33	高坏	脚部～裾部		推定11.6		ミガキ、ハケ目、ナデ	ナデ	にぶい橙 黒褐	にぶい黄橙	3mm以下の灰褐・茶褐・黒褐色粒を含む	
253	土師器	SA33	埦	口縁部～底部	13.6			横方向のナデ、ナデ	横方向のナデ、一部指押さえあり、ナデ	橙 にぶい黄橙	橙 にぶい黄橙	4mm以下の茶褐色、2mm以下の茶褐・灰褐色粒を含む	
254	土師器	SA35	甕	口縁部～胴部	推定25.8			ナデ、横ナデ、斜方向の工具ナデ、スス付着、指押さえ	ナデ	橙	にぶい橙	7.5mm以下の灰白・灰褐・茶褐色粒、2mm以下の柱状黒色光沢粒を含む	
255	土師器	SA35	甕	口縁部				ナデ、タタキ、スス付着、指押さえあり	斜方向の工具ナデ	黒褐	にぶい黄橙	4mm以下の灰白・灰褐・茶褐色粒を含む	
256	土師器	SA35	甕	口縁部				ナデ、指頭痕あり	斜方向にナデ、指頭痕あり	にぶい橙	にぶい黄橙	3mm以下の灰褐・黒褐色の粒、2mm以下のにぶい橙色粒、1mm以下の灰白色粒を含む	風化気味 黒変
257	土師器	SA35	甕	胴部～底部				ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	4mm以下の黒・灰褐・茶褐色粒を含む	黒変 平底
258	土師器	SA35	甕	底部				粗いナデ	不定方向のナデ	にぶい橙 浅黄橙	にぶい橙 浅黄橙	4mm以下のにぶい赤褐・褐灰色粒、3mm以下の灰白で鈍光沢粒、微細な透明光沢粒・黒色鋭光沢粒を含む	丸底
259	土師器	SA35	壺	口縁部～胴部	推定17.7			横ナデ、ナデ（指頭痕あり）、キザミ目突帯、スス付着	横ナデ（指頭痕あり）、ナデ	橙 にぶい黄橙	にぶい黄橙	6mm以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒、1mm以下の黒色鋭光沢粒を含む	
260	土師器	SA35	壺	口縁部				ナデ、横方向のナデ、スス付着部分あり、斜方向の平行タタキ	ナデ、やや斜方向及び横方向のナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	3mm以下の褐・灰・乳白・黒色粒、微細な金色光沢粒を含む	
261	土師器	SA35	壺	底部		推定6.6		タタキ	ナデ一部にハケ目、指頭痕	にぶい橙、 にぶい黄橙	褐灰	4mm以下の褐灰色で鈍光沢粒、5mm以下の灰白色で鈍光沢粒、微細な無色透明の鋭光沢粒を含む	黒変

第12表　山口遺跡第２地点　出土土器観察表（９）

遺物番号	種別	出土地点	器種	部位	(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
262	土師器	SA35	高坏	坏部	推定16.6			ナデ、櫛描波状文、縦方向の丁寧なナデ	横方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5mm以下の褐色粒、3mm以下の赤褐・乳白色粒、1mm以下の褐・灰色粒を含む	
263	土師器	SA35	高坏	裾部		推定16.2		ハケ目、工具ナデの後ナデ、ナデ、スス付着	ナデ、工具ナデ	橙	橙 灰黄	5mm以下のにぶい橙・灰白・浅黄橙・黒色粒を含む	
264	土師器	SA35	高坏	裾部		推定14.6		ハケ目の後ナデ、横ナデ、指頭痕		橙	橙	4mm以下の灰白・にぶい橙・灰・褐灰・黒色光沢・透明光沢粒を含む	
265	土師器	SA35	高坏	裾部				斜方向の工具ナデ、横方向のナデ	斜方向のハケ目？、横方向のナデ	浅黄橙	浅黄	2mm以下の褐・灰白・透明光沢・乳白・黒色粒、1mm以下の褐・金色光沢粒を含む	黒変
266	土師器	SA35	鉢	口縁部～底部	11.9	2.2		不定方向のナデ、口唇部指押さえ	斜方向のナデ、指頭痕	にぶい黄橙 黒褐	にぶい黄橙 黒褐	5mm以下の茶褐・灰褐色粒、2mm以下の黒色鈍光沢粒を含む	黒斑
267	土師器	SA35	鉢	口縁部～胴部				不定方向に工具ナデ、ナデ、口唇部指押さえあり	不定方向に工具ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	4mm以下のにぶい褐色粒、2mm以下の黒褐・黒色粒を含む	
268	土師器	SA35	鉢	口縁部				斜方向のナデ、横方向のナデ	斜方向のハケ目？、黒斑？、横方向のナデ	橙 にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下の褐色粒、3mm以下の褐・乳白色粒、1mm以下の灰色粒を含む	
269	土師器	SA35	鉢	口縁部				口唇部指押さえ、横ナデ、斜方向にナデ	横方向にナデ、斜方向にハケ目？	浅黄橙	淡黄	4mm以下の灰褐色粒、2mm以下の黒褐・灰白・黒色粒を含む	
270	土師器	SA35	鉢	口縁部～頸部				ナデ、口唇部指押さえ	横ナデ、斜方向にナデ	浅黄橙	浅黄橙	3mm以下の黒褐・褐灰・黒色粒を含む	
271	土師器	SA35	鉢（ミニチュア）	底部		推定4.0		丁寧なナデ、ナデ、指頭痕あり	丁寧なナデ	浅黄橙	浅黄橙	3mm以下の鈍光沢のにぶい褐・褐色粒、2mm以下の灰白色で鈍光沢粒、1mm以下の黒色で鈍光沢粒を含む	
276	土師器	SA36	甕	口縁部～胴部	推定24.3			不定方向の工具ナデ、スス付着、指頭痕	ナデ、指頭痕	橙	橙	8mm以下の灰褐、茶褐色粒、1.5mm以下の柱状黒色光沢粒を含む	風化
277	土師器	SA36	甕	口縁部				横ナデ	ナデ	橙	橙	11mmのにぶい橙色粒、5mm以下のにぶい褐・にぶい橙・灰・にぶい赤褐・灰白色粒を含む	
278	土師器	SA36	甕	底部		推定6.0		ナデ、細沈線（斜方向に1.1～1.4mmの間隔で４本あり）	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	6mm以下の褐・黒色粒、3mm以下の乳白・褐・灰白粒、1mm以下の透明光沢・金色光沢粒を含む	木の葉底
279	土師器	SA36	甕	底部				ナデ	ナデ	にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい黄橙 にぶい黄褐	5mm以下の灰色粒、3mm以下の褐・灰・黒色粒、微細な透明光沢・黒色光沢・金色光沢粒を含む	
280	土師器	SA36	甕	底部付近				縦方向のミガキ、ナデ	ナデ、工具痕？あり	にぶい黄橙	黒褐	5mm以下の灰白・褐・灰色粒、1mm以下の灰白・乳白色粒を含む	風化気味 黒変
281	土師器	SA36	壺	口縁部				櫛描波状文	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下の灰白・にぶい褐・黒色光沢・透明光沢粒を含む	
282	土師器	SA36	壺	口縁部				ハケ目	斜方向にナデ	浅黄橙	浅黄橙	3mm以下の茶褐・黒色粒を含む	
283	土師器	SA36	壺	頸部～胴部				斜方向のナデ	横ナデ	にぶい黄橙 褐灰	褐灰	2mm以下の乳白・灰褐色粒を含む	
284	土師器	SA36	壺	頸部				貼付突帯？	剥離	橙		2mm以下の茶褐、白色不透明の光沢粒を含む	
285	土師器	SA36	高坏	坏部	推定17.0			工具によるナデ	工具によるナデ	橙	橙	4mm以下の明赤褐・灰白・黒色光沢・透明光沢粒を含む	
286	土師器	SA36	高坏	坏部				横ナデ	横ナデ	橙	にぶい橙	3mm以下の明赤褐・淡橙・灰白・黒褐色粒を含む	
287	土師器	SA36	鉢	口縁部				ナデ、指押さえ	ナデ	にぶい橙	橙	3mm以下の灰白・灰褐・赤褐色・黒色光沢粒を含む	
288	土師器	SA36	鉢	口縁部				ナデ、指押さえ、スス付着	工具によるナデ	にぶい橙	浅黄橙	5mm以下の灰白・灰褐・にぶい橙、にぶい赤褐色粒を含む	
289	土師器	SA36	坏	口縁部	推定10.0			ナデ	ナデ	橙	橙	2mm以下のにぶい赤褐・褐灰色・黒色光沢粒を含む	
290	土師器	SA36	坏	底部		8.1		回転ナデ、工具痕	回転ナデ	淡黄 黄灰	浅黄橙	4mm以下の灰黄・灰褐・にぶい褐・灰・灰白色粒を含む	黒変
291	須恵器	SA36	甕	胴部				格子目タタキ	同心円当具痕	灰	灰	2mm以下の灰白・淡黄橙・橙・黒色粒を含む	
292	土師器	SA36	フィゴ	羽口				ナデ、指頭痕	ナデ	淡黄 にぶい黄橙	にぶい橙	5.5mm以下の浅黄橙色粒、微細な透明光沢粒を含む	
294	土師器	SA37	甕	口縁～底部	推定22.2		33.7	ナデ、横ナデ、スス付着、平行タタキの後にハケ目、工具ナデか？	工具ナデ・横ナデか？、指頭痕ハケ目の後ナデ	浅黄橙 にぶい黄橙	橙 黄灰	5mm以下の灰黄褐・灰白・灰・にぶい黄橙・にぶい赤褐・黒色粒を含む	黒変
295	土師器	SA37	甕	頸部～底部		4.4		平行タタキ、所々ナデ（不定方向）、スス付着、ナデ	工具ナデの後ナデ	にぶい橙	浅黄橙 橙	5mm以下のにぶい赤褐・灰褐・灰白・黒褐・黒色粒を含む	黒変
296	土師器	SA37	甕	口縁部～底部	12.0	5.7	13.8	工具によるナデのあとナデ、わずかにスス付着、ナデ	指頭痕、工具によるナデのあとナデ、ナデ	浅黄	浅黄	4mm以下の赤灰・褐灰・にぶい橙・灰白・灰黄色粒を含む	
297	土師器	SA37	甕（小型）	口縁部～胴部				ナデ、指つまみ	斜方向のナデ	灰白	にぶい黄橙	2mm以下の褐・赤褐色粒、1mm以下の褐・乳白・黒色粒を含む	
298	土師器	SA37	甕	口縁部				横方向のナデ、ナデ、黒斑？、指つまみ	斜方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の褐・灰白・黒色粒を含む	黒変？

第13表　山口遺跡第２地点　出土土器観察表（10）

遺物番号	種別	出土地点	器種	部位	(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
299	土師器	SA37	壺	口縁部（二重口縁）				横方向のナデ、櫛描波状文	横方向のナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の褐・黒・灰色粒、2mm以下の黒・褐・乳白色粒を含む	
300	土師器	SA37	壺	口縁部（二重口縁）				横方向のナデ、櫛描波状文	横方向のナデ	にぶい黄橙	黄灰	2mm以下の灰・乳白・褐色粒、1mm以下の褐・灰白・黒色光沢粒、微細な金色光沢・黒色光沢粒を含む	黒変
301	土師器	SA37	壺	口縁部（二重口縁）				横方向のナデ、板状工具（？）による斜方向の連続刻み、斜方向の工具ナデの後板状工具（？）による斜方向の連続刻み、ヘラ描き線刻文、細片のため何が描かれているのか不明。	横方向のナデ、ナデ、斜方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の灰・黒・褐色粒を含む	
302	土師器	SA37	壺	口縁部～胴部				横方向のナデ、ナデ、指つまみ	横方向のナデ、斜方向及び横方向のハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙 橙	4mm以下の灰白・乳白色粒、2mm以下の褐・灰白・黒色粒を含む	
303	土師器	SA37	壺	突帯部				刻み目		灰白		4mm以下の褐・灰・乳白透明光沢・黒色粒を含む	
304	土師器	SA37	壺	底部				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	褐灰	2mm以下の茶褐・灰褐・黒褐色粒を含む	黒変
305	土師器	SA37	鉢（小型）	口縁部	推定18.2			ハケ目、指頭痕	ハケ目	灰	灰	3mm以下の茶褐・乳白色粒を含む	
306	土師器	SA37	注口土器					ナデ、指押さえ	ナデ、指押さえ	灰	灰	3mm以下の茶褐色粒、2mm以下の柱状黒色光沢粒を含む	
307	土師器	SA37	不明					ハケ目、指頭痕	ナデ	橙	橙	7mm以下の灰白粒、2mm以下の黒色光沢粒、1mm以下の黒褐・灰褐色粒を含む	
308	土師器	SA37	不明	胴部				タタキ	布目痕	灰白	浅黄橙	2.5mm以下の灰褐、茶褐色粒を含む	
311	土師器	SD1	壺	口縁部～底部	8.0	3.7	10.6	横方向のナデ、文様がわずかに残る、やや斜方向のミガキ、斜方向のナデ、ナデ	ナデ、横方向のナデ	浅黄橙 灰白 にぶい橙	浅黄橙	1mm以下の透明光沢・黒色光沢・灰白・乳白色粒を含む	風化気味
312	土師器	SC7	壺?	底部		推定6.0		タタキ、ナデ	斜方向に工具ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	10mm以下の褐灰色の岩片、3mm以下の黒・灰白・灰褐色粒を含む	黒変
313	土師器	SC7	壺?	底部		4.4		タタキ、ナデ、工具痕	工具痕	にぶい黄橙	暗灰	5mm以下の灰白色粒、1mm以下の黒・赤褐色粒を含む	黒変
314	土師器	SC1	甕	口縁部				横ナデ	指頭痕、横ナデ	橙	橙	3mm以下の灰白・灰褐色粒を含む	黒変
315	土師器	SC1	甕	口縁部				横ナデ、指押え、スス付着	横ナデ、指押え	黒褐	にぶい黄橙	3mm以下の茶褐・灰褐色粒、2mm位の黒色鈍光沢粒を含む	
316	土師器	SC1	甕（小型）	口縁部				横ナデ、工具ナデ	ナデ	浅黄橙	橙	2mm以下の灰白・灰褐・茶褐色粒を含む	
317	土師器	SC1	甕（小型）	胴部～底部				斜及び縦方向にミガキ、スス付着、ナデ？	不定方向に工具ナデ	にぶい褐	にぶい橙	5mm以下の明褐灰粒、2mm以下の灰白・黒色・暗褐色粒を含む	
318	土師器	SC1	甕	底部		推定6.0		ナデ	横方向にナデ、工具痕	橙 にぶい橙 黒褐	にぶい黄橙 褐灰	4mm以下の灰褐・乳白・茶褐色粒を含む	
319	土師器	SC1	高坏	坏部				横ナデのあとミガキ、黒斑	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい橙	4mm以下の灰褐・茶褐色粒を含む	
320	土師器	SC1	高坏	裾部		推定10.3		横方向にナデ	横方向にナデ	橙	にぶい橙	7mm以下の灰白色粒、5mm以下の黒褐色粒、3mm以下の黒色粒、1mm以下の赤褐色粒を含む	
321	土師器	SC1	高坏	裾部		推定12.9		ナデ、横ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	2mm以下の黒・灰褐・褐灰色粒、1mm以下の灰白色粒を含む	
322	土師器	SC4	壺	口縁部				ナデ、櫛描波状文、横ナデ	横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	3.5mm以下の灰褐・灰白色粒を含む	
323	土師器	SC2	甕	口縁部				横方向にナデ、スス付着、指頭痕、ナデ、指つまみ	横方向にナデ、指頭痕	にぶい橙	にぶい黄橙	4mm以下の灰白色粒、2mm以下の黒・灰褐色粒、1mm以下の赤色粒を含む	
324	土師器	SC2	高坏	坏部	推定12.7			横ナデ	ナデ	橙	橙	1mm以下の灰白・黒色粒を含む	風化
325	土師器	SC3	壺	肩部				横方向のナデの後に斜方向に沈線文?と工具痕	横方向にナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の褐灰・灰褐・灰白・黒褐色粒を含む	
326	土師器	SC3	高坏	坏部				横方向のナデ、指頭痕、斜方向にナデ	斜方向にナデた後に横方向にナデ、指頭痕あり	にぶい橙	にぶい黄橙	8mm以下の褐灰色の岩片、5mm以下の灰白・灰色粒を含む	
327	土師器	SC3	高坏	裾部		推定12.7		ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	3mm以下の黒褐色粒、1mm以下の灰白・黒色粒を含む	風化
328	土師器	SC5	甕	口縁部				横ナデ、スス付着	横ナデ	にぶい橙	浅黄橙	2.5mm以下の茶褐・灰褐色粒を含む	
329	土師器	SC6	甕	口縁部				横ナデ、ナデ	横ナデ	黄橙	橙	1.5mm以下の灰褐・茶褐色粒を含む	
330	土師器	V層	甕	口縁部～底部付近	推定24.7			横方向のナデ、横方向にミガキ、斜方向・縦方向にミガキ、ハケ目、スス付着	ナデ、横ハケ目、工具痕、指頭痕	橙 黒褐	橙 黒褐	3mm以下の灰褐・黒褐・茶褐色粒、1mm以下の灰褐・黒褐・茶褐色粒を含む	

第14表　山口遺跡第２地点　出土土器観察表（11）

遺物番号	種別	出土地点	器種	部位	(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
331	土師器	V層	甕	口縁部～底部	推定24.8	6.1	24.5	指頭痕、横方向に工具ナデ、スス付着、斜方向に工具ナデ、ナデ	横方向のナデ、指頭痕、斜方向及び横方向にナデ、斜方向にナデ、不定方向にナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	8mm以下の灰褐色粒、5mm以下の褐・褐灰色粒、4mm以下の黒褐色粒、2mm以下の灰白粒を含む	黒変
332	土師器	V層	甕	口縁部～胴部	推定18.0			ナデ、指押え、タタキ	斜方向のナデ、指押え、ナデ	橙	橙	3.5mm以下の灰白・灰褐・茶褐色粒を含む	
333	土師器	V層	甕	頸部～胴部				タタキ、スス付着	工具による斜方向のナデ	黄橙	浅黄橙	6mm以下の灰色鈍光沢粒、3mm以下の黒色鈍光沢粒・灰白光沢粒・灰黄褐・にぶい褐粒、微細な透明光沢粒を含む	
334	土師器	V層	甕	胴部				横方向にタタキ	横方向にナデ	黄灰	灰白	6mm以下の褐灰・にぶい褐・灰白粒、3mm以下の灰黄色粒を含む	
335	土師器	V層	甕	口縁部				横ナデ、刻目突帯、斜方向のハケ目、沈線？	横ナデ、ナデ	にぶい黄橙	黄褐	2mm以下の茶褐・灰褐色粒を含む	
336	土師器	V層	壺	口縁部	推定15.2			ナデ	横ナデ	黒	黒	2mm以下の茶褐・灰褐色粒を含む	
337	土師器	V層	壺	口縁部（複合口縁）				櫛描波状文	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	4mm以下の灰褐色粒、3mm以下の黒褐色粒、2mm以下の黒・灰白粒を含む	
338	土師器	V層	壺	口縁部（複合口縁）				横ナデ、櫛描波状文	横ナデ	にぶい黄橙	黄灰	3mm以下の褐灰色粒、1mm以下の褐・灰・灰白・黒色粒を含む	
339	土師器	V層	壺	頸部				格子目状突帯、ナデ	ナデ	にぶい黄橙	暗灰		
340	土師器	V層	壺	胴部				ナデ、貼付突帯	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の灰白・褐・金色光沢粒を含む	
341	土師器	V層	壺（小型）	口縁部～底部	推定9.3		11.5	ナデ、ミガキ一部黒斑あり、指頭痕	ナデ、指頭痕	にぶい黄橙 橙	にぶい黄橙	7mm以下の灰白色粒、5mm以下の灰白・淡黄・にぶい褐・透明光沢・黒色光沢粒を含む	
342	土師器	V層	壺	胴部～底部				横方向にナデ、不定方向にナデ	ナデ、指頭痕、工具によるナデ	にぶい橙	にぶい橙	6mm以下の褐灰色粒、4mm以下の黒色粒、3mm以下の灰褐・灰白粒、微細な金色光沢粒を含む	黒変
343	土師器	V層	高坏	脚部				斜方向にナデ、刻み目突帯、斜方向にナデ、縦方向にミガキ、穿孔４ヶ所、ハケ目	ナデ、横方向ハケ目	灰黄褐	黄灰	5mm以下のにぶい橙粒、4mm以下の灰白粒、3mm以下の灰褐・黒褐・黒色粒を含む	黒変
344	土師器	V層	鉢	口縁部	推定20.1			ナデ、工具による縦方向のナデ、スス付着、突帯接合面	工具によるやや斜方向のナデ	にぶい橙・淡黄	淡黄	4mm以下のにぶい黄褐色粒、3mm以下の褐灰色粒、微細な透明光沢粒を含む	
345	土師器	V層	鉢	口縁部～底部	推定10.7	4.0		ミガキの後工具ナデ、ナデ	ミガキの後ナデ、指頭痕	橙	橙	3mm以下の灰白・灰褐・茶褐色粒、1mm以下の黒色光沢粒、微細な透明光沢粒を含む	黒変
346	土師器	V層	埦	口縁部～底部	11.4	5.2	6.2	ナデ？	横ナデ？	にぶい橙	にぶい橙	8mm以下の褐灰色粒、5mm以下の赤褐・赤灰粒、3mm以下の灰・灰白粒、微細な黒色光沢粒・透明光沢粒を含む	風化、黒変
347	土師器	V層	手捏土器	頸部～底部				ナデ	ナデ	浅黄橙	橙	4mm以下の黒褐・褐灰・灰白・透明光沢・黒色光沢粒を含む	
348	土師器	V層	手捏土器	口縁部～底部	4.5	1.8	2.7	ナデ、指頭痕	ナデ、指頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下のにぶい黄橙・灰白・灰色・透明光沢・黒色光沢粒を含む	
349	土師器	V層	甑取手部分？	胴部～底部		3.4		ナデ、スス付着か？	ナデ	にぶい黄橙 黄灰	灰	4mm以下の灰黄・灰白・黒褐・にぶい橙・淡橙・透明光沢・黒色光沢粒を含む	
350	須恵器	V層	甕	口縁部				回転ナデ	回転ナデ	灰黄	灰	4mm以下の浅黄橙・暗褐・黄褐色粒を含む	
351	須恵器	V層	壺	頸部				突帯、回転ナデ	回転ナデ	灰黄	浅黄	1.5mm以下の灰・淡黄・灰白・透明光沢粒を含む	
352	須恵器	V層	坏蓋	口縁部～体部				回転ナデ	回転ナデ	灰	灰	3mm以下の合灰白・黄褐色粒を含む	
353	土師器	V層	土錘		長さ 3.8	幅 1.15	重量 4.2g					5mm以下の黒・黒褐・灰白・灰色粒、3mm以下の灰褐色粒を含む	
354	陶磁器	山口 1-SA Ⅱ層	壺	体部～底部		推定5.1		施釉、露胎	露胎	灰白	にぶい赤褐	精良 2.5mm以下の灰白粒を含む	
355	陶磁器	山口 V	甕	体部				施釉	タタキ	黒褐 暗褐	にぶい赤褐	2mm以下の灰白粒を含む	
356	陶磁器	山口 SH13	碗	底部		推定5.8		回転ナデ、露胎	施釉、釉ハギ、見込み釉ハギ	灰黄	灰オリーブ 灰黄	精良	
357	陶磁器	山口 AS/a Ⅳ層	碗	体部～底部付近				施釉、露胎、回転ナデ	施釉	黒褐 灰黄 灰褐	黒褐 灰黄 灰褐	精良	
358	陶磁器	山口 1-SA Ⅱ層	皿	底部		推定5.5		回転ナデ、露胎、底部に一部面取り、砂目	施釉、露胎、重ね焼きの跡あり	にぶい黄橙	灰オリーブ	精良	
359	陶磁器	山口 B5-C Ⅳ層	皿	体部				施釉	施釉	暗ｵﾘｰﾌﾞ褐 灰白 浅黄	暗ｵﾘｰﾌﾞ褐 浅黄	精良	

第Ⅳ章　普及啓発

宮崎県埋蔵文化財センターでは、普及活動の重要性と必要性を考え、様々な活動を行ってきた。

学校における文化財の活用に関しては、ことさら目新しいものではなく、学校・文化財行政の相互の要請により、従前から実施していたことは確かである。では、何故、今、学校での文化財の活用を問い直す必要があるのかといえば、学校教育の変革に伴い、制度的に文化財を活用する門戸が開かれようとしているからである。

平成14年度から完全実施された新学習指導要領では、地域の特性・人材を生かした学習活動が盛り込まれている。地域学習と学校の一層の連携、人材バンクを望んでいる。その上で「総合的な学習の時間」の実施に伴う外部講師の積極的な活用や、地域の教育資源の有効利用は、地域研究の膨大な蓄積がある文化財関連諸学の成果を活かす格好の機会である。また、埋蔵文化財を通して、我が国の歴史を正しく認識、理解させることは、自国の歴史に誇りを持たせ、これからの国際社会において自国の歴史を理解する上でも重要な事である。

そこで、山口遺跡第２地点では、普及啓発活動を３回実施した。「山口遺跡第２地点遺跡説明会」「遺跡を通じた総合的な学習の時間－延岡市立上南方小学校－」「発掘調査を活用した職業体験学習－延岡市立南方中学校－」である。特に、学校教育との連携ということで実施した「遺跡を通じた総合的な学習の時間」は、１年間を通して、「遺跡を通じた地域学習」を学習に取り入れ、開かれた学校として、地域の教育力を生かす総合的な学習の構成を試みるものとなった。

子どもたちが埋蔵文化財センターで学ぶ大切なことは、専門的な知識や技能だけでなく、予想以上に広がる活動を他者と協力しながら成し遂げようとしていることである。さらに、多くの児童生徒が見通しを持って活動に取り組み、積極的に解決の方法を探る姿勢が身に付き、自己課題の追求にも前向きに取り組めるようになることである。そして、埋蔵文化財センター、地域の方々との関わりを通して、コミュニケーション能力をはじめとする人間性も身に付いてくるのである。

山口遺跡第２地点に係わる普及啓発活動は以下の日程で行った。実施にあたっては、国土交通省九州地方整備局、東臼杵教育事務所、延岡市教育委員会をはじめとする関係諸機関の協力を得た。

◆平成14年５月29日（水）「**職業体験学習**」を実施。
- 延岡市立南方中学校主催（午前８時30分から午後４時30分）
- 参加生徒　南方中学校３年生４名（男子２名：女子２名）

◆平成14年６月27日（木）「**遺跡を通じた総合的な学習の時間：遺跡発掘の体験学習**」を実施
- 延岡市立上南方小学校主催（午前９時から午前11時30分）
- 参加生徒　上南方小学校６年生26名

◆平成14年７月13日（土）「**山口遺跡第２地点現地説明会**」を実施。
- 宮崎県埋蔵文化財センター主催（午後１時から午後３時）
- 見学者85名

「山口遺跡第２地点を通じた総合的な学習の時間」年間指導計画

学期	月	単　元　名	時数	備　考
1	5	○山口遺跡第２地点を調べて、そこにあった土器を作ろう。①		
		（１）テーマの決定。	1	遺跡発掘体験
		（２）遺跡について調べる。	1	（H14. 6. 27）
		（３）発掘調査をする。（体験学習）	4	外部指導者に
		（４）発掘された土器を観察する。	1	による授業実践
		（５）土器の特徴をまとめ、人々のくらしを考える。	1	（H14. 7. 5）
2	9	○山口遺跡第２地点を調べて、竪穴式住居を作ってみよう。①		
		（１）テーマの決定。	1	
		（２）竪穴式住居について調べる。	1	
		（３）発掘調査の状況を調査する。（調査活動）	4	
		（４）竪穴式住居についてまとめ、人々のくらしを考える。	2	
	10	○山口遺跡第２地点を調べて、そこにあった土器を作ろう。②		
		（１）土器づくりをする。	2	外部指導者支援
		○山口遺跡第２地点を調べて、竪穴式住居を作ってみよう。②		
		（１）竪穴式住居づくりをする。	5	外部指導者支援
	11	○縄文時代の食生活を体験しよう。		
		（１）縄文時代の食材、調理方法を調べる。	2	外部指導者支援
		（２）縄文食の調理計画を立てる。	1	
		（３）縄文食の調理実習。	4	
		（４）縄文時代の食生活についてまとめる。	1	
3	2	○学習のまとめをする。	5	
		（１）わくわく発表会にむけての準備をする。		
	3	○「わくわく発表会」	2	

◆　埋蔵文化財センター支援情報

①　遺跡地図は、宮崎県埋蔵文化財センター及び延岡市教育委員会が保管している。その他は、発掘調査報告書に遺跡の位置と簡単な性格が記載されている。

②　考古資料は、宮崎県埋蔵文化財センター、県立博物館、延岡市教育委員会、歴史民俗資料館、公民館等に保管されている。

③　土器の写真は歴史図鑑や美術図鑑などに載っているので活用できる。また、埋蔵文化財センターホームページにも県内の各遺跡の写真等を掲載している。

テーマ:第６学年総合的な学習の時間(わくわくチャレンジの時間)学習指導案

平成14年６月27日（木）

山口遺跡第２地点を調べて、そこにあった土器を作ろう！

1　単元の目標

○　遺跡や発掘された考古資料や情報を調べることによって、郷土の歴史遺産のすばらしさに気づかせる。

○　遺跡や発掘された考古資料や情報をもとに、自ら自分の課題を決めたり、学習計画を立てて、意欲的に課題解決をしようとする態度を育てる。

○　縄文時代の生活を疑似体験することによって、当時の人々の苦労や努力、生活の変化や継承

2　指導計画

時間	学　習　活　動	教　師　の　支　援
1	1　山口遺跡第２地点を調べる学習の計画を立てる。 ○やってみたいことを考える。 ○テーマを決める。	●意欲的、自主的に活動できるように自分たちで調べて行くことにする。
1	2　遺跡について調べる。 ○図書室で資料を探す。 ○遺跡について調べる。	●市立図書館への協力を依頼する。 ●社会科で学習した遺跡についてより詳しく調べさせる。
4	3　発掘調査をする。 ○山口遺跡第２地点で発掘作業の体験学習をする。	●実際に発掘されたものから、当時の生活を忍ばせたり、時代の変化に気づかせる。
1	4　出てきた土器を観察する。 ○土器を観察して特徴をまとめる。	●どのような特徴を記すべきか、的確に観察できるようにする。
1	5　土器の特徴をまとめ、人々のくらしを考える。 ○土器から当時の人々のくらしを考える。	●発掘された土器から考えられる当時の人々のくらしについて考える。
2	6　土器づくりをする。 ○文様の付け方を観察し、土器を作る。	●発掘した土器を思い出させながら、取り組ませる。

◆　活動の留意点

①　発掘作業員との幅広い年齢層との交流を図り、知恵や技術を学ぶ。

②　サポーティングティーチャー（延岡市文化課との交流）を探し、児童の興味・関心を満たせるような専門的な知識を持たせる。

③　学年通信等を使い、保護者への説明責任を果たし、理解協力を求める。

第15表　「山口遺跡第２地点を通じた総合的な学習の時間」年間指導計画・学習指導案

山口遺跡第２地点【上南方小学校：体験活動の様子】

第Ⅴ章　総　括

山口遺跡第２地点においては、弥生時代後期から古墳時代中後期の竪穴住居跡38軒、土壙墓１基、土坑７基の遺構・遺物が検出された。以下各時期における遺構群・遺物の概略をまとめ、調査報告の概括としたい。

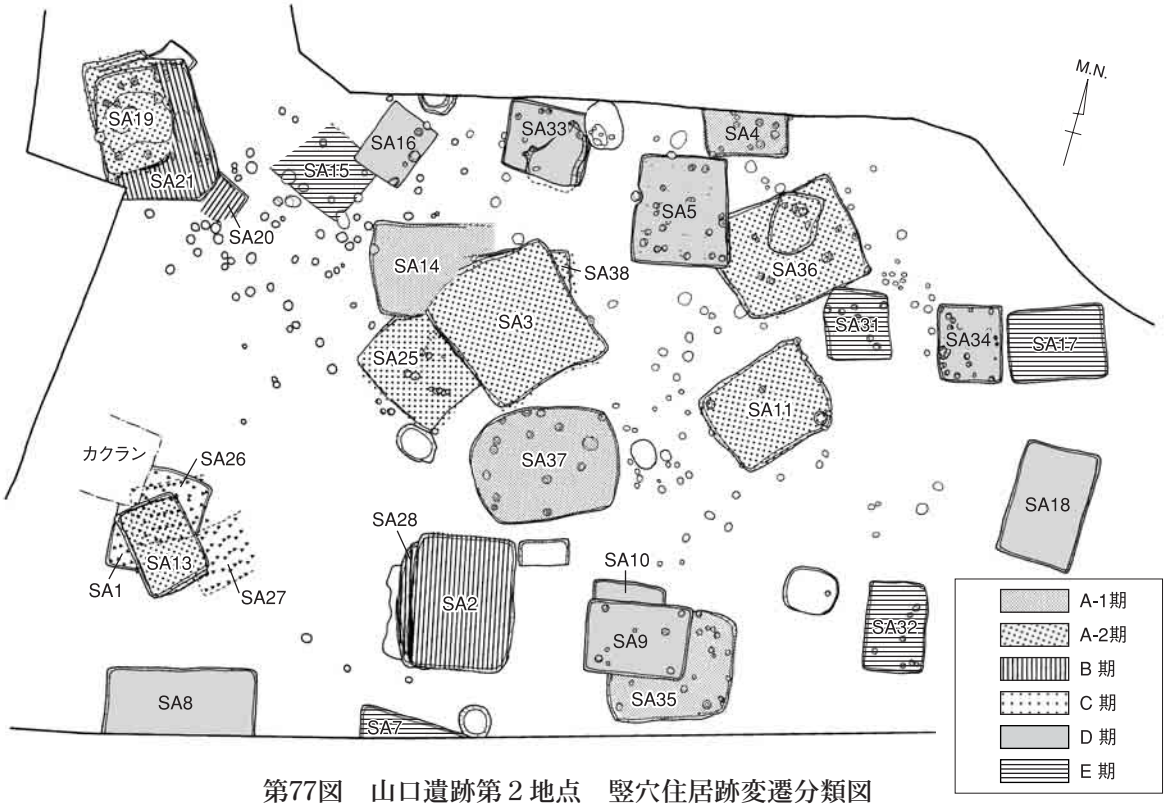
１　弥生・古墳時代の遺構について

（１）集落構成

山口遺跡第２地点は細見川の左岸、細見川により開析された標高約16ｍの河岸段丘縁辺部の沖積低地に位置する。河床と遺跡の比高差は現況で約２ｍである。本遺跡の堆積土壌は、黄褐色砂質河成二次堆積土すなわち氾濫土であり、わずかな降雨で冠水するなど、水の引きは非常に悪い。そのため現在の集落は、遺跡東部の丘陵裾部に営まれている。そして沖積地の多くは水田や畑地として利用されている。

本遺跡の現況は水田であったが、旧地形は圃場整理事業により大規模な改変がなされており不明な点が多い。調査区に入れたトレンチの情報を断片的に分析すると、本遺跡造営以前、少なくとも弥生時代以前には調査区は細見川の一部だったことが窺える。その後、河川の氾濫等自然の営力により土砂が堆積する。河の流れが微妙に変化するとともに、弥生時代終末から集落が営まれることになる。集落は、古墳時代前中期をピークに、平安時代まで続くと考えられる。

河川を目前に控えた集落だけに、数多くの被災の痕跡を留めているが、平安時代以降にそれまでには類を見ない災害に見舞われることになる。おそらく、調査区すべてが水没し沼地と化したのだろう。結果、集落は調査区東側などの段丘裾部に移動したと考えられる。ここに沖積地が生産地として用いられる端緒が認められ、それが現在まで続いてきたのだろうと思われる。しかし、後背の高台に集落があり、あえて後背湿地に集落を営んだ背景は不明である。



第77図　山口遺跡第２地点　竪穴住居跡変遷分類図

（２）竪穴住居跡について

住居跡はすべて方形プランである。埋土と堆積土の判別が容易ではなく、壁面・床面の検出は非常に困難であった。また、過去の耕地整理により竪穴が削平され床面付近での検出となった住居跡も多い。基本的に住居中央部に焼土や炭化物の広がり、硬化面を持つ。そのため単独で焼土がある場合は、竪穴が焼失している竪穴住居跡と判断し遺物の広がり、土質の変化をもとに住居跡の範囲を推定した。遺構検出面は第Ⅳ層上面である。以下、個別に検討する。

①　竪穴住居跡の平面形態及びその内部構造

平面形はおおよそ方形を基準として構築されたことが理解できるが、規模的な観点から平面形も含めて類別すると、次のように細分化が可能である。

Ⅰ類　長軸が５ｍを越える大型住居

ａ．主軸長が若干短い横長の長方形プラン…１１・１４・３５・３６・３７号住居跡

ｂ．主軸長が若干長い縦長の長方形プラン…２・２１号住居跡

ｃ．正方形プラン……３・２８号住居跡

Ⅱ類　長軸が４ｍ以上５ｍ未満を測る中型住居

ａ．主軸長が若干短い横長の長方形プラン…９・１７住居跡

ｂ．主軸長が若干長い縦長の長方形プラン…１・５・１８・１９住居跡

Ⅲ類　長軸が２ｍ以上４ｍ未満の小型住居

ａ．長方形プラン……４・１３・１６・３２住居跡

ｂ．正方形プラン……３１・３３・３４住居跡

Ⅳ類　プランが不明である。……７・８・１０・１５・２０・２５・２６・２７・３８住居跡

などの類型に分けて捉えられる。

Ⅰ－ａ・ｂ類についてみると長軸が５～６ｍであり、この遺跡では大型の部類にはいる。柱穴はすべて４本柱であるが、炉及び貯蔵穴については検出できなかった。しかし、Ⅰ－ｃの３号住居跡については、不定形の掘り込み（貯蔵穴？）や炭化物を含んだ石組が検出され火所として利用された可能性がある。また３号住居跡には多くの炭化材が検出され焼失家屋と考えられる。床面の貼床が確認できたのは１４号・３６号住居跡で他の住居跡については遺存状態が悪く貼床の有無がはっきりしなかった。

Ⅱ－ａ・ｂ類についてみると１辺が４ｍ前後で、柱穴は２本柱から４本柱である。

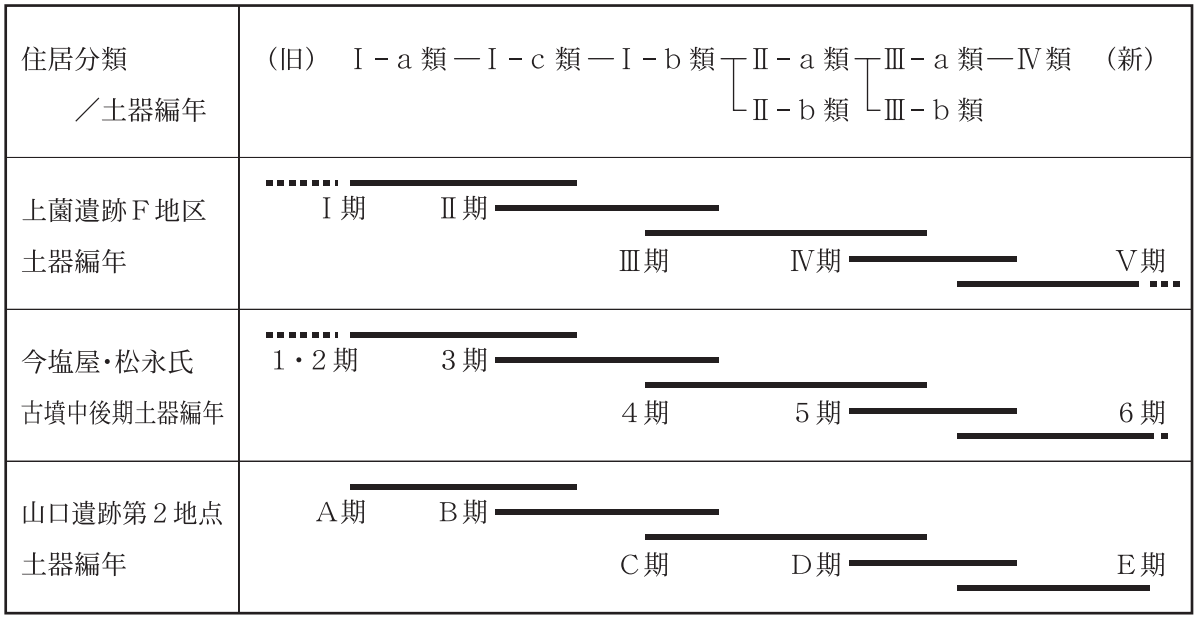
Ⅲ類についてみると長軸が2.72～3.64mと小型で主柱穴はすべて４本柱である。ただ深さがかなり浅く10～20㎝ぐらいで、検出した面が堀り底に近い状態であった。また、小型、中型の住居跡は、貯蔵穴等の付属施設は伴わないと思われる。

Ⅳ類については切り合った状況の中で、平面プランの確認ができなかったもの、不明なものを一括して取りまとめたものである。以上分類ごとに述べてきたが、各分類をみてもさらに多種におよぶと考えられる。本遺跡の時間的変遷をみると、河川の氾濫等により短時間にさまざまな形態の住居跡が出現し、変化していったことが伺える。

②　住居跡の分布と時間の変遷

それでは、分類ごとの住居跡の分布状態をみてみると、その形態ごとにまとまりがあることがうかがえる。遺跡全体のうち、東西において線的にしかうかがえないが、分布の移動及び住居跡の切り合い関係から、時期の変遷が僅かではあるが、うかがうことができる。調査区の東側から順にそのまとまりを

見てみることにすると、調査区東側から調査区壁沿いにⅢ類が点在する。遺跡のほぼ中央にⅠ類ａ・ｂとⅡ類ａ・ｂがあり、これらの類はお互いに重複している。また、主軸方位の関係から１４・３７・３５号住居跡と２５・３・３６・１１号住居跡はそれぞれ同時期ではないかと予想される。このように、大まかではあるが、グループごとにその変遷が見えてくる。さらに、これらのグループに属する住居跡の切り合い関係から見てみると、一部不明確な面もあるが、第１竪穴住居跡群・第３竪穴住居跡群においては、時期差がなく住居の建て替えが行われた可能性がある。そこで、以下のような新旧関係が浮かび上がる。



ただし、単純に何ｍをもって何型とする基準は無意味であり、そこでの理解は１時期における住居構成や個々の性格と機能、出土遺物等を関連づけて追求することはもちろんであるが、当時の環境（細見川の氾濫等における住居の位置関係：第77図参照）などにも目を向けていく必要がある。

県内の遺跡から本遺跡と類似している遺跡をみると、東郷町鶴野内中水流遺跡、新富町上薗Ｆ地区遺跡、国富町西下本庄遺跡などがある。特に鶴野内中水流遺跡と類似しており、時期が下がるほど小規模化していく傾向がうかがえる点にある。また、本遺跡は上薗遺跡のように、何れも短時間あるいは断続的に中期から後期まで継続している。谷口武範氏の「上薗遺跡Ｆ地区出土土器編年表」による上薗遺跡の集落形成と類似しており、本遺跡もⅣ期あるいはⅤ期に住居の数が大幅に増加し、それ以降は急速に集落の規模は縮小するものの、１世紀以上継続した集落であると思われる。

２　弥生・古墳時代の遺物について

各住居跡の中から、かなりの量の土器が出土した。その器形は甕・壺・高坏・鉢・坏・椀・手捏土器等で、数千点に及ぶ。本報告書に掲載できたのはその一部である。

山口遺跡第２地点は五ヶ瀬川の北岸にあって丘陵が複雑に入り込んだ所に位置する。五ヶ瀬川は、西は熊本、大分両県境の九州山地に源を発して、高千穂町、日之影町、北方町と順次東流して日向灘に至る県北随一の河川であり、流域に各時代の文化を育んでいる。両地方（大分・熊本）、さらに瀬戸内地方の影響を受けていたと考えられる。また、それらの影響を受けつつも独自の文化を受け継いでいたともいえる。土器についてもこのことがうかがい知れる。ただ延岡市における弥生時代終末から古墳時代中後期までの遺跡の発掘例が乏しく、他遺跡との対比が出来なかったことから明瞭な時期判断が出来な

かった。このような理由から「弥生時代後期から古墳時代中後期にかけて」と曖昧な時期判断をせざるを得なかった。ここでは、前述で分類した住居跡のうち、大まかな住居跡を選出し、それから出土した土器を比較することで、時期の変遷を見てみることにする。なお、時期決定については、須恵器との供伴関係から求め、また、土器の時期区分については、今塩屋毅行・松永幸寿氏による「日向における古墳時代中～後期の土師器」、谷口武範氏の「上薗遺跡Ｆ地区出土土器編年表」を参考にし、山口遺跡第２地点土器編年（Ａ期～Ｅ期）を作成した。時期差が土器関連等からかなり重複すると考えられる。

（１）甕

Ａ期については２時期に細分化される。Ａ－１期の甕は、口縁部が「くの字」状で口縁部付け根付近から外反するもの（121・294）、直立して伸びるもの（116）があるが、その内面の稜線はいずれも明瞭である。また外器面にタタキが施されている。ただ、底部のつくりがやや小さく、胴部の大きさに対して不安定な印象を与える。Ａ－２期の甕は、外器面にタタキが消え最終調整が板状工具によるナデ、または指によるナデ仕上げによるものが主体である。口縁部が立ち上がり気味に開くもの（13・67・206・276）、短く外反するもの（162）がある。住居跡Ｉ－ｃ類については３号住居であり、土器の時期幅が広く、川の氾濫による建て替え等の影響ではないかと思われる。また、本遺跡はこの時期に集中しており、住居跡Ｉ－ｂ類～Ⅱａ・ｂ類に至っては木の葉底を呈する甕が多くなってくる。また、口縁部が短く屈曲するもの（125）、胴部の中位が張るもの（115･18）等がある。４号住居跡出土土器（121）については弥生時代後期の土器と考えられる。吉本正典氏は宮崎平野出土の甕を大きく２つに分類した。一つは、布留式土器の影響を受けた球形胴甕、もう一つは弥生時代後期後半以来の伝統をもつ在地系甕である。本遺跡の甕は２１号住居跡に多くみられるように布留式土器の影響を受けた球形胴甕（199・203～205）が全体的に多く、年代は５世紀中頃から後半前後と考えられる。

（２）壺

Ａ期～Ｂ期の壺は「くの字」状に内傾する二次口縁部をもつ二重口縁壺（299・300）や小型丸底壺（341）がみられる。Ｂ期の住居跡Ｉ－ｂ類期については頸部に刻目突帯を貼る大型壺（259）や頸部の稜が曖昧になり、最大径が胴部上位あるいは中位にくる。底部は尖底気味の小さな平底や厚手の丸底となる。二重口縁壺がこの時期に姿を消すなど器種構成が変化する時期である。Ｃ期については扁球気味の小型壺（26）が主体となり底部は平底を呈する。Ｄ期については供膳具といえる須恵器模倣の甕（311）がみられる。供膳具や銘々器と考えられる須恵器の蓋坏や高坏が日常生活に定着してきたことと連動し、生活習慣の変化を読みとることができる。Ｄ期～Ｅ期については球形胴に長い口縁部が付く長頸壺がみられる。一方で口縁部付け根付近に刻目突帯を有する大形の壺はこの時期で消滅すると考えられる。Ｅ期の壺（212）は球形の胴部を呈し底部は厚手の平底となる。

（３）高坏

Ａ期～Ｃ期の高坏は坏部体部と口縁部の境がやや不明瞭となり、口縁部が大きく外方に開く。高坏を分類すると坏部に４形態、脚部に６形態ある。坏部は、ａ坏部が深く口縁部が大きく開き口縁25㎝を越えるもの（216）、ｂ坏部が浅く屈折部の稜が明瞭なもの（30・91・177・219・222）、ｃ坏部が浅く口縁部が外反するもの（215）、ｄ椀状をなすもの（２・21・27）、ｃについては短い脚部に内湾した裾部が、ｄには長目の脚部に外反する裾部がそれぞれ付く。それ以外の全体形については不明である。脚部については脚部が短いという新相と、エンタシス状の脚部や裾部が内湾するなど古い様相がみられる。

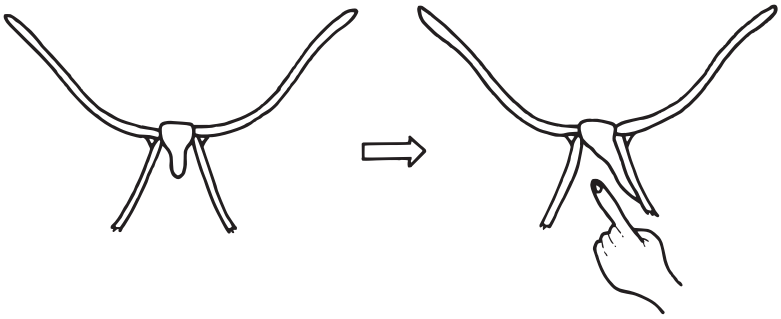
出土資料のうち、高坏のほとんどは中空の柱であることが観察できた。脚柱部が露出した資料を観察

すると、中空の坏と脚部に後から粘土塊を挿入した状態がみられた。また明瞭に支持土が付着した状態の資料も存在している。以上の点からこれらの粘土塊は中空の坏、脚部の接合時に上部から差込むために制作されたものであることが推察される。

資料１－１：山口遺跡第２地点の高坏・坏、脚部接合部

資料１－２：山口遺跡第２地点の高坏・坏、脚部接合部

この粘土塊を差込む技法は、前田千津子氏によると、畿内地方の高坏は弥生時代中期～奈良・平安時代の土師器までの長きにわたり、もろもろの方法こそ違うが「円板充填法」が用いられるとした。また、「円板充填法」と並行して、弥生時代後期以降からは、「さし込み法」「貼り付け法」などもみられるようになったと考える。「貼り付け法」については古墳時代前期に多いことも指摘している。



資料２：高坏の製作技法模式図

鹿児島県高山町永野原遺跡では、粘土塊を「充填用円錐塊」とし、脚柱部の接合方法を「円錐塊充填法」としている。当遺跡においても円錐塊充填法によって接合されたもののヘソ部は垂下したままの状態でみられるもの（資料1－1)、脚柱部に指で押さえ付けられた状態で焼成されているもの（資料1－2）がある。これは、舌状に垂下したヘソ部を坏部と脚部との接合度を高めるために支持土として使用した結果ではないかと考えられる。永野原遺跡における「円錐塊充填法」は古墳時代中期と位置づけているが、当遺跡においても同時期（Ａ期～Ｃ期）と考えられる。また、今後宮崎県においても形態だけでなく製作方法にも着目する必要があると思われる。

Ｄ期のころの高坏は体部と口縁部の境がなくなり、口縁部が長くなるため坏部がさらに深くなる(150)。脚部は全体的に短くなり裾部が不明瞭となる。Ｅ期はこれまでの形態が大きく変化し、坏部は椀状のものにかわると推定され、Ｃ期までの高坏はみられない。脚部は厚手で外方に広がり屈曲した裾部は消滅している。

（４）その他の遺物

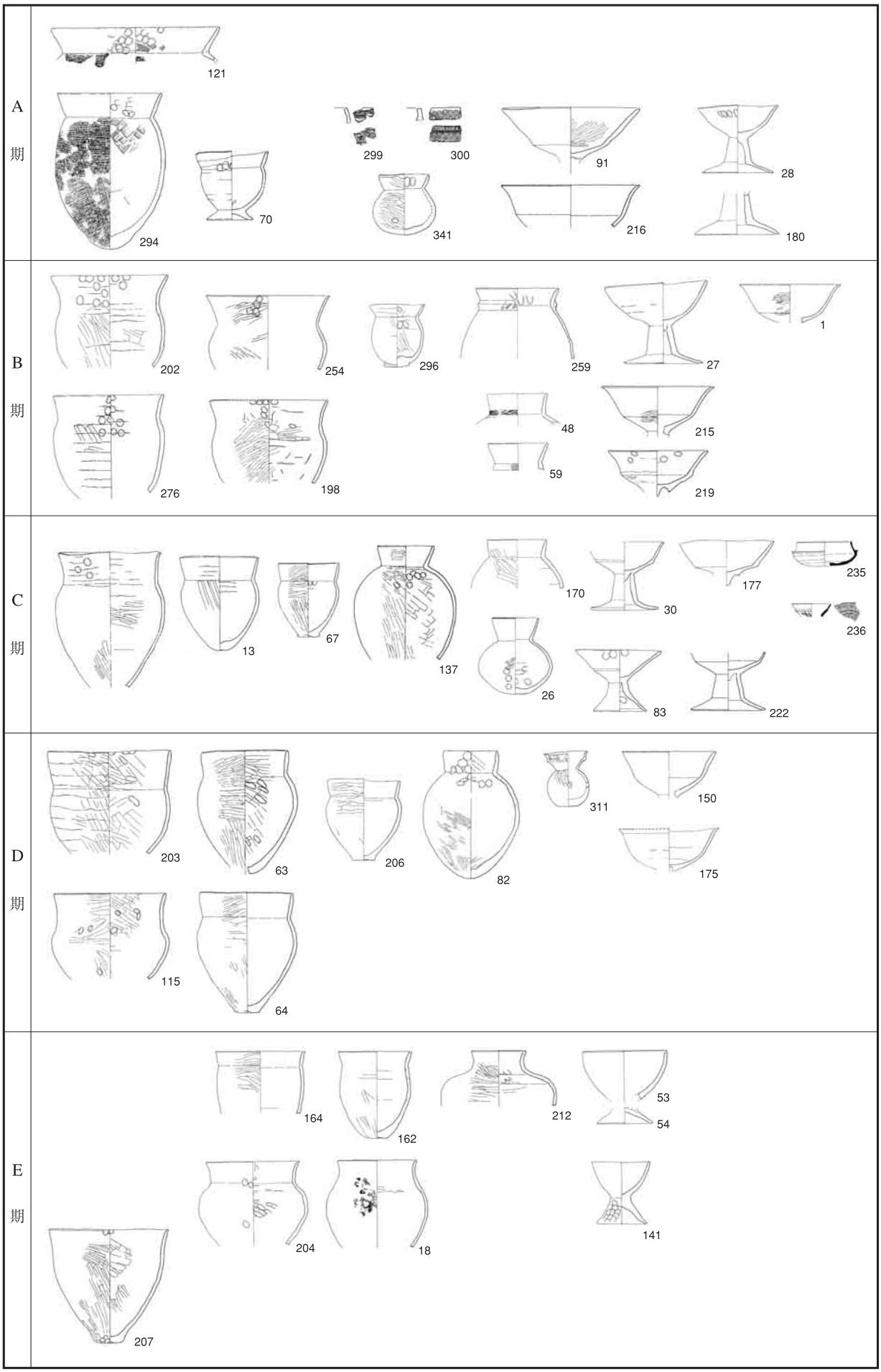
椀は口縁部が内湾気味に立ち上がる形態と器高が高いものがあり、さらに、それぞれの形態に平底あるいは、やや上底の底部がつくものが存在する。ミニチュア土器については、器高４～８㎝程度のもの

を一括してまとめた。コップ形、皿形といった単純な器、片口や台付、通常の土器のように胴部、頸部、口縁部が区別されるものまでの様々な形状である。技術的には手捏ね土器がほとんどであった。実測個体は８個体を数える。須恵器は外面に、格子目タタキを残したままの甕、あるいは、やや内傾し長く伸びた口縁部を持つ坏身などＴＫ２０８段階に平行するものと推定される。ＴＫ２０８段階の坏身については２１号住居跡から出土している。この時期については、供膳具や銘々器と考えられる須恵器の蓋坏や高坏が日常生活に定着してきたことと連動し、生活習慣の変化を読みとることができるのだが、本遺跡において、甑の出土がなく、さらにカマドをもつ住居跡が検出されていない現状では、甑を使った炊飯やカマドが本格的に定着したかどうかは不明である。また、本遺跡における須恵器の出土量は概して低く、土師器の占める割合が極めて高い。一般に言われる煮沸用具としての土師器、供膳用具としての須恵器という使い分けが、この時期から始まったとは想定できない。当遺跡のこの時期はＣ期にあたり、甕や高坏の形態などからＡ～Ｂ期から連続する土器群として考えられるが、甕のタタキの消滅、高坏の小型化、須恵器の出現などＡ～Ｂ期とＣ期との間に大きな変化が認められた。ほぼ同じ時期として国富町西下本庄遺跡１２号住居跡、新富町上薗遺跡Ｆ地区５号・６号住居跡の供伴遺物を検討して判断していきたい。また、Ｃ期以降については、須恵器の壺、坏身等、良好な資料ではないがＴＫ２３～４７段階の併行する土器が２１号住居跡から出土している。

土器以外の遺物では、鉄器および石器がある。鉄器は、鉄鏃・刀子などが出土したが数量としては少なく、石器については、２１号住居跡から蛇紋岩製の勾玉（110）１個が出土した。これは近隣の畑山遺跡出土の勾玉と類似している。３５号住居跡では抉り入りの石庖丁（272）と柳葉式鉄鏃（275）が共伴している。

３　まとめ

弥生時代後期から古墳時代中後期にかけて、本遺跡の土器様相から、それらを通じて当地域の集落構成について上記で述べた。一言でいうと、当遺跡の土器様相は地域間交流によりもたらされた外来の土器とその在地化の繰り返しから成り立っているといえる。今後土器を属性に分解し、それぞれの属性の系譜を追っていくことが必要であり、それが遺跡間、遺跡群間、地域間の交流の実態を明らかにすることにつながるであろう。例えば細見川沿いの上南方地区遺跡（畑山遺跡・中尾原遺跡・山口遺跡第１地点）などである。そして、鉄製品の確保、稲作や灌漑技術といった集落の存在を左右する情報については、恐らく遺跡ごとでなく、遺跡群として入手、共有していたと推察され、弥生時代後期にはこうした遺跡間の有機的なつながりが既に成立していたと考えられる。情報センターとしての役割をもっていた遺跡もあれば、ある種の情報に通じていた遺跡もあったかもしれない。そうした面は他の遺跡に依存していた遺跡もあったのであろう。こうした地域の中での遺跡間の関係や各遺跡の役割を追求していくためには、外からの情報の入り方、受け取り方から見た遺跡の性格を把握する必要がある。土器に関する情報だけで、これが可能なわけではないが、最も材料が揃っているところから始めるしかない。ただしそれには、上記のような情報と土器づくりに関する情報との構造的な関係を整理しておくことが必要である。また、古墳時代前期から中後期にかけての土器群について、土師器を中心とした編年的見通しを叩き台として提示したが、今回当遺跡で検出された住居跡の報告は、上南方地区全体を網羅しているわけでなく、あくまで山口遺跡第２地点における状況を示し、今後については全体の報告（畑山遺跡・中尾原遺跡・山田遺跡等）を待ってその責を果たさなければならない。



第16表　山口遺跡第２地点　出土土器編年表

＜参考・引用文献＞（敬省略）

「上南方地区遺跡」『延岡市文化財調査報告書』第８集　延岡市教育委員会　1992

「差木野遺跡」『延岡市文化財調査報告書』第９集　延岡市教育委員会　1992

「貝の畑遺跡」『第二次日向遺跡総合調査　第二・第三』宮崎県教育委員会　1967

「野田町八田遺跡」延岡市教育委員会　1978

「地蔵ヶ森遺跡」『宮崎県史　資料編　考古２』宮崎県　1993

「林遺跡」宮崎県教育委員会　1990

「上薗遺跡」『宮崎県史　資料編　考古２』宮崎県　1993

「大戸ノ口第二遺跡」『高鍋町文化財調査報告書』第５集　高鍋町教育委員会　1991

「延岡市苺田窯跡」『宮崎県文化財報告書』第９集　宮崎県教育委員会　1992

延岡市教育委員会　平成３年調査

金関恕／佐原眞　編『弥生文化の研究　７弥生集落』雄山閣　1997

石野博信／岩崎卓也／河上邦彦／白石太一郎　編『古墳時代の研究　２集落と豪族居館』雄山閣　1994

「木脇遺跡（旧石器時代～弥生時代編）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第43集　宮崎県教育委員会　2001

「木脇遺跡（古墳時代～中世編）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第43集　宮崎県教育委員会　2001

「鶴野内中水流遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第16集　宮崎県教育委員会　2001

「西下本庄遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第15集　宮崎県教育委員会　1999

「永野原遺跡」『高山町埋蔵文化財発掘調査報告書』（7）鹿児島県高山町教育委員会　2000

「北原牧地区遺跡　上薗遺跡Ｆ地区」『新富町文化財調査報告書』第18集　宮崎県新富町教育委員会　1995

「北原牧地区遺跡　上薗遺跡ＡＢＣ地区（1）」『新富町文化財調査報告書』第18集　宮崎県新富町教育委員会　1995

「北原牧地区遺跡　上薗遺跡Ｅ地区（1）」『新富町文化財調査報告書』第18集　宮崎県新富町教育委員会　1995

「下那珂遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第90集　宮崎県教育委員会　2004

「陣内第２遺跡」『埋蔵文化財調査研究報告Ⅰ』宮崎県総合博物館　1987

「特集　古代の住居－縄文から古墳へ」『季刊考古学』第32号　雄山閣　1990

浅川滋男　編「先史日本の住居とその周辺」『奈良国立文化財研究所シンポジウム報告』同成社　1998

「上の原第３遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第13集　宮崎県教育委員会　1999

「樫野古墳」『８農免農道堅田地区建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』大分県佐伯市教育委員会　1998

石川悦雄　「宮崎平野における弥生土器編年試案－素描（Mk. Ⅱ）」『宮崎考古』第９号　1984

松永幸寿　「宮崎平野部における弥生時代後期中葉～古墳時代中期の土器編年」『宮崎考古』第17号　2001

吉本正典　「宮崎平野出土の土師器に関する編年的考察－須恵器出現以前の資料を中心として－」

『宮崎考古』第14号　1995

松永幸寿　「日向における古式土師器の成立と展開－宮崎平野部を中心として－」

『西南四国－九州間の交流に関する考古学的研究』平成14年度～平成15年度科学研究費補助金（基盤研究（Ｃ）(1)）2004

石川悦雄　「日向における外来系の土器の伝播とその地域性（1）－瀬戸内・畿内系土器の流入とその展開」

宮崎県総合博物館『研究紀要』ＮＯ．９　1983

吉本正典　「日向の庄内式併行期の土器」考古学ジャーナル7月号　1993

第２竪穴住居群（ＳＡ３・ＳＡ14・ＳＡ25・ＳＡ38）

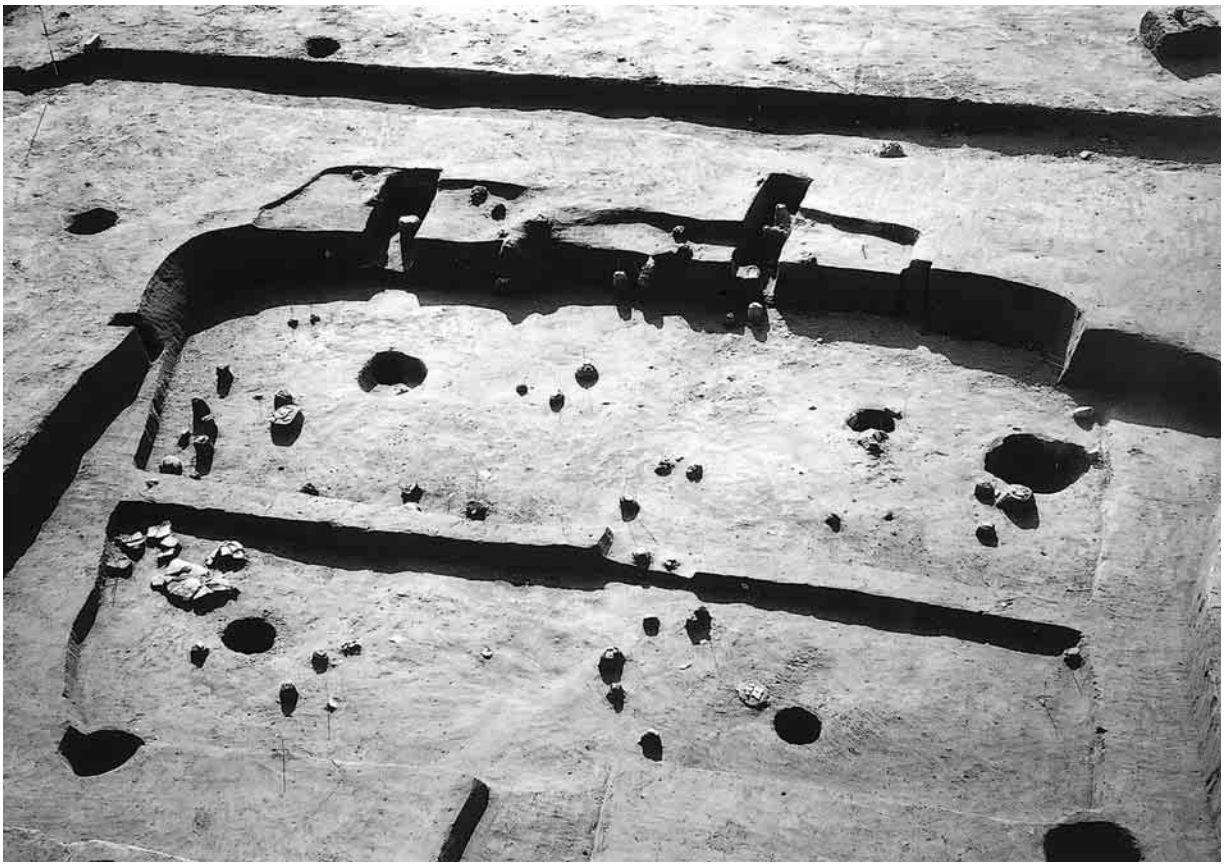
第３竪穴住居群（ＳＡ19・ＳＡ20・ＳＡ21）

37号竪穴住居跡（ＳＡ37）

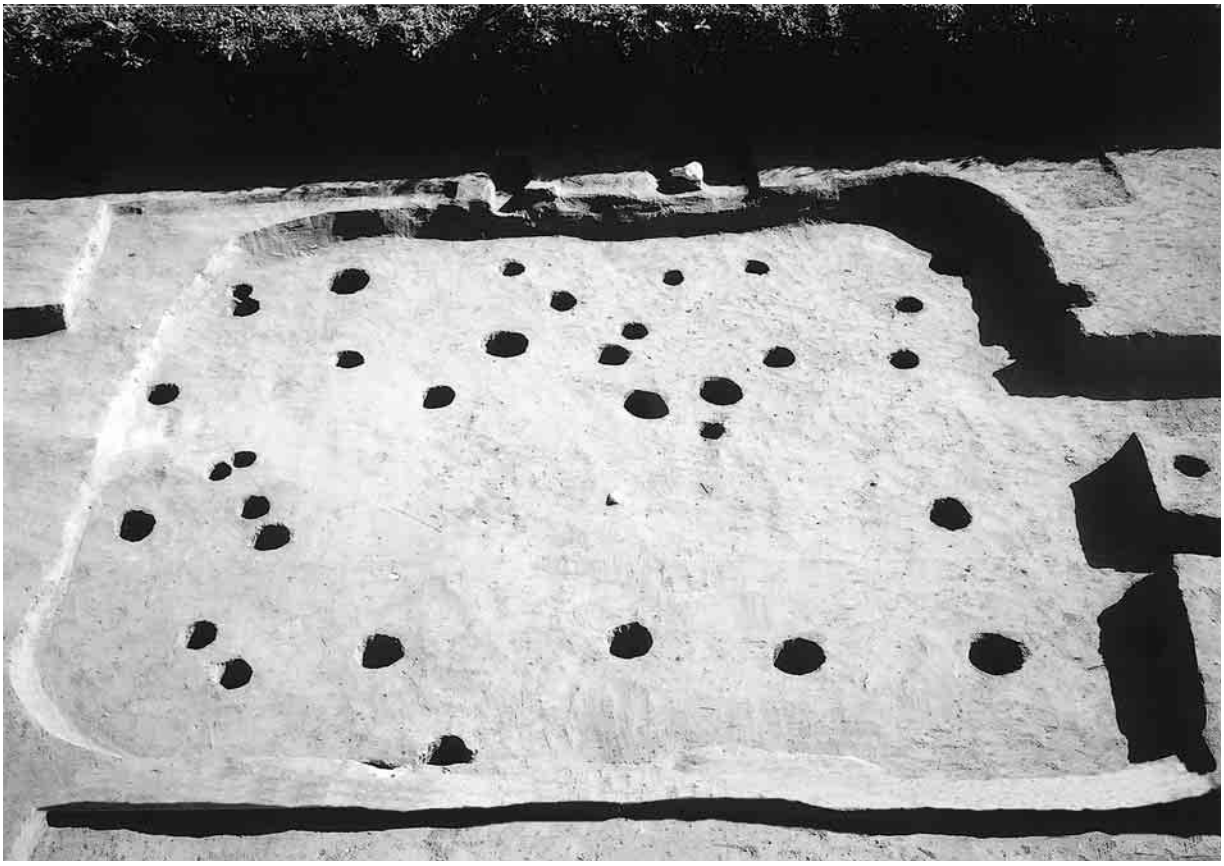
36号竪穴住居跡（ＳＡ36）

5号竪穴住居跡（ＳＡ５）

11号竪穴住居跡（ＳＡ11）

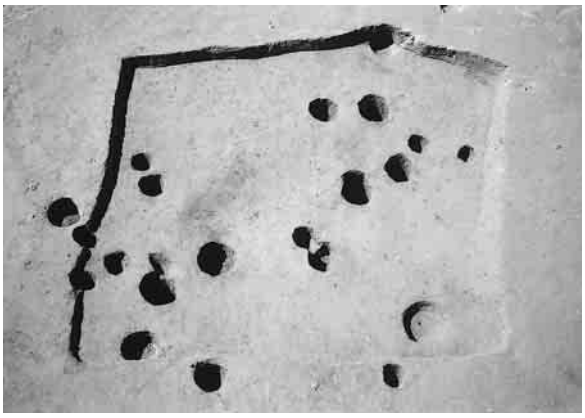


２８号竪穴住居跡（ＳＡ２８）



３５号竪穴住居跡（ＳＡ３５）

調査区中央部 竪穴住居跡検出状況



３１号竪穴住居跡（ＳＡ３１）

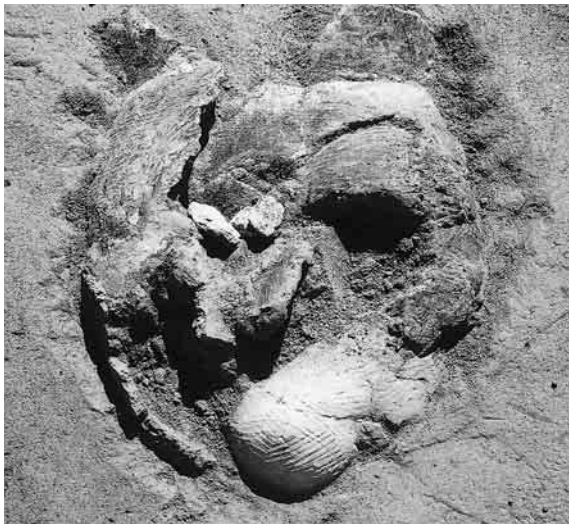
３２号竪穴住居跡（ＳＡ３２）

３４号竪穴住居跡（ＳＡ３４）

４号竪穴住居跡（ＳＡ４）

3号竪穴住居跡検出状況（土器・炭化材）

3号竪穴住居跡　石組検出状況



3号竪穴住居跡　土器検出状況

2号土坑（ＳＣ２）

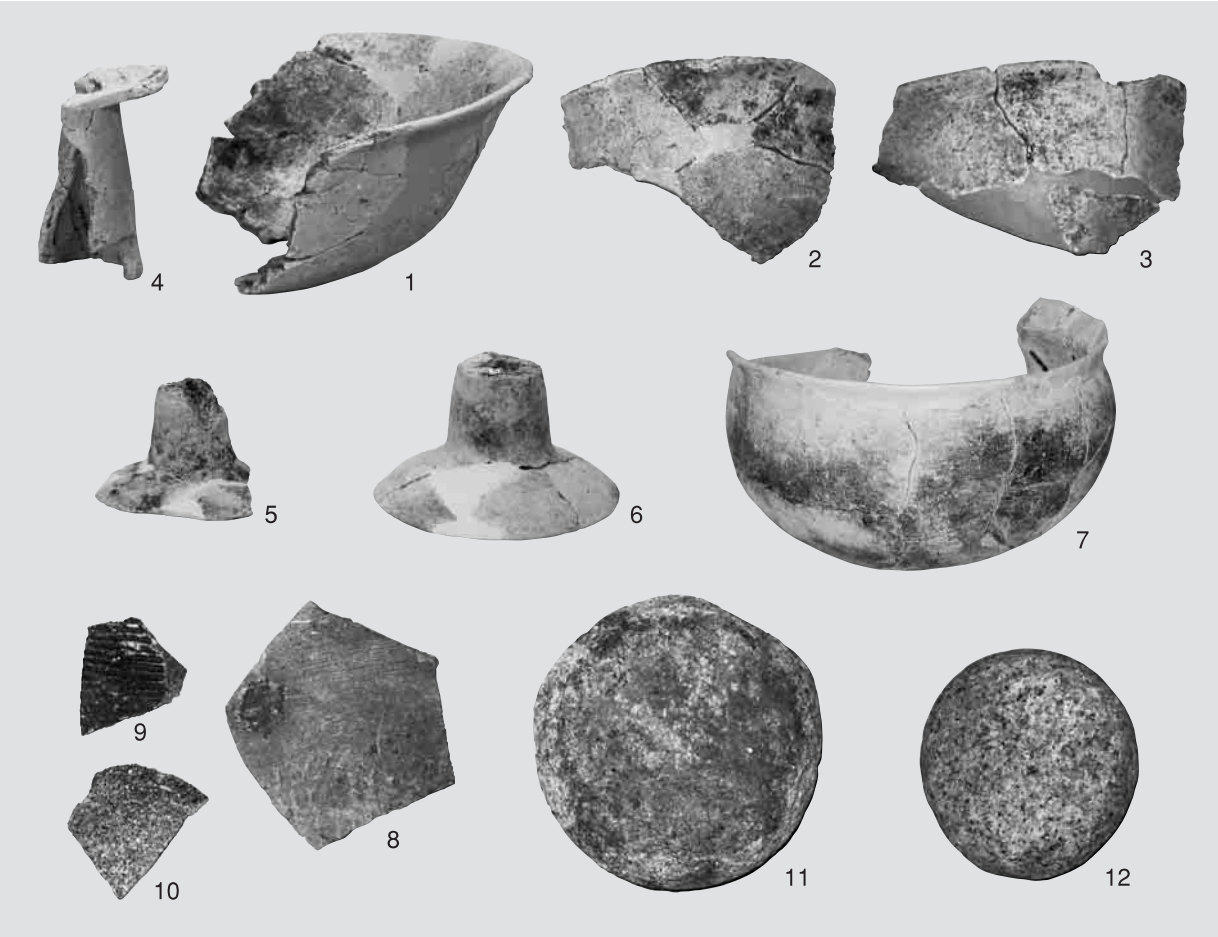
5号土坑（ＳＣ５）

3号竪穴住居跡 土器検出状況

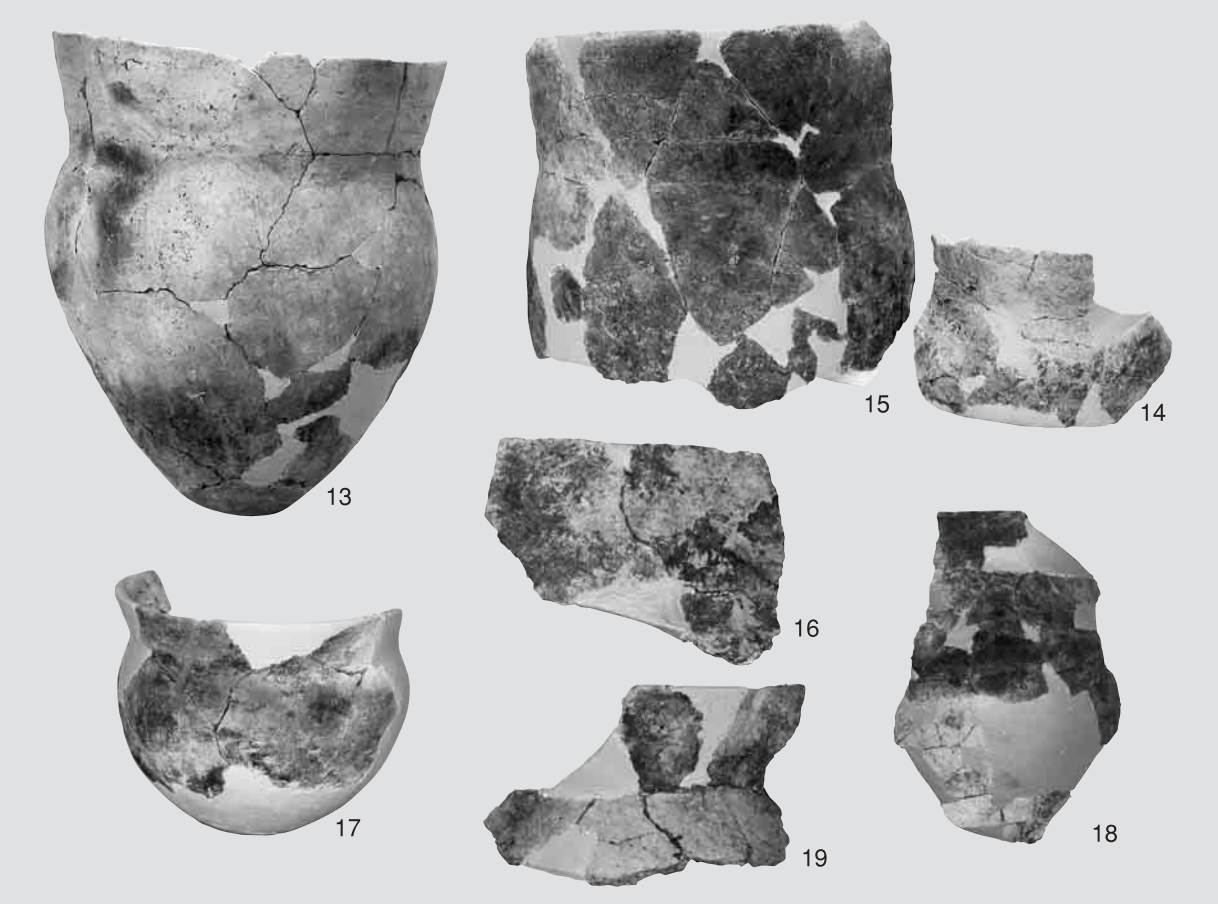
37号竪穴住居 土器検出状況

土器検出状況

作業風景

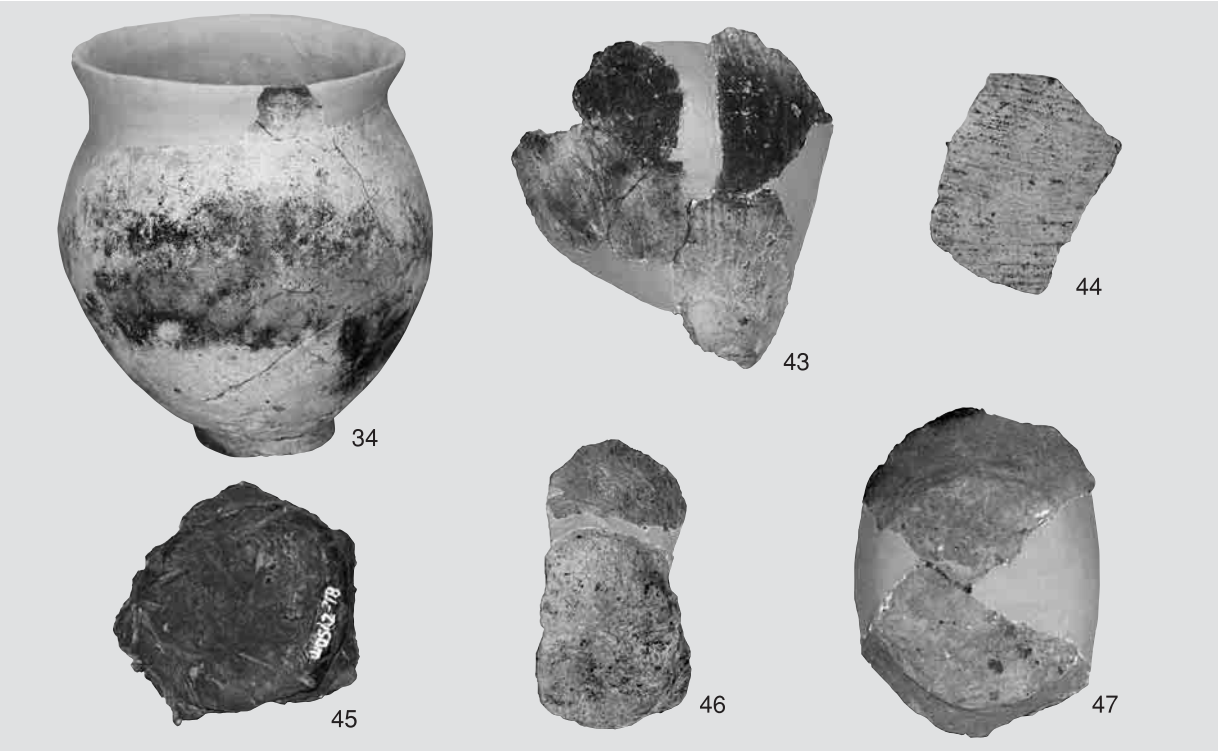


ＳＡ１出土遺物

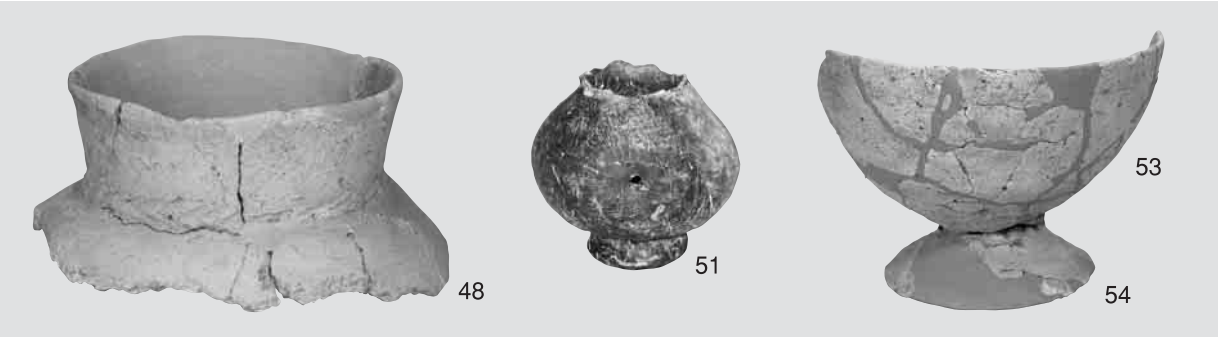


ＳＡ13出土遺物（1）

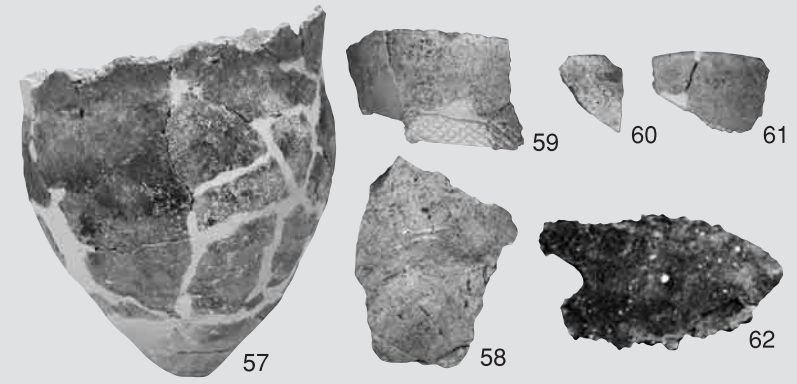
ＳＡ13出土遺物（2）



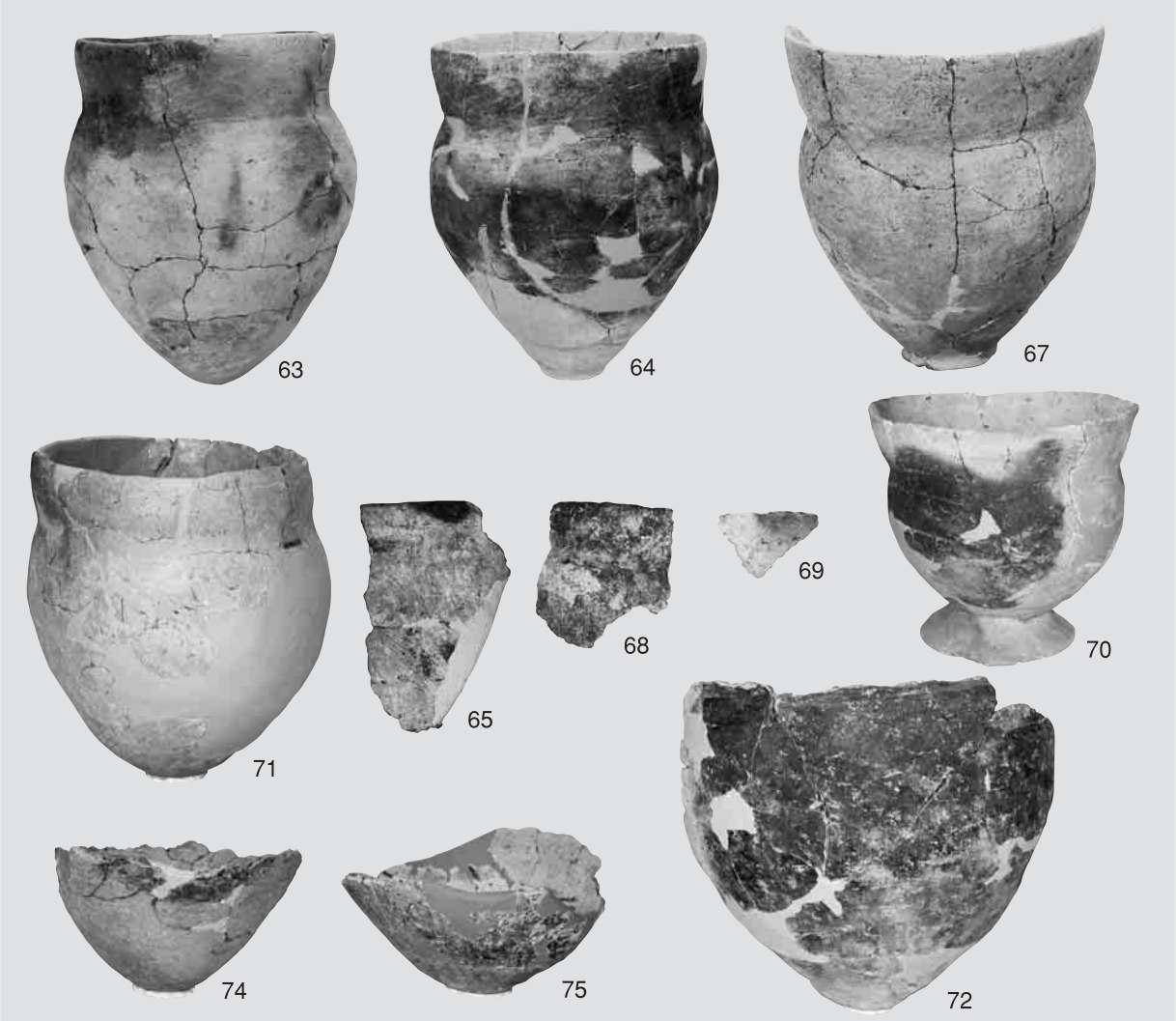
ＳＡ2出土遺物（1）



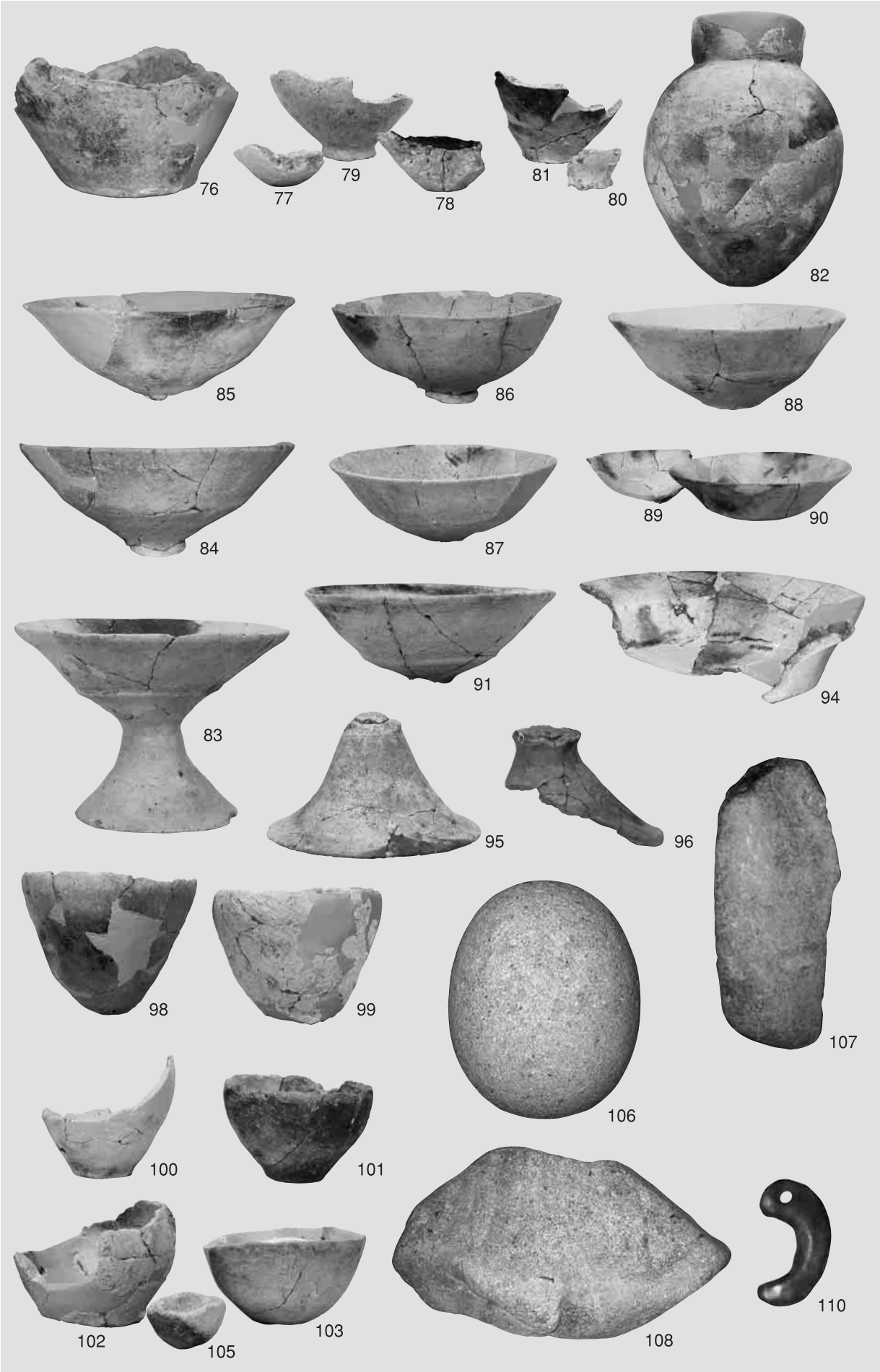
ＳＡ２出土遺物（2）



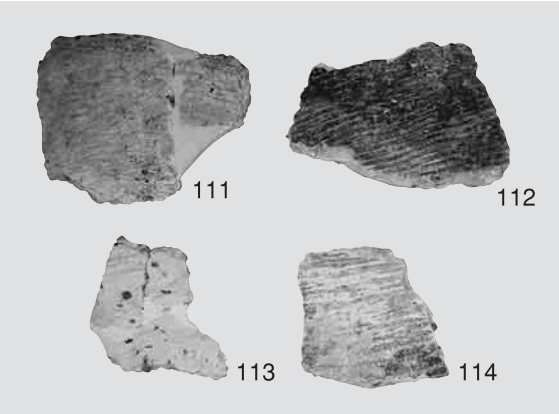
ＳＡ28出土遺物



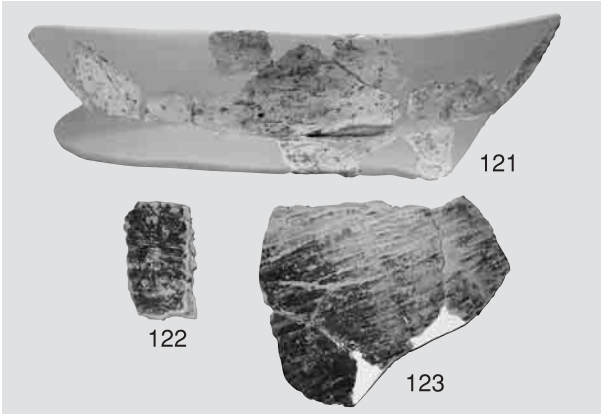
ＳＡ３出土遺物（1）


76
77
79
78
81
80
82
85
86
88
84
87
89
90
91
94
83
95
96
107
98
99
106
100
101
102
105
103
108
110

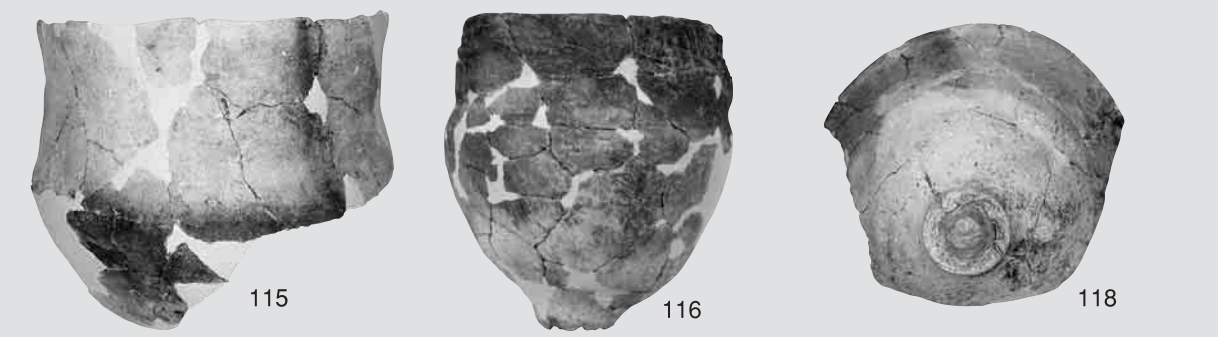
ＳＡ３出土遺物（2）



ＳＡ14出土遺物

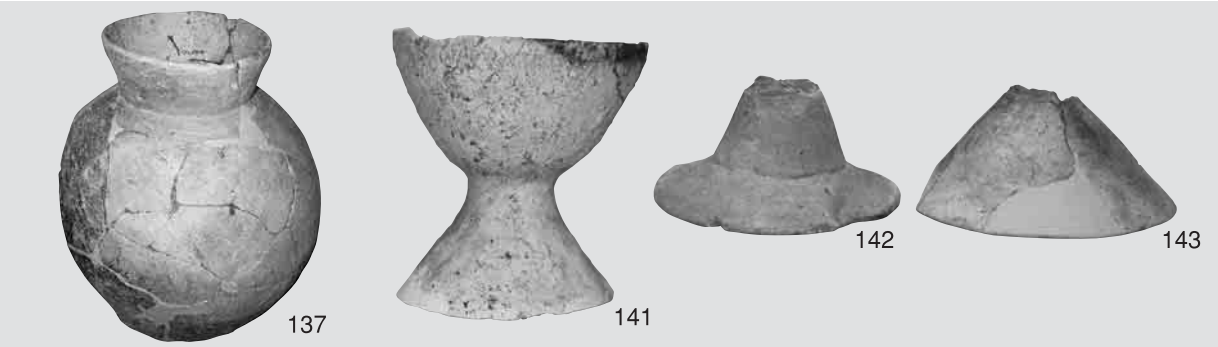


ＳＡ4出土遺物

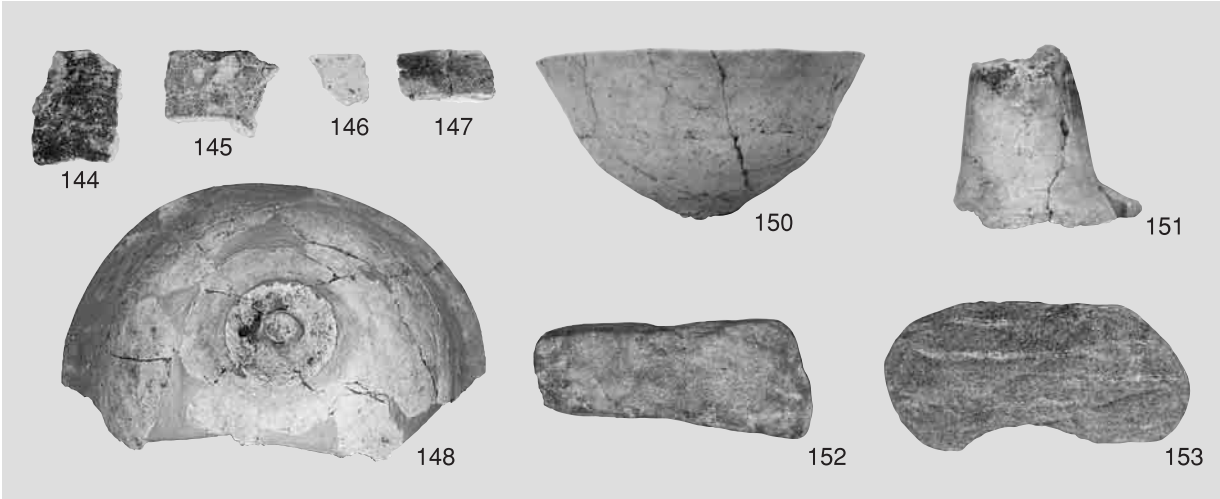


ＳＡ25出土遺物

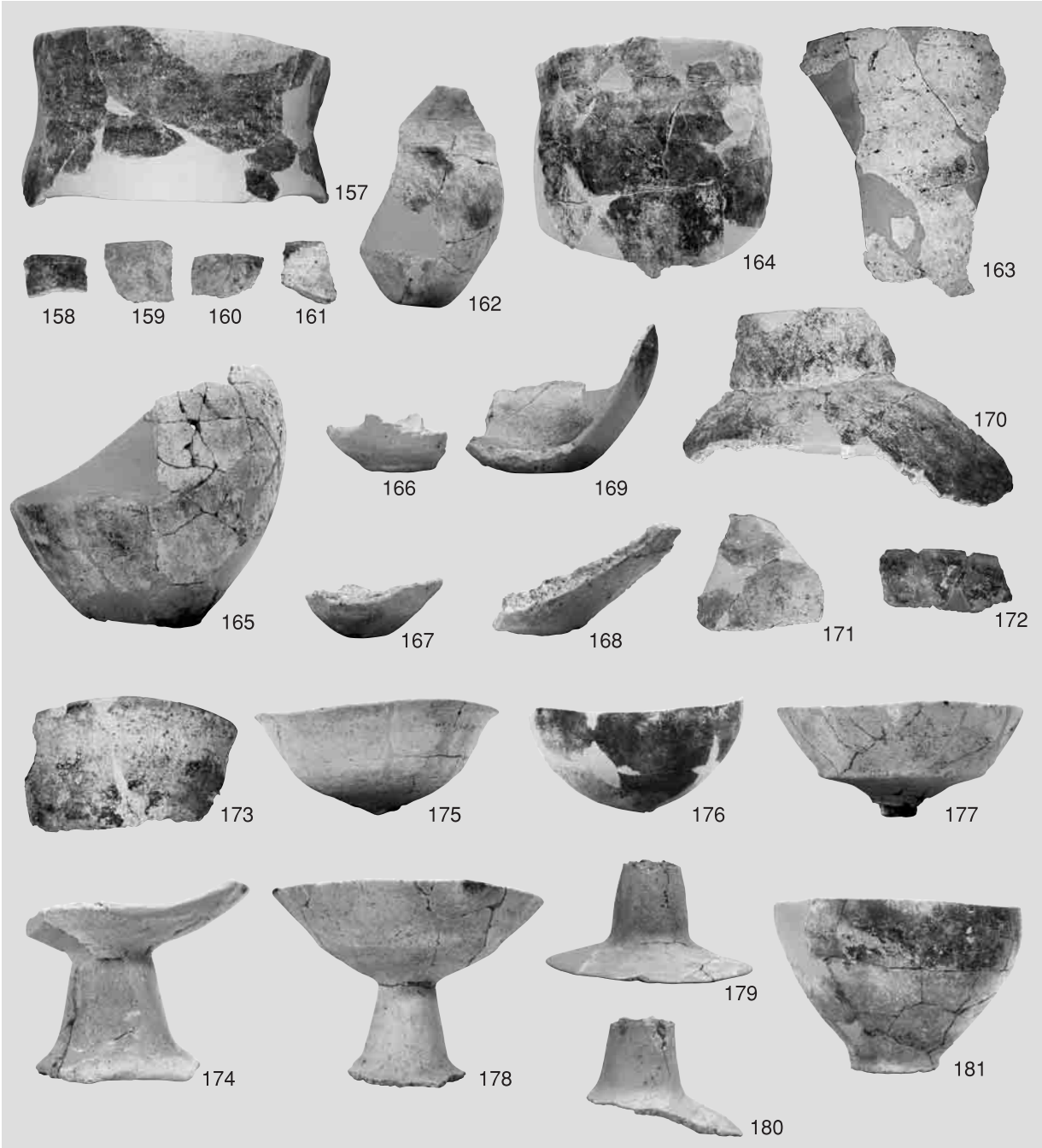
ＳＡ5出土遺物



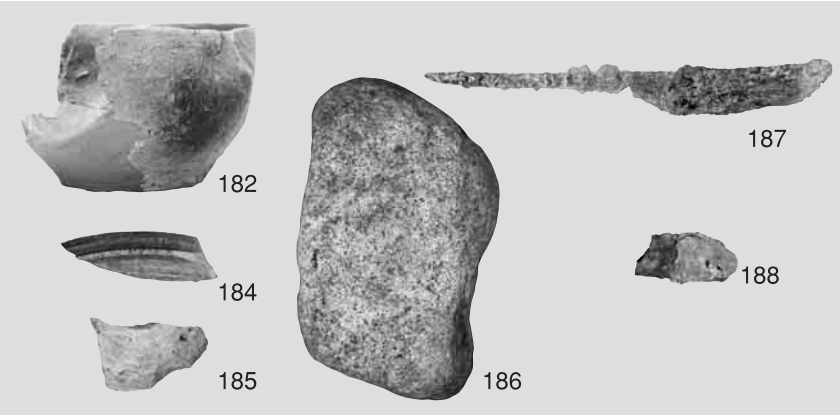
ＳＡ7出土遺物



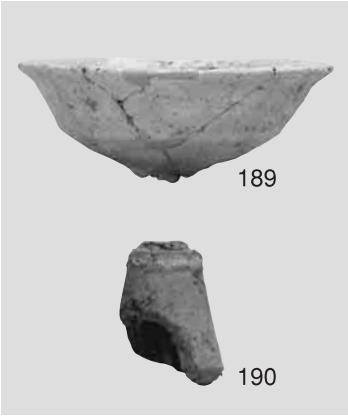
ＳＡ８出土遺物



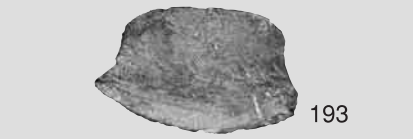
ＳＡ11出土遺物（1）



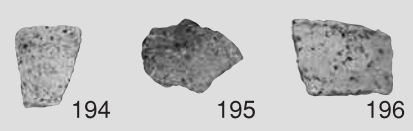
ＳＡ11出土遺物（2）



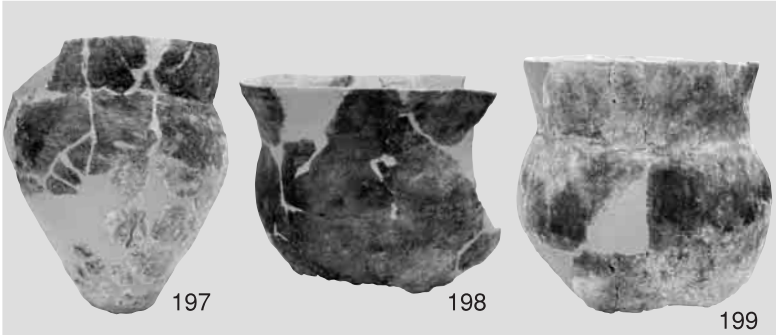
ＳＡ15出土遺物

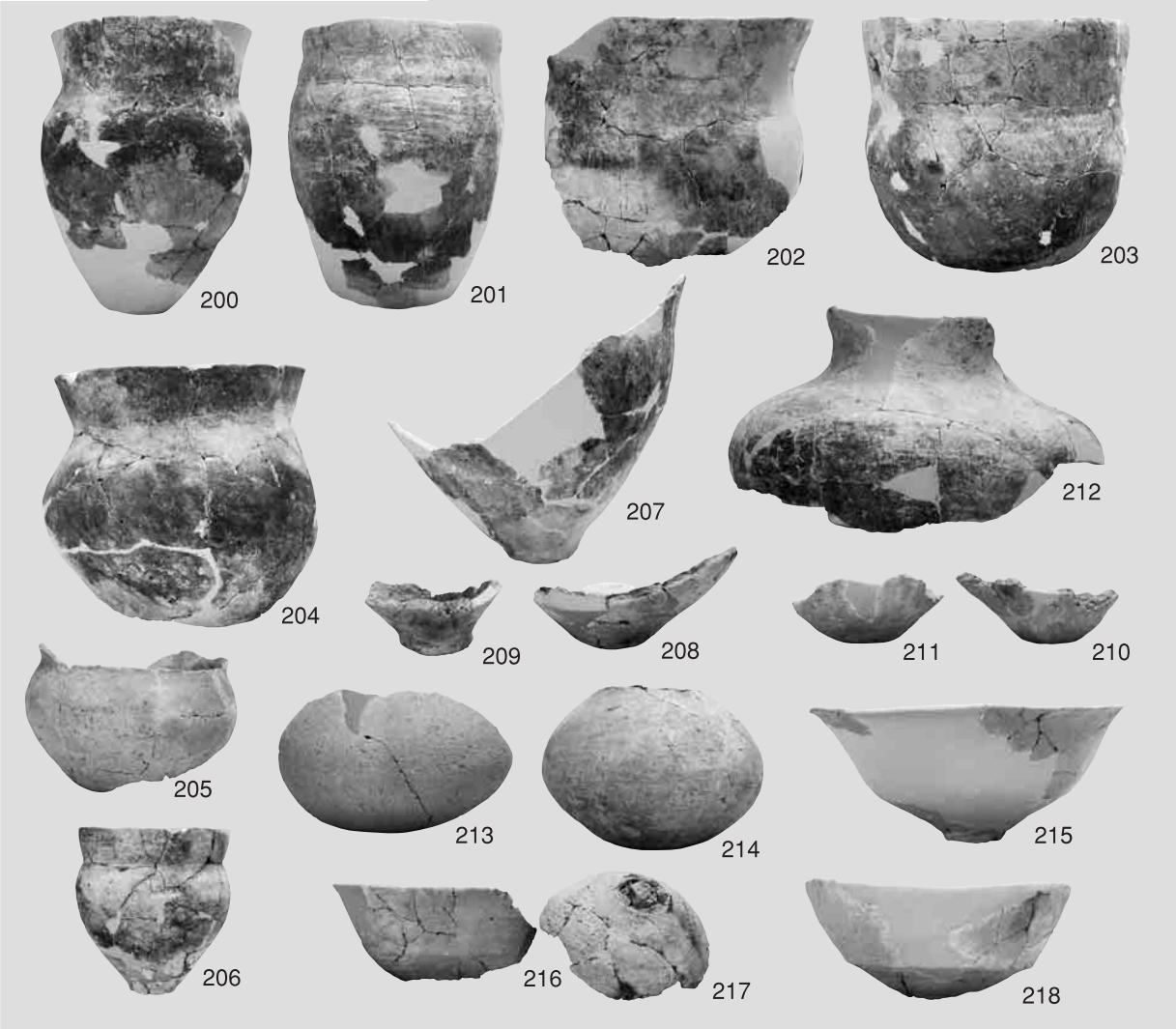


ＳＡ17出土遺物

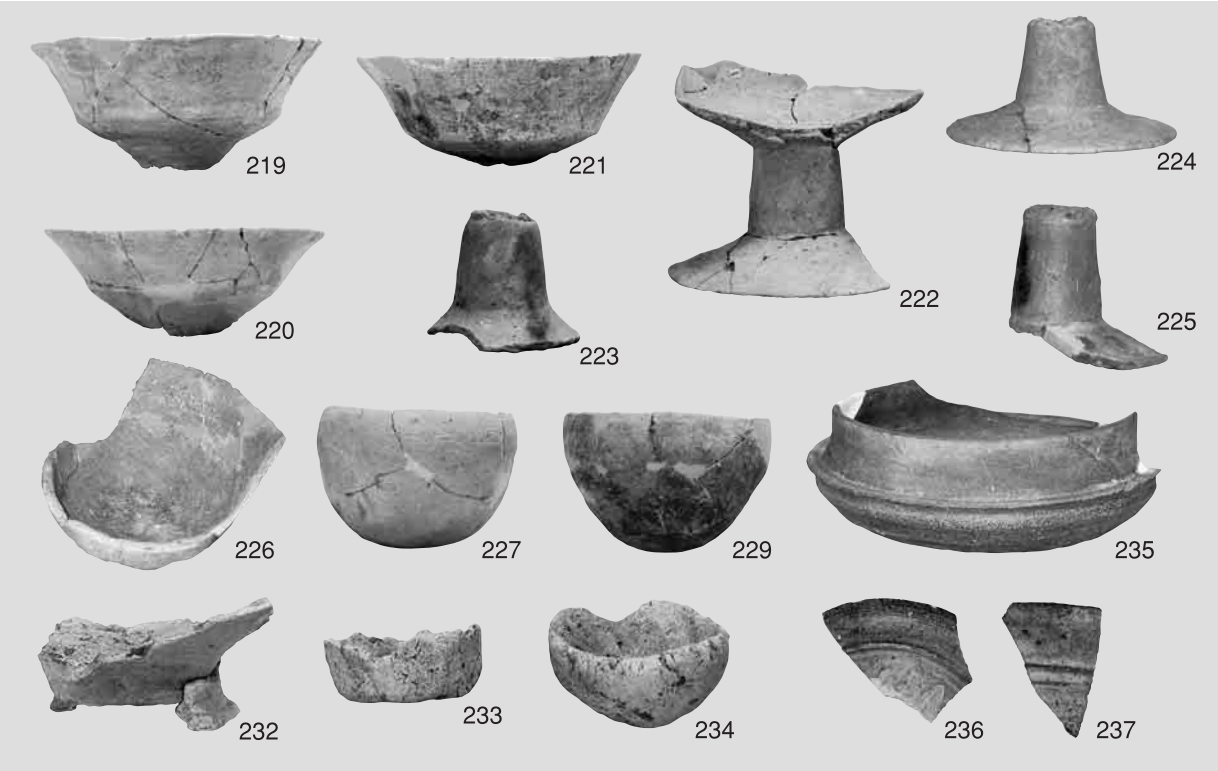


ＳＡ18出土遺物

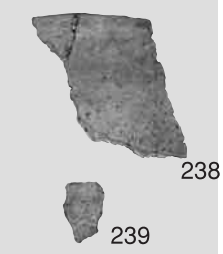




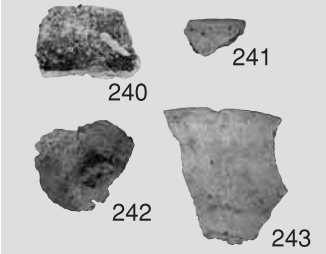
ＳＡ21出土遺物（1）



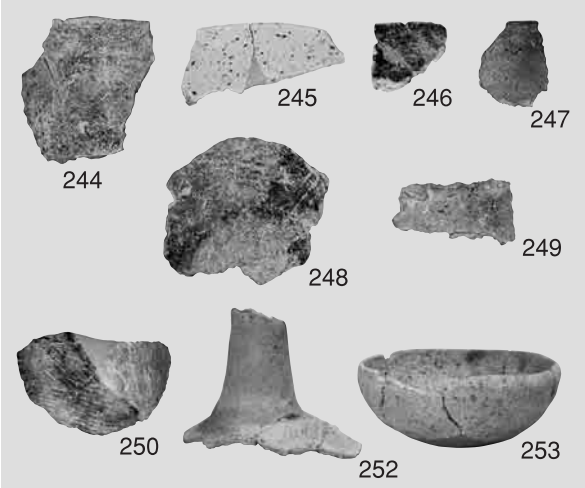
ＳＡ21出土遺物（2）



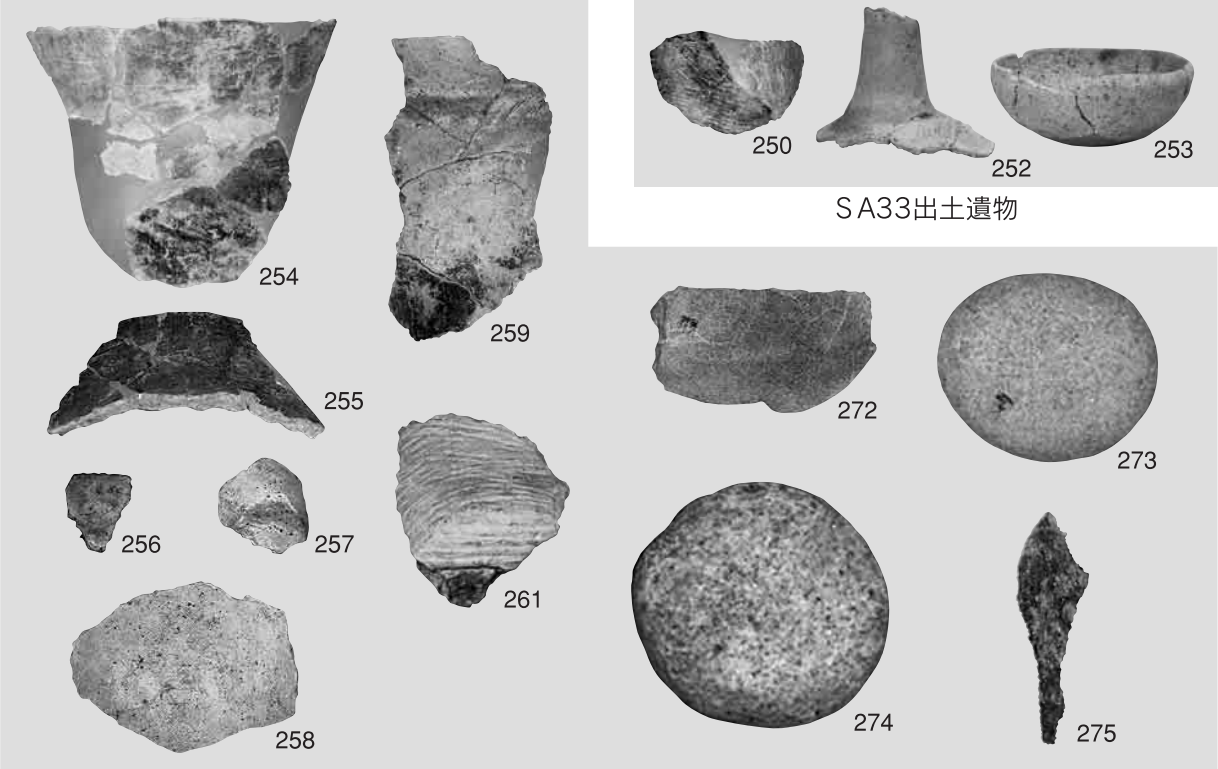
ＳＡ31出土遺物



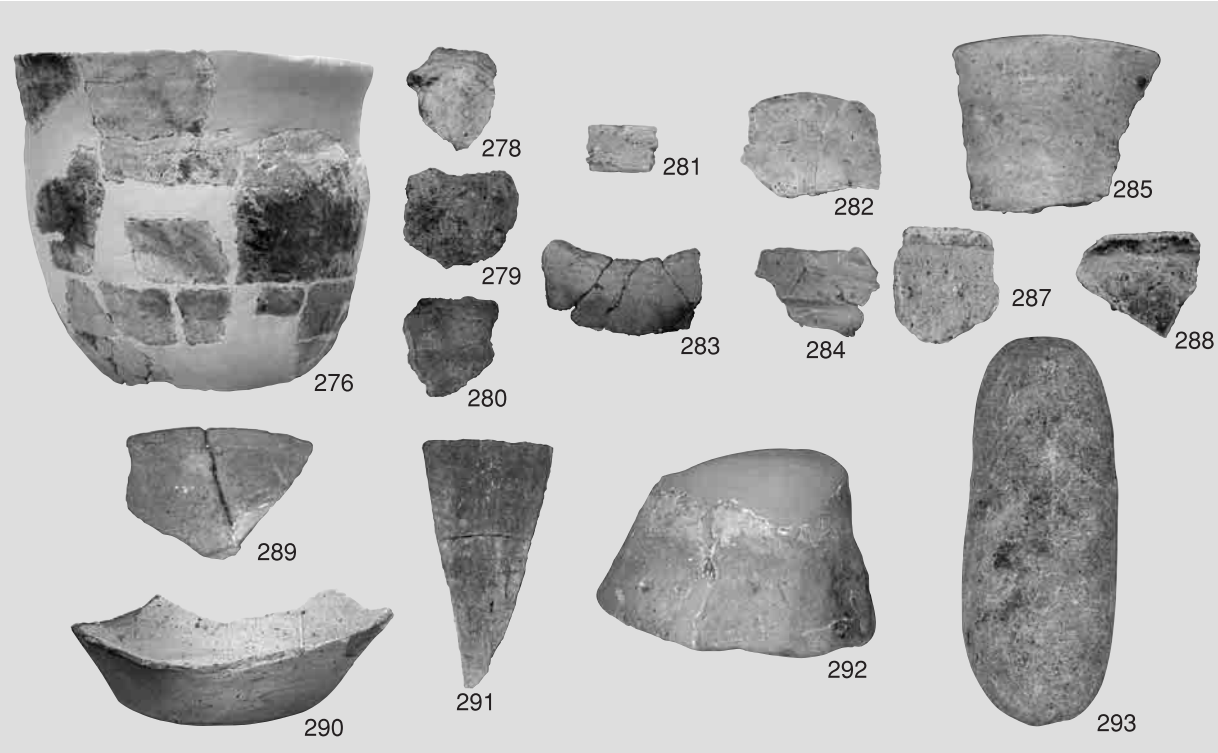
ＳＡ32出土遺物



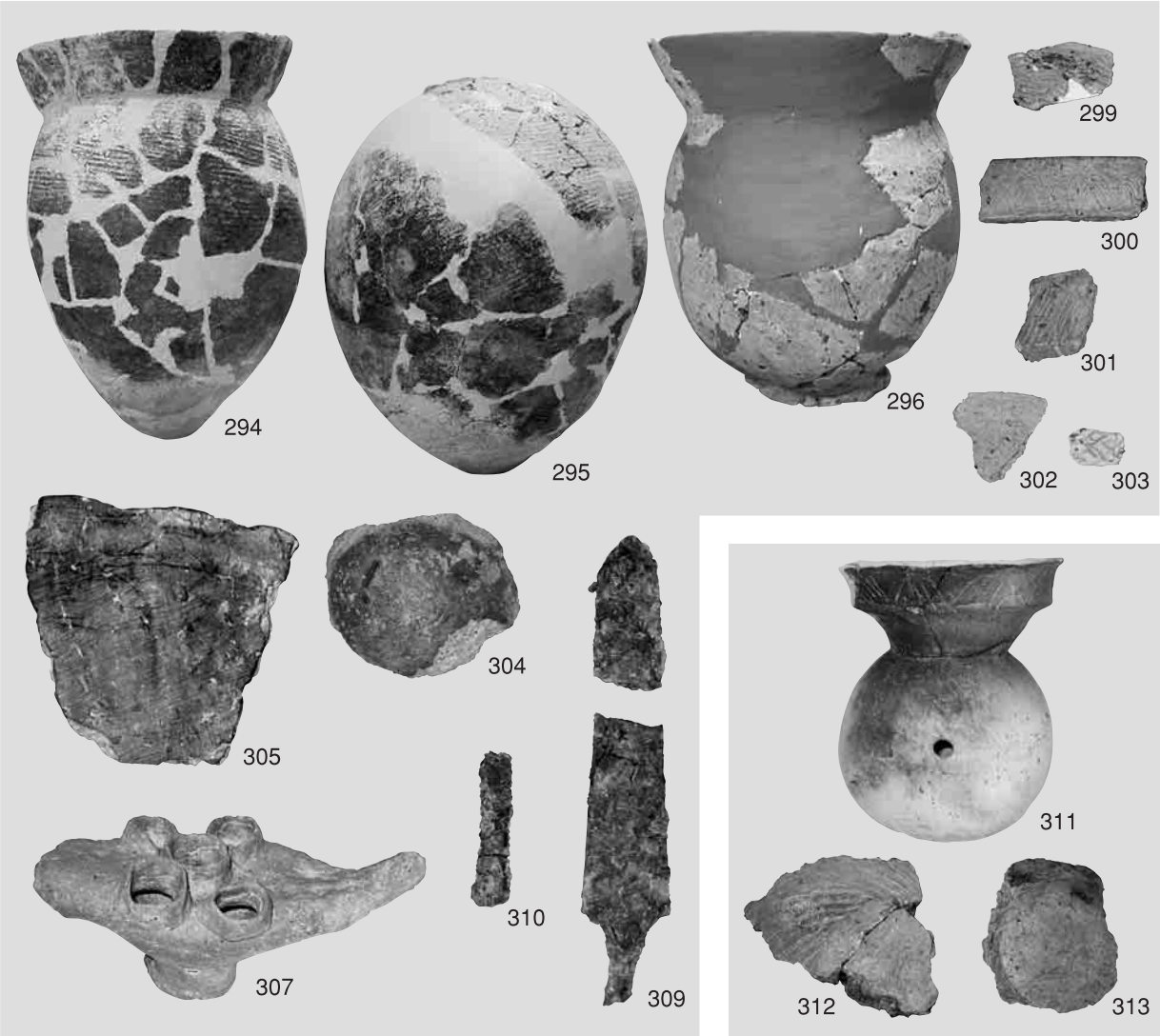
ＳＡ33出土遺物



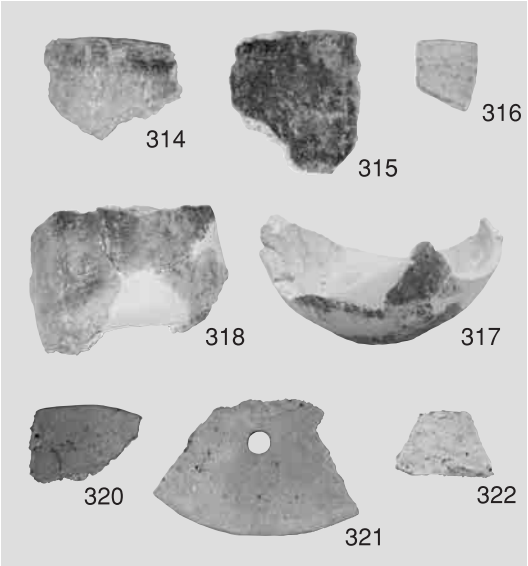
ＳＡ35出土遺物



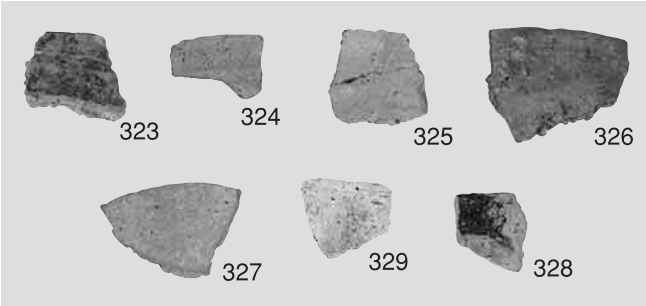
ＳＡ36出土遺物



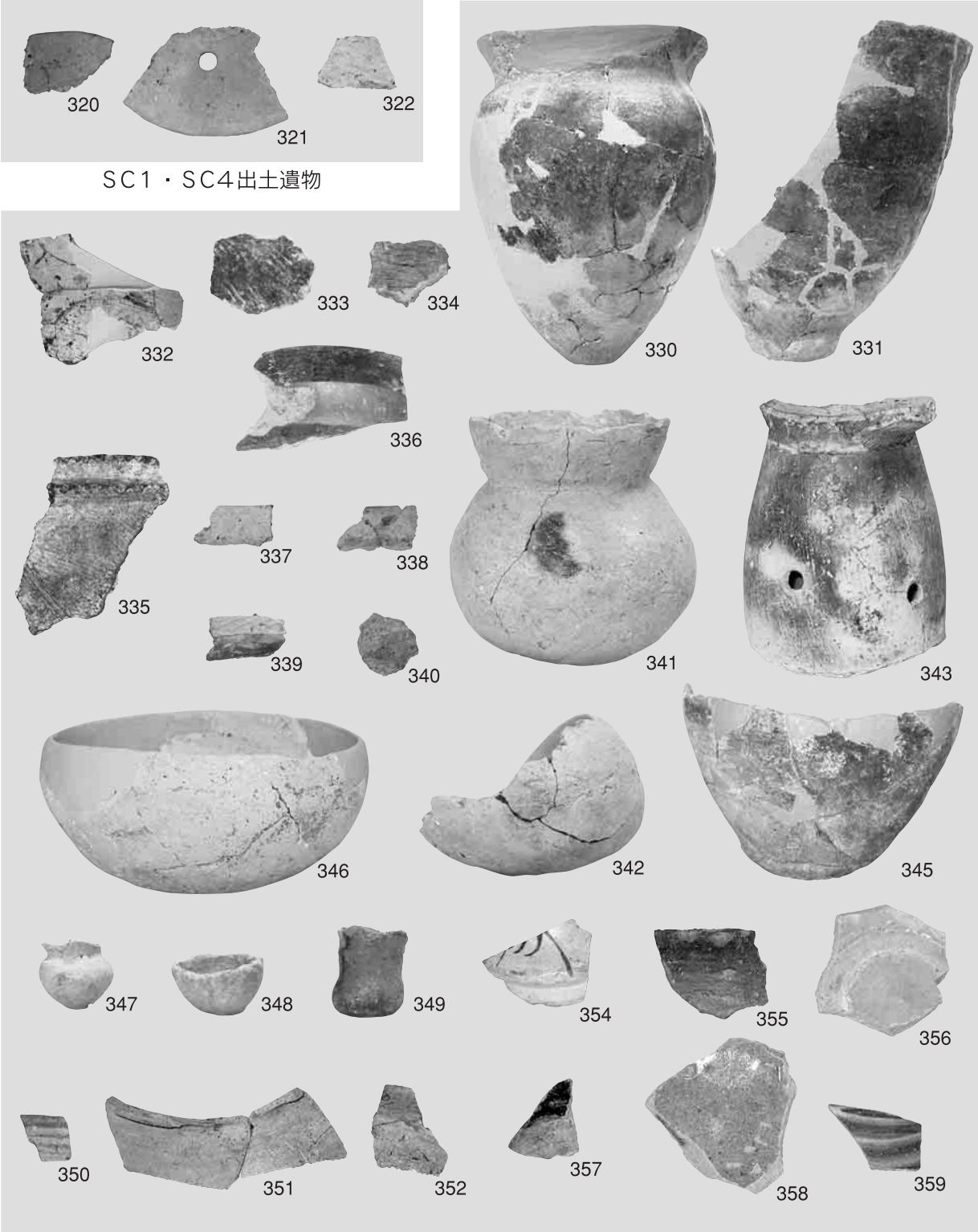
ＳＡ37出土遺物　　ＳＤ１出土遺物



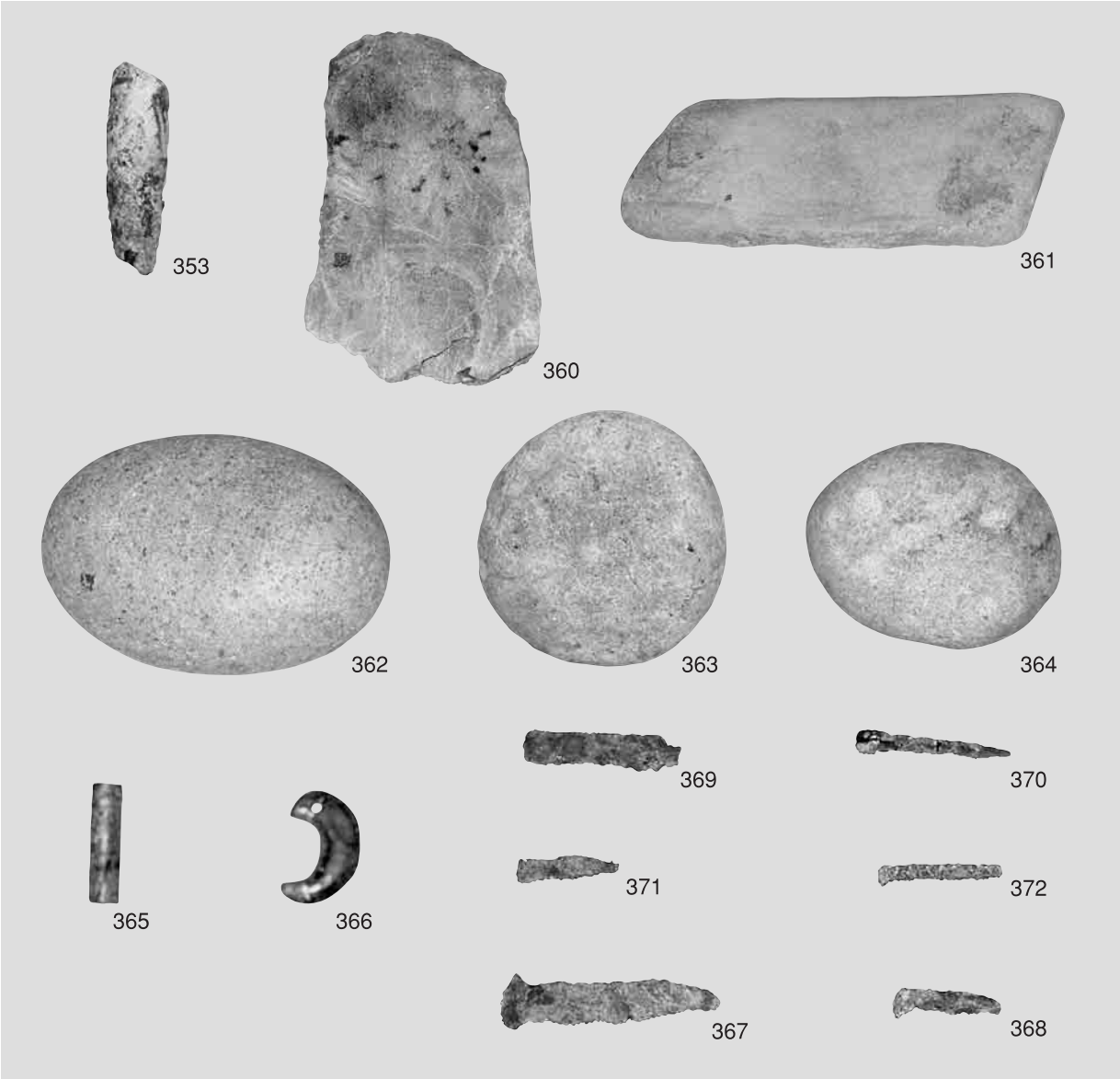
SC1・SC4出土遺物



SC2・SC3・SC5・SC6出土遺物



包含層出土遺物（1）



包含層出土遺物（2）

報　告　書　抄　録

ふりなが	やまぐちいせきだいにちてん
書名	山口遺跡第２地点
副書名	一般国道218号北方延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第99集
執筆・編集担当者名	玉利勇二
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒880－0212　宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地
発行年月日	2005年　月　日

所収遺跡名	所在地		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
山口遺跡第2地点（やまぐちいせきだいにちてん）	宮崎県延岡市小川町（みやざきけんのべおかしこがわまち） 4366－1，2		32° 31′ 49″	131° 35′ 19″	第一次調査 2002.4.30～ 2002.8.1 第二次調査 2002.9.30～ 2002.11.13	2000㎡	一般国道218号北方延岡道路建設
	コード						
	市町村	遺跡番号					
	45203						

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡 散布地	弥生時代 古墳時代	竪穴住居跡　38軒 土壙墓　1基 土坑　7基 ピット　多数	弥生土器（後期） 土師器 （甕・壺・高坏・坏・模倣坏） 須恵器 土製品（土錘） 陶磁器 石器 （台石・敲石・磨石） 鉄製品 管玉・勾玉	主に古墳時代中後期にかけての遺構・遺物である。

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第99集

山口遺跡第２地点

一般国道218号北方延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005年２月発行

発行　宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212

宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地

電　話　0985（36）1171

印刷　株式会社　都城印刷

〒885-0055

宮崎県都城市早鈴町1618番地

電　話　0986（22）4392